
ツクラレタ聖女

jade

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツクラレタ聖女

【Nコード】

N5718M

【作者名】

jade

【あらすじ】

300年前、1人の少女は己の命をかけて魔王を封印する。彼女は後に伝説の聖女として多くの人に讃えられた。そして時は流れ現代。とある場所で唐突に目覚めた少女アリア。「…どうして生きてるんだ？」時の流れに戸惑いながらも、アリアは新しい人生を歩む決意をする。正体を隠し、勧められるままに魔法学園に入学した彼女が見つけた、驚くべき真実と己の生きる理由とは…？

序章「終わりの日」

月の綺麗な夜だった。

戦場には血と肉の焼ける匂いが蔓延し、もはや人か魔のどちらかわからない肉の塊があたり一面に広がっている。

かぎなれた臭いではあるものの、気温の高さと怪我の具合もあいまって、ひどく気分が悪い。

自身の体からは血と汗が混じったものが噴き出し、この命がそう長くはもたないことがいやおうなしにわかる。

そして、そんな自分の後ろには総大将として自国の王子……次期国王がいる。

あの子の未来のためにも、彼だけはなんとしても守らねばならない。

だが

（このままでは負ける……）

油断していたわけではないが、想像以上の力だった。

さすがは魔王の名を冠するだけはある、といったところか……各国の精鋭を集めた連合軍もほぼ壊滅し、残された者は絶望の目でこちらを見ている。

そんな窮地にありながらもひどく冷静に状況を分析している自分に、ふと自嘲する。

いつからこんな風になったのだろうか。

思えばひどい人生だった。

5年前……ほとんど全てを失ったあの日から、己の人生は常に死と隣り合わせであった。

王と宰相、そしてただ一人の家族と忌まわしき胸の呪印。

枷をはめられ命じられるままに多くの命を絶ち、その血を浴びてきた自分は、はたからみたらどんなに滑稽だっただろうか。

（しかも利用されるだけ利用され、最後は戦場で散るか……）

……本当に、滑稽だ。

「ご主人様……どうでしょう」

愚かな思考にふける自分に、金色に輝く毛と透き通るような空の瞳を持つ幼い狼が、泣きそうになりながら話しかけてくる。

思えば、この獣も物好きなやつだ。

たった一回魔物から助けてやっただけで、こんな戦場までついてくるなんて……

迷子の聖獣だと思い仮契約を結んで天界に還してやろうとすれば、

『恩を返すまで、なにがあってもご主人様についていきます！』と言って拒否するし。

いつぞやのドラゴンの子どものようにさっさと親元に帰ればいいものを……こんな危ないところまでついてきて。

でも今は感謝しよう。この幼獣が見つけてくれた方法があるから、私はまだ希望を持つことができる。

せいぜい、華々しく散ってやろうではないか。

「キラ。お前、私が死んだ後は仮契約の相手をみつけて早く天界に帰るんだぞ」

そう言えば、「ご主人様あ」となぜかひどく複雑な表情で自分を見上げてくる。

……まあいい、あとは後ろの人が。

この人には5年前から本当に世話になった。共に訓練をし、ともに戦場に立ち、身分の差を超えた信頼を築けた……と思う。少なくともこの人だけは私を“人間”として見てくれた。

（だからこそ私は　　）

「アスト王子……妹を、マリアを頼みます」

自分は最後の最後まで何を言ってるのやら……なんだか情けなくなってくる。

最後くらいもう少し色気のある言葉は吐けないものだろうか。

……でもいい。

未来のない自分にはこれがお似合いだ。

（……………さようなら初恋の人）

想いを振り切り、死体だらけの戦場を駆け抜ける。ただ一人の敵に

向かって。

「アリア！ 待て！ 君は…し…つ……………さな…い…！！！」

後ろでアスト王子がなにか必死に叫んでいるのが聞こえるが、もはや時間がない。

流れゆく血が地面にどんどんその跡を残していく。

それはまるで己の残された時間を刻む砂時計のようだった。

ここでやらなければ人間に未来はないだろう。

負ければ人は家畜のように支配され、いつか食糧として魔物に“喰われる”餌になり下がる。

もつとも、それに関してはなんの感慨も浮かばないが……

私にとって世界の命運なんてものはどうでもいい。

ただ一人、たった一人。自分が不幸にした少女に、せめてもの償いができるというのなら、この命いくらでもくれてやろう。

互いの顔が見えるところまで来たところで一度立ち止まる。

そして覚悟を決めて、また一步死出の旅路への道を踏み出す……今

この空間を支配している災厄のもとへ。旅の供のもとへ。

「魔王シヴァ……ともに、地獄に堕ちてもらおうか」

嫌だといつてもつきあってもらう。

いくら私でも死ぬときまで一人は嫌だ。

この時少女の顔を見ることができたのは魔王ただ一人であつたが、もし普段の彼女の顔を知るものがいたらひどく驚愕していたことだろう。

それは5年間、彼女が一度も見せることのない表情だった。

それはこの世で最も美しいと言っても過言ではない……まるで女神のような慈愛に満ちた微笑みだった。

白銀の髪をなびかせ、その目にアメジストの輝きを宿す類まれなる美少女は、まるで月の女神が地上に舞い降りてきたような……とてもここが血の蔓延る戦場とは思えないような錯覚を相手に覚えさせる。

それは魔王ですら魅了するほどの

「……地獄に堕ちるのは貴様だけだ」

一拍間を置いて、極上の笑みを浮かべた美男が応える。

残虐非道で冷酷無慈悲、圧倒的な力を持って魔の頂点に立ってきた灰銀髪の男は、よくできた彫像のように冷ややかで、近寄りがたい美貌の持ち主であった。

そしてその瞳は 魔物は瞳の色が赤ければ赤いほど、濃ければ濃いほど強い力を持つといわれているが、魔王の瞳はまるで最高級のピジョンブラッドのように禍々しく、そして美しい紅だった。

（冥土の土産としては上々かな……）

そんなとりとめもないことを考えながらアリアは疾走する。

そして、次の瞬間大きな衝撃波が戦場を駆け抜けた。

少し離れた所で見守る者たちは最初、それが膨大な魔力の衝突によりおこったものだと理解できなかった。それほどの規模であった。

しかし次に目に入ってくる光景がそれを裏付ける。

そこには美しき男女がまるで舞を踊るように戦う姿があった。恋い焦がれる男女の戯れように余人の入り込む余地のない……神話で語られる神々の戦争のように圧倒的で、それでいてどこか美しい戦いの光景がそこにはあった。

その中心地にいる二人は、周囲の反応など気にすることもなく切れ間なく互いを攻撃し続けていた。

それは当初互角の戦いをしているように見えたが、時間が経つにつれて次第にその天秤は形勢を傾けていく。

灰銀の魔王がまだどこか余裕のあるような笑みを浮かべる一方、白銀の少女は苦い顔をしながら少しずつ押されていくのが見て取れる。

アリアは汗を流しながら苦笑した。

（人離れた魔力を持ち“化け物”と呼ばれた私でも、多くの生物を“喰って”力を増してきた魔王には一歩及ばないか……）

もとよりここに来るまで血を流しすぎた。

紙一重で攻撃を回避しながらなんとか魔王に近づく隙を窺うが、なかなか見つけられそうにない。

（近づくことさえできれば……！）

既に戦いが始まってから数刻が過ぎ、体力が限界に近付いてきている。今決着をつけなければ、自分に勝ち目はないだろう。

「……一か八かの賭けに出るしかない、か」

そのように考え、踏み込もうとした瞬間。不意に背後から強い魔力を感じた。

闇を縫うような赤い残像はそのまま自分を通り越し、魔王の足元に直撃する。

粉塵が舞い、お互いの姿を隠した。

味方の援護だろうか……なんにせよありがたい。

この隙に一気に勝負をしかける。

（ここ！）

粉塵の先から唐突に現れた少女に魔王は驚愕の表情を浮かべる。

アリアはそれに会心の笑みで応えながら、血に濡れた両手で魔王を捕らえた。

そして、切り札として取っておいた古代魔術 自身の血と肉に魔力で刻んであつた術式を解放する。

【ギルム メシュ リ ハルフエン ルア セント オルシス（我、この血と肉を代償に、ここに封印をなさん）！！】

殺すことはできなくても……己の命をかければ永遠の封印をかけることはできる。

古代ヴィシア式魔術。

その中でも命を代償にする禁呪を使えば、たとえ魔王といえども枷は解けないはずだ。

自分が偶然助けたキラが、古代遺跡で偶然この禁呪を見つけた時は

運命を感じた。

ああ、これが私の未来か、と。

周囲に光が溢れ、封印が成功したことを感じる。

……………とても安らかだった。

死とはもっと苦しいものだと思っていたが……………胸のあたりを中心に真綿のような魔力に包まれていることを感じた。

そつと、瞼を閉じる。

（自分の役目はここで終わりだ）

ここまで長かった。でも、ようやくすべての重荷から解放される。

（これで……………やっと）

（……………やっと……………死ねる）

ぼやける意識の中、最後に見たのは天上に浮かぶ美しい満月と……………今まで見たことないような赤紫の、でもどこかなつかしい瞳だった。

そして巨大な光の球が夜の戦場を照らした後、残されたのは大きなクレーターだけだった。

そこには魔王も少女の姿もなく、しばらくして残された者たちは奇跡が起こったことを悟る。

皆が歓声でわく中……ただ一人、総大将と呼ばれたハインレンス王国第一王子アストレイは、この世で一番愛しい少女を失ったことに、静かに涙した。

ハインレンス王国歴148年夏。後に”救世の日”として語り継がれるその日。

一人の少女が表舞台から姿を消し、同時に伝説の聖女が誕生した。

……そして舞台は300年後に移る。

序章「終わりの日」（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

勢いで書いてしまった感じなので、なんだかいろいろ不安です。

誤字・脱字等ありましたら、ご指摘のほうよりしくお願いします。

0 章「伝説の聖女」

『ハインレンスの聖女』

彼の者の美貌 天地に比類なき

瞳に宿す紫は宝石のごとく

風に揺れる白銀は月光のよう

けがれなき真珠の肌は何人にもおかしがたく

ただその清らかさを象徴せん

傍らには猛々しき金色の狼をはべらせ

救世の道をいざ歩まん

ああ、我らが愛しき神の娘アリア

月光の聖女

黎明の戦女神

紫銀の救世主

彼の者その命をもって魔王を打ち滅ぼし

我らの命を救いたまん

我らその犠牲を忘れることなかれ…

王国歴149年　ディナミス・ゼン・バツハン著

1章 第1話「始まりの日」

「ひっ！！ いやだ、来ないで！！ 助けてお父さん、お母さん！」

……妹の声がする。

「この化け物！！ あんたのせいで村の人間は……私の兄さんは死んだんだ！！」

ああ、これは隣村のおばさんの声だ。

「ほう……これが噂の『テルニアの悪魔』か。悪魔の割には見目麗しいのお。喜べ、我が今日からお前の主人だ」

新しいおもちゃを手に入れた、子どものような国王の声。

「逆らえば……妹がどうなるかわかってるな？」

極悪宰相の声……虫唾が走る。

「アリア……すまない」

……アスト王子。

「……！！……ま……んさま……！！」

うるさいな、今度は誰だ？

でもこの声、どこかで聞き覚えがあるような……

（まだ眠い……）

まるで眠りの魔法をかけられた後のように身体がだるく、意識がはつきりしない。しかし、耳元でギヤーギヤー騒ぐ声を無視すること
もできず、ゆっくりと重い瞼を開ける。

目を開けて一番に入ってきたのは蒼だった。

それは冬の晴れた日の、蒼天の色。

「ご主人様！！　よかった、本当に目が覚めたんですね！！　僕も
う、夢かと……」

涙交じりの声を耳にいれながら、何度か瞬きを繰り返す。
するとようやくぼやけていた視界がはつきりしてきた。それと同時
に頭も回転を始める。

仰向けに寝ている自分、周りが少し暗い。

（……ここはどこだ？）

長年の習慣から瞬時に魔物の気配を探り、とりあえずは安全な場所
であることを確認する。

しかし、それ以外にも何か重大なことを忘れているような気がする
……が、それがなにか思い出せない。

……いや、まずは目の前にいる不審人物が先か。

そう思い、寝ている自分に覆いかぶさるようにして、至近距離で顔

を覗き込んでいる少年に意識を向ける。
数秒見つめあった後、そのままの姿勢で口を開く。

「……………誰だ？」

年頃の娘としてこの反応はどうなんだろうと自分でも思うが、まあ今更だろう。

そんな私のそっけない言葉を聞くと、目の前にいる人物は少し怒ったように頬を膨らませ言い返してきた。

「僕を忘れたんですか！？　ずっと待ってたのに！！　ご主人様の魔力の気配が大きくなったのを感じて、急いで戻ってきたのに！！」

そう言ってポコポコたたいてくる。

だがそんなことを言われても、自分の記憶が正しければ、この少年とは今日が初対面のはずだ。

蒼色の瞳に漆黒の髪を持つ…………おそらく10歳前後の少年。
アーモンド形の大きな目は涙でキラキラと輝き、その筋の人間にはたまらないほどいじらしい表情をしていた。…………あいにく、自分にそんな趣味はないが。

漆黒の髪は濡れたように輝いている。少し癖っ毛ぎみなのが逆に愛嬌を誘う。

ともかく、将来は確実に女泣かせの美しい青年になることが約束されたような美少年だった。

ひとつ気になることがあるとすれば、身なりのいいその服にあまり見慣れない装飾が施されていることくらいか。

しかし

(やっぱり見覚えがない)

そう考えチラッと少年の方を見て答えを促すが、少年はムスツとして顔を横にむけた。

……どうやら私が思いだすまで自分の正体を言うつもりはないようだ。
なんて面倒な。

(いや、だが、この面倒な感じ……どこか既視感があるような……?)

そう言えばこの少年は私のことを“ご主人様”と呼ばなかっただろうか？

そもそも自分のような人間を“ご主人様”と呼ぶ奇特な者は、この世に一人しかいない。

「まさか………キラ、か？」

かなり疑い深い目つきでそう聞くと、少年は喜んだようにがばっと抱きついてきた。

「そうです!! キラです!! この姿でもわかってくれるなんて、やっぱり愛の力ですね!!」

そう言っただけ涙を流しながら私の胸に顔を押し付けてくる。

……ああ、この面倒くささは間違いないキラだ。

一気に脱力する。と、同時に新たな疑問がわいてきた。

「なぜ人化できるんだ？　しかもその髪の色はどうした？」

聖獣は生まれてからある程度の年月がたたなければ、人化することはできない。

種族差や個体差によつてその時期は様々だが、少なくとも幼獣であるはずのキラは人化できるわけがないのだ。

それに髪の色についても……キラは光の属性の聖獣だから、毛は金色のはず。

よっぽどのがない限り黒に変わることはない。

（まったくわけがわからない……いったいどうなってるんだ？）

そうしてふと自分の着てる服、血まみれの軍服を見た。瞬間、一気にその情景がよみがえってくる。

戦場、赤い血、死体、封印、魔王

（魔王の封印！　どうして忘れていたんだ！？）

「封印は、魔王はどうなった！？　どうして私は生きているんだ！？」

早口で最重要疑問を尋ねると、少年……もといキラはどこか困ったような、なにかから話せばいいかわからないような顔をしながら答えた。

「封印は成功しましたよ。地上に魔王の気配はありませんから、まだ封印されているか、もしくは既に消滅したんだと思います」

そう言われたものの、一応自分でも確認してみる。
目を閉じて集中する……たしかにあの強大で異質な魔王の気配はど
こにも感じられない。

（そう、なのか……ならよかった）

万が一にも失敗して、あの子に危害が加わるのだけは避けたかった。
あの子は、妹は私が生きる理由なのだから。

そうして息をはいて安心していると、かつて狼だった少年は何かを
言いたげに、でもどこか言いにくそうな表情で、モジモジしながら
上目づかいで私を窺っていた。

……人間バージョンでも一瞬で理解できてしまうほど、それはわか
りやすかった。

（これは、あれだ……菓子盗み食いがばれそうになったのを、必
死で隠そうとしていた時と同じ反応だ）

……だが、魔王の脅威は去ったのだ。
どうせそれ以上に重要なことなんてないし、それに今ならどんな失
敗も広い心で許してやれる自信がある。

「キラ、怒らないから言ってごらん。なにか伝えたいことがあるん
だろう？」

私がそう言うと、キラは心底ホツとしたように笑い……そして、
こつぶちまけてきた。

「ご主人様、落ち着いて聞いてくださいね。あのですね……実は今

年は王国歴448年で、ご主人様が眠りについた日から……封印を
おこなった日から、ちょうど300年が過ぎてるんですよ

「……………は？」

第2話「忠狼」

正直信じられなかった。

キラがいうには、封印をおこなったあの後、私と魔王はあの場から姿を消したらしい。

その時、他の人間たちは私と魔王が相討ちで死んだと思っていたらしいが、キラだけはあの封印のことを……その記述を知っていた。

実はあの禁呪には、かなり低い……それこそ広大な砂漠から砂粒一つ見つげるくらいの確率で、術者が生きのこることもある、という嘘くさい記述があったのだ。

もちろん、可能性はなきに等しいらしいので、私は死ぬつもりでやったのだが。

そんな眉唾物の記述を信じたキラは、『もしかしたら……』と一縷の願いをこめて、各地を回りながら私の気配を探していたのだという。

そして数年が過ぎたころ、この洞窟の近くで微弱な、ほんとに見つかったのが奇跡といえるほど弱い私の気配を感じ、その奥で封印魔法に包まれて眠っている私を見つけた……らしい。

なんだか奇跡のような話ではあるが……まあ、キラの稀にみる幸運体質を考えると、ある程度納得もできる。

最初は封印を解こうとして（その時、魔王まで目覚める可能性については考えてなかったらしい。後で説教だ）いろいろ試してみたが

うまくいかず、『こうなったら目覚めるまでとことん待つてやろう！』ということまで今に至るらしい。

「封印を解きたかったなら、他の人間を連れてきて協力させれば良かったんじゃないか？」

と訊くと、キラいわく

「今の私はちよつと有名？な存在らしく、生きてることを教えたら悪い人がわんさか来る……かもしれない。

？禁呪を使った影響か、封印はかなり強固で、それを解ける力量をもった魔法使いは今まで生まれてこなかった……気がする。

？そもそも人間は信用できない（そういえば王宮での私の扱いを見て、人間不信になったんだっけ）。

というなんとも微妙な理由から、他の誰にも知らせずたった一人で300年近く私を守っていてくれたらしい。もつとも何から守っていたのかはよくわからないが。

そうして眠る私のそばで長い時を過ごし、時々人間の街において情報収集をしながらのんびりと力を溜めていたとのことだ。

そう、髪が黒くなったのは、この洞窟に多くいる闇の精霊から魔力を吸収していたためらしい。

聖獣や神族（人化ができるようになるとこう呼ばれる）は自然界にある魔力を少しづつ取り入れて力を増す。^{マナ}

聖獣は普段はここ、地界とは異なる次元にある天界（地界よりマナが多くあり、聖獣や神族、高位精霊がいる空間）で暮らしているのだが、召喚で呼ばれたり、はぐれや迷子になると地界に來たりする。その天界は、根源属性である火・水・風・土・光・闇のマナのある

エリアが6つにくつきりと分かれており、基本そこに住む者は生涯生まれた属性のエリアから出ることはない。

だからふつうは自分の生まれもった属性で一生を過ごすのだが……

しかしキラは長い間この洞窟で闇のマナを取り入れたことによって生まれたもった属性である光から、闇の属性へ乗り換えるという前代未聞のことをなしのけた。

おそらくまだ適応力のある幼獣だったからこそできた荒技だろう。

ちなみに聖獣や神族といった聖なるものは、瞳が青ければ青いほど、そしてその色が濃ければ濃いほど力が強いといわれている。

魔族とは違い、自然のマナを取り入れて力を増すので、基本的には歳をとればとるほど力は大きくなるのだ。

そう考えるとキラの瞳が、以前の水色から濃い蒼へと変化しているのもうなずける。

その後、いまだ半信半疑の私の要望で、一度獣型になってもらった。それはもう見事な漆黒の、以前より二回りくらい大きい狼だった。

（あのときは私の膝下くらいの……それこそ犬ほどの大きさだったのに）

今では自分の腰に届くかというほどの立派な狼だ。それこそ自分がのっても大丈夫そうなほどの。

しかし、よりくわしく観察しようとした矢先、人型に戻ってしまった。

その理由を尋ねてみると、「だってこのほうがご主人様に抱きつきやすいから」だそうだ。

変わったのは外見だけで、中身のほうはまったく変わっていないらしい。

それにしても

「私が死んだら、仮契約の相手を見つけて天界に帰れといったろ。それに神族になったのなら自力で帰ることも可能だったはずだ」

そう、天界からこちらの地界に来る場合は、基本的に魔法使いによる召喚が必要とされている。

だが逆にあちら（天界）に帰るだけなら……神族くらいの力があれば単独で帰還できるはずだ。

だからこそ、はぐれや迷子 召喚中に主が突発的に死んだり、元の狭間に迷いこんで（幼獣が多い）地界に来てしまい、天界に帰れなくなるのは聖獣だけなのだとわれている。

迷子（この場合はぐれか？）神族なんて聞いたこともない。

なにより、いつ目覚めるかもわからない主を300年近くも待つているなんてとんだ忠犬、いや忠狼だ。

たった一回助けてもらった人間相手に普通そこまでするものか？

「だってご主人様は現に生きてたし……このマナは天界並みに濃いかから十分力はたまるし……それに天界に帰っても僕には家族も友達もいないもん。僕にとってご主人様といった1年間は本当に楽しかったんです」

キラがシヨボンとしながら言う。

それは初耳だった。

てつきり心配する親がいると思っていたから、早めに還さねばと仮契約を勧めていたのだが。

もしかして、ずっと契約を拒んで自分のもとにいたのは寂しかったから、なのだろうか？

……そう思うとこの甘えたがりな狼が可愛く思えてくるから不思議なものだった。

なにより自分を待って300年も共にいてくれた存在を、どうして拒絶できようか。

軽く苦笑しながら、黒く変わったその髪をくしゃりと撫でる。

「キラ……待っていてくれてありがとう。またお前と会えてうれしいよ」

そうして心からの言葉を送ると、キラは多くの感情が入り混じった複雑な表情を浮かべたあと……また勢いよく抱きついてきた。

第3話「現実」

「さて、どうしたものか」

キラからこれまでの経緯について説明を受けたものの、やはりまだに信じられない気持ちが大きい。

……というか実感がわかない。

自分にとってはつい先ほどのことのようなあの出来事から、300年も経っているなんて。

その気持ちを悟ったのだろうか、キラが唐突に「街に行きましょう！ ちょっと待っててください！ 」と言って洞窟から飛び出していた。

そしてしばらくして戻ってきたキラの手には、血を拭うためのタオルと黒いワンピース、あとはなぜかお金が握られていた。

確かに今のような血まみれの格好で街へ行ったら、騒ぎになるかもしれないが……

「……いったいどこから調達してきたんだ？ まさか盗」
「拾いました！」

……中身は変わっていないと思っていたが、どうやら認識を改めなければならぬようだ。

確実に以前よりしたたかになっている。

いつの間にこんなこと覚えたんだか。

まあなんにせよありがたいし、今は文句を言えるような状況でもないかと思い、礼を言って受け取る。

（しかし、後でもう一度しつ……教育しなおさなければ）

そう決意しキラの方を見ると……目があつた瞬間、ものすごい速さで外に逃げられた。

黒のワンピースはシンプルで好みだったが、ここ5年間のほとんどを軍服で過ごしてきたため、スカートは少し気恥ずかしい。

最後にスカートをはいた記憶といえば……魔王討伐の遠征に向かう前日、健闘を祈る名目で行われた城のパーティーに無理やり出席させられた時以来だ。

あのドレスは苦痛だった。出席者たち（特に男）からはまるで珍獣でも見るような眼を向けられた。ジロジロジロジロ。

“化け物”がドレスを着るのがそんなに珍しかったのか……嫌な記憶を思い出してしまい嘆息する。

でも

（あの時のアスト王子はかっこよかった。……そういえば、あのパーティーの時に『魔王討伐が終わったら、伝えたいことがある』と言っていたが）

もしキラの話が本当なら、それはもう永遠に聞くことはできないだろう。

アスト王子はもう……

そしてなにより、自分の生きる理由であった少女も……

そこまで考えたところで一度思考の糸を断ち切る。頭を振って、素早くワンピースを着用し、外で待つキラのもとへと足を進める。

話が本当なら、今そのことを考えても時間の無駄だ。

（まずは現状を確認しないと……）

そして洞窟から出て、キラの先導で一番近い街へと向かうことにした。

私のいた洞窟は山（バルモア山というらしい）の麓の滅多に人の来ないところにあった。

ちなみに、キラが目くらましの魔法をかけていたこともあいまって、誰かに見つかることは一度もなかったらしい。ほんとに何から私を守っていたんだ？

（こんな辺鄙な場所にいたとは……）

キラはよく私を見つけたものだ。

その執念には感服する。

あの戦場からは馬で12日ほどの距離にあるらしい。

どうしてこんなところで300年も寝ていたのだろうか……まったく

くもって謎だ。

ぴったり300年というのもなんだかひっかかる。

まあ、あの古代ヴィシア式魔術ははまだ解明されていないところも多い。

もしかしたらもともと封印後、術者はどこかに飛ばされ、300年の眠りにつく仕組みだったのかもしれない。

そう考えると命が助かる可能性があるというのも、寝ている間になんらかの外的要因によって死ぬことがほとんどだからこそあった記述だと推測できるが……

（まあ、これ以上考えても仕方ないだろう……とりあえず街見学だ）

街道を目指して森を抜ける道中、キラから基本的な地理の説明を受けることになった。

「ここはハインレンス王国ディレイド公爵領のほぼ中央部に位置します。ちなみにこれから向かうのはポーラという商業が盛んな街ですよ〜」

「ディレイド公爵領……よりによってあの極悪宰相のところか」

なんだかそれだけで気分が滅入ってくる。

どうせなら寝ている間に没落してしまえばよかったものを……今代の人には関係ないこともかもしれないが、やはり自分の貴族嫌いはなかなか治せるものではないのだ。

しかしポーラという街は聞いたことがない。

それについて尋ねてみると、今から約220年ほど前にできた街らしい。

……なんだか時間の感覚がおかしくなってきた気がする。

現実逃避をするように周囲の光景に目を向けると、何本かの木でピンクの花が色づいているのに気付いた。

「ユスラの花……今は春なんだな」

自分にとって昨日のことのように感じる戦いは、夏の暑い日のものだった。

これで少なくとも季節が一巡するくらいには寝ていたことが証明されたわけだ。

春になると咲くユスラの花。

妹が好きだった薄紅色の可憐な花。

（本当に、もういないのか……）

そんな風に感慨にふけりながら歩いていると、ついに森の終着点が見えてきた。

あとは街道沿いに歩いていけば20分ほどで街に着くらしい。

そうしていざ森を出ようとした時、ふと思い出したようにキラが言う。

「あつ！ その髪の色は魔法で変えておいたほうがいいかもしれませんが」

あたりまえのようにその理由を尋ねてみると、またモジモジしながら

ら上目づかいで見してきた。

……どうにも嫌な予感しかない。

一時の心の平穏をとるか、それとも

悩んだ末に結局黙って髪色を変えることにした。

できることなら今日だけはこれ以上心乱されず、穏やかに過ごしたいからだ。

……もつとも、数刻後すぐにその期待は裏切られることになる。

とりあえず髪色を変えることは決定したが……

「むむ、何色にするか……」

そう独り言をつぶやく。

すると横から元気よく「黒ー！」という意見が寄せられた。

特に反対する理由もないので、魔法を使い髪を黒色にコーティングする。

瞳の色を変えるのはなかなか難しく（やろうと思えばできるが）魔力もかかるのだが、髪色程度ならば片手間で変えられる。

（どこか、違和感があるような……？）

髪色のことではない。

魔法を使ったときに、いつもとは少し違った感じがしたのだ。

しかし首をひねって考えてみるも、その違和感の正体がわからない。

「わーい。ご主人様とおそろいだあー」

だが、飛び跳ねる紅顔の美少年を見ると、なんだかそんな瑣末なことを考えているのが馬鹿らしく思えてきた。どうせそのうちわかるだろう。

そのキラは私の周りをクルクル回りながら、上機嫌でこう尋ねてくる。

「うふふ、僕たち姉弟に見えますかねー？」

（キラが弟？）

少し考えて、問われた質問とは全く異なる回答をする。

「面倒くさそう」

そうして、なぜかプンスカ怒る少年の声を背に、街への一步を踏み出した。

第4話「回顧」

思えば、私は12歳の時まで生まれ故郷である辺境のテルニア村から出たことがなかった。

その後の5年間に至っては、王宮と戦場の往復だけ。しかも、移動の際も外の景色は一切見ることが許されない隔離ぶりだった。

唯一の例外は、あの魔王討伐の時だけだろう。華々しいパレードで大々的に王都から見送られたのを覚えている。その時は不審に思いながらも、どこかこそばゆい気持ちで出陣したものだっただが……

（冷静に考えれば理由は簡単、か）

国内で魔物を狩っていた時、自分の存在は完璧に秘匿されていた。目立った戦績をあげて、その功績と名声をもって地位を得ないよう……

檻から逃げないよう、飼育殺しにするために……

そういえば、ハインレンス軍騎兵隊は当時”太陽の矛”とか呼ばれる諸国最強部隊だと言われていた。

だからこそ魔王討伐の遠征軍においても中心的な役割を担ったのだが……

ただ最初それを聞いた時は、笑ってしまった。

もちろん皮肉で、だ。

なぜならその”最強部隊”の戦果のほとんどが、小娘一人の手によるものだったから。

それを世間が知ったらどうなるんだろう、と考えるとおかしくて仕方なかった。

（私の知ってる“最強部隊”が戦場でやっていたことといえば、せいぜい周辺の人払いと情報操作くらいだ）

そして実際最強には程遠い部隊だったことが、あの時証明された。

あの血まみれの戦場において……各国の精鋭を集めた連合軍の中で、真っ先に瓦解したのが”太陽の矛”であった。

開戦は昼過ぎのことだったが、皮肉なことにも名前通り太陽が落ちて月が昇り始める頃には壊滅していた。

まあ、それもあたり前である。実戦経験の少ない者ばかりだったのだから。

そう考えると、逆に魔王討伐の時だけ自分の存在をひけらかしたのは、各国が集まる連合軍の中で自国民である私に戦果をあげさせ、その後の外交交渉で優位に立つためだったのだろう。

ならあのパーティーは国内外の有力者に対する顔見せということになる。

世間一般ではなんの戦歴もないとされている小娘を無理やり総副大将に押し込めたのも、その後の外交に繋げるための布石だったのだ。

そういえば遠征出発前の1週間でしたことといえば、パーティーに
するための礼儀作法の練習だけだった。

どこの世界に戦を前にそんなことをする人間がいるだろうか。

今思えば、国にとってはあの時から既に戦いは始まっていたのだ
ろう。ウチの場合は確実にあの極悪宰相の入れ知恵だろうが……

（まったく……ここまでくると、いつそのこと感心する）

（……………本当に“よく”利用してくれたものだ）

なんだかずいぶん話がずれた気がするが……ともかくそんな経緯
で、私は田舎である故郷と、たった一度見た記憶のあいまいな王都
の街（しかもパレードで人がいっぱいだったので街の景色はほとん
ど覚えてない）しか街を知らないのだ。

だから目の前に広がる街並みが、300年前と比べてどうという
比較はできないのだが。

「……………大きい」

そんなひどく幼稚な感想しか言えない自分に少し悲しくなる。

しかし（ある意味）箱庭の中で育った無知な自分には、これが限
界だった。

「そうでしょう、そうでしょう」

なぜか自慢気に胸を張るキラが気になるが……まあ、ここに連れてきてくれたことは事実だし、何か言うのはやめておこう。

その代わりに、もうひとつ気になっていたことを訊いてみる。

「そういえば、言葉の方はどうなっているんだ？　今でも通じるのか？」

「大丈夫ですよ。ハインレンスはこの300年、他国から侵略されることもなく独自の文明を築いてきました。多少言い回しが変わったり、新しい言葉が生まれたことはありますが、基本的なところは変わっていません。今話している言葉は、現代人にはちよつと古風に聞こえるかもしれませんが、ちゃんと通じますよ」

「なら、安心だな。……行くか」

憂いも消えたところで、もう一度その巨大な町の門を仰ぎ見る。

（300年越しの初めての街見学、か）

……少しだけ、ワクワクする。

第5話「初めての街」

初めてまともに見る街は、自分にとってはまるで異世界のような街だ。……

人が、物があふれている。

街を縦断する大きな通りには露店が所狭しと並び、客寄せの元気な声があちらこちらから聞こえる。

（人が生き生きとしていて、活気がある。……これが普通なのか？）

そうだとしたら、魑魅魍魎の巣である王宮と殺伐とした戦場しか知らなかった自分の世界の、なんて狭かったことか。

王都でのパレードでは、たしかにすさまじい歓声を送られ、『すごい活気だ』という感想を持った。

もつともあの時は、民もみな戦を前に一時的に興奮して（新兵によくある）いるのが原因なのだと思っていたのだが……

なんにせよ普段からこんな風になぎやかなのは驚きだ。王都はもつとすごいのだろうか？

そんなことを考えながら、おのぼりさんよろしくキョロキョロしながら大通りの混雑した道を進む。

そしてしばらく道を歩いていると、不意に横あいから元気な若い男の声が聞こえた。

「そこのかわいいお嬢さん！ ちょっと見ていかないか！」

（……………もしかして私のことか？）

“かわいい” などという形容詞は、12才以降一度も言われたことがないので正直かなり戸惑う。

あたりを見回してみるが……やはり自分の他に“お嬢さん”と呼ばれそうな年代の女性はいない。

「そうそう君だよ！ どうだいこの指輪！？ お嬢さんのようなかわいい子にこそ似合うよ！！」

顔を向けると、首やら腕にじゃらじゃらしたものを身につけた青年がにこつと笑いながら話しかけてきた。

（装飾品を販売している露店、か。でも指輪は……）

「……………指輪なら持っているから大丈夫だ」

生まれてからずっと、自分の装飾品など持ったことがなかった。そんな私を憐れに思ったのか、アスト王子がああ戦いの前に指輪をくれたのだ。

翠色の アスト王子の瞳の色と同じガラス玉は、中に見たことのない紋章が刻まれていてとてもきれいだった。

最初は『こんなものもらえない』と断ったのだが、『安物だから気にしないで。それに……これは君のために用意したんだよ』と言われては受け取らざるをえなかった。

今となつては“形見”といえるようなものかもしれない。

「おっと、こりゃ失礼。なんならこっちのネックレスはどうだい！
？ お嬢さんのようなかわいい娘なら特別にこのピアスもサービス
しちゃうよ！！」

そんな自分の郷愁をぶち壊すように、青年は何かを悟ったように
ニヤニヤした表情を浮かべながら違う商品を勧めてくる。
こういうのを商魂たくましいというのだろうか。

そもそも自分は買い物という行為をしたことがなく、お世辞も言
われ慣れていない。
なにがしたいのかというと、つまりこういうときにどう対処す
ればいいのか全くわからないのだ。

とりあえず人間ではないものの、自分よりはこの手のことに詳し
そうな奴に助けを求めてみる。

「キラ、こういうときはどうすれば……………て、あれ？」

振り向いて後ろを見るが、そこに少年の姿はなかった。

周辺にも、いない。そういえばさっきあたりを見回した時もない
かった。

……………どうやらはぐれたみたいだ。

（ふむ……………迷子か。困ったな）

そうして眉を八の字にしていると、青年が心配そうに、でもどこ
かうれしそうに声をかけてきた。

「お嬢さんもしかして迷ってるのかい？」

これには、驚いた。

たしかに自分は（道に）迷っているといえるが。

（なぜこの青年はそれを知っている？ もしや……何かの魔法か？）

そう思い興味深い目で青年を見ると、彼はいきなり立ち上がり……満面の笑みを浮かべながら私の手をつかんでなにかを言ってきた。

「そうか、そんなに迷っているならタダであけてもいいよ！ なあに、たとえ彼氏がいても俺は気にしない！ だからこれあげるかわりにこのあとデ」

「ああああ　！！　いたああああ　！！！！」

青年の言葉を遮り、絶叫しながらこちらに爆走してくるのは、間違いないキラだ。

その美少年は、自分たちのつながれている手を見るとさらにスピードをあげて、悪鬼のような形相でそこに突っ込んできた。

ぶつかる直前、青年が慌てて手を離す。

「危ないな」と私が文句を言おうとしたその時、キラは青年を射殺しそうな目でキッと睨んだ。

そして、天地に轟くような大声でこう叫んだのだ。

「僕のご主人様に手をだすな！！ このブ男！！！」

「……………」

瞬間、あたりはそれまでの喧騒が嘘のようにシーンと静まりかえる。

……………理不尽なこの手の悪口も、絶世の美少年から言われるとやはりダメージが大きくなるらしい。

憐れにも、青年は固まったまま何も言い返すことができなかった。

第6話「衝撃」

今、私はキラと手をつないで街を歩いている。

あの”ブ男”発言のあと、その手をとって逃げるように場を後にしたのだ。

あの青年には悪いことをした……せめて心の傷が残らないことを祈ろう。

キラはまだあの男にいろいろ言いたかったらしいが、あれ以上の暴言は彼の将来にかかわるかもしれない。

そう考えると、やはり自分の行動は正しかったと思う。

が、そのかわり、今は私のほうにそのベクトルが向いているようだが。

先ほどから、ぶつぶつと不満を口に出している少年に目を向ける。

「……もう、ちゃんと聞いてるんですか！？　ようやく見つけたと思ったら、変な男にひっかかって……もっと気をつけてくださいよねー!!」

保護者のような説教に少し辟易するが、はぐれたのは自分が悪い……気がするので、ここは素直に謝っておく。

「ああ、すまない。以後気をつけよう。だがこうして手をつないでいれば、とりあえず迷子になることはないだろう?」

そう言つと、キラは呆れたような顔になった。

「……ほんとにわかってるのかなあ。もういい歳なんですから、いい加減自覚してくださいよ?」

……確かに迷子になっていいような歳ではないが、自分は自覚が必要なほどひどい迷子体質ではないはずだ。

(今回はちょっとケースが特異だっただけで……)

それに

「いい歳って……一応私はこれでもまだ17歳だぞ。……まさか、317歳という意味で言ってるのではないだろうな?」

しかしそう考えるのなら、同じく300年以上も(しかも意識のある状態で)生きてきたにも関わらず、いまだ子供のような言動&見た目10才ほどのキラにそのことを指摘されるのはしゃくというものだ。

そう反論すると、キラはなぜか怒ったように、そして何かを諭すように言い返してきた。

「もう、そっちじゃなくて!! ……はあ。いいですか? 男はみんな狼なんですよ!？」

………まったくもって意味がわからない。

そもそも

「狼なのはお前だろう?」

二人の会話は、どこまでも交わることがなかった。

「どうやら不毛な会話をしていることに気付いたらしい少年は、……まあ、僕が気をつけてればいいか」と呟き、ふと視線を違うほうに向けた。

おそらく自分の好物の匂いがしたのだろう。こちらへんは狼だ。元気な声で話題を変え、少し離れたところにある店を指さした。

「ご主人様ーおなか空きませんか？ あー、あんなところに食堂がありますよ！」

そうわざとらしい口調で言われて、そういえば自分が（寝ていた間は別にしても）長い間食事をとっていなかったことを思い出す。

（あの戦場で、なにかを食べる余裕なんてなかったしな）

特に拒む理由もない。

「そうだな……久しぶりに、まともな食事でもとりに行くか」

「はい、お待ち！バナ肉のステーキとホットケーキとルクの実のジュース2つだね！」

元気のいいおばちゃん注文した品を持ってくる。

私の対面に座っているキラは、すでにそのおばちゃんが持ってい

るホットケーキにくぎづけだ。

神族にとっては魔力が食糧マナのようなものだから、本来口から食べ物摂取する必要がない。

それでも、彼らにとって人間の食べ物嗜好品のようなもので、中には好んでそれを食べる者もいるのだ。

ちなみに、キラは甘いものが大好物だった。

もっとも見た目は獣だったから、健康に悪いと思ってあまり食べさせなかったのだが。

そんなことを考えながらふとキラを見ると……

大好物であるホットケーキに手をつけず、非常にそわそわしながら期待と懇願が混じったようなまなざしで自分を見つめてくる。

(?? …… ああ、そういえば)

「……………よし」

自分の声を聞くと同時に、キラは猛然とホットケーキをがつつき始めた。

その光景を見ると、(キラが人型をとっているせいか)どこか罪悪感のような、物哀しいような想いが芽生えてくる。

しかし

(……………こういうところは変わっていないんだな)

つい苦笑してしまう。

子狼だったころのしつけの成果は、いまだ健在だった。

「それにしてもお嬢ちゃん綺麗な目をしているねえ。加えてすごい別嬪さんだし」

食後、ルクの実のジュースを飲んでまったりしていると、暇なのかさっきのおばちゃんが話しかけてきた。

「……ありがとうございます」

今まで容姿のことで褒められたことなどほとんどない（貴族のお世辞はスル）から、なんだか気恥ずかしい。

「ああ、もしこれで髪が銀色だったら、それこそ聖女様の生まれ変わりなんじゃないかと騒がれるだろうに」

おばちゃんがうつとりしたような声で言ってきた。

（銀色……の髪？）

いや、それより

「聖女様って……誰、ですか？」

すると、おばちゃんは信じられないものを見るような目で、こちらを凝視してきた。

(……なんだろう、嫌な予感がする)

キラのほうを見るとなぜか視線をそらされて……ああ、またモジモジしている。

とりあえずジュースを飲んで心を落ち着けよう。

そして、おばちゃんは………今度はこちらが驚くようなことを言っただけだ。

「なあに言ってるんだい！ そりゃあ、聖女様っていったら一人しかいないだろう！？ 聖女アリア様だよー！」

その日、アリアは生まれて初めて飲み物を嘔いた。

第7話「聖女様」の伝説

「ほんとに知らないのかい!? ある日流星のごとく現れたことから、『人々の危機に神が地上に使わされた娘』といわれたお方を!? 300年前魔王の手から全世界を救った聖女アリア様といえば、今時3歳児でも知ってるよ!？」

おばちゃんが、信じられないものを見るような目を向けてくる。私も、できれば信じたくなかった。

それにしても……口元を拭きながら対面にいる少年に問う。

「キラ……“少し”有名、だったか？」

「……………」

漆黒の髪からルクの实のジュースを滴らせた少年は、バツのわるい目をしながら……賢明にも無言をつらぬいた。

(髪の色を変えたほうがいいと助言したのは、このためか……)

とりあえずさっきおばちゃんが言ったように、『聖女様の生まれ変わり』などといわれる自分を想像してみる……鳥肌がたった。

本当に変えておいてよかった。

それにしても、本日2度目の衝撃だ。

300年後の世界というだけでも驚愕だったのに、今度は”聖女”。

……そろそろ心が折れそうである。

そんな自分たちのまわりに流れる微妙な空気を知ってか知らずか、おばちゃんはダメ押しともいえる言葉を重ねてきた。

「ああ、あんた運がいいよ！　そういえば今日は吟遊詩人が来てる日だったわ。今日のは聖女様の詩を詠うはずだから、ちゃんと聴いていきなさい！！」

この食堂には見世物をするスペースもあるらしく、しばらくすると（なんとタイミンクのいいことに）派手な格好をした男がハープを持って現れた。

……正直、聴きたくない。

しかしおばちゃんが睨みを利かせているため、逃げることもできない。

魔物相手には“無敗”を誇る自分でも、このおばちゃんの強引なおせっかいには勝てなかった。

そして憂鬱な自分の感情とは裏腹に、吟遊詩人は高らかに”それを詠った。

「彼の者の美貌　天地に比類なき

瞳に宿す紫は宝石のごとく

風に揺れる白銀は月光のよう

けがれなき真珠の肌は何人にもおかしがたく

ただその清らかさを象徴せん

傍らには猛々しき金色の狼をはべらせ

救世の道をいざ歩まん

ああ、我らが愛しき神の娘アリア

月光の聖女

黎明の戦女神

紫銀の救世主

彼の者その命をもって魔王を打ち滅ぼし

我らの命を救いたまん

我らその犠牲を忘れることなかれ」

詩がおわり、拍手とともにおひねりが投げられる。

そんな中、私はただ一人、微動だにせず、無我の境地に入ろうとして……失敗した。

どうしよう……さっきまで耳に入った“音”を何一つ理解しなかった。

「いい詩だろう？ 聖女様を讃える詩は多くあるけど、これが一番有名さ。なんとってこの詩をつくったバツハン伯爵は、実際聖女様に拝謁できた数少ない人だったって言うからねえ」

そう、聞いてもいないのに親切に教えてくれるおばちゃんの解説を聞き、ようやく思考を取り戻し始める。

（バツハン伯爵………あの変態か！！）

今、自分の目の前にいたら、確実に殴っていたであろう人物のことを思い出す。

やつは……例のパーティーで極悪宰相に紹介された貴族のうちの

一人だった。

やたらしつこかったからよく覚えている。

（そういえば、『私、詩をつくるのが得意なんですよ。今度あなたの美しさを讃える詩をつくっても？』とかきざったらしく言っていたが……）

まさか本当につくるとは。あの時キツパリと断っておけばよかった。

もつとも宰相が紹介してきたことを考えれば、これも最初から例の“計画”のうちだったのだろうが……

そんな複雑な自分の胸中を知ってか知らずか、既に開き直っているキラが無邪気に詩の感想を尋ねてくる。

ちなみに、おばちゃんは満足したのか仕事に戻っていったようだ。

「あはは、おもしろい詩でしたねえ。ご主人様はどう思いましたか」
「？」

ほんとにおもしろそうに笑う様子に、一瞬殺意を覚える。

……とりあえず、八つ当たりが必要だろう。

「猛々しき金色の狼……猛々しき……猛々、しき？」

そして胡乱な目でキラを見てやる。

「何度も言わないでください！？ しかも最初に突っ込むのがその部分ですか！？」

（そんなことを言われても……現実逃避もしたくなるだろう）

もはや完全に別人を讃えているとしか思えないあの詩に、一体どんな感想を持てというのだろうか。

いくら魔王を倒した英雄として持ち上げるにしても……

「はあー……………普通、ここまでやるか？」

ため息しかでてこない。

神の娘、聖女、女神に救世主…………知らない間にずいぶん和二つ名が増えたものだ。

だが、こうつらつらと並べては、逆にありがたみにかけるような気もする。

ほんとに詩作が得意だったのかと疑いたくもなるものだ。

…………もしかしたらセンスのないあの貴族連中が、寄つてたかつてあれこれ詰め込んだ合作なのかもしれない。だとすれば納得の出来だ。

それにしても

「ずいぶんと出世したものだな」

つい皮肉気に笑ってしまう。

“化け物”やら“悪魔”やら呼ばれていた自分が、今では”神の娘”で”聖女様”だ。

…………はたして神などこれっぽっちも信じていないただの人間が、

聖女になどなれるのか、甚だ疑問だが。

5年前……いや305年前のあの日から、私は神に祈ることをやめた。

敬虔な信者であつた両親を死なせた神を恨み、なによりその原因をつくつた自分の運命を呪い……神を憎んだ。

そんな自分が神の娘だと？

救世主だと？

（反吐が出る。お前らのために……世のため人のために魔王を封印したわけではないのに）

（私は、ただ一人のために……）

そのままつい哀愁にくれてしまいそうになる思考を、なんとか押しとどめる。

負のスパイラルから脱出するためにも、他のことを考えないと。

……そういえば、最後の一文。

「『我らその犠牲を忘れることなかれ』、だつたか……」

死んだ自分を担ぎあげるだけなら、この一文は不要だろう。

なにより疑問だつたのが

（こんな殊勝なことをいうやつらだつたか？）

このふざけた詩をつくつた連中。あの性悪どもの中に、最後の文

を書くような殊勝な心を持つ者はいない……はずだ。

……だが、彼らの顔を思いだすだけで気分が悪くなったので、結局すぐにその思考も放棄してしまった。

第8話「二人の迷子」

どうやら例の“聖女様”シリーズには肖像や彫像もあるらしい。もっともそちらは（も？）本来の私とはずいぶん違うらしいが……

というより、いろんな顔の聖女様像があるといえは正しいのか。

（ああいうのをつくるには、長期間モデルになる必要があると聞いたことがあるしな）

たとえばあのパーティーにその筋の職人がいたとしても、さすがに一度見かけただけで本人そっくりに作品をつくることはできなかったのだろう。

なにはともあれ、それだけが救いだっただ。

指名手配犯のように容姿まで知れ渡っていたら、おそらく自分は日の目を拝めないことになっていただろう。

そしてなにより……これ以上“聖女”関係でなにかあつたら、自分分は間違いなく憤死する。

白光を帯びて輝く月が、ポーラの街並みを照らす。

（なんだかどつと疲れた……もう休みたい）

さすがに、今日はもうこれ以上の心労に耐えられそうにない。そんな理由から食堂を出て、今はキラと一緒に宿屋を探している。

時刻は夜も更けたところで、遅くまで露店を営んでいた人も既に家路についていることだろう。

「あつ！ あそこなんてどうですか！？」

見た感じ、そこそこ上等そうな宿だ。

自分のお金じゃないのが唯一心苦しいが……ともかく今は一刻もはやく外界との接触を絶ちたかったので、そこに泊ることを即決した。

そして、宿に入ろうとした、その時。

「……！？」

急に後ろを振り返る私に、キラが怪訝な表情をする。

「ご主人様？ いきなりどうしたんですか？」

（……………気のせいかな？）

だが、一応確認の意味も込めて、キラに今の違和感を伝えてみる。

「いや、何かに見られていたような気がして。一瞬だったから、確証はないが……」

自慢ではないが、戦場を渡り歩いていたせいかな魔族などの悪意ある気配には人一倍敏感なほうだ。

街に入ってからやけに多くの人々の視線を感じてきたが……やは

り今のは違う気がする。

しかし

「む、僕は特になにも感じませんでしたけど？」

自分には劣るものの、普通の神族並みに感覚は鋭いキラが答える。

「……なら、気のせいかな」

もう何も感じない。

やはりただの勘違いだったのだろう。

少し疲れているのかもしれない。

これまでずっと極限状態の中で生活してきたのだ。少し神経が過敏になっていたに違いない。

そもそも、ここに……この時代に自分を知る者なんているわけがないのだ。

そう考え俯いていると、なにを勘違いしたのかキラが意気込んでこう言ってきた。

「大丈夫です！！ なにかあっても僕が守ります！！ ご主人様にちよっかい出すやつは、僕がけちょんけちょんにしてやります！！」

そんな……300年前よりちょっと頼もしくなった相棒の声を聞いて、なんだかひどく安心する自分がいた。

宿に入り、とりあえず一泊することを決めて受付を（ほとんどキラが）する。

そして鍵をもらって2階の一番奥の部屋に入ると、ようやく安堵の息をはいた。

夜も遅かったせいかな、あいにく一人部屋しか空いてなかったが……キラなら同じベッドで寝た所でたいして問題もあるまい。

上質なベッドに腰掛け今日一日を振り返る。

解かれた封印、姿の変わったキラ、ユスラの木、ポーラの街並み、そして……聖女の話。

「……なあキラ、今日街を歩いて確信したよ。あの日から、ほんとに300年が経っているんだな」

さっきまでの街の光景を思い出す。

手を掴まれた時に気付いたのだが……あの露天商の青年の服は、自分の知っている貴族の服のように、生地がきめ細やかで上質なものであった。

（300年。それだけあれば庶民の生活水準も向上するか……）

今着ている服も、そしておそらく通りを歩く人々の服も同程度の品質だろう。

見慣れない装飾も……今はこれが主流なのだとわかった。

食事に関しても、いくつか知らない調味料が使われているようだった。

さすがに今日は見る事ができなかったのも、自分の専門である魔法については比較ができなかったが……

それでも、大通りを歩くうちに目にしたいいくつかの武器や防具は、やはり自分の知っているものとは変わっていた。

それら全てが……あの時から長い時間が経っていることを証明をするには、十分な証拠だった。

(300年……300年………なら、生きてるはずがない)

ベッドに仰向けに倒れこみ、白い天井を見上げる。

心は疲れて早くこの思考を断ち切りたいのに、300年も寝ていたせいか……身体は眠くなってはくれない。

そして、一度回りだした思考も止まってはくれない。

魔王を命がけで封印した理由。自分の生きる理由であった少女のことを思い出す。

……… たった一人の、私の妹。私の罪の証。

(それが……もういない?)

自嘲する。そして……絶望した。

「……なあキラ。私は、これからどうすればいいんだ？」

自分でもわかるくらい、ずいぶんと情けない声が口からでる。
そう自覚しながらも……止められそうになかった。

だって

（あの子がいない、それはつまり）

「生きる理由がなくなっちゃったよ……」

ずっとあの子のためだけに生きてきた。

周りに押しつぶされないように男のような口調で話し、どんなに切迫した状況でも冷静に判断をしてきた。

血反吐を吐きながらも死ねずにいた。

だからこそ……最後のあの時、魔王と対峙しながらようやく訪れる己の死の予感に歓喜した。

そしてその望みどおり、最高の死に場所で最高の死に方ができたと思った。

それなのに

「……………迷子になっちゃった」

時においていかれた。

本当に迷子のように……今の自分は、寄るすべを失って途方にくれた子供と同じだ。

静寂が部屋を包む。

しばらくすると、キラが珍しく真面目な口調で語りはじめた。

「ご主人様……ご主人様が迷子になった時は、僕が必ず迎えにいきます」

そうして、ベッドに寝転がる自分に近づいてくる。

「僕がついてます。ご主人様が死ぬ時までずっと、ずっとおそばにいます」

自分の横にすり寄り、幼子をあやすように己を抱きしめてきた。

あつたかい……まるで真綿に包まれているようだった。

「だから、だから生きてください。もう僕を、置いていかないでください」

その声色からは、切実さが滲み出ていた。

そして、その声に導かれるようにひとつの事実が脳内へとやってきた。

(……………ああ、そういえばこいつも迷子だったな)

偶然助けた迷子の聖獣。

300年間自分を待っていてくれた存在。

（そうか、私たちは似たもの同士か…）

迷子が2人。

そう……時に置いて行かれても、自分には待っていてくれる人がいた。

（私は、1人ではなかったのだな）

もしあの偶然の出会いが、神の采配によるものだったとしたら……

今だけは感謝してやってもいい。

そしてなにより、今、目の前にいる存在に心からの感謝を。

「キラ……お前に出会えてよかったよ。ありがとう」

迷子同士、これからは手をつないで共に歩もう。

もう二度とはぐれることのないように。

キラが身じろぎして……その後何かを呟くが、薄れる意識の中ではなんといったのか聞き取ることができなかった。

でも

（ああ、このぬくもりの中でなら安心して……）

そうして“明日”が“今日”へとかわった頃、聖女と讃えられた少女は、300年ぶりの眠りについた。

朝日とともに目覚めるであろう、確かな眠りに。

第9話「監視の影」

時刻は遡って、アリアが目覚めたその日の未明。

ポーラの街の影で、一人の青年が誰かと連絡をとっていた。

『そちらも目覚めていたか？』

相手の男が口火を切る。

「ええ、予定通りに……」

『そうか、計画は順調だな。こちらもついにあのシヴァを喰ってやったぞ』

「おめでとつございます」

『封印のおかげだな。さすがにあれで弱っていなければ、いくら300年で力を増した私でも魔王を喰うことはできなかったろう。まったく、あの小娘も役に立ったものだ……ああ、気配もかなり微弱だったから、おそらくよほど敏感な者でなければあの魔王が目覚めていたことには気付かなかったはずだ』

「……………」

（ついに念願になって魔王を喰らえたからか……いつもより饒舌だな）

無言を貫く青年は、ひとり胸中でつぶやく。

『ところで、監視に気付かれてはいないだろうか？』

「……………今のところは」

『……………本当だろうか？ 今後はさらに注意しろ。絶対に悟られるなよ』

「了解しました」

『シヴァの力……………さすがに最強と呼ばれただけはある。吸収した力を身体に定着させるのにおそらく1年ほどはかかるだろう。……………これから私は眠りにつく。その間気付かれることなく監視を続ける』

「はい」

そして『最後に』と、赤金色の目をした……………300年前は珊瑚色の目を持っていた魔王の元側近はこう警告する。

『カオス、あの小娘を死なせるなよ。あれも私の大事な餌となつてもらうのだからな』

「かしこまりました……………ベリアル様」

カオスと呼ばれた青年は青紫の双眸を怪しく輝かせながら、己の主 に恭順の礼をとった。

第9話「監視の影」（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。ここで第1章はおわりです。

ついでに連続投稿もいったん終了（汗）

できるだけ早く続きを書きたいと思いますが…

さて次はいよいよ学園編がスタート。

ようやく他の主要人物と魔法が活躍できる舞台がやってきます。

よろしければ気長にお付き合いください。ではでは。

2章 第1話「出会い」

視界に映る光景は、まるで地獄のようだった。

ついさきほどまでであった、自分たちの暮らしていたはずの家が、街が……原形を留めていないほど、破壊されている。

いまだ火の手があがっている家と……何かの焼ける匂いが、鼻をつく。

（なにが……おこったの？）

最後の記憶は……ああ、村を魔族が襲って、両親が自分と妹を納屋に隠したんだ。

でも結局見つかって、抵抗したけど、殴られて……それから……それから……

（どうしたんだっけ？）

誰かその疑問に答えてくれる人はいないかと、あたりを見回し……そして、自分のかわいい妹がひどい怪我を負って座り込んでいるのを見つける。

「マリア！？ どうしたの、そのけ」

しかし近づこうとすると……仲の良かったはずの妹は、涙を流しながら、必死に己からあとずさる。

そして

「ひっ！！ いやだ、来ないで！！ 助けてお父さん、お母さん！」

（ねえ、どうしてそんな目をするの？まるで……まるで”化け物”を見るような目を）

「……！！」

一気に覚醒する。

「……は？」

そうだ。昨日300年の眠りから覚めて……自分は……
苦い笑いがこぼれる。視界に映る白い天井がどこか忌々しい。

（そうそう、うまくはいかないもの、か）

たとえ300年の時が過ぎていても、いまだ自分の心は過去に囚われている。

心底に潜む深遠の闇は一朝一夕で振り切れるものではない。

（昨日は穏やかに眠れたと思ったのにな）

その原因？　とっていい少年を探す。

いた。ギリギリベッドの上に載っているが、いつ床に落ちても仕方ないほど危ういバランスで……実に幸せそうに眠っている。なぜか安心した。

身体は昨日目覚めた時と同じく、少しだるかった。

きつとまだ300年の眠りの後遺症が残っているのだろう。

だがそれでも、カーテンの隙間からこぼれる300年ぶりの朝日はひどくやわらかく、自分をやさしく出迎えてくれているように感じた。

これが私の新しい世界だ。

（今日からまた……生きていくんだ）

その最初の1日。まずは、その決意をくれた相手を起こすことから始めようか。

少し寝過したらしく、アリアたちが階下に降りるときには、太陽はすでに万人にその光を浴びせるほど高くあがっていた。

幸いなことにもこの宿は一階が食堂と兼任で、そこで遅めの朝食をとることにする。

（さすが高い宿なだけはある）

柔らかいパンとあたたかいコンスープ、そして名前の知らない卵料理（おそらく300年間で新しく生まれた料理だが）を前に少し感心してしまう。

それを食しながらキラとこれからのことを話す……前に、まずは最優先でしなければいけないことがある。

「キラ、人型時は“よし”ではなく“いただきます”で食事をとるんだぞ」

「はい」

自分が新しい人生を始めたついでに、今日からキラのしつけ、もとい教育も始めることにした。

そして相変わらずがつがつ食事をとるキラを見ながら（これもおいしい教育が必要だ）、昨日から思っていたことを口にだす。

「キラ、お前どこか行きたい所はないか？」

キラはパンくず（もちろん菓子パンの）をほっぺにつけながら、不思議そうにこちらを見てくる。

「ほへ？……僕が決めていいんですか？」

「ああ、だつてお前ずっと私のそばを離れられなかったんだろ？300年も待たせたんだからな、せめて行き先はお前が決めてくれ。私は特に行きたいところもないしな」

すると今度はちょっと迷ったような顔をした後、それをふっきるように言った。

「……じゃあ、僕、王都に行ってみたいです！！」

（王都か……うん）

王都なら大きい都市だし、なんらかの働き口も見つかるだろう。

（さすがに、これ以上他人のお金で生きていくのは忍びないしな……）

最悪自分には魔法もあるし……まあ、なんとかなるだろう。

それに王都ならここから飛行魔法で3時間といったところだ。た
いした手間ではない。

「よし、じゃあ朝食を食べ終えたら王都へ向かおう」

街を出て人気のない方向へと歩く。

少なくとも300年前の時点では、飛行魔法は使い手の限られる
高位魔法であった、と聞いている。

今がどうなっているかは知らないが、とりあえず用心に越したこ
とはないだろう。

一度行った場所ならいけることから、転移魔法という手も考えた
が……なにせ300年前の記憶だ。

下手な場所にでたらとりかえしが見つからないことになるので今回は
やめておこう。

（新しい人生は、なるべく目立たないように生きていきたいからな）

余計なトラブルなどはごめんだった。また利用されるなんてもつ
てのほかだ。

そんなことを考えながらのんびりと歩いていると……少し先に、
懐かしくも忌々しい気配を感じた。

「魔物、か……」

正直昔とは事情が違っただから、無理に倒す必要はない。

ないのだが

（さすがに目の前で死なれたら寝覚めが悪い）

道の先で、自分と同じくらいの歳の青年が、イノシシのような魔獣に囲まれているのが見えた。

長年の習慣から、ほぼ無意識のうちに魔獣の瞳の色を確認する。

（……薄い紅色。雑魚か）

魔物は、他の生物を“喰う”ことによって、その体内の魔力を自分の中に吸収し、力を増す。瞳の色を見れば大体の強さがわかるのだ。

青年は……どうやら剣で応戦しているようだが、やはり多勢に無勢である。

「……仕方ない。加勢するか」

どうせ通り道だし、自分のためでもある。

そう言い訳しながら、すべる様な動作で魔物の一団に向かって火球を放った。

それは吸いつくように魔獣の一匹に直撃し、すぐにイノシシの丸焼き（黒こげだが）ができあがる。

近くにいた魔物が唐突に燃やされ、青年が驚いたようにこちらを見てきた。

（またあの違和感が……）

髪色を変えた時と同じ感じがする。

が、今は戦闘中なのでひとまずその思考を閉ざすことにした。
なにしろ、新たな敵を見つけた魔物が、今まさにこちらへと大挙
してきているのだ。

（高位魔法で一気に片付けよう）

そう思って、魔法を発動させようとするが……

「……なっ!？」

なにもでなかった。

なにかが足りないような……そんな、初めての感覚がした。

（どういうことだ!? いや、それよりも……まずい!!）

気付けば目の前に敵が迫っていた。

イノシシらしく猪突猛進の勢いだ……いや、そんなことを考えて
いる場合ではない。

（回避……できない!）

だが、ぶつかる、と思った瞬間自分の背後から魔力を感じた。
黒い影が地面を走り、自分を通り越して今まさに襲いかかろうと
していた敵を切り裂く。

「今の……は」

まさか、と思いながら、後ろを振り返る。

「大丈夫ですか、ご主人様!？」

人差し指を魔物に向けたキラがそう言った。

珍しく、忌々しいものでも見るように、好戦的に魔物を睨みつけている。

だがそれよりも

（なんだか時の流れを感じるな。あのへっぽこだったキラが、今ではこんな魔法を使えるなんて）

つい感慨にふける。

魔法の照明ひとつ出せなかったあのころのキラが懐かしい。

それでいて魔王との戦いにまで付いてくるのだから、もはや無謀としかいいようがなかったのだが……

「キラ………お前、ほんとに300年生きてきたんだな」

しみじみという私にキラは、「今さら!？」といいながら、次々と黒い影で魔物を撃退していった。

どうやら自分の出る幕はないようだ。

いや、舞台にあがれない理由は……自分にこそある。

ようやく、違和感の正体がわかったのだ。

少し冷静になって気付いた……魔力切れである。

今まで自分には縁のない感覚だったから、最初はわからなかったが。

「これも、封印の影響か……？」

だとしたら自分には死活問題である。

思い返してみると、今日は昨日より魔力量が増えていた、気がする。

（少しずつ回復するようではあるが……さて、困ったな）

これでは飛行魔法も、ましてや転位魔法も使えやしない。

（まともに使えるとしたら……）

ふと青年の方を見ると、どうやら2匹の魔獣に挟まれてなかなか危ない状態のようだ。

あまり気は進まないが……しかたない。

【頼む】

そう言つて、さきほど私の放った火球に引き寄せられて集まった、火の精霊に“お願い”する。

すると淡いぼわわした地界の精霊は、どこかうれしそうにそれに応え、青年の背後にいる魔獣を燃やし尽くした。

自分の後ろにいた魔物が突然燃えだしたことに、また青年が驚いている。

しかし、今度はすぐに気を取り直して、正面にいる魔物に斬りかかっていった。

(……ふむ、どうやら問題ないようだ)

二つの意味で確認した。

「ありがとう、助かったよ。……今度礼をする」

そう火の精霊に言って、解散させる。

いつもなら力を借りる対価として自分の魔力を与えているのだが……今はそれができないことが心苦しい。

しかし精霊は『気にしないで』というように、自分の周りを一回りして帰って行った。

それを申し訳なくなりながら見送っていると、どうやら戦闘が終わったようだ。

「ご主人様、僕の活躍見てくれました!？」

キラが『褒めて、褒めて』とでもいうように、嬉しそうな顔で駆け寄ってきた。

それに苦笑し、子狼の頃にやっていたようにその毛、改めその髪をくしゃくしゃになでてやる。

「ああ、強くなったな。助けてくれてありがとう、キラ」

実は最初のやつ以外ほとんど見てなかったのだが……それでもキラは満足そうに目を細めている。

だがそのあとすぐに、少し警戒するように後ろを振り向いた。

自分にはさつきから見えていたのだが……さきほどの青年がこちらの方に向かって歩いてきている。

（面倒ごとにならなければいいが……）

そう願いながら、少し緊張する。

今まで同年代の人間とまともに話す機会などほとんどなかったのだ。

まして、今や時代も違う。

（現代の若者とちゃんと会話ができるのか……不安だ）

老人のような思考をしているのに気づいて、微妙な敗北感を味わう。

（考えていてもしょうがない。…まあ、なるようになるか）

そして不安と……少しの期待を胸に寄せて、アリアは己の運命を変える人との出会いを果たすのだった。

2章 第1話「出会い」（後書き）

てなわけで2章の始まり始まり。

1章は勢いがのって1日で書けちゃったんですけど…やはり見切り
発車だつてせいからここから難産しそうです（汗）

週1〜2話のペースで更新…できたらいいなあ。

では今後ともよろしくお願いします。

第2話「ライル」

その青年は、さきほどまで命のやりとりをしていたとは思えないほどさわやかな笑みで、右手をあげながら話しかけてきた。

「よお、助かったよ！ 普段はこんなところに魔獣なんてでないのに、今日に限って急に出てきてさー……あ、俺はライル！ あんたは？」

栗色の髪に若草色の瞳を持った人物は、人懐っこそうな目をしながら2人の前まで来た。キラの頭の上からその顔を見つめる。

精悍な顔つきながら、どこか少年っぽさを残したその相貌は“綺麗”というよりは“格好いい”という表現のほうが似合うだろう。

（名前については“あれ”があるからあまり口に出したくはないのだが……偽名で呼ばれるのも、な）

この時代で唯一自分という“個”を認識できる記号なのだ。なにより両親がつけてくれた、自分にただ一つ残されたものを偽る気にはなれなかった。

「……アリアだ。こっちはキラ」

少し逡巡しながらも結局、自分を守るように立ちふさがっているキラと一緒に名乗る。

それにしても、なにやらキラの雰囲気がいっつもよりとげとげしい……人間不信が発動したのかだろうか？

そんなキラの態度を全く気にせず……いや、気付いてないのかも
しれないが、変わらない態度で青年は応じる。

「へえ、聖女と同じ名前なのか……あんたも大変だなあ」

（も？）

そう言っただけ苦笑する青年に少し疑問を感じるも、とりあえずこれ
以上名前のことで突っ込まれたくはないので、結局何も言わなかつ
た。

「おっと、そうだ」

そうして黙っていると、不意に青年はなにかを思い出したように
そう言っただけ口笛を吹いた。

すると……森の中から足に傷を負った栗毛色の馬が、ひよこひよ
こしながらこちらに歩いてくる。

（よく訓練されている）

感心すると同時に、最後の戦いで自分を乗せてくれた同じ栗毛を
持つ馬のことを思い出す。

途中ではぐれてしまったが、あの馬は無事だったろうか……短い
付き合いながら賢い子だったのはよくわかったし、あまり心配はし
ていないが。

そんな、ついつい300年も前の、今更考えてもどうしようもない
ことを考えてしまう己が少し嫌になる。

（まあ、いまはまだ仕方ないか）

ちなみに青年はといえば……馬の方に向けよって心配そうにその傷を確認しているところだった。

「怪我させてごめんなリス。すぐに治してやるからな」

そう言つて栗毛の馬にむかい、両手をあわせて目を閉じる。

【神の慈悲をここに請わん 祈りに応えて 彼の者に癒しを与えた
まえ】

すると、どこからともなく白色の光が現れ、馬の怪我を癒しているではないか。

（これは……魔法、か？）

なにやら自分の知ってるものとはずいぶん違うようだ。

だがそれより気になったのが

「お前、魔法が使えるのにどうして剣で応戦してたんだ？」

「そりゃ詠唱なんてしてる暇がなかったからなー。あんたみたいに詠唱破棄なんて高度な技、俺みたいな普通の魔法使いじゃ無理だよ」

「そ、そうか……」

（今は詠唱を行うのが普通なのか？）

詠唱などよつぽど大規模な魔法を行使する時しか使わない。30年前とて、自分がさきほど出した火球程度なら誰でも詠唱なしで行使できたはずだ。

(……もしかして、300前より魔法は退化している?)

だがこの青年の言葉だけではまだ確信が持てない。

ここで結論を出すのは早計だろう。

さまざまな憶測が宙に浮かんではすぐに消えていく。なんとももどかしい感じだった。

おそらく自分がそんなことを考えているだろうとは全く思っていない青年は、なおも話を続ける。

「しかも最後に敵を燃やしたあれ、精霊の力だろう? 俺も火の属性を持つてるからなんとなくわかったよ。詠唱破棄のうえに精霊の力まで借りれるなんて、あんたすげえ魔法使いなんだな!」

これにもなんだかひっかかるものを感じたが、下手に突っ込もうものなら今度はこちらの藪を突かれかねない。ここは話をあわせたほうが無難だろう。

苦くなりそうな顔をなんとか無表情の仮面で取り繕って、冷静に答える。

「……いや、それほどでもない」

「まあ、そんなに謙遜するなよ。これでもほんとに感謝してるんだぜ。ところであんたらどこに向かおうとしてたんだ? この方向だ

と……もしかして王都か？」

「そうだが」

特に嘘をつく理由もないので素直に答える。

すると、それを聞いた青年は、どこかうれしそうにこう提案を持ちかけてきた。

「ならちょうどいい！！俺も王都に行くところだったんだ！助けてくれたお礼もしたいし、よければ王都まで一緒に行かないか？」

(……ふむ、どうするか)

少し迷う。

おそらく普段なら断っているところだが……今は状況が状況だ。

「あー。ちょっと待ってくれ、今連れと相談するから」

そう言い、いまだ青年を睨みつけているキラの首根っこを掴んで、相談という名の緊急会議をする。

そして青年と少し距離を置いたところでキラと向き合った。

……本題に入る前にひとつ確認しなければならないことがある。

「おいキラ、あの男が言っていたのはどういうことだ？今の魔法はみな詠唱が必要なのか？」

「え？う、うん？僕、人間のことはよくわかりません」

なぜかわざとらしく答えるキラに疑念が生じる。……目が泳いで

いる。

「……お前、私が眠っている間『情報収集をしていた』、とか言うてなかったか？」

するとキラは……お得意のモジモジを発動した。

今までは後回しにしてきたが、もはやこれまでの経験で後回しにするとうるくなことにならないのはわかっている。

「キラ……お前、いつたいな・ん・の情報収集をしていたんだ？」

少しドスをきかせて尋ねてみる。

「……えつと……新作のお、おかし…と、か？」

目をせわしなく動かし、しまいにはつくり笑いを浮かべて、かわいらしく首をかしげるキラ。

その頭を……驚掴みにする。

「お・ま・え・は」

とんだ失敗だ。

自分はその点においては結構キラをあてにしていたのに。

どうやらこいつの知識はお菓子関連とその延長線上のものに限られているらしい。

そういえばこいつ、“聖女”のことについては知っていたのに“聖女の詩”については知らなかった。

……おそらく本当に基礎的な知識しか知らないということだ。いや、それすらも危うい。

（しかし……これでは迷子が2人どころではない。世間知らずの馬鹿2人だ）

昨日一日でひとまず心の整理ができ、新しい人生を受け入れることができた。

だからこそ王都に着くまで、ここで生活していくための基本的な知識をキラから教えてもらおうと思っていたのに……

その計画は丸潰れである。

ついキラの頭を掴む手に力が入ってしまうのも、仕方のないことだろう。

背後から、なにやらその様子を見ていたらしい青年の「お、おい、虐待はよくないぞ!」という声が聞こえる。

それに、「違う。これは教育的指導だ」と答えながら、ようやく本題を思い出した。

「まあいい……さて、どうする？　あの男とともに王都に行くか？　どっちにしろ魔力切れで飛行魔法は使えないし、道すがら私たちの足りない情報（という名の常識）を得るためにも、私はその方がいいと思うんだが？」

「ぼ、僕は反対です!」

やけに焦ったようにキラが主張する。

「ほう、その理由は？」

「え……えと……か、勘です!!　僕の勘がそう告げています!!」

あ、あいつきつと悪い男ですよ！」

どもりながら答えるキラの“それ”を聞いて安心した。
これならばまず間違いない。

「よし、じゃあ彼と王都まで行くか」

「なんでえ！？」

キラが裏切られたような顔をして、大きな目を精いっぱい開きながらこちらを見てくる。

「だってお前の勘はまずあたらないだろう？」

キラの勘はあたらない。それはもう確実にあたらない。
つまりキラの勘が彼を“悪い男”と告げているのなら、現実はその逆だということだ。

自分の失言が主の意見を後押ししたことに気付いたキラが、頭を抱えて唸っている。

それを後目に青年の方を向いて了承の意を告げる。

「わかった、王都まで同行しよう」

それを聞いた青年。いや、ライルだったか……は、それはそれは嬉しそうに目を輝かせながら答える。

「そうこなくっちゃ！ 王都までよろしくな。アリア、キラ！」

そうして3人と1匹（あるいは2人と2匹）は王都までの道のり

を共にすることを決めたのだった。

第3話「事情」

「そついや紹介し忘れていたな。こいつは俺の愛馬のリースヘン。美人だろう？」

そう言つて見事なたてがみを撫でるその様は、まさしく親ばかりのようであつた。

しかしそれと同時に、同じ栗色の毛を持ったものが並ぶその姿には、たしかに種族を超えた親愛があるように感じとれた。

リースヘンという馬のほうも『もつと言つて』というように、うれしそうにライルの顔に頬ずりしている。

「ああ、なかなかの器量の持ち主だと見受けられる」

「へへ、ありがとう。……しかし、困つたなあ。キラは小さいけれど、さすがに3人乗りはキツイだろうし。でも徒歩じゃ途中で野宿することになつちまうしなあ」

どうやらそこらへんのことを考えてなかつたらしい。

（私も人のことは言えないが、あまり後先考えない性格なのか……？）

でもそれについてはいい考えがあるので、心配する必要はない。

「ああ、それな……」

「僕は小さくない！ 子ども扱いするな！！」

提案しようとした矢先、キラが私の言葉を遮つて、ライルにかみ

ついた。

なぜだかこの青年のことがお気に召さないらしい。

「ああ、悪かったよ。たしかにあんなすごい魔法使えるんだもんなほれ、お詫びの印にこれやるから、そう怒んなよ」

ライルは苦笑しながらそう言い、ポケットから飴玉を2個とりだしてキラの口に放り込む。

（まさしく子ども扱いしているようだが）

しかしキラはそれに気付いてないのか……あっけなくその誘惑におちた。

「あはは、リスみてえ！」

飴玉で両頬を膨らますキラを見て、ライルが爆笑する。

それを見た私も嘆息する。

飴玉2個であっけなく陥落するキラに、保護者として一抹の不安を覚える。

（まさか菓子を与える人になら誰にでもついて行くんじゃないだろうな）

幸せそうな顔をしているキラを横目に恐ろしい想像をする……どうやら新たな教育が必要なようだ。

「で、話に戻っていいか？ さっきの話だが、問題ない。こちらにも足はある」

「ん？ そうなのか？ 見たところ馬は連れていないようだけど……」

不思議そうな顔をしたライルがあたりをキョロキョロと見回す。

「そりゃ馬じゃないからな。……キラ」

いまだ幸せそうな顔でにんまり頬をおさえている自分の相棒に声をかける。

「え？」

そして、次に発せられる自分の言葉にその顔が凍りついた。

「獣型になれ」

「う、うえええええ！！ ご主人様……まさか！？」

「そのまさかだ。別に、いいだろう？」

そう言いながら先ほどキラの頭を驚掴みにした方の手をにぎにぎする。

それを恐ろしそうに見たキラは、「あううう、今回だけですよ」と言っ、嫌々そうにしながらも漆黒の狼の姿になった。

そこにいたって、一連の出来事を見ていたライルも驚いたように声をあげる。

「うお！ キラお前、神族だったのか！？ しかも“ご主人様”ってことは……もしかしてアリアの使い魔か！？」

ちなみに馬のリースヘエンも主人と同じく、突然現れた肉食動物に驚いているようだ。

「使い魔？ 契約のことか？」

また聞き慣れない単語だ。でもどうせ王都までの付き合いだと思いい、今度は遠慮なく訊く。

「そうそれ。姉弟だと思ったら主と使い魔だったなんてなあ。そういわれてみればキラの瞳は蒼か……てことはあれか？ アリアは火と闇の2つの属性を持っているのか？」

（2つ、の属性？ ……話についていけない）

属性を持っているとはどういうことだろうか。

聖獣や神族じゃあるまいし、人間に属性を持つも持たないもないはずだが……

疑問に感じたが、ここであまり無知をさらすのもどうかと思い、焦りながらもなんとかごまかすように違うことを答える。

「いや、正式に契約を結んでいるわけではないのだが……」

そう自分で言っと思って出す。

（そういえばまだキラと契約を交わしてなかったな）

以前は天界に還されるのが嫌で契約を拒んでいたはずだが……今

はどうなのだろうか。あとできいてみよう。

「そうなのか？ まあ、確かに使い魔は常に地界に顕現してるものじゃないって聞くしな。……にしても神族を供にしているなんて、アリアはよっぽど優秀な魔法使いなんだな！ いったいどの学園で学んだんだ？」

「学園？ いやどこにも入ってないが……」

「へー、じゃあ誰が高名な魔法士に師事したとかか？」

「い、いや、そういうわけでもない」

（まずい、だんだん会話が苦しくなってきた）

「じゃあどうやって魔法を修得したんだ？ そもそも出身はどこなんだ？」

次々と繰り出される質問に冷や汗が流れる。

ライルの顔が少しいぶかしげなものに変わるのが、なんとなくわかった。

（しまった。こんなに早く誰かと身の上話をするとは思っていなかったから、そこあたりの“設定”をなにも考えていなかった）

軽い気持ちで同行を許可したことに少し後悔する。

そもそも嘘をつくのもそこまで得意なほうではないのだ。こんな時とつさに嘘八丁並べるようなスキルは、少なくとも今の自分にはない。

ぐるぐる考えどう答えようかと悩んでいるまさにその時、神族らしく天からの助けの声が入った。

「ご主人様は独学で魔法を修得した天才なんですよ！ でも、ずっと森の中で住んでいたから世間の事にはすっごく疎いんです！」

「そうだったのか……たしかに最初の火の魔法も今まで見たことない感じだったしな。じゃあ、どうして王都に？」

「そ、それは……ある日ご主人様の魔法が暴発して住んでいた家が黒こげになっちゃったんです！ おかげで今は一文無しです！」

（キラ……いくらなんでもそれは）

苦しいのではないだろうか……いや、それ以上にかなり恥ずかしい。

なんだか冷や汗をかきすぎて肌寒くなってきた。

「そうか、それは災難だったな。なら王都には出嫁ぎに行くのか？」

（信じた！？）

ずいぶんあっけなく信じたその様子に驚愕する。

実はこの青年も少し普通の人はずれた感覚を持っているのかもしれない。

（いや、今はずいぶんと平和らしいし……そのせいかな？）

自分のいたところは、一人で街の外に出るなど魔物に殺してくれといつてるようなものだった。

とにかくこれ幸いと自分も会話に加わる。

これ以上キラに任せていたらとんでもない人物像ができあがってしまう。それだけは阻止せねば。

「ああ、そうなんだ。独学ながら魔法は使えるし、それで生計を立てようと思っている。だが、なにせさつきキラが言ったようにずつと世間と隔絶したところで暮らしてきたからな。一般常識が足りないんだ。よければ道すがらそのへんのことを私に教えてくれないだろうか？」

そう言ってキラの背に乗る。ふわふわした毛が気持ちよく、優しくなでてやる。

この点はキラに感謝せねばならないだろう。これなら多少常識知らずでも、不自然にはならないはずだ。

自分のその姿を見てライルも愛馬に騎乗する。

リースヘンはまだキラの存在に怖々としているようだが、主になだめられてなんとか慣れたようだった。

「ああ、そういうことならまかせとけ！ 王都の一般常識からおすすめデートスポットまで、なんでも教えてやるよ！」

そう言ってこちらに笑いかけてくる。別にデートスポットはいらないのだが……

「僕のご主人様を口説くな！！」

キラが昨日もしたようにキツとライルを睨みつけている。

……しかし今日は、次の一言であっけなくその溜飲を下げた。

「まあまあ、落ち着けよ。王都に着いたらお菓子買ってやるからさ」

「ほんとう！？ どれくらい！？」

そのあまりの変わり身の早さに、さすがに物哀しくなる。

（私は菓子以下か……）

どうやらライルは完全にキラの操作方法を理解したようだった。

第4話「勧誘」

キラの背に乗り、王都への道すがらいろいろなことを聞いた。
人々の生活や王都の名物、ここ最近流行っているものいるものなど……ライルは実に話し上手だった。

その合間に自分が気になっていたことについても、さりげなく訊いてみる。

「なあライル、先ほど私の属性について尋ねていたが……その、
」

しかしそこからどう聞いたものか……しばし悩む。

「ん？ ……ああ、もしかして他の魔法使いに会うのも初めてなのか？ じゃあ自分以外の属性を持つ人間も珍しいだろ」

幸いなことにもうまいこと勘違いしてくれたらしく、ライルは勝手にしゃべってくれた。

「ちなみに俺は火と風の属性を持ってるんだぜ」

「……へえ、そうなのか」

（人によって使える魔法の属性が違う、のか…？）

300年前は、得意不得意はあったものの、ほとんどの魔法使いが全属性の魔法を使えた。もちろんアリアもそうだ。むしろ苦手な属性などひとつもない。

やはり魔法については300年前より衰えていると考えていいのだろうか？

「そういやさつきも聞いたけど、アリアは結局なんの属性なんだ？火が使えるのはわかってるけどさ。キラもいるし……闇の属性も持ってるのか？」

（しかも契約は自分の属性の相手としか結べないことになっている？）

どんどん己の常識が崩れていく。

6大精霊と契約している自分は、この時代ではかなり異端な存在だろう。

この時おそらくキラがその胸中を知っていれば、『いや、300年前でも十分異常でしたよ』と指摘していただろうが、幸か不幸かそのことには気付かなかった。

（ライルも2つの属性を持っていると言っていたし、別に不自然ではないよな？）

「まあ、そんなところだ」

「じゃあ俺と一緒に2つの属性を使えるんだな！それだけで一般の魔法使いとは差がつけられるぜ！」

『よかったな』とでも言いたげなライルの姿に、また思考が回転を始める。

（……普通は1つしか属性を持ってない……と）

そう心のメモ帳に書きつける。
なんだか今日だけでノートがいっぱいになりそうだ。

さすがに（自称）魔法使いを名乗っているだけに、魔法についてはあまり大っぴらに聞けない。

そのせいかさつきから危ない橋を命綱なしで渡っている気分だ。

だが、そのリスク分の価値はある。

特にこれからは、この魔法を使って生計を立てていくのだから。
なにを聞いておいても損はないだろう。

「あつ、そうだ！ 大事なこと言うの忘れてた！」

だがそんな自分の決意とは裏腹に、ライルはとんでもないことを暴露した。

「アリアは職業として魔法を使う“魔法士”になるんだろ？ でも魔法士になるには免許が必要なんだよなあ。知ってたか？」

「……………めんきよ？」

そんな話はもちろん聞いてない。

「あー、やっぱり知らなかったのか。普段の家事程度に魔法使うなら必要ないんだけど、魔法で生計を立てようとする人は“協会”でライセンスを取得しなきゃならないんだよ」

（“協会”？ なんだそれは…………いやそれより）

「そ、そのライセンスを取得するにはどうすればいいんだ？」

「2つ方法があるんだけどな。1つは協会に所属する魔法士に推薦状を書いてもらって試験を受けること。もう1つは、協会が認定する“学園”を卒業すること、だ」

「……………」

どう考えても、自分には無理だ。

“学園”なんてものは知らないし、推薦状についても……………こんな身元不明の怪しい人間に書いてくれるような酔狂な者は、まずいないだろう。

「まあ、森で暮らして独学で魔法を学んだエリアにはキツイ話だな。でも“もぐり”でやるとすぐに協会の審問官がすっ飛んでくるからな。やめておいたほうがいいぞ」

なぜかしたり顔で説明してくるライルに恨みがましい視線を送る。

（そんなことを言われても……………いったいどうしろというのだ）

せつかく始まった新しい人生計画は、初っ端から暗礁に乗り上げてしまった。

自分には魔法以外能などないのに、それすらも取り上げてしまわれてはお先真っ暗である。

そしてズーンというような効果音が似合いそうなほど落ち込む自分に、ライルはどこかうれしそうに提案してきた。

「で、だ。ここで俺から提案があるんだけど…アリア、うちの学園に來ないか？」

「……ライルの、学園？」

ライルは両手を大きくあげて主張する。

「そう、ハインレンス王立魔法学園！大陸屈指の名門校だぜ。でも魔力さえあれば庶民でもはいれるし、実力があれば編入もできる。アリアならきっと大丈夫さ！それに魔法が暴発したってことは、まだコントロールが未熟だってことだろう？一度しっかり学んだほうがいいと思うんだ」

（たしかに現代の魔法について興味はあるが……）

自分の魔法は現代では異端のようだ。

この時代で生きていく以上あまりそれを使うべきではないだろう。

だが、たとえ学びたいとは思っても、いまだ不安は拭えない。
なにせ自分には先立つものがなにもないのだから。

「しかし……入学できるようなお金はないぞ。それに、私には身元を保証してくれる者もないし……」

「それについては心配いらない。なんせ庶民でも入れる学園だから、入学金は安いし、奨学金制度も充実してる。なに、命の恩人なんだから入学金くらい俺が出すよ。ついでに身元保証もな！」

そう朗らかに答えるライルに多少の疑念をもってしまうのは、仕方のない話だろう。

なぜなら

（ずいぶん話がうまくないか？）

いくら命の恩人とはいえ、入学金を払ってくれる上に、身元保証もしてくれる……考えてみれば、それができる家というのは自然と限られてくる。

（もしかしてライルは……）

そこまで考えて頭をふる。

たとえそうだとしても、ここまでいろいろ親切に話してくれた相手に対し、その理由だけを持って態度を変えるのは失礼な話だろう。自分の好き嫌いはどうしようもないが、ライルに対しては誠意を見せたい……そう思った。

ただどうしてもこれだけは聞いておきたかった。

「なあ、どうしてそこまで親切にしてくれるんだ？」

「そりゃ自分の命を救ってくれた人だし、精いっぱい恩返しをしたいと思うのは当然だろ？ それに……なにより俺はアリアのこと、気に入ったしな」

前半はさも当たり前のことを言うように、そして後半はどこか照れくさそうにライルは答える。

その様子を瞬きもせずに観察したアリアは、安心したように息を吐いた。

（よかった……嘘を言ってるようではない。信じてよさそうだ）

今までの経験上、人の嘘や悪意は目を見ればなんとなくわかった。ライルのまつすぐな瞳は、とても嘘を言っているような感じではなかった。

むしろそんな相手を疑った自分の方が恥ずかしくなるくらいだ。

「なあキラ、どうしようか？」

最終確認として己の下にいる相棒に問いかける。

「僕はご主人様と一緒になら、別にどこにいてもいいですよ」

すぐにそう答えてくれるキラに、言葉にはできない思いがこみあげる。

「ライル」

その問いかけも予想していたのだろう。ライルは先回りして自分の疑問に答えてくれた。

「ああ大丈夫だ。すでに使い魔を連れてきている生徒もいるし。なにより上級クラスになったら全員使い魔召喚の授業を受けることになるから、キラと一緒にでも全然問題ないよ」

それを聞いて安心した。

「そうか……じゃあ、さっきの話お願いしていいか？」

「おう、まかせろ！」

こちらの間髪いれずに答えてくれる。

基本的に人に頼るのは良しとしない自分だが、今回は命を助けた貸しがあるので、ありがたくこの好意を頂戴することにした。

それにしても

（どうやら自分にもキラの幸運体質が移ったようだ）

いきなりこんな人間と出会えるなんて、僥倖以外の何物でもない。もしかして、300年前では不幸続きだったから、今生では幸運続きになるのか…そんな馬鹿なことを考えてしまうほど、いいこと尽くしだ。

「まったく……人生捨てたものではないな」

まさしく300年前、人生を投げ捨てた自分にそう言ってやりたい。

（それに学園か。どんなところなんだろう？）

そういうものの存在だけは知っていたが、自分には一生縁のないものだと思っていた。

まだ見ぬ学び舎に想いを馳せる。

（“ともだち”……できるかな）

今度は年相応の思考をしているのだが、残念ながら本人にその自覚はなかった。

それまでのものとはまた違う、新たな期待に胸を躍らせながら、
アリアは王都への道を進む。

第5話「王都」

自分はおぼろげながら300年前の王都を知ってるし、ポーラの街も見てきたことから今度は比較ができるはず、なのだが……

「……………大きい」

結局またでてきたのは、そんな残念な感想だった。自分の語彙力のなさに絶望する。

「そうだろう、そうだろう」

そしてどこかで聞いたような会話を、今度はライルと繰り返す。やはりどこか自慢げに胸を張っているのが気になるが、その気持ちもわからなくはない。

王都は、本当に大きかった。

ポーラの街の10倍はあろうかという広大な面積を要する土地には、これまた大小様々な家屋が並んでいる。色彩豊かな衣装を身にまとった人々は談笑しながらあたりをいきかい、大道芸人は道で各々自慢の芸を披露してそれに花を添える。

（ポーラの街も活気があるとは思ったが、これは……）

その比ではない。おぼろげな記憶ながら、300年前よりもはるかに発展しているのがよくわかった。時刻は既に夕方を過ぎようかといったところなのに、いまだ人の流れは絶えることがない。

背後を険しい山脈に守られたハインレンス王国王都ヴィシアンテ。

古代ヴィシア王国をその名の由来としたいまや大陸屈指の大国の首都は、その名に恥じないたたずまいだった。王城を最奥にして、道を放射線状に広げるその都は、歴史と伝統のかげを残しながらも新しい文化とうまく融合している。混沌ではなく調和、まさしくその見本になるにふさわしい景観だった。

目を細めて、遠目に見える王城を観察する。
自分が唯一よく知っているその建物も、以前とは様相を異にしていた。

（石造りの頑丈そうな建物だったから、300年の歳月でも大丈夫だと思っていたが……）

本城の方は随分と外観が変わっているようだ。
なんといっても真っ白……前は灰色だったそれは、今やいやらしいくらいに純白だった。微妙に悪趣味な気がする。

しかも

（あの忌々しい塔は健在か……）

王城の敷地の端につくられた高い塔。
あれだけ残っているとは一体なんの皮肉だろうか。

「ほら、いつまでボーとしてんだ？ キラなんてもう先にいつちまっただぞ」

ライルが思考に沈む自分を引き上げる。そういえば確かにキラの姿が見えない。

今日中に着くためにここまでけっこう飛ばしてきたから、てっきり隣でバテてるかと思ったが……

ライルの後に従い、門を抜けて少しすると……なにやらショーウインドに顔をひつつけて店内を凝視しているキラを見つけた。

「うわぁ〜これが王都にしか売ってないと言われている“聖女の祝福”かぁ」

うつとりするような声。その視線の先には、色とりどりのお菓子が並んでいる。

「あー、こっちはあの有名な“アリアの涙”！これ一度食べてみたかったんだよなぁ」

ヨダレを垂らし興奮した面持ちで語るその様は、まさしく狂喜という言葉がふさわしい。もし獣型だったら、きっとその尻尾ははちきれんばかりに動いていたことだろう。

中にいる店員が迷惑そうな顔をしているのは……おそらく気のせいではない。

だが迷惑を受けているのはむしろこちらの方だ。

（なぜ人の名前を使って勝手に菓子をつくってるんだ）

こんな生活に密着したところでも自分の名前が浸透（しかもかなり恥ずかしい形で）しているなんて……これからも一生こんな気持ちを味わわなければならないのだろうか。

にしても

（まさか王都に行きたいと言ってたのは……）

キラの顔を見て……やはり考えるのをやめた。むなしすぎる。それにどこでも好きなところへと言ったのは自分だ。

きっとお菓子好きのキラはずっと我慢していたのだろっ。そう思うことにした。

「あっ、あの約束覚えてるよね！？ちゃんと買ってくれるよね！？」

こちらに気付いたキラがライルに詰め寄る。

「はいはい、覚えてるよ。ほら、どれが食べたいんだ？」

「えっと……じゃ、じゃあ、こっからここまでぜ……！」

「2個までだ」

そう言った自分にキラが泣きそうな目で抗議してくる。

だがそんな目をして無駄だ。甘やかすのは教育に良くない。

「くっ……だとき、ほれ選びな」

ライルはそんな自分たちの様子を微笑ましそうに見て、キラの肩を慰めるようにたたいた。

「ご主人様のいじわる！ むっ、じゃあ今回は“女神の慈愛”と“アリア様ラブラブセット”で！」

（……そのチョイスは私へのあてつけか）

そう思わずにはいられなかった。

しかもこの店は“それ系”の名前のものしか売ってないのか……嫌過ぎる。

お菓子を買ってほくほくのキラと、それを楽しそうに見ているライルを先頭に大通りを歩く。今はライルの家に向かっている途中だ。今日はそこに泊る予定である。

最初は『そこまで面倒をかけるわけには……』と断ったのだが、『だって一文無しなんだろう？ それに俺の恩返し計画は始まったばかりなんだぞ！』とわけのわからないことを言われて押し切られた。

（そういえば一文無しってことになってるんだった……）

実はまだキラが持ってきたお金が少しだけ残っているのだが、どちらにせよもう一泊は難しいので、お言葉に甘えることにした。ライルに出会えた自分たちは本当に幸運だ。

「おい！ 汚い手で触んじゃねーよー！！」

キラ同様ほくほくして歩く自分の耳に、不意にそんな怒声が入ってきた。

声のした方に視線を送ると、路地裏近くでボロ布を纏った老人と青年が言い争っている。……いや、なにか違う。

「お恵みを……お願いします。もう3日もなにも食べてないんです」

「そんなこと知るかよ！ 放せ！」

そう言って青年は、老人の腹を思いつきり蹴った。

体重の軽い老人はバウンドするように壁に激突し、そこで腹を抱えてうずくまる。その間に青年はその場を去り、立ち止まっていた周りの人間も興味が失せたように元の喧騒の中へと戻る……そう、まるでいつものことのように。

「……ライル。あれは？」

「あー、なんていうか、都会にはこういう人がけっこういるんだよ。国もどうにかしようとはしてるんだが……」

苦々しい顔をしたライルが、どこか悔しそうに説明する。

「こういう人、とは？」

「いろんな事情があるが……要するにお金がなかったり、住む場所がなかったりする人は路地裏で生活しているんだ。いわゆる浮浪者ってやつだ」

「浮浪者？　だがそういう人間は……その、奴隷になるのではないのか？」

己の胸に手をあて、少し躊躇しながらも尋ねてみる。

少なくとも自分のいた時代はそうであつたはずだ。お金がなく生活が苦しい者は、権力者や富裕層の奴隷となり、自由の代りに毎日の暮らしを保証された、はずである。

「奴隷？　一体いつの時代の話をしてんだ。奴隷制度なんてもう何百年も昔に廃止されたる？」

「そう、なのか？」

「はあ、ほんとに知らなかったんだな。まあ森育ちじゃ仕方ないか……にしても知識が古すぎないか？」

ライルが呆れたように見ていたが、それは気にとめず、未だ苦しむ老人をじっと見つめる。

（そうか。奴隷は、もういないのか……）

そんなことを思いながら黙って老人に近付き、その腹に手をあて簡単な治癒魔法をかける。ここに来るまでの間、また少し魔力が回復したからこれくらいのことではできた。

急に痛みがなくなり、それどころか疲労感までなくなった老人はひどく驚愕しているようだ。

「あ、あの……？」

そうして戸惑っている老人の手に残りのお金が入っていた袋をそっと握らせ、ライルたちのところへと戻った。

「アリア……その、俺が言えることじゃないとは思うんだが、あまりそういうことはしない方がいい。一度やれば、それこそ際限なく搾り取られるぞ」

気まずそうにライルが言う。

何かをあげたことは知られたようだが、何をあげたかまでは知られてないようだ。

「わかつている……今回だけだ」

自分でも正直どうしてこんな行動にでたのかはよくわからなかった。

以前なら決してしなかっただろう。なにせ自分のことだけで精一杯だったから。

だがなんとなく思うところがあったのも事実だ。

奴隷制度はなくなった。それ自体は良いことなのかもしれない。だが、その結果貧富の差が拡大した。

（いや貧富どうこうというよりは、持つ者と持たざる者の関係が、か……）

300年前は例え老人の奴隷でも、あんな扱いを受けることはなかったのだ。

魔物による度重なる襲撃で人はどんどん死んでいった。だから奴隷は労働力として重宝されていたし、そもそも人間同士で傷つけあう暇などなかった。

不自由だがまず飢えることはなかった奴隷と、自由ではあるが今日食べるものにも困る浮浪者。

どちらが幸せなのだろうか……胸に手をあてて考える。

結局答えはでなかった。

第5話「王都」(後書き)

暗い!!

というか全然話が進みませんね(笑)

ちよつとまとまった時間もできたので、ここらへんでまた連続投稿したいと思ってます。

たぶん3時間に1話くらいのペースで出しますので、よければご覧ください。

第6話「貴族」

「……………」

「い、いや、いきなりそうだって言ったら嫌われるかと思ってさ！
貴族を嫌う人も多いし、エリアには……まず自分自身を見てもら
いたかったんだ！」

平民の家とはあきらかに違う、おそらく貴族街と言われる中でも
一層立派な屋敷の前に自分たちはいた。

ライルは慌てているが、大体予想はしていたのだ。

一方でキラは気付いていなかったのか、若干警戒の眼差しで尋ね
る。

「なんで貴族のお坊ちゃんが、従者もつけずにあんなとこにいたん
ですか？」

かなり無愛想ではあるが、これでもまだいいほうだ。

キラはある意味自分以上の貴族嫌いで、以前は貴族に会えばその
存在をきれいに無視していた。

……きつとお菓子を買ってもらった恩があるからだろう。

だがライルの方はキラの態度がいきなり変わったことに、少し焦
ったようだ。

「だ、だって、従者つけて狭い馬車で長時間過ごすなんて……暇す

ぎるだろ。まあ、立ち話もなんだしとりあえず入ってくれよ」

愛馬を門番に預けてライルは自らその立派な門戸を開く。

その後に続き、いまだ洩るキラとともにその立派な玄関をくぐる。

ここまで来て帰るのはなんだし、もとより貴族だったからといって今更どうこうするつもりもなかった。

ライルが『自分を見てほしい』と言ったように、私もライル自身を見ようと決めたのだ。

そして、決意を固めたその目に最初に飛び込んできたのは

「げっ」

「どうしたんだ？ ああ、あの肖像画か？ まあ、有名だもんない」

すごく見覚えのある顔を背景に、ライルは苦笑しながら言う。

「あらためて自己紹介するよ。俺はライラック・ユア・ディレイド。一応ディレイド公爵家の長男をしている」

「……………」

（……………あの極悪宰相の、子孫？ ライルが……………あの？）

視線を向けるとヘラッと笑う青年。

それと彼の後ろに描かれている自分の殺したい人間トップ1である男の顔を見比べる。

……一体何の冗談だ。隣でキラも口をあんぐり開けて驚いている。

（しかし、なんというか……奇跡としかいいようがないな）

一体なにがどうなればあの性悪の子孫がこんな人間になれるのだろうか。

いや、もしかしたら300年のうちに血が薄まったのかもしれない。

そういえばあの愚王とアスト王子も親子だったのだし、ありえないことではないだろう。

しかし

（世間はなんと狭いというか）

とりあえず眠っている間に没落していなくて良かったと思う。
でなければライルに会うことはできなかったのだから。

……たしかに驚きはしたが、やはりこれまでの彼の人柄を見れば、あの極悪人の子孫だからという理由だけで嫌いになることはできなかった。

「でもいくら聖女を見出した有名人だからって、なににもこんなでかどかと肖像画飾ることはないよなあ。…それにここだけの話だけど、

俺この人の顔あんまり好きじゃないんだよ。なんか性格悪そうじゃないか？」

「同感だ」

間髪入れず同意する。

それについては、まったくもって同感だった。ライルとは気が合いそうである。

「そっか！ アリアもそう思っただな。よかったー、家族はだれも同意してくれなくてさあ。『この罰あたりめ！』って怒られるんだよ」

確かになんらかの罰（という名の報復）はありそうな気がする。だが、どうせ相手は死人だ。そんなものは地獄に行ってから考えればいい。

（いや、ライルは天国か……）

自分は行けそうにない。行くにはあまりにも……殺しすぎた。そんな馬鹿なことを考えてしまう自分に辟易してしまう。

「それに俺聖女についてもあんまり信じてないんだよなあ。あ、気悪くしたらごめん」

「いや、気にしないでいい。ところでどうしてそう思っただ？」

これはぜひともうかがいたい。目覚めてから初めての聖女否定論だ。

「いや、なんていうかさ……あの伝承、あんまりにも都合がよすぎるっていうか。それに、俺の幼馴染で聖女に過度の妄想抱いてるやつがいてさあ。そいつの話を聞いてたら『そりやないだろう』って気持ちになっちゃったんだよ」

「ふむ、そうか」

その気持ちはぜひ大事にして欲しいところである。それにしてもほんとにライルとは気が合いそうだ。

「坊ちゃま、お帰りなさいませ。そちらの方々は？」

ライルが同士を得てうれしそうにしていると、いかにも執事、といった風な初老の男性が丁寧な口調で尋ねてきた。

「ああ、道中魔物に襲われていたところを助けてくれた命の恩人だ。手厚くもてなしてくれ」

「なんと！ お怪我はありませんでしたか！？ だからあれほど従者をつけてくださいと常日頃から申しておりますのに……！」

心配そうな顔をした初老の男性は、今度はこちらを向いて深々と腰を折る。

「お二方とも、坊ちゃまを助けて頂き本当にありがとうございます。私当家の執事を務めております、ベン・ハミルトンと申します。本日は使用人一同、感謝を込めて誠心誠意おもてなしさせていただきます」

白髪をきれいにセットし、ビシツとスーツを着こなした老執事は、懇切丁寧にそう述べた。

「あ、ああ、こちらこそよろしく頼む。私はアリア、こっちはキラだ」

今までこんな風に人に接せられたことなどない。ついつい恐縮してしまう。

その後、なんと豪華な夕食を御馳走になった。

いまだかつて食べたことのない高級食材が出てきて、心底驚いたものだ。

こんなに緊張した食事も、初めてだった。

そして、食事をしながら思ったことは、この屋敷で働いている者はメイドから下男までみな、本当に親切で生き生きとしていることだ。

仕える人間と同じく性根の良い人間が集まっているのだろう。

王宮のプライドばかり高い侍女とは大違いだった。

(……しかし、少し警戒心が足りないんじゃないか?)

そこあたりも主に似てしまったのか。

いくら命の恩人として紹介されたからといって、どこの馬の骨ともわからぬ人間をここまで丁寧にもてなすなんて……正直もう少し危機感を持った方がいいと思う。

という助言を先ほどの執事にしたところ『我々は坊ちゃんの目を

信じてますから。それに、危険人物は自分からそんなことは言いませんよ』と笑われてしまった。

……たしかにその通りだった。

食事を終えて、湯浴みも済ませ（メイドが手伝おうとしてきたが、謹んでお断りした）、やっと本日の寢床に案内される。

さすがは公爵家といったところか。これまたなんとも広くて豪華な部屋だった。

だが、それでも王都にあるのは別邸で、本邸は昨日までいた領地のほうにあるらしい。

そこではライルの両親や弟妹たちが暮らしており、本当はもっと早くこちらに戻ってくる予定だったが、引きとめられてしまい今に至るそうだ。

趣味のいい調度品に触れながら、さきほど聞いた明日の予定を反芻する。

ライルは明日から学校がある（というか新学期は既に始まっている）らしく、そこへ自分も一緒に連れて行ってくれるらしい。

入学試験の時期はとくに過ぎているので、自分は編入試験を受けることになった。

ライルは『まあ、詠唱破棄とか精霊魔法とか使えるなら楽勝だろ！』と言ってくれたが、やはり魔力がまだあまり回復してない。そこだけが心配だ。

(……そうだ、今訊くか)

学校といえ、一つ思い出したことがあった。

「キラ」

「はい、なんですか？」

天蓋つきのふかふかベッドで遊んでいるキラに話かける。

夕食で例のお菓子を食べたせい、それともどんなに寝相が悪くても落ちることはまずなさそうな広大なベッドのせいか……ひどくご満悦の様子だ。

ちなみにライルには『部屋分けたほうがいいじゃないか？』と言われたが、『いつも一緒に寝ていたし、もう一つ部屋を用意させるのも悪い』といって遠慮した。

別に嘘は言っていない。

300年そばで寝てたのは事実だ。

それより

「契約のことなん……」

「嫌です……!」

まだ最後まで言っていないのにキラが拒否する。

「いや、別に天界に還そうというわけではなく、その……本契約を

結ばないか？」

「それも嫌です！」

「……………えーと、なんでだ？」

（というかそこまで全力で拒否されると、さすがに傷つくのだが）

本契約は仮契約のような一時的なつきあいではない。それこそどちらかが死ぬまで、一生もののつながりができる。

だが一生とは言っても、そもそも聖獣や神族にとって、人の一生など微々たるものだ。

彼らの寿命は何千年ともいわれており、その長い生の中で退屈しのぎに人間と契約を交わすものも多い。

契約を交わすと、聖獣や神族は主に従うことになるが、代わりに主から魔力をもらうことができるようになる。

（300年ずっと待っていてくれたキラに自分が返せるものといったら、これくらいしか思いつかなかったのだが）

「だってご主人様はすぐ無理するじゃないですか！ 僕はご主人様をないがしろにするような命令なんて絶対聞きたくありません！」

確かに本契約では、聖獣や神族は主と主従契約を結び、基本的にはその命令に絶対的に支配される。

つまり主のどんな命令にも逆らうことはできなくなるのだ。

「それに契約を結んだら、ずっとそばにいることはできませんし……」

これも一理ある。契約を結んだ相手は、主の魔力をもらって地界に顕現するから、魔力が尽きれば強制的に天界に送還されることになる。

以前はともかく、今の自分では長い間キラを留めておくことはできないだろう。

「だが……それではお前がつらくないか？」

聖獣や神族は本来天界の豊富なマナを吸収して生きる生物なのだ。彼らが召喚に応じるのは、一時のこととはいえ人間から魔力をもらう方がはるかに効率がいいから、という理由もある。

つまりなにが言いたいのかというと、普段の地界のマナは彼らにとって物足りないのだ。神族クラスにもなるとなおさらだろう。

ちなみに魔力とマナは基本的に同じものを指すが、生物に宿る場合は魔力、自然界にある場合はマナ、と呼び分けられることもある。

「大丈夫です！ 300年間、あの洞窟で純度の高い闇のマナを吸収してきましたから、魔力の問題はありません。それに本来のご主人様の魔力はとてつもなく大きくて、いつも身体からはみだしているんですよ。それを吸収すれば特に契約をする必要はないんです。ご主人様の魔力が完全に回復するまでだったら、今まで溜めてきた分で大丈夫だし……何より回復するまでそばでご主人様を守る人がいないと駄目でしょう？」

そこまで言われてしまつては、こちら無理に契約を持ちかける気にはなれない。

（まあ、そばにいてくれるんだつたらいいか）

「わかつたよ。お前がそれでいいなら、もう私からは何も言わない。さあ、明日も早いしそろそろ寝るか」

別に無理に契約で結び付ける必要などないのだ。
したくなつたらあつちの方から言うてくるだろうし、今はこの状態でお互い満足しているということだろう。

なによりキラがそうしたいというのなら、そのとおりにしてやろうと誓つたのだ。

それが……自分を孤独という闇から救ってくれたキラへの、せめてもの恩返しだと思っている。

そうしてどこかホツとしているキラの横に寝転がる。

明日からのことを少し考えようと思つたのだが、移動で疲れていたこともあつたのだろう……その日はすぐに眠りにつくことができた。

そして、悪夢をみることもなかった。

第7話「編入試験」

夢も見ないほど深い眠りにつき目覚めたその日は、まさしく新しい人生の門出にふさわしい日だった。

（今日は朝から調子がいいな）

どうやら身体も回復してきたらしく、だるさもほとんどなくなっ
た。

外を見ると……今日も快晴のようだ。小鳥の楽しそうな歌声が聞こえる、なんとも良い朝である。

ただ、相変わらずキラの寝相だけは悪かったが。

この広いベッドで一体どういう寝方をすれば、あんな端っこまで転
がることができるのか。

朝から豪勢な食事をとったあと、使用人全員で「いつてらっしゃ
いませ」とお辞儀をされて送りだされた。その間を歩くのは……な
なか勇気が必要だった。

ちなみに「いつもこんなことをしているのか？」とライルに訊く
と、「今日は特別。アリアたちがいるし、それに俺、普段は寮の方
に泊ってるから」とかえってきた。

学園には遠方から来る人もいるため、格安の寮が完備されている
らしい。

別にライルの場合、無理にそこに住む必要もないのだが、「その方

がなんかおもしろそうだろ。それに親友も寮に住んでるからな」とのことだ。

今日からは自分もその寮でお世話になる……予定である。

格安の上に、奨学金制度もあるため無一文の自分でもなんとかなるらしいが、そのためにはまず編入試験に受からなければならぬ。ちなみに優秀な成績で編入すれば、授業料半額などの特典がつく、特待生制度もあるらしい。

（気合いを入れていかなければ）

そうして、今は黒いローブを身にまとったライルとともに、学園への道に向かっていく途中だ。

なにやらクラスによって着る色が違うらしく、その真新しい黒のローブは、上級クラスの証らしい。ライルは（失礼だが）意外と優秀なのだろう。

（できることならライルと同じクラスに入りたいな……）

やはりその方が自分もいろいろと安心できる。

昨日からのつきあいだが、ライルとはずいぶん気が合うし……なににより一緒にいて楽だ。

森の設定はともかくとしても、自分が世間に疎いという事情も知っているし、世話好きのいいやつだと思う。

そんなことを考えていると、噂をすれば……というのは少し意味

が違うが、ちょうどいいタイミングでライルが声を発した。

「そーいやアリアって家名なんなんだ？ 紹介状書くとき必要になんだけど」

「家名、は……ない」

正確に言えば、昔はあったが今はない。

その昔の家名を復活させるつもりもない。

自分に……両親や妹と同じ家名を名乗る資格はないと思っている。

「へ？ そんなことってあるのか……えと、失礼かもしれないけど両親は？」

「両親もいない。孤児だった私を森に住んでいた老人が拾ったんだ。その老人もすぐに死んだがな」

これは教訓を踏まえて昨日のうちに作っておいた“設定”だった。

「そ、そうか悪いこときいたな……」

若草色の瞳を伏せて、申し訳なさそうにしているライルの様子に、少々良心が痛む。

しかし、まさか真実はもっと悲惨だとは思っまい。

もちろんそんなことは知る由もないライルは、仕切りのおすように明るい口調で提案してきた。

「じゃあ俺がつけてやるよ！ なにがいいかなあー…うん、“セレ

ステイ”なんてどうだ？」

「まあ、別にいいが……ちなみに“セレスティ”ってどういう意味だ？」

なにやら勝手に話が進んでしまったが、別に不満があるわけではない。

これから家名が必要になるなら、つけてもらった方がいいだろう。

もとより自分にはよくわからないものだして。ただ、その意味だけは気になった。

「異国の言葉で“可憐な人”って意味さ。アリアにぴったりだろ」

「コラ、口説くな！！」

またもやキラが抗議する。

なにもそこまで過剰反応することではないと思うのだが……

そして、結局昨日と同じパターンが繰り返されることとなった。

「はいはい、後でお菓子いっぱい買ってやるからなー」

「ほんとう！？ 今度は端から端までいい！？」

「コラ、甘やかすな！！」

ギヤーギヤー騒ぎながら歩く3人は、周りの人が微笑ましそうにその様子を見ていることに気付かなかった。

ライルの屋敷から40分ほど歩いたところに“それ”はあった。

“学園”。正式名称ハインレンス王立魔法学園は、思っていた以上の規模だった。

それこそ王城と同じくらいの広大な面積の敷地には、大小さまざまな建物……授業棟だけでなく、研究棟や訓練場、食堂から寮までありとあらゆるものがあつた。

今現在おおよそ600人の生徒と、100人以上の教職員および研究者を抱えるこの学園は、その270年以上の長い歴史と、輩出される魔法士が総じて優秀なことから大陸でも非常に高い評価を得ている……らしい。

その上、一定以上の魔力さえあれば身分に関係なくだれでも入学することができするため、最低入学条件の12歳以上を満たした老若男女が身分に関わらず机を並べて勉強する……というなんとも珍しい光景が見れる学園としても有名だそうだ。

一応6年制のようで、クラスはそれぞれレベルによって2年ごとに区切られた下級、中級、上級が存在する。

始めはみな下級から始めるのだが、そのクラスが終了した時点で一応卒業することが可能である。

これは才能や体内魔力量に応じてどのクラスまでいけるかが決まるという意味で、具体例をあげるなら

【1、2年下級クラス】……基礎魔法とコントロールの方法を学ぶクラス。あまり魔力のない庶民や商人の多くはここらへんで卒業し、その魔法レベルもせいぜい生活に役立てる程度。青いローブを着ている。

【3、4年中級クラス】……基礎魔法以外の中級魔法と、それぞれの特性にあった魔法を見つけて学ぶクラス。傭兵・騎士・魔具士など魔法を補助で使う職業を目指す者、もしくはある程度の魔力量しか持たない者はここで卒業する。赤いローブを着ている。

【5、6年上級クラス】……上級魔法と、自分の特性にあった魔法などを専門的に学ぶクラス。才能を持つ者、将来専門的に魔法を扱う者、研究したりする者が集まる。ちなみに貴族が多かったりする。黒いローブを着ている。

この体制を維持している以上、当然だが上のクラスになるほど人数は少なくなり、約600人いる生徒は下から6：3：1程度の割合になるらしい。

と、こんなところだ。

もつとも全て、今見ているパンフレットとライルによる補足で知った内容だが。

『そもそも基礎魔法ってなんだ？』などという、よくわからないところがあるものの、これで大体の概要はつかめた。

そんなことをしているうちに、いつのまにか試験会場に着いたら

しい。

昨日から連絡は云っていたらしく、ライルが受付らしき人物に紹介状を見せた後、すぐに試験が始められるようだった。

「じゃあアリア頑張れよ。お前ならきつと中級以上にいけるはずだ！！ 学園で待つてるからな！」

そう言い残しライルは自分の受ける上級クラスの学科へと行ってしまった。

少し不安になるものの、そんな自分を見かねたキラが声をかけてくれる。

「ご主人様、頑張りましたようね！！」

「ああ、そうだな」

（そうだ、これからの人生がかかっているのだから……全力を尽くそう）

そうして決意を固めていると、人の良さそうな中年の男性と、眼鏡をかけた若い女性の2人組がやってきた。

2人とも白いローブを着ている。おそらくこれが教員の証なのだろう。

「アリア・セレスティさんですね。今回の試験の担当官を務めるデイン・カイルスです」

「同じくエリザ・リーン・バーステンよ」

「アリアです。こちらはキラ。今日はよろしく願います」

「はい、こちらこそよろしく願います」

「もう使い魔……それも神族の使い魔がいるなんてすごいわね」

眼鏡の女性が感心したようにキラを見る。

一瞬なんでわかったのだろうと思ったが、彼女が左手に持っている書類で納得した。

おそらくライルが紹介状の中で書いたんだろう。

こちらもちいち危ない説明をする手間が省けて助かる。

「ふふ、これは期待できそうですね。ではまず始めに体内魔力量を調べますね。ついて来てください」

そして男性の先導で、なにやら机の上に見たこともない装置が置かれた部屋に案内された。

手のひらの印がかかっている台と、そこから線のようなものでつながれた……なにやら数字のようなものがみえる、装置である。

「なんですか、これ？」

「おや、ご存じないですか？ こちらに手のマークがあるでしょう。そこに手を置けば、機械があなたの体内にある魔力の量を自動で計測してくれるのですよ。ちなみに今日はまだ魔法は使用していません」

んね？」

「え、ええ、まあ……」

（おもしろい装置だが……これはまずい）

300年間の技術進歩に感心すると同時に、危機感が込み上げてくる。

封印のせいで今の自分の魔力量は今かなり低いはずである。

300年前の話ではあるが、“化け物”と呼ばれるほどあったそれは、果たして今現在どれほど残っているのか、そしてそれは合格基準に達するのか……正直ものすごく不安である。

「はい、ではここに手を置いて3分ほどジッとしててくださいね」

しかし無情にも時は待つてはくれない。諦めて手を置く。

（もしこれで駄目だったら……）

数週間もしくは数カ月後、魔力が完全に回復してからもう一度受けさせてはくれないだろうか。

……いや、それ以前にそれまで私は生きているのだろうか。

死刑判決を待つような気持ちであればこれ考えていると、3分というは異常に長く感じられた。隣でキラも固唾をのんで見守っている。

「はい、計測終了ですね。………っえ？」

3分が経って、装置を見た眼鏡の女性が驚いたような声をあげる。

（……やっぱり駄目だったか）

これからどうすればいいのだろうか。

いや、それよりも、このままではせっかくここまでしてくれたライルに申し訳が立たない。

なんとかしなければ……

「あの！ できれば後でもうい……」

「すごい！！」

「……はい？」

同じように装置を見た男性も感心したようにつぶやく。

「今まで長いこと人の魔力量を見てきましたが、ここまで多い人はなかなかいませんでしたよ。宮廷魔術士並みですね」

「……………そう、ですか」

「よかったですね、ご主人様！！」

キラがうれしくて仕方ないといった表情でこちらを見上げてきた。

（喜ぶべきこと、だよな？）

あの心配はなんだったのだろう。なぜか損をした気分になった。
だが、逆にこれでよかったとも思う。
どうやら自分の“化け物”ぶりはこの時代でも通用するようだ。

（満杯の時に測らなくてよかった……）

心からそう思った。

第8話「実技」

「えーと、紹介状によると既にいくつかの魔法が使えるようですね」

「あ、しかも属性も2つあるんだ、優秀ねえ」

カイルスという中年男性のあとに、バーステンという眼鏡の女性が最初よりいくぶんかフレンドリーに話してきた。

「あの……他には何が書かれているんですか？」

思わずそう尋ねてしまったのは、ライルがどこまで自分の情報を教えているのか気になったからだだった。

たしかに紹介状のおかげで説明の手間が省けるのはうれしいが、詠唱破棄や精霊魔法についてまで書かれているのは、少々困る。

自分はあくまで平凡かつ平和に学園生活を送りたいと思っているのだ。

だから、あまり（現代の基準で）突飛なことができるということは知られたくなかった。

「あとは……ああ、『ずっと森で暮らしていて知識が偏っているから、その点は便宜をはかってほしい』だそうです」

それを聞いて安心した。

しかも、なんとも気がきくというか。まったく、ライルには頭があらがない。

ホツとしたように胸をなでおろす自分の様子に、試験官は多少疑問を感じたようだが、結局突っ込まれることはなかった。

「よろしいですか？ では次は実技の方にいらさせていただきます。訓練場に案内しますので、ついてきてください」

そう言われて彼について行った先は……一見ただの原っぱのようなが、四方をなにかの魔法、おそらく結界で囲まれた空間であった。

ここで試験を行うらしいが、そこにはすでに先客がいた。それも30人ほど。

「ああ、今は上級クラス6年生の授業中ですね。端のほうを使わせていただきますでしょうか」

どうやら魔法の訓練中らしい。3人ほどの教員が見守る中、数十人の生徒が各々好きなように魔法を放っていた。

（上級クラスという割に若い世代が多いようだが……）

みんな自分と同じくらいか、少し上程度である。

上級クラスには貴族が多いと聞いたが、それと関係あるのだろうか？

あちらもこちらの方に興味津津らしく、その多く（特に男子）が手を止めてこちらを見ている。

ちなみにライルは上級クラスの5年とっていたこともあり、その中にはいなかった。

（やりにくいな）

「多少やりにくいとは思うけど……まあ、彼らのことは道端の雑草だとも思っ
てちょうだい」

何気にひどいことを眼鏡の女性が言うが、そのおかげで少し緊張が解けた。

それにキラが彼らの視線を遮るようにその間に立ってくれたので、どこか安心する。

なにやら彼らの顔が引きつっているような気がするが……いったいキラはどんな顔をしているんだ？

「ではあの的に向かって、なんでもいいので魔法を放ってください。ああ、回復魔法や補助魔法が得意でしたらそちらでもかまいませんが」

「いえ、攻撃魔法が一番得意です」

これは事実だった。

なにせ一人で魔物の殲滅してきたものだから、誰かの怪我を治すことなんて滅多になかった。

自分は、あらゆる攻撃魔法をあたり一面にぶっ放す……いわば超攻撃型の戦いしかしてこなかったのだ。

まあ、それはともかく
(さて、どうするか……)

視線の先、10メートルほどの間をあけたところには、木でできたがある。

気をつけなければいけないことがいくつかあった。

- 一つ、属性は火か闇を使うこと。
- 一つ、詠唱をすること。
- 一つ、あまりおかしいことはしない。しかし合格はすること。

最初については、特に問題はない。とりあえず、目に見てわかりやすい火の属性を使うつもりだ。ちなみに精霊に力を借りるつもりもない。やはり試験なのだから自分の力を見せなければいけない……と思ったからだ。

次の詠唱については、現代の詠唱なんぞわかるわけがないので、自分が魔法のコントロールを学ぶために最初の時だけ使用していたものを使うしかない。まあ、聞き覚えがないといわれたら、森でうんぬんの話をしてごまかせばいい。

最後は……正直なにがおかしく、なにがおかしくないのかが全くわからないので対処の仕様がでない気がする。しかし、今の自分の魔力は一応(宮廷魔術士ほどではあるが)人並みらしいので、少しくらい頑張ったところで問題はないだろう。それに加減をしすぎて試験に落ちることになれば目もあてられない。

いまだ生徒たちとにらめっこを続けているキラに視線をうつす。

…それに、キラと自分の人生がかかっているのだ。

（よし、本気でやるか）

そう決めたアリアは集中を開始する。

唐突に膨れ上がった強い魔力の気配にその場にいた者は、はじかれたように一斉にその方向を向く。

【火焰・凝縮・目標・前方】

そう淡々と言った彼女の右手には、子どもの頭程度の大きさの火の球ができあがっていた。

生徒、教員、試験官、そこにいた全員がその魔力の気配に戦慄する。

『あれをくらったら確実に死ぬ』ということが、本能でわかったからだ。

そして……とてつもない密度と熱量を保つ”それ”は、次の一言で放たれた。

【発射】

ものすごいスピードで的に向かった火球は、一瞬で目標を焼失させ……そのままの勢いで訓練場の四方を囲っていた結界に衝突した。

バリインというガラスの割れたような音があたりに響き渡る。

今までどんなことがあっても破られることのなかった、この学校一番の使い手が張った結界が…… たった一発の魔法で破壊された瞬間だった。

「……………」

静寂に包まれる訓練場。

誰もなにも言わないことに不安を覚えたアリアは、助けを求めるように相棒の方を見た。

額に手をあて、「あーあ」という風に天を仰ぐキラ。

「ご主人様…… 多分やりすぎです」

「……………」

周りをみると…… 誰もが目と口を全力で開いてこちらを凝視している。

(…………… 失敗、したかもしれない)

平凡を貫きたいというささやかな願いは、結界とともにもろくも破壊されたようだった。

第9話「大騒ぎ」

「あのー……」

いまだ意識を飛ばしている試験官2人組を振り向く。

しかし、そこまで言ったはいいが、一体どう切り出せばいいのだろう。

『結界を壊してすみませんでした』それとも、『ちょっと加減を間違えてしまいました』か？

そうして悩んでると、試験官の男性が茫然とした様子でつぶやいた。

「こ、古代魔法……」

「こだいまほう？」

こだい……古代、の魔法。

古代といえば、古代ヴィシア式魔術のことかと思うが……先ほど自分が使ったのは、あくまで普通の魔法のはずだ。

（わけがわからん）

「あ、あ、あなたそれをどこで習得したの！？」

眼鏡の女性が口をワナワナさせながら尋ねてくる。

「も、森で独学で、ですが？」

「信じられない！ 古代魔法は威力はすごいけど、コントロールが難しい上に魔力消費量が甚大で、ほとんど使い手がいないのよ！ それこそ世界でも数人よ！」

「そう、ですか……」

コントロールが難しいものにも、コントロールをつけるための詠唱をわざわざしたのに、それでもまだ難しいというのか。

しかし、魔力消費量が大きいというのは少し納得だ。
だからすぐに魔力切れになるのか……あくまで現代の基準の話だろうか。

（いや、そもそも古代魔法とはなんなのだ？）

その疑問に答えるように、キラがそつと耳打ちしてきた。

「ご主人様、もしかして300年前は普通に使っていた魔法のことを、今では“古代魔法”と呼ぶんじゃないですか？」

「……ああ、なるほど。偉いぞキラ」

つまりはそういうことなのだろう。

（……全く時の流れとは無情だな）

キラの頭を撫でながらそんな現実逃避をしていると、一人の男性がものすごい勢いでこちらに駆けてきた。

白いローブを着ているから、おそらくさきほどの上級クラスの担任の一人なのだろうが……まだ若いその人は、自分の前まで来ると、そのままの勢いでガシッと肩を掴んできた。

地味に痛いのだが……その目がまるで獲物を狙う野生の獣のようにギラギラしていて、結局なにも言えない。

こちらがその気迫に圧倒されていることに気づいていないのだろう……その人は興奮した面持ちで捲し立ててきた。

「君、今の古代魔法だよね！？　どうやって習得したの！？　習得した時の文献は！？」

「え？　えー、ぶ、文献は……住んでいた家が火事になり、その時全て焼失してしまった、です」

勢いに押されておかしな敬語になってしまったが、男性教諭はそれにも気付かず「ああああー！」と言って頭を抱えてしまった。

その絶望したような顔を見ると、多少申し訳なく思えてくる。しかしなぜ文献？　現代ではそんなに貴重なものなのだろうか。

「あー、すいませんね。彼は古代魔法を研究していました。ほら、クルト君すっかりしたまえ」

ようやく復活したらしい試験官の中年男性がクルドと呼んだ青年の肩をたたいた。

「私は少し学園長に相談してくるよ。バーステン君、後のことは任せたよ」

そう言って校舎の方へ小走りで駆けて行った。あの歳で走るのはきついだろうに。

……というか、彼は学園長と言わなかったか？

（話が大きくなっている）

なんだか嫌な予感がした。

隣のキラは……すでになにかをあきらめた表情をしている。

一方男性試験官の後ろ姿見送っていた若い男性教諭は、ふと何かに気付いたように顎に手をかけた。

「……いや、待てよ。たとえ文献がなくても、今ここに生きた知識の持ち主が――」

そう言ってこちらをギョロリと見てくる。……正直かなり怖い。

「エリザ。状況から察するに、彼女は編入試験を受けに来たんだよね？」

「ええ、そうよ」

それを聞くと同時に、彼はまたすごい勢いで駆けだした。先ほど

の男性試験官が向かった方向に。

「カイルス先生！ 待ってください僕も行きます！ 必ずやか……
を僕のクラスに！」

最後のあたりはよく聞こえなかったが、どう考えても不吉な想像
しかできない。

（あの人のクラスにだけは入りたくない）

「え、えーと……じゃあ、気を取り直して、最後の試験に行きまし
ようか！」

眼鏡の女性試験官が明るいうつろい口調で話すものも、もはや自分の心は
晴れ間の見えない曇天の空のようだった。

「はあ……最後はなんですか？」

できればこれ以上の心労は避けたいところだ。

「最後は筆記よ。まあ一般常識と基礎的な魔法知識とだから安心
して」

「……………」

全く安心できなかった。

最後の最後で超弩級の難関が来た。しかも今の自分に一番足りな

いものだ。

(……おわった)

死刑台に赴くような気持ちでアリアは女性試験官の後をついていく。

だから気付くことはなかった。

周りの学生たちがずっと彼女を見つめていたことを……

そしてアリアの姿が見えなくなると同時に、彼らがものすごい勢いで先ほどの感想を語り合っていたことを……

さらには、様々な尾ひれのついた彼女の噂が、すぐに学園中に広まったことを……

第10話「緊急会議」（前書き）

人の良さそうな試験官の視点です（笑）

第10話「緊急会議」

その日、ハインレンス王立魔法学園のとある一室は、喧騒に包まれていた。

噂を聞きつけ、急遽駆け付けた教師や研究者たちが見守る中、会議室の中央では既に熱い議論を交わされていた。

「だ・か・ら！　うちのクラスに来てもらえばいいんですよ！！」

その中でも一層暑苦しく熱弁しているのは、先ほどアリアに詰め寄った男、ジヨシユア・クルトだった。

「君のところは上級クラスの6年だろう！？　そこへ編入するなんて前代未聞だぞ！？　……ていうかお前ただ研究したいだけだろ！！」

「そうだそうだ！　むしろ研究するならぜひともうちの研究室に来てもらいたい！」

研究者の一人がそう言い、それに同意するように周りのグループが頷いた。

なにせ世界に数人しかいないと言われている古代魔法の使い手が現れたのである。

コントロールが難しく、消費魔力も膨大なため今現在この学園でも使える者はいない。その上、文献もほとんどが失われている貴重な魔法だ。

研究者たちが目の色を変えるのも仕方ないだろう。

しかし

(ここまで大ごとになるとは……)

先ほどまで自分が編入試験を担当していた少女のことを思い出す。

最初見た時はその美貌に、その後は魔力量に、極めつけは先ほどの魔法に驚かせられた。

お世辞にも強いとは言えない自分の心臓には、今日一日で大変負担がかかったものだ。

(……いや、一番大変なのは彼女のほうか)

この光景を見てみると、そう思わずにはいられない。

目の前ではいい年をした大人が……特に血気盛んな研究者たちと教師陣を筆頭に彼女の争奪合戦を繰り広げている。

「むしろ彼女の才能は生徒たちにいい影響を与えるはずだ!」

「古代魔法が使えるレベルなんだぞ! 今更何を学ぶことがある!」

「だが編入試験を受けに来ている人間に研究対象になってくれという方がおかしいだろう!」

「研究対象とは失礼な! 少し実験に協力してほしいだけだ!」

「同じことだろうが! これだから冷血漢の研究者は!」

「なんだと、教えることしかできない能なしが!」

ああでもない、こうでもないと交わされる議論……という名の罵り合いは、一向に収まる気配が感じられなかった。

どうにかしたいと思うが、元来争いを好まない自分にはこの間に入っていくような気概もない。

「皆さん、静粛に」

そこでついに学園長の鶴の一声が入る。

学園長ニーナ・シンク・ヒーストン。

齢70を超えながら未だ衰えぬその魔法の腕を持って、この名門学園の頂点に立つ人物である。その実力は折り紙つきで、昔は国一の宮廷魔術士であったと聞く。

ちなみに件の少女が壊した結界を張ったのも彼女だった。

熱くなっていた両陣営は、その優しい茶色の瞳に鎮められ、恥じたように下を向いた。

「落ち付きなさい、同じ学園に所属する仲間でしょう。さて、彼女の処遇をどうするかについてですが……新しくきた人もいるようですし、まずは皆に正確な情報を提示する必要があるでしょう。カイルス？」

自分の名前が呼ばれ、すぐに何を求められているのかわかった。その場で起立して、ここまでの彼女の情報を伝える。

「はい、名前はアリア・セレスティ。魔力量は……7200」

そこまで言った時点でまたざわめきが広がる。

今現在この学園でその値より大きい数字を持っているのは、目の前にいる学園長と他数人といったところだ。

生徒の中では今5年生に在籍しているこの国の第二王子に続く、2番目の魔力量の持ち主である。

この学園の入学条件として掲げられている魔力量は120以上。上級クラスの平均がおおよそ3000程度なのだから、すごい数字だということがわかる。

それこそ宮廷魔法士になれるレベルだ。さすが古代魔法が使えるだけはある、といったところか。

ざわめきが小さくなったのを見計らって、報告を続ける。

「また、既に神族の使い魔を連れています。属性は火と闇で、火の方は実技の時に確認しました」

「……しかし、その実技で使ったのは本当に古代魔法だったのかのお？」

自分の正面に座っているこの学園の古株、精霊魔法のエキスパートでもあるパウル老が疑問を投げかけてくる。

ちなみに彼はその小柄な体と水の精霊に好かれる穏やかな性格から、生徒たちから“爺先生”と呼ばれ、慕われている。

「はい、間違いないですよ。詠唱に単語を使っていましたからね。なにより、学園長の張った結界を壊せるほどの威力をだすのは、古代魔法以外では難しいでしょう」

自分たちの使う魔法は、基本的に文章・詩の形をとっている。

文の中には祈りや願い、もしくは想像の媒介をするものなど、魔法の発動しやすい要素が組み込まれており、今はそれを使うのが一般的である。

そしてそれは、この数百年で魔力量が著しく減ったとされている人々のために、多くの魔法使いたちが研究と実験を繰り返し、工夫

した成果でもあった。

一方で、区切られた単語だけを使う古代魔法というのは、その分を補う想像力や技術力、何より膨大な魔力が必要になってくる。

そのかわりに言葉に込められた純粋な“意思”というのは、簡潔にまとめられた単語のほうが強く、より強力な効果を発揮するといわれているのだ。

なにより、彼女は魔法を出すまでにたった5つの単語しか使わなかった……しかも後半の【目標・前方・発射】の3つは魔法の指向性に関するものだったから、実質的には最初の【火焰・凝縮】の2単語で魔法を発動したことになる。

（たしかにすごい才能だよな……）

またざわめきができそうな中、今度はそれを遮るようにコンコン、というノック音が会議室に響いた。

「失礼します」

なんともいいタイミングで、もう一人の試験官エリザ・リーン・バーステンが入室してきたのだ。

彼女はまだ若いながら優秀な教師見習いで、今日も自分の下で見聞を積んでいた将来の有望株である。

「おお、バーステン君。戻ったか……それで、筆記の方はどうだった？」

彼女は最初、会議室にいる人の多さに驚いていたようだが、すぐに気を取り直してその眼鏡をクイツと持ち上げた。

「ええ、すごかったですよ」

「ほう、やはりそちらも優秀なのか……これはもう免許を与えて、いち早く社会に貢献してもらった方がいいのではないか？」

今度は、神聖魔法の権威であるグナイド教諭がそう進言する。

こちらは神聖魔法の使い手にしては少し性格がキツイことから“怒れる神父”というなんとも不名誉な二つ名を持っていること有名である。

彼の言葉に同意して数人が頷くが……次に発せられる言葉に大きく期待を裏切られることになった。

「いえ、そちらの意味のすごいではないですよ。ほら、これ見てください」

そう言って彼女が掲げた紙に……正確にはその右上に書かれた数字に、その場の全員が注目する。

「……………3点？」

「ええ、3点です。本人は、かなり真面目に解いていたようですが……終わった後は魂が飛んでいました」

「……………」

なんともいえない空気が会議室に流れる。

10歳児でも30点はとれるテストで3点。

まさかの結果に、さきほどまで言い争っていた研究者と教師陣がそろって顔を見合わせる。

もしこの場に本人がいたら『勝手に見せるな!!』と抗議していたことだろうが……あいにくそんなことを気にする人間はここにはいなかった。

「……そういえば、森でずっと暮らしていたから知識が偏っている、と紹介状に書かれていましたね」

あの『便宜をはかってほしい』という意味がようやくわかった気がする。

(それにしても予想の斜め上をいく結果だが)

「はい、唯一正解した問題は、古代のことにに関するマニアックなものでして……まず普通の人には解けません。その一方で、普通の人なら簡単に解けるような一般常識問題などは全滅しています。」

「……おもしろい子ですね」

隣に座る同僚のフィリス先生がつぶやく。自分も同感だった。

「しかも聞くところによると、我々が使うような一般的な魔法は、現時点で一切使えないらしいですよ。それを学ぶためにここへ来たとか」

それを聞いた一同は沈黙する。……おそらく考えていることは一緒だろう。

学園長があたりを見回したあと、確認を求めるように述べた。

「では、やはり彼女は学園に編入させる、ということでもいいですか？」

というより、現時点ではそれしか道はない。

いくら古代魔法が使えるとはいえ、ここまで知識のない人間に魔法士の免許を与えるのはあまりにも危険すぎる。

彼女が将来なにを目指すにしても、まずは学園で普通の知識と一般的な魔法を習ったほうがいいだろう。

「ですが、そうすると今度はどのクラスに編入させるかが問題になりますね」

「では、ぜひともうちのクラスに！」

『しめた！』と思ったのか、クルト君が勢いづいてそう進言してきた。

他の教員は出遅れたためか、悔しそうな表情をしている。

しかし……それを聞いた学園長は、どこか諭すように、まだ若い教師にこう質問した。

「クルト。彼女はなんのためにこの学園に来たのだと思います？」

「なんのためと言うとそれは……」

「そう、学ぶためですよ。そしてここはそのための機関です。彼女の学問を、学ぶ意欲を阻害するような要素があってはいいけません。」

研究は自重するように。」

その言葉を聞いた研究者グループが抗議の声をあげようとしたが、有無を言わせないその双眸を前に結局何も言えないようだった。

クルト君も思うところがあつたらしく、何も言い返すことはなかった。

「ところで、カイルス。先ほど紹介状と言ったけど、誰からの紹介なのかしら？」

「はい、上級クラス5年のライラック・ユア・ディレイドからです」

「ほお、あのディレイド公爵家の嫡男からか……こりゃ下手な扱いができないねえ」

ニヤニヤした表情でそう言ったのは、歴史学を担当しているケイン先生だった。

個人的に少し苦手な相手である。なにがどう苦手というわけではないのだが。

「たしかに。これで下手に彼女を研究対象にでもしようものなら、公爵家からどんな抗議があるかわかりませんし」

パウル老が同意する。それに頷いた学園長は新しい人物に話をふった。

「ライラック・ユア・ディレイド……たしかあなたのクラスでしたね、フラスト？」

「ええ、そうですよ」

この緊急会議が始まってから、一言も話さなかった人物にお鉢が回る。

バッシュ・フラスト：歳はたしか35歳。元宮廷魔法士で、専門は攻撃魔法だったはずだ。

常に飄々とした態度を崩さず、今も多くの人間に見られながら、堂々と発言をしている。

「あなたのところは上級クラスの5年生でしたね。やはり知り合いもいた方がやりやすいでしょうし…あなたのところに任せまじょうか」

「了解しました学園長」

まあ、妥当な判断だろう。

彼女は下級や中級のクラスから始めるにはもったいないと思えるほどの実力を持っているし、上級クラスの5年なら頑張ればすぐに授業に追いつくことができるだろう。

そうして、ようやく結論の出たところで緊急会議はお開きになった。未だ不満がある研究者たちは愚痴をこぼしていたが。

そして、自分も帰ろうと席をたったその時、例のフラスト先生がこちらへ向かってやってくる。

「カイルス先生」

珍しく深刻な表情をした彼は、これまた重い口調で自分の名を呼

んだ。

「な、なんだね？」

いったい何なのだろう……無駄に緊張する。

「ひとつ、どうしても聞きたいことがあるのですが」

こんなに真面目な表情をした彼を見るのは初めてだ。

きつとよほど深刻な話なのだろう……こちらこそそれなりの覚悟で聞かなければ。

そう思い居住まいを正す。

「あ、ああ。なんだい？」

「そのアリアという少女は……」

その真剣な眼差しに、ごくりと喉が鳴る。額を緊張の汗が伝う。つい身体が前のめりになってしまいが、それすらも無意識のうちだった。

「……………美人ですかね？」

ずっこけた。

第10話「緊急会議」（後書き）

気付いたらパソコンの前で爆睡してました！すいまっせん！！

とりあえず連続？更新はここで終了です。そして第2章も終了です。

…はい、自分ウソつきました（汗）

次章こそほんとのほんとの学園編スタートです！

ただこれから少し忙しくなるので、今までよりは更新が遅くなるかもしれません…

でも時間が空いたらまた連続投稿しようと画策してますので、気長にお待ちいただければと思っています。

3章 第1話「編入生」(前書き)

* 某貴族のボンボンの視点です。

あと今回はちょっと長いかもしれませんが(汗)

3章 第1話「編入生」

昨日と同じくまだ通い慣れていない教室のドアを開ける。

その瞬間耳に飛び込んできたのは、自分が連れてきた少女の話題であつた。

「おい、聞いたか！？ 例の編入生うちのクラスに来るらしいぜ！？」

「まじかよ！？」

「でも、上級クラスに飛び級で編入なんて……今まで聞いたことがないわ」

「そりゃなんたつて古代魔法の使い手だからなあ」

「ああ、昨日先輩がそう言つてた。なんかすげー興奮してたけどな」

「へえ。でも貴族ではないんでしょう？」

「らしいよ。でもすんごい美少女なんだつて」

「いやいや、そんな都合のいい話があるかよ」

「きつと先輩の妄想でしょ。初めて見る古代魔法に興奮しすぎたのよ」

教室は朝からこのクラスにやってくる編入生の噂でいっぱいだった。

それぞれ6年生の先輩から仕入れた情報を交換して、どんな人物なのかを推測している。

その様子を見て、ドアを開けた状態のまま呟く。

「……………暇人ばっかだな」

（まあ、その気持ちもわからなくはない、か）

変化に乏しいこの上級クラスにあらわれる旋風。それもどうやら特大級の存在に、誰もが興味津津のようだ。

それにしても

（予想以上に噂になってるな）

昨日学校が終わった後に、アリアから事の顛末を聞いて、多少の混乱は予想していた。

しかし……これほどとは思わなかった。

ここに来るまでも廊下のあちこちでこの手の話を聞いたし、既に学校中に広まっているのだろうか。他人事ではあるが心配である。

自分の姿を見つけた同級生のフィリック・ダン・リンメルが机を蹴散らして駆け寄ってくる。

いつもは余裕綽々のくせに、今日に限ってなぜか落ち着きがない。

「おい、ライル！？ 編入生って昨日お前が話していた子だろ！？ ホントにかわいいのか！？」

そして大真面目に、なんともくだらんことを訊いてくる。

……落ち着きがないよく理由がわかった。そういえば、こいつはこういう奴だった。

しかも昨日した話をすっかり覚えてやがったようだ……この女の子のアンテナにひっかかってしまったらしく、教えたことに多少の後悔を覚える。

「見てのお楽しみだ」

そう言って自分の席にまでの道を進む。

そこらじゅうに大小様々なグループができていて、ものすごく通りにくい。人と物の隙間で四苦八苦しながら、自分の言葉を思い返す。

フィリック……フィルは一応誤魔化せたが、どうせ何分後かにはばれるだろう。アリアの容姿を見た時のこいつの顔が目には浮かぶようである………なんか嫌な気分だ。

そして、ようやく窓際の後ろから3番目の自分の席に着き、いまだ騒がしいクラス内を見回す余裕ができた。

……この上級クラス5年には昨日から入ったばかりだが、ここにいる連中はみんな顔見知りばかりだった。

なにせ一人を除いた全員が貴族であり、それゆえに学校以外の場所……パーティーやらなにやらで顔をあわせることも多い。それに中級以上は極端に人数が減ってくるため、自然と貴族同士が会う確率も高くなる、という理由もある。

（唯一の平民といえば……）

自分の2つ前の席で、灰銀色の髪をした貴族に声をかけられている少女に目を向ける。いまだ見慣れない平民の少女は、どうやらその対応に困っているようだ。

その特異体質から存在だけは知っていたが……上級クラスに来れるほど“増えた”という事実には単純に驚いた。おそらく前例のないことだろう。

……それにしても、我が従姉妹さまはどうにも人の心の機微とい

うものがわかってないようである。相手が迷惑がっていることに全く気付いてない。

（第一あのやり方じゃ一生わかりあえないだろ）

灰銀色の髪をした従姉妹は、決して性根の悪い人間ではないのだが…… なんとか、誤解を受けやすい性質の持ち主だった。

赤毛の髪を持つ平民の少女に同情するし、なんとかしたいとも思うが、自分は昨日来たばかりの人間である。

そしてなにより女同士のことに下手に口をだすと、いろいろと面倒くさいのが経験上わかっている。

見た目とは裏腹に、なんとも男らしい少女のことも思い出すが……
やはりあれは例外だろう。

だから、もうしばらく様子を見ることに決めた。

上級クラス5年の平民が彼女一人であることからわかるように、貴族は総じて魔力が強い傾向にある。

いや強くなるように婚姻統制をしてきたと言った方が正確か。それは魔力がある程度血筋に影響されるためであり、さらに元の魔力が強ければ強いほど顕著に表れるためでもある。

ちらり、と横の席を見る。

現に隣に座っている自分の幼馴染も、数百年前の人の影響を受けてたにもかかわらず、いまだ学年一の魔力量を保持している。

（にしても、いつもどおりの仏頂面だな）

“氷の美貌”と呼ばれるその麗しい顔は、基本的にいつも不機嫌そうに眉を顰めている。しかし、それもどうやら教室の騒がしさに辟易しているようで、転校生自体にはあまり興味がないようだった。古代魔法のことを聞いても変わらない幼馴染の態度に、なぜかホツとする。

才能があると見込まれた貴族の子弟は、大抵、最低入学条件である12歳の時にこの学園に放り込まれる。基本的に生まれた時から魔力量は決まっているし、少し努力さえすれば上級クラスに入ることは確約されているからだ。

そして、今このクラスにいるのは全員が16〜18歳までの、いわゆるお年頃の男女であることもその理由の一つである。

（くっだらねえよなあ）

ここにいる奴らの目的は2つ。

卒業して箔をつけることと、将来の結婚相手を探すことだ。貴族の場合、より強い魔力の持ち主と子を成すことはすなわち家の繁栄に直結する。

280年ほど前、王都の大火事によって多くの才ある魔法使いが死んだといわれている。

そのせいで大きな魔力量を持つ人間も一気に少なくなり、人の魔力量は世代を追うごとに少なくなっていた。

だから今は魔力の強い魔法使いはどんなところでも重宝されるのだ。貴族社会ならばなおさらである。

なにせ家の子どもが宮廷魔法士にでもなれば、数世代は安泰して暮らすことができると言われているほどだ。

そんな理由もあって、幼馴染は女子の間で一番人気の結婚候補者なんだが……もっともその家格が家格なので、誰もあからさまなアプローチはしない。

それでもやはり女子たちが虎視眈々とその隣を狙っているのは、嫌がおうでもわかってしまうのだろう……いつも不機嫌なのはそのせいだ。

いくら兄の命令といえども、無理やり狼（というより女狐？）の輪の中に放り込まれた幼馴染には、本当に同情する。

本来ならこんなところに4年も通うべき存在ではないのだ。

そんな事情を知っているから、とりあえず幼馴染みたいに巨大な魔力を持たなくて良かったとは思っている。

……まあ、自分も家柄的には充分いい力モだろうが、今のところそついう意志はないのでなんとかして逃げ切るつもりだ。

しかし

（となるとアリアも大変だな）

なにせ古代魔法が使えるほどの魔力量を持っていて……加えてあの容姿だ。ここにいる男どものいい獲物である。

これから訪れる波乱の予感に、不安を拭えない。

唯一の救いはアリアが平民であることだろうか。基本貴族は貴族としか結婚しないという慣習がある。

「……それでも例外はつきもの、だよなあ」

古代魔法が使える人間は本当に少ない。『たとえ平民でも』と言う貴族はいっぱいいるだろう。最悪家柄については、どこか適当な貴族の養子にしてしまえば解決するのだ。

……だが、そんなことは絶対させたくない。

ここまで連れてきたのは自分の責任だし……なんというか、ほっとけないのだ。あの世間知らずな少女を守りたいと思う心に偽りはなかった。

もちろん自分の命を救ってくれた礼もあるが、おそらくそれ以上の意味においても。

(……………もしかして、俺は)

「おー朝っぱらから元気だな、お前ら」

いいところで担任の声がその思考を遮った。

男はそのまま悠々と壇上まで歩き、おそらくいつもしているように30人ほどの生徒がいる教室内を一望した。

一方生徒たちはそれぞれ席に着くと同時に、いつもとは違う期待の目を彼に向ける。

その中でも、さきほどARIAについて熱く語り合っていたうちの一人が、待ち切れずに右手と声を一緒にあげた。

「せんせー！ 編入生が来るってほんとですか!？」

「なんだ、もう知ってんのか……つまらんな」

本当につまらなそうな顔をしている。どうやらサプライズにした

かったようだ。

「かわいいですか!？」

続いて、こりないフィルがまたくだらない質問をする。

……こいつは、他の女子の軽蔑したような眼差しに気付いていないのだろうか。

「それは……見てのお楽しみだ」

つまらなそうな顔から一転、なにかいたずらを思いついたような顔に変わった担任、バツシュ・フラストが楽しげに、さきほど自分が言っただのと同じように（もっとも表情だけは正反対に）答える。

この男、以前は宮廷魔法士だったらしいが、今年からこの学園の教師になった……らしい。

自分は昨日初めて会ったのだが、会っていきなり『おう、お前がデイレイド家のボンボンか？ 新学年の初っ端から一週間の遅刻なんてなかなかやるじゃねえか!』と言われたのには、驚きを通り越して『この人が教師でいいのか?』と心配になったものだ。

帰りのホームルームの時は、なにやら緊急の会議とやらでいなかったのだが……自分の第一印象としては、やはり“変人”の二単語がしっくりきた。

もしくは“喰えない男”といったところだろうか。

（てか、平民の上にこの性格で、よくいきなり上級クラスの担任を任されたもんだと思ったけど、生徒には懐かれてるんだな）

「ふふん。まあ、お前たちの驚く顔が見ればそれでいいか」

そうやって目を細めたフラスト……先生は、ドアの向こうにいる人物に呼びかける。

「おい！ 入ってこい！」

教室の入り口に全員が注目する。

そして、ドアから現れたその人物に姿に、全員が息を呑んだ。

（そりゃ、驚くよな）

自分も最初は驚いた。危機的状況にありながら、その姿を見ただけであらゆる思考が吹っ飛んだものだ。いや、むしろ『ここ天国？』と自分の生を確かめるほどの衝撃だった、と言うべきか。

……それこそ、あの時攻撃されてたら死んでいたかもしれない。だから今のクラスの状態を見ても、ある程度納得できる。現に一昨日から見慣れている自分でさえ、いまだその姿から目が離せないのだ。

つややかな黒髪をなびかせ壇上まであがった少女は、そこにいる全員の視線をもともせず、堂々と前を見据えていた。

その顔を正面から見ても、いまだに気持ちが高鳴るばかりで、どこか現実感が感じられない。

極上の黒髪。それに映えるような白い肌。顔のパーツはそれぞれ完璧に配置され、その輝く瞳を引き立たせている。

アメジストのような瞳は……まるで伝説に詠われる聖女のように、神秘的で強い意志を内包していた。

その不思議な引力を持つ瞳に、誰もが囚われている。

“神のつくった芸術品”

そう言われれば信じてしまいそうなほど、その存在は浮世離れしていたのだ。

「……………」

教室は水を打ったようにシンと静まりかえっていた。

ただ一人、自分たちの担任だけは満足したように意地の悪い笑みを浮かべていたのだが……結局誰もそれに気付くことはなかった。

夢見心地のように空気がまどろむ。

それが永遠に続くと思われたその時。少女から発せられた言葉によって、ついにその幻想が破られた。

「アリア……セレスティ、だ。属性は火と闇で、特技は魔物狩り、だ。……と、ともかくよろしく頼む」

……内容と口調は勇ましいが、その話し方と目線のさまよい具合から、どこか焦っているのがわかる。

（古風かつ男口調なのは相変わらずだけど……もしかして緊張してんのか？）

教室に入ってきた時の堂々とした姿とは打って変わって、少々表情がかたい。

そういえばアリアは森で暮らしていたのだし、こういった大勢の前で話すのは初めてなのかもしれない。それなら納得だ。

（でも、魔物狩りって……冗談を言ってるわけじゃないことはわかるけど…）

多分自分以外の人間には冗談にしか聞こえないだろう。
現に自分もあの勇士を見ていなかったら、こんなか弱そうな少女が魔物を狩る姿など、とても想像できなかった。

……だが、そういった些細な事よりも、自分の与えた家名を名乗ってくれたことが何よりもうれしかった。

周りの人間に自慢したくなるような……そんな優越感を感じた。自然と唇が笑みの形になるのを止められない。

そして気付けばさきほどの冗談（？）のせいもあって、クラスの雰囲気はかなり和らいだものになっていた。その中でいち早く復活し、いの一番に馬鹿な質問をしたのは……ある意味予想通りの男だった。

「しつもおーん！ 現在特定のお相手はいますか！？」

フィルのその質問にクラス中の男が喰いつく。かくいう自分もなぜかその一人だった。

（い、いや、これは別にそういう意味じゃなくて！ お、俺はアリアの保護者みたいなもんだし……他の男をよりつかせない義務があるというか！）

自分でも意味不明な言い訳をしているのはわかっていたが……まあ、そんなことはどうでもいい。今はアリアのことだ。

「特定の……相手？」

しかし、どうやらその本人はいまいち質問の意味がわかっていないようだった。

「あーつまり、パートナーはいるか？ ってことだよ」

ニヤニヤしたフラスト先生が、意外にも大人らしい柔らかい表現を使って説明する。

どうやらそれに納得したらしいアリアは、固唾を飲んで見守る男たちの前に、ためらいもなく爆弾を落とした。

「ああ、そういうことか……いるぞ。それがどうかしたか？」

その言葉を聞いた瞬間、教室が阿鼻叫喚の嵐に包まれた。

男子は絶望したように頭を抱え、逆に女子は「キャー」と両手で頬をおさえて興奮している。本当に女子はこういった話題が好きだ。もちろんこの場合、自分たちの強力なライバルがすでに戦線を離脱していることに対する安心もあったのだろう。

(……いやいやいや、そんなことより！ 聞いてないぞ！？)

聞いてないというよりは、むしろ想像していなかった。流れに乗って他の男子と同じ行動をしてしまったが、そもそも自分はアリアの事情を知っている。

森でずっと暮らしていたアリアに恋人ができるわけがないのだ。

(そう、唯一アリアのそばにいたのは、使い魔のキラだけのようだった……)

そこまで考えて、ある恐ろしい仮説が、頭の中に浮かんた。

(いや、だけど、そんな馬鹿なことはあり………えそうだ)

自分はここまでの道中で、あの少女のすさまじい天然ボケぶりをいくつも見てきたのだ。

今までの会話の流れを思い返してみても……うん。パートナー＝相棒＝キラという方程式が成り立ったのは間違いなさそうだ。

安堵と呆れの二つの意味で、そっと溜息をつく。

それにしても、森で隔絶して生きてきたということは、ここまで恐ろしい誤解を生むものなのか。

(今後のアリアの常識教育計画の教訓にしよう)

そう心に誓った。今回については……いい男よけになったから良ししよう。

そして、そのお騒がせな少女はというと……なにやら教室のあちこちで騒いでいる生徒の様子に困惑しているようだった。

おそらく『自分は変なことでも言ったのだろうか?』とか考えているのだろう。

……まあ、間違っではないが、今回は教えなくてもいいだろう。

苦笑しながら少女の困った顔を眺めていると、不意にその紫の双眸と目があった。自分の顔を見た瞬間、パツと顔をほころばせたその変化に、また優越感を感じる。

(こういう気持ちをなんていうんだろう)

優越感……いや、もしかして独占欲か?

彼女の目を見ながらそんなとりとめもないことを考える。

だが、もう少しで答えがわかると思った瞬間、今度はアリアの顔が驚愕のものへと変わった。

そして、騒がしい教室内において、他の誰よりも大きな声でこう叫んだのだ。

「アスト王子!？」

……その視線の先を追うと、どうやら自分の横の席の人間に向けられていたようだった。

自分の幼馴染であり学校一の魔力の持ち主でもある人物のもとへ。

この国の第二王子である、レストシア・クライス・ハインレンスのもとへ。

3章 第1話「編入生」（後書き）

ようやく第3章突入です！

ここからは学園ハートフルストーリーに…できたらいいなあ。

そんなことを言っておきながら、次回は微妙にシリアスな感じになりそうですが（汗）

なんやかんやで最近ちょっと忙しいのですが、最低でも週一のペースは維持していきたいと思っていますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

第2話「失われた恋」(前書き)

遅くなつてすいません！
今回もちよつと長い：かな？

第2話「失われた恋」

「アスト王子!？」

(どうしてここに…!?)

思わずその席の前まで駆け寄る。

周りがギョツとしたようだが、気にしている余裕はなかった。

そして、至近距離で顔を確認して……ようやく己の間違いに気付いた。

「あっ……」

違う。顔立ちは良く似ているが……それでも違った。

だが冷静になって考えてみれば、当たり前のことだ。

(私は馬鹿か……この時代に生きているはずがないだろう)

一体何を期待していたのだろうか。

愚かな自分に思わず苦笑いをこぼしながら、改めて目の前の青年を観察する。

ここまで来てようやく気付けるほど似ている青年と、アスト王子の決定的な違いは、その瞳にあった。

アスト王子は穏やかな翠色の瞳だったが、この青年のそれは……どこかで見覚えのある薄い紫色をしていた。

（この色はまるで……）

その一方で薄紫の目の持ち主は、百面相をする自分をいぶかしげに見ていた。

おそろくかなり怪しい人間に思われてしまっただろう。なんとか取り繕うとした矢先、今度は青年の方から話かけてくる。

「さっきの名前……もしかしてアストレイ国王のことか？ どうしてそんな呼び方をしているのか知らんが、間違えるな。私は……」

そこで話が唐突に途切れる。

一体どうしたのかとその顔を見ると……先ほどのいぶかしげな目とは違い、今度は何かに驚いた目をしていた。

その視線は、ちょうど机の上に置かれた自分の左手に向いている。

「……っ、おい！ 貴様ちょっと来い！！」

しばらく至近距離で“それ”を凝視した青年が、急に私の手を引いて立ち上がる。

「お、おい、レスト！」

隣にいたライルは、乱暴な手つきになにか言おうとしたが……そのあまりに真剣な表情に、結局なにも言えないようだった。

そうこうしている間にも、青年は私を巻き込んでズンズン教室を進む。掴まれた手が少し痛むが、ここは我慢するしかない。

それにしても……昨日の男性教諭といい、ここの男にはろくなやつがいない、気がする。

それに

（授業はいいのだろうか……？）

学校生活1日目からなんとなく面倒事に巻き込まれている感じがしたのは……おそらく気のせいではないかった。

しかし、手をつないで（正確には一方的に掴まれて）教室を出て行く二人は知らなかった。

その後の教室が、先ほどとは違った意味で大騒ぎになったことを

……

次の日には、『王子の一目ぼれ！略奪愛！？』などといった噂が広がることを……

（なんだか昨日から驚かされることばかりだな）

人気のない薄暗い廊下を、手を引かれながら進む。

どこに連れていくつもりかは知らないが、少なくとも移動中は何も話すつもりはないようだ。どうせすることもないので、青年の背中を眺めながら昨日までのことを振り返える。

あの実技の後に受けた筆記試験は……正直ひどかった。

道中ライルに一般常識を学んだつもりだったが、所詮は付け焼刃だ。王都のデートスポーツが試験問題で出るはずがないし、現代の

魔法知識についてはなおさらである。

3代前の国王の名前やら、基礎魔法の定義やら、私が知っているわけがないだろう……そう言って問題用紙を黒焦げにしていまいたかった。

……まあ、唯一確信を持って解けた問題も1つだけあった。
なにせ今から300年前に、自分が関わった事件についてのものだったのだ。

もちろん手柄は例のごとく騎士団に横取りされたため自分の名はなかったが、問題は『王国歴148年に太陽の騎士団が魔物の大群と衝突し、勝利を収めた戦いをその地名か』の戦い』という』、といったものだった……答えは【ニルゲントの戦い】だ。

この戦いのことはよく覚えている。
地面にでかいクレーターをつくったのもそうだが……珍しく手こずった戦いだった、というのが何よりの理由だ。

相手の大将は、たしか魔王の側近の……ベリアルといっただろうか。

基本的に、魔物は本能で生きる生物だ。

魔獣の方は特にその傾向が強く、また人型をとれるようになった魔族についても、その知能はせいぜいある程度の会話ができるレベルだといわれている。

魔物は様々なモノを“喰う”おかげで全属性の魔法を使えるが、その代りに聖獣や神族ほど知能は高くない……はずだった。

だが、あの魔族は違った。

それまではただ突っ込んでくるだけだった魔物が、統制された動

きを見せ、あまつさえ罨まで使ってきたのだ。

いつのまにか魔物の大群に囲まれていた時は、さすがに冷やりとした。

そのせいか、最後は力押しでなんとかあったものの、ベリアルだけは逃してしまったのだ。今思えば負けることはなかったが、あれは自分にとって唯一の引き分け試合と言っていていいだろう。

燃えるような赤い髪と珊瑚色の瞳を持っていたあの男は、魔族としての力は決して強くはなかった。

だが、あれで奴自身の力がもう少し強かったら、ある意味魔王より厄介な存在になっていたかもしれない……正直二度と戦いたくない相手だ。

もつとも、その数週間後に魔王との決戦があったから、奴が生きているとは考えにくいが。

多少脱線しながらも遠い過去に思いをはせる。

そうして気付けば、いつのまにか校舎の外に出ていた。

（本当にどこまで行くつもりだ？）

いまだ青年に立ち止まる気配はない。仕方がないので回想を続ける。

……絶対落ちたと思ったが、その後学園長と呼ばれているこの学校一の権力者に呼び出された。

そこでライルのクラス、つまり上級クラス5年に入ることを告げられた。しかも特待生のおまけつきときた。

正直疑問が付きないが……あの笑顔で『いいですよ？』と訊かれれば『はい』と答えざるえない。もとより私にとってもいい話であつたのは事実だ。

その日は急遽用意された部屋に泊り、次の日、つまり今日からは寮暮らしが始まる。

そうしてさっきのクラスメイトとの初顔合わせという流れになつたのだが……

ライルと同じクラスなのはうれしいが、正直貴族ばかりのクラスなど、貴族嫌いの自分にとっては地獄のような場所に等しい。

だが、それでも編入しようと覚悟を決めたのは、ほかでもないライルの例があつたからだ。

教室に入つた直後から、多くの視線を感じた。誰かに見られることは慣れていたので問題ないが……大勢の前で話すとなると話は別だ。

初めての経験に、自分自身ひどく緊張しているのが自覚できた。そして、なんとか普通に自己紹介ができたと思つた矢先にあの質問だ。

“特定の相手”というのが最初何を指すのかよくわからなかったが……担任いわくパートナーのことらしい。それなら簡単だ。きつと現代風の使い魔の呼び方なのだろう。

しかしそうになると、相棒がいると言つただけなのに、どうしてみなあれほど驚いていたのだろう？
何かおかしいなことも言つたのだろうか。現代の若者はいまいち理

解できない。

ちなみにキラは今、自由行動中だ。

キラについては、自分の魔力量が高いせいか、常に地界に顕現している使い魔として認識されたい。基本的に使い魔は必要な時だけ呼び出し、用が終わったら天界に還すものとされているが、キラはその例外として、学園内での自由が保障された。

今現在一緒に授業は受けられないものの、1ヶ月後ぐらいに上級クラス5年生で使い魔召喚の儀があるらしく、その後は使い魔と一緒に授業を受けることも可能になるらしい。

それまでキラには自由に行動してもらい、今度こそ“常識”を学んでもらいたいと思っている。

そんなことを考えているうちに……どうやらようやく目的地に着いたようだ。

校舎の端に位置する閑散とした空き地……内緒話をするのに、ここほど適した場所はないだろう。

（さて、なにを言われるのやら）

まさか初日から喧嘩を売られることはないと思うが。

（でももし売られたら……買っていいのか？）

これまでは貴族に逆らうこともできなかったが、今は違う。
自分を縛るものは何もないのだ……よし、いざとなったらやろう。

だが、そんな自分の決意が使われることはなかった。こちらを振り向いた青年が言ったのは、思いもよらぬ質問だったのだ。

「貴様に訊きたいことがある。その指輪はどこで手に入れた？」

「指輪？ どこ、というか……人にもらったものだが」

「それは誰だ？」

「誰って……」

まさか300年前あなたそっくりの顔の人にもらったとも言えず、言い淀んでしまう。

「答えられんのか？」

青年の顔が険悪なものへと変わる。

「それは代々の国王が自分の一生の伴侶となる人間、つまり王妃に渡す指輪だ。それぞれの国王には固有の紋章があり、王家の秘匿技術によって作られている。つまり同じものは二つとしてない、ということだ」

初めて聞く話だ。この指輪にそんな意味があるなんて全く知らなかった。

（“安物”と言っていたのに）

「しかもその紋章は、かの有名なアストレイ国王のもの。どうして貴様がそれを持っている」

アストレイ……国王。

そういえば先ほども聞いた気がするが、無事国王になれたようで安心する。彼は少し優しすぎる性格の持ち主だったから、心配していたのだ。

指輪を眺めながら、その柔らかな笑顔を思い出す。

（でも、そんな大事な指輪を私にくれたのは……）

無駄とは知りながらもつい想いをはせるのは、やはり初恋の相手だったからだろうか。

――だが、自分の淡い妄想は、次の一言で破られた。

「それを持つていいのは、マリア王妃だけだ」

「……え」

この青年は今なんと言った。

「……マリア……おう、ひ？」

「聖女様と同じ名前のくせに、まさか知らないわけではないだろう。聖女アリア様の妹君であり、“癒しの王妃”と呼ばれた有名な方だぞ」

聖女アリアの妹というなら間違いなく自分の妹マリアのことだ。

マリア王妃……それはつまりマリアとアスト王子が結婚したとい

うこと。

（マリアとアスト王子がけっこん？）

頭が真っ白になる。

（自分の妹と……初恋の人が……結婚？）

混乱、安堵、絶望、憧憬、嫉妬、様々な感情が錯綜する。

泡のように浮かんではすぐ消えていく“それ”は、どれもが当てはまるようであり、しかしどれも違うような気がした。

うまく頭が回らない。

自分がどうしてここにいいのかさえわからなくなっていく。

そんな私を現実に取り戻したのは、青年の慌てたような声だった。

「お、おいなぜ泣く」

そう言われて初めて、己の頬から一筋の滴が垂れているのに気付く。

「泣く？……私は、泣いているのか？」

どうして泣いているのだろう。

305年前のあの日から、一度も泣くことなどなかったのに。

「お前、ご主人様を泣かせるな！」

少し離れたところからキラの声が聞こえた。

もしかして、心配して物陰からずっと付いてきてくれたのだろうか？ 好きに動けとは言ったが……本当にモノ好きな奴だ。

その存在に安心したせいもあるのだろう。徐々に意識が遠のいていく。

「ご主人様！？」

慌てるキラの声を子守唄に、意識は深い闇へと吞まれていった。

第2話「失われた恋」（後書き）

約束の1週間から1日遅れての投稿になります（汗）

申し訳ないです（超汗）

えー、そんなわけでちらほらと300年前とのつながりもできてきました。

物語はまだまだ続きますが、「あーここにつながるのか!」と思っていただけのようにいろいろ考えながら書くつもりです。

拙い文章で非常に恐縮ですが、皆さんに楽しんで読んでいただけるようにこれからもがんばります。

第3話「保健室」

「あい……僕……して。ただ……して……る！」

「まあ……おさ……なん……らあ」

朦朧とする意識の中、よく知った声と……もう一人知らない女性の話声が聞こえた。重い瞼を開け、瞬きをして霞んだ視界を調整する。

そこは、知らない部屋だった。自分の身体は、白を基調とした部屋の窓際の清潔なベッドに寝かされている。

「……、は？」

無意識のうちにつぶやいた。自問自答の形にはなるが、なんとなく医務室のような所だということにはわかっていた。目覚めた瞬間から、薬品のようなものの匂いが鼻を突いていたからだ。

（そうか、私は……）

魔力の気配で自分が起きたことを悟ったのだろう。誰かと話していたらしいキラがこちらに駆けよってくる。

「よかったあ、目が覚めたんですね！」

「キラ」

倒れたのだ。

……情けない。それが、最初に出た感想だった。もしここが戦場なら、とつくに自分の命はなきものとなっていただろう。

意識を失う直前の記憶を呼び起こす。なんとも苦い記憶だった。本当に、穴があつたら冬眠したい気分だ。

- - あの後どうなったのだろうか。

「キラ……彼は？」

「ご主人様をいじめた男なら、ここまで案内させた後追い出しましたよ。僕のご主人様を泣かせるなんて1億年早いです！ 今度ヤキを入れてやります！！」

意味はよくわからないが、なんとなく熱意と思いやりは伝わった。彼……そういえばまだ名前すら知らないが、とりあえずあの青年には悪いことをしたと思う。無理やりあそこまで連行されたとはいえ、いきなり話し相手が倒れ、いたく驚愕したことだろう。謝罪を含めて、今度こそちゃんと自己紹介したいと思った。

だが、今はそれ以上に目の前にいる相棒に謝りたい気分だった。こちらは感謝の念を込めて、だ。

「キラ、心配をかけたな。すまない」

「ぼ、僕……突然倒れたから、また一人になるんじゃないかって」

涙目になっているキラの言葉を聞き、反省する。かなり心配をか

けてしまったようだ。

「本当に悪かった。これからは気をつける」

「うっん、それより大丈夫ですか？」

“何が”とは訊かないキラの優しさにも感謝した。

「……ああ、もう大丈夫だ」

半分は嘘だが、もう半分は本当だった。心を穏やかにして瞑想する。

今は、まだ多少混乱しているが……所詮300年前のことなのだ。騒いだところで何がどうなるというわけでもない。もはや、変えようのない過去の歴史だ。

ただ、この現実を受け入れるのに少し時間がかかるだけ。それだけのことだった。

（それでも、さすがに聖女の話のようにはいかない、な……）

あれには意図された策略があつたし、奴らの素行を思い返せば納得もできた。

だが、今回の“それ”は全くの想定外のできごとだ。てつきり魔王を封印した後、妹は城から解放されるとばかり思っていたのだが。

（……いや、『妹を任せる』と言ったのは他でもない私だろう）

アスト王子は結婚という形でその約束を守ってくれたのかもしれない。

何よりあの2人の性格から考えるに“無理やり”というわけではなかったはずだ。きつとお互いが納得した上で、そうするに至ったのだろう。

そう思うことにした。

……結局は全てが想像にしか過ぎないのだ。2人が何を思っていたのか、今となっては知るすべがない。

だから……私は、ただ祝福しよう。

（よく考えてみればめでたいことではないか）

大切な人同士が結ばれたのだ。これ以上の祝儀があろうか。

……そうして、理性とは裏腹に未だ反抗を続ける自分の淡い感情を封じ込めた。

思考を断ち切り、俯いていた顔をあげてキラを見る。まだ心配げに自分を見守るキラに、何かを話そうとするが……うまい言葉が見つからない。

「あらあら、起きたのねえ。気分はどお？」

そんな自分を助けるように、キラの後ろからひよっこり顔を出したのは、まだ若い女性だった。

短く切りそろえられた水色の髪に、深い知性を匂わせる紺色の瞳。

25歳前後といったところか。見た目は白衣がよく似合っている知的な女性だ……が、その言動がどうも容姿とすれ違いを演じている。現に今もキラの肩に両手をのせて、こちらを興味津津に眺める様子は子どものようなものだ。

ちなみにもものすごくどうでもいいことだが、その大きな胸がキラの頭にくいこんでいる。

男（オス？）にとっては、いわゆる役得というものはずだが……キラの顔が微妙にひくついているのは、はたしてうれしいからなのか、それとも嫌がっているのか。いまいち判断がつかない。

それにしても

（……何を食べたらあんなに大きくなるのだ？）

別に気にしているわけではないが、まるで爆弾でも入れているのかと疑いたくなるような大きさだ。

だが、そこまで考えたうえで、ようやく初対面の相手に随分と失礼な考えを持っていることに気付いた。

……どうやらいまだ自分の頭は混乱の最中にあるらしい。

キョトンと自分を見つめる女性の質問を思い出して、慌ててその返答をする。

「あ、ああ、もう平気だ……です。お世話になりました」

慌てすぎて敬語を忘れてしまったが、相手は気にもせずニッコリと返してくる。

「ええ、お世話しましたあ。キラちゃんが血相変えてあなたを運ん

できたのよお。でも、まさかこんなに早く噂の美少女に会えるとは思ってなかったわあ。私ってラッキーねえ」

やはり怜悯な見た目とは裏腹に、全体的にポワンとした雰囲気醸し出している。おそらく語尾を伸ばすのが癖なのだろう。

「そう、ですか」

”噂の”というのが気になったが、なんだか嫌な予感がしたので、今は訊かないでおく。

「私はこの学校の保健医で、クラリス・リボンっていうの。よろしくねえ」

「アリア・セレスティです。こちらこそよろしくお願いします」

「そう、じゃあアリアちゃん。今日はもう自室で休みなさい。担任には私から言っておくわあ」

「し、しかし――!」

さすがにそれは、と思い反論する。だが意外と素早い動きで自分の額に指を当てられ、そのままツンツと頭を押された。

「もう初登校ではりきるのわかるけど、無理は禁物よあ。めっ!」

「は、はあ」

……なんだか今まで出会ったことのないタイプだ。非常に対応に困

る。

（さて、どう攻略したものか）

はじかれた額に手を当てて考えていると、不意に保健室のドアがバンつとすごい勢いで開かれた。

「アリア！ 倒れた、って……聞いて、たぞ？ も、う、大丈夫、なの、か？」

血相を変えたライルが、勢いそのまま入室してきた。しかし既に起き上がっている私の姿を見て、途中から疑問形になる。

ここまで走ってきたのだろうか、かなり息がきれている。

「あらあ、いいところに王子様のお迎えねえ。ふふ、もっとも本物じゃないけどお。じゃあ、彼女をお部屋まで送ってちょーだいね、偽王子様。アリアちゃん、今日はもう絶対安静よお。キラちゃんもまたいらっしやあい」

「偽王子って、そりやないよ、リボン先生。……まあいつか。それでは参りましょうか姫。ついでに従者も」

ズーンと落ち込んだと思ったら、すぐにケロッとおどけるライルについて笑ってしまう。姫呼ばわりなど今の自分には皮肉でしかないが、その悪意のない様にいつのまにか救われている。

ちなみに従者呼ばわりされたキラは「僕が先にいたんだから、僕が王子様だ！」とよくわからない対抗心を燃やしていたが、「そっかー残念だな。王子様にはもうお菓子なんて庶民的な物、恐れ多く

てやれないなー』という言葉に『僕、従者がいい!』と即答していた。

……もはや毎回恒例の光景になっている気がする。

第3話「保健室」（後書き）

またもやギリギリ投稿です（汗）

でも今回はきりのいいところで切ったので、明日あたりまた1話投稿すると思います。

リボン先生は、人によっては多少イラっとするキャラかもしれないね。

ちなみに私も書いててちょっとイラっしました（笑）
でもやっぱり好きなんですよねー。不思議なものです。

第4話「子孫」

「リボン先生は……その、変わった女性だな」

保健室を出た後、先手を打って、半歩先を歩くライルに話しかけた。

できれば“あの”話題には触れてほしくなかった。

「そうなんだよ。見た目は知的美人なのに、中身はあれだろ？でも、あのギャップがまた男子に人気でさー。いわゆる“ギャップ萌え”ってやつ？」

（“ぎゃつぷもえ”……ああいうのを現代ではそう表現するのか）

彼女の言動を思い出し、新しく増えた語彙をそれに当てはめた。なんだかひとつ賢くなった気分だ。

そこで油断してしまったのだろう……次の質問にはすぐに答えることができなかった。

「ところでさ……何があつたのか聞いていいか？」

ふんふん頷いている自分の顔を、心配そうな顔をしたライルが覗き込んできた。

やはりそう簡単に、物事はうまく進んでくれないようだ。

「……たいしたこと、ではなかった」

「“たいしたこと”じゃないのに、倒れたのかよ？」

すぐにそう返してくるライルの表情は、ひどく真剣だ。

これは正攻法では、切り抜けられそうにない。
どちらにせよ真実は言えるわけがないので、無理やり話を変える
ことにする。

「本当にたいしたことではなかったんだ。そ、それより授業に戻らないか？ リボン先生にはああ言われたが、今日が初日なのにいきなり授業を休むのはさすがに気が咎める」

自分でも下手くそな方向転換だとは思ったが、仕方ない。これが限界だった。

一方ライルは不満げに私を見つめるが、結局それ以上追及することとはなかった。

おそらくさきほどからキラが『なにも聞くな』というようにライルを睨みつけているせいもあるのだろう。

「いや、むしろ今日はもう教室には戻らない方がいい。今教室は大混乱の真っただ中だし」

「大混乱？ なぜだ？」

「そりゃ、あの堅物で知られる男が転校生を連れ出したあげく、戻ってきたときには、『倒れたから保健室に置いてきた』なんて言ってたんだからな。大混乱にもなるよ」

「置いてきたんじゃないくて、僕が追い出したの！」

キラが抗議するが、問題はそこではない気がする。

なんだかいろいろと誤解が生まれそうな要素が、あちらこちらに散らばっているような……

それについて聞こうと口を開くが、先にライルの口から発せられた内容は、さらなる疑問を提示するものだった。

「そうなのか？ まあ、教室に帰ってきたレストの奴もすぐに『王宮に行くって来る』って言うって早退したけどな」

「レスト？ それに王宮？」

「ああ、あいつ名乗ってすらいなかったのか。あいつはレストシア・クライス・ハインレンス。この国の第二王子だよ」

「ええ、あいつが！？ むう、確かにあの王子にも似て、ふがあ！」

慌ててキラの口を手で押さえる。危なかった。

授業中のせいか人気のない廊下で、その声は思いのほか響いていた。

だが、キラが必要以上に騒いでくれたおかげで、逆に私自身が冷静になれた点は良かったと思う。

（王子……だからあの瞳と容姿なのか）

いろいろな意味で納得する、と同時に引導を渡された気分だった。

アスト王子とそっくりの青年……レストシア王子。

指輪のことを知っていたのも含めて、どうやらあの青年が彼と妹の血筋を受け継いでるのは、間違いないようだった。

人間には、魔族の赤い瞳や神族の蒼い瞳のように決まった色の傾向はない。

だが、魔力の強さと瞳の色というのはやはり関係があるようで、魔力の強い者の色はその子どもに遺伝する、というのが魔法使いの間の常識でもあった。

マリアは私ほどではないにしろ、巨大な魔力の持ち主だった。それこそ長い時の中で血が薄められていたとしても、数百年はその遺伝が続くほどの。

レストシア王子の滅多にない薄紫の瞳は、間違いなくマリアのそれと同じ輝きを持っていたし、今思い返せば、魔力の質も自分と似ていたかもしれない。

（……つまり、あの青年は私と遠い親戚関係になるということ、か？）

つい頭を抱えなくなった。

幸か不幸か両手がふさがっていたため実行はしなかったが。

自分の子孫（？）と一緒に授業を受ける。

こんなおかしな体験をするのは、世界広しといえどもおそらく自分だけだろう。

キラの途中で途切れた言葉にライルは首をかしげた。

「似て？ …… ああ、アストレイ国王の若かりし頃の顔に似ているってやつか？ それあいつのコンプレックスでさ。ほら、そこら中に肖像画がおいてあるだろ？」

どうやら自分とは違い、アスト王子の肖像画はばっちり残っているらしい。

この分ならおそらくマリアのそれもたくさんあるのだろう。身内としては、どう反応すればいいのかわからない複雑な気分になりそうだ。

それにしても、出会ったばかりの時、聖女と同じ名を名乗った私に『あんたも大変だな』と言ってきたが……その“も”というのは彼のことだったのか。一つ謎が解けた。

300年前の国王とそっくりな外見を持っているレストシア王子。そして聖女と同じ瞳と名を持つ私……いや本来の順番的には私と同じ瞳と名を持つ聖女か。

ともかくお互い苦労しているという点では一緒だ。少し親近感が湧いた。

「私はまだその肖像画を見たことがないから、わからないが……彼も苦労しているのだな」

そう言っ、今一度先ほどの青年の姿を脳裏に呼び起こす。

確かに顔は似ていたが、その身にまとう空気はずいぶん違っていた……ような気がする。アスト王子は常に柔らかく、親しみやすい雰囲気を出していたが、あの青年のそれは伶俐な刃物のようだった。

それに髪についても……金髪は共通していたが、レストシア王子の方が若干明るい印象を受けた。

だがそのどちらも、肖像画においてはたいした違いではないのだろう。

「そうそう。その上、学校一の魔力の持ち主だからな。第二王子なのにこんな学校に通っているのもそれなりの理由があつてさ。まあ、いつも不機嫌だけど悪い奴じゃないんだよ。だから、その……」

「ああ、わかつている。私も別に彼が嫌いなわけではないんだ。ただ少し、驚くことがあつただけだ。悪いのは彼じゃない」

「もつとも僕は許しませんけどね！ 今度会つたらお菓子を要求してやります！」

「……おい、ヤキを入れるんじゃないのか？」

いつのまにかやること違くなっている。

おそらく、『王子だからヤキを入れない』ではなくて、『王子だからいっばいお菓子を請求しても大丈夫だろう』という考えなのだろう。

（……やはり私は菓子以下なのか？）

いつか真面目に問いただしてみたいが、もし『そうです！』と言いつけられた時の衝撃を考えると……やはり怖くて聞けない。

そんな自分とキラの小声で交わされた切ないやりとりは、聞こえなかったのか……ライルは話を続けた。

「そうなのか？ なら良かった。あいつも結構誤解されやすい奴でさ。……ま、何があつたかについては言いたくなつたら言ってくれ。寮に行くんだろ？ 案内するよ。どうせ今の教室に戻っても質問攻めになるだけだしな」

「ああ、ありがとう……だがライルはいいのか？」

「いいの、いいの。どうせ今日はたいした授業入ってないしな」

そして手をひらひらさせて、先を歩く……と思ったら、不意にいたずらっ子のような顔をしてこちらを振り向いた。

「それにほら、サボる口実ができた」

そう言って太陽のように朗らかに笑うライルは……とてもまぶしく心強い存在だった。

第4話「子孫」(後書き)

話が進まない(涙)

次回あたりからはサクサク進めていきたいと思っています。

ちなみに今さらですけど、ライルは天然のタラシです。

そしてアリアは悪意には超敏感だけど、好意には超鈍感という損な習性をしています。

そんな2人なので、これからもきつとこんな感じでまったりしていくことになると思います。

第5話「入寮」

そこは、想像の斜め上……から垂直降下して地面にめり込んだような場所だった。

もちろん悪い意味で。

「まさか……ここが？」

「そのまさかだ」

「う、嘘でしょう?! こ、こんなところに住めっていうの?!」

慈悲のかけらもないライルの言葉にキラが抗議の悲鳴をあげる。

心なしかその顔は青ざめている。私の着る黒いローブの端っこを掴んでぶるぶる震える黒髪の少年の姿は……なんだかマニアックな需要がありそうだった。

「てか俺、実際住んでるんだけど……まあ、最初は皆そういう反応するもんさ」

そう言うライルは自分たちの反応を予想していたのか、至極平静に言葉を返してくる。

「しかし、本当に住めるのか? なんていうか……今にも崩れそうな儂さなのだが」

そう、寮と教えられた建物は、ボロかった。それも半端ないほどに。たしかに数百人単位で人が住めるほどには大きいが、はたして上の階は住む人間の体重に耐えられるのか、という疑問が湧くほど

だ。

「その点は大丈夫。魔法で補強してあるらしい。それに案外中の方は綺麗なんだぜ?」

この外観でそう言われても、全く説得力はない。良くいえば風情ある、悪くいえばボロイ建物の外側は、何かの植物のツタで覆われており、その裏手には山林が広がっている。それらが一層の不気味さの演出に一役買っているのだ。

(……というか魔法で補強するくらいなら、いつそ立て直せばいいのでは?)

なにかこたわりがあるのだろうか?

おそらく築数百年と推測されるその建物は、確かにボロイ中にもどこか荘厳な雰囲気を感じられるが。

「そ、そ、そんなこと言ったって……ご主人様あ、ここ絶対なにか出ますよ!?!」

「……キラ、お前闇属性のくせして幽霊を怖がってどうするんだ?」

つい呆れてしまう。

「そ、そんなの関係ないですよ!」

「……まあ、出るのは本当らしいけどな」

ぼそつと呟いたライルの言葉に2人仲良く動きを止める。

その中でもキラは壊れた首ふり人形のように、ぎこちない動作で

ライルを振り向いた。

「え？ なにか言った？ 気のせいだね。ですよね、ご主人様？」
「ライル、何が出るんだ？」

キラのささやかな抵抗も空しく、魔族を相手に戦ってきた私は“それ”に対して必要以上の恐怖もない。

『襲ってきたら退治すればいい』という程度の認識のもと、一気に核心に迫る。

「そりゃ決まっているだろ？ ゆう「ああああー何も聞こえないiiiiiiー！！！！」」

耳を押さえて絶叫したキラは、自分のローブの中に頭を突っ込んできた。“頭隠して尻隠さず”とは言いが……まさにそう形容するにふさわしい状態だ。

だが、その姿を笑うことはできない。

（ここまで怖がりだったとは……）

新たな発見といえいいのか。

そう言えば300年前も夜は必ず私の傍で寝ていたし、今でもそうだ。もしかしたら、もともとそういう状況は苦手なのかもしれない。

だとすれば、あの洞窟での日々はキラにとって苦痛でしかなかったはずなのに。

それでも気の遠くなるような年月を傍で過ごしてくれていたのだ。ホントに感謝してもしきれない。ローブの中にあるその頭を慈し

むように撫でる。

一方のライルは、「なんだ、キラは怖がりなのか？ そりゃ大変だなあ」と言っているが……ニヤニヤ笑うその顔は絶対に大変だとは思っていない。

「そんなに寮に入るのが嫌なら、外に犬小屋でも作ってもらうか？」

その言葉は少年の逆鱗に触れたようだった。ブチっと何かが切れた音がしたのは……気のせいではないようだった。

ガバリと私のローブから顔を出したキラはさきほどとは一転して激怒していた。

怒りのせいか顔を紅潮させ、そのまま天に向かって吠える。

「い、犬？！ ぼ、ぼ、僕は狼だああああ！」

「うわ！ な、なんだこれ！？」

ライルの影がゆらりとその形状を変える。

生き物のようにうごめくそれは、そのまま素早く伸びて本体であるライル自身の身体を拘束した。

黒い影にぐるぐる巻きにされた彼は大きな音をたてて派手に地面に転がる。

犬呼ばわりによつぽど腹が立ったのか、どうやらライルの影に魔法をかけたようだ。

（人の影に干渉……だからあんなにタイミングがよかったのか）

影の拘束から逃れようと、ジタバタもがいているライルを観察し

て、ようやく先ほどのことに納得がいった。

「キラ、お前私の影にも細工したろう？」

そう言った途端、それまで激情に駆られていたキラの気配が一気に静かなもの……というよりは、どこか脅えたものへと変化した。そうして一瞬びくりとした後、これも毎度お馴染のもしもじを披露したその姿を見て、ますます確信を強める。

ある意味賭けのような推測だったのだが、この反応を見る限り、自分の勘は外れてなかったようだ。

「あの時も私の影に干渉して会話を聞いていたんだな？」

ずっと不思議だった。

自分が倒れた時、近くにキラの気配は感じられなかった。それにも関わらず、あの登場の仕方だ。あのタイミングの良さは、魔法を使って会話を聞いていたからに違いない。

『ご主人様を泣かせるな』と言っていたことから、おそらく視界もつなげてたのだろう。

いや、むしろ“その”光景を見て駆け付けたというところか。

「あ、あの……ごめんなさい」

下を向いてシュンと謝る、その殊勝な態度に苦笑する。

獣型だったら、きっとその耳と尻尾も同じように下向きに頂垂れていたことだろう。

「別に怒ってはいないよ。心配してくれたんだろ？」

いっそ感心したものだ。

他人の影に干渉する……それだけでも闇属性の魔法としては、十分玄人の域にはいる。

その上、私にかけたのは、対象の影に自分の五感……この場合は目や耳の感覚器官をつなげる魔法である。

隠密活動などで使用されるそれは、闇の属性の中でもかなりの難易度を誇る上級者向けのものだ。

それにしても

(……いつのまにかけられたのだろうか?)

もともとその特性から相手に悟られにくいものではあるが、それでも魔法の気配に敏感な自分に気付かれずにかけるとは……称賛に値する。

今回の魔法も無詠唱で魔法を発動させたことから、その熟練度が知れた。おそらく闇属性の神族の中でもトップクラスだと考えていいはずだ。

(本当に成長したのだな)

己の主人がそんなことを考えているとはみじんも想像していない少年は、未だ心配そうに上目づかいでこちらを見ている。

あまりおおっぴらに褒めると調子にのりそうだから、とりあえずは優しい口調で注意事項を言うことにした。

「まあ、別にお前に聞かれて困る話なんてないしな。ただ、今度からはかける前に一言いうこと。いいか？」

「はい」

今度こそ安心したように答えたキラの声とともに、その場には和

やかな雰囲気が出る。

しかし、次に聞こえた声にある存在を思い出すことになった。

「……………和やかに話しているところ悪いんだけどさ、そろそろ解放してくんね？ この放置プレーはきついわ」

自分の影に捕まり地面に転がる、という間抜けな状態のまま放置されたライルの声は切実さに満ちていた。

（“ほうちぶねー”……………ふむ、また新しい言葉を覚えた）

そこには、ようやく解放されてぐったりしているライルと、どこか満足そうな顔をしたアリアがいた。

寮の中はライルが言っていたとおり、外観を裏切るきれいなものだった。それを自分の目で確認した相棒は、少し安心したようだ。掃除は隅々まで行き届いていて、300年前の王宮にどこか似ている気がする。

もしかしたら、この寮が建てられたのは私のいた時代に近かったのかもしれない。

ライルの案内で共有スペースを見学した後、初めて自分たちに割り当てられた部屋を訪れてみる。

「やけに広くないか？」

案内された部屋の広さに驚く。王宮にあった自分の部屋よりも数倍広く、その内装も豪華だ。

大きなベッドが一つと、その隣に簡易ベッドが置かれている。床

には高級そうなじゅうたんが敷かれ、机や椅子、たんすに鏡といった家具は既に配置されていた。しまいには大きな窓とその先にあるバルコニーだ。

室内でありながら走ることができそうなそこは、とても一寮生に与えられる部屋とは思えない。

「アリアはキラと2人分だしな。それに特待生でもあるから、貴族用の広い部屋が用意されたんだろ。ちなみに、この古めかしい内装で好みが分かれるところなんだけど……どう？」

「いや、むしろこの方が落ち着くよ」

古風、とおそらく現代では言われるのだろうか。

それでも自分にとっては身近な内装があり、懐かしくも落ち着く空気がそこにはあった。

「ところで、なんでベッドが2つなの？」

キラが不思議そうに首をかしげるが、心なしかその気配はひんやりしている。

「そりゃ俺が頼んだんだよ。キラ……お前いくら使い魔だからって、アリアと同じベッドは駄目だろう。というか俺は許さんぞ！」

「なんでライルの許可が必要なのさ!？」

先ほどのことに警戒したのだろう、かみつくキラにライルはファイティングポーズをとって身構えた。なんとも大げさな。

「ライル、私は別に一緒でもかまわないのだが」

どうせキラだ。さすがに寝首を搔かれる心配はなくていい、と思う。

「いや、ダメだ！ 本来なら性別の違う奴同士が、同じ部屋で寝るのも問題なんだぞ！ それに今までがどうか知らないけど……ここではこれが“常識”なの！」

“常識”と言われてしまえば、納得せざるを得ない。やはり常識知らずな自覚はあったので、ここは彼の言葉におとなしく従うことにした。

「むう。キラ、ここでは別々に寝るのが“常識”のようだ。そうするか」

「ご主人様、切り替えが早すぎです！」

「ふ、主人の意向に従うのが、従者の役目さ。諦める、キラ。あつ、ちなみに俺は2つ隣の部屋だから、何かあったらすぐに来いよ」

「何か？ まあ、わかった」

ちらりと隣の様子を眺めながら頷く。

おそらくライルの言葉のせいだろうが……なぜかさっきからキラが殺気を放っている。

「ついでに向かいハレストの部屋だな。こっちは別に行かなくていいからな！」

「いや、特に用事もないだろうが……王子も寮に住んでいるのか？」

「ああ、あいつ王宮が嫌いらしくてね。……なのにいきなり『王宮
に行ってくる』って言ったもんだから、驚いたよ。ホント何しに行
ったんだか」

「……さあな」

なんとなく予想はできたが、やはり口に出すことはなかった。
いや、その勇気がなかった……というべきか。

ベッドで不貞寝を始めたキラを見ながら、アリアは自問にくれるの
だった。

第5話「入寮」（後書き）

サクサク進んだ…のでしょうか？

なんだか相変わらず脱線ばかりな気がします（汗）

次は王子様視点が入ります。

噂の？第一王子もちらっと登場予定ですので、こっぴど期待。

第6話「混乱」(前書き)

*今回は予定どおり、レストシア視点です。
ただ予定どおりじゃないのは、王子視点がもう一話続くということ
です(汗)

第6話「混乱」

その涙は今まで見てきたどんなものより美しく、そして儚いものだった。

王家の色であり、禁色でもある紫。自分のよりさらに深みのあるその瞳から流れた滴は、まるで宝石のように輝きながら、触れれば壊れてしまいそうな……相反する印象をもたらした。

……だが、その涙の理由がどうしてもわからない。

（確かにさきほどは、ついきつい口調になってしまったが……）

そんな思考の中で、自分が柄にもなく動揺しているのがわかってしまった。

幼いころから感情をコントロールする癖をつけてきたはずなのに、この体たらくはなんだろうか。

しかし、自己嫌悪に陥る自分の前で、その涙の源泉はゆっくりと身体を傾けていく。

「お、おい！」

草の地面に倒れこむ前に、慌ててその華奢な身体を受けとめようとするが……不意に黒い闇が視界を覆った。

「触るな」

その冷徹な声に反応して顔を向けると、少女自身の影が伸びてその身体を支えている光景と、傍に寄り添う少年の姿が目映った。

底の見えない闇はある者には恐怖を、また違う者には安らぎを与える。

この場合は言うまでもない。この影は、自分に対しては明らかに敵対心を持っているが、その一方では少女をそっと包み込み誰にも触らせないように守護しているのがわかった。

「お前が触っていい人じゃない」

にわかには信じがたいが、今までの流れから一連の出来事は、この辛辣な言葉を吐く少年の仕業に違いないようだ。

先ほど急に現れた紅顔の美少年は、貴族の女性に見せればそれこそ家で困いたくなる容姿をしていた。

だが、自分の視線に侮られていると思ったのか……その一見ひ弱そうな体躯から、今まで浴びたことのないすさまじい殺気が放たれる。

「つく」

その急激な圧迫感に、身震いすると同時に戦慄を覚えた。

これまでの人生の中で、ここまで直接的に命の危機を感じたことがあっただろうか。

（なぜ護衛が来ない？）

実際は護衛という名の監視だったが、それでもここまであからさまな殺気が放たれているのに、普通出てこないはずがない。

兄の命令でつきまといっている護衛は、いつもは煩わしいとは思っていないが、今に限っては違う。これは自分一人で太刀打ちすべき相手ではない。本能がそう告げている。

(こんな肝心な時に)

「ああ、周りにいた人たちなら眠ってもらったよ。だから助けを求めても無駄」

「な……!？」

今の話が真実だとすれば、いつの間にやったかは知らないが、かなりの手練れだ。

王家の護衛を簡単に倒すほどの腕……正直勝てる気がしない。いくら魔力が強くても、まだ学生的身である自分には過ぎた相手だ。

濡れたような黒髪、蒼い瞳からは見る者を極寒へと誘う波動が放たれている。まるで死神のようなその姿に、瞬間死を覚悟する。

だがそんな自分の覚悟とは裏腹に、少年はそのまま倒れた彼女に歩み寄り、壊れ物を扱うような手つきでそつとその背中と膝に手をまわした。

そのまま小さな外見からは想像もつかないほど、軽々とその身体を持ちあげる。その顔は自分だけの宝物を手に入れた子どもようだった。

どうやら目的はその少女だけのようだ。

「……貴様は、誰だ？」

「答える義理はないよ。そんなことより医務室に案内しろ」

いまだ緊張はとれないものの、自分に危害を加える気はない様子

に多少安心したせいもあるのだろう。

こちらを振り向くと同時に戻る不機嫌な顔と有無を言わせないその眼差しに、つい苦笑いがこぼれてしまった。

王子である自分にここまで傲岸不遜な態度をとるものが、これまでいただろうか。だが、それがいつそ愉快でもあった。

眉根を寄せている少年はやはり変わらず冷徹な眼差しでこちらを睨みつけてくる。

「聞こえなかったのか？ お前のせいでご主人様は倒れたんだから、それくらいの責任はとってもらおう」

（ご主人様…使い魔か）

そう言えば先ほど現れた時もそう言っていた。

神族の使い魔を連れているという噂は聞いていた……が、この執着は尋常じゃない。

自分自身今まで多くの使い魔達を見てきたが、ここまで深い絆を持つ使い魔と契約者は初めてだ。

契約というのは本来もつと淡泊なものなのだ。

使い魔は魔力を、契約者は使い魔の力を、それを対価交換するだけの関係。それが一般的な理解である。

王家に引き継がれている自分の使い魔はちよつと変わっているが、普通使い魔というのは、呼んだ時だけ地界に顕現し、用事が終わればすぐに天界に還るものだ。

主の命令には従うが、それ以上のことはしない。それが使い魔という存在のはずだった。

だがこの二人は……いや、この使い魔は主の命令なしに自主的にその身を守っている。

その扱いもまるで恋人に対するそれのような。

「ねえ」

少年の声が1トーン下がったのを聞き、そこで思考を中断した。これ以上怒らせると本当に命が危うい状況になりそうだ。

「……ついて来い」

先頭をきつて、そのまま歩き出す。少年も一人抱えているとは思えないしつかりとした足取りで後を追ってきた。

お互い何も話さず、ただ靴音と少女のかすかな寝息だけがその場に響いた。

「ここ？　じゃあ、あんたはもういいや。消えて」

使い魔の少年はそのまま少女と共に保健室の中に入っていった。相変わらずの辛辣な言葉と絶対零度の視線は、自分に一切の好感がないことを示していた。

それは、もはや人を見る目でもなかった。物だ。

……だが、それに気をもんでいても仕方ない。

一旦教室に戻るために、踵を返す。

その背後では、容姿と性格のギャップがひどい保健医の「まあまあ、美少年に美少女じゃなあい」という、医者にあるまじき第一声が聞こえた。

第6話「混乱」（後書き）

てなわけで、ごめんなさい！

第一王子は次で出てきます。

でも今7割くらいは書けてるので、おそらく明日までにはあげれるかと思っています。

あとは、キラのギャップに驚いてるかもしれませんが…一応人間嫌いという設定もあったということ（笑）

第7話「王宮」(前書き)

* 6話にひき続き、王子視点になります。

第7話「王宮」

ドアを開けると同時にその場の全員の視線が突き刺さった。

その眼差しに含まれる好奇と疑惑の感情を完全に無視し、そのまま教室の中に足を踏み入れる。

同じく自分に気付いたらしい、教科書を片手に黒板に何かを書いていた深緑の髪の男は、こちらを振り返りながら軽い調子で訊いてくる。

「お、ようやく戻ってきたのか。うん？ 転校生はどうした？」

そういえば一限目はちょうど担任フラストの攻撃魔法の授業だった。

その人を喰ったような表情は一見軽薄そうな印象をもたますが、自分は王宮でのこの男の働きを知っている。

鬼神のごとき強さから諸外国では恐れられていた……我が国の守護神といってもいい存在だった。

だが、ある事件を契機に自らその地位を捨て、教職の道を選んだ変わり者でもある。

それでもさすがというべきか……陽気に自分を見つめる藍の目は、どこか鋭い刃物のような視線が隠されていた。

この男もまた自分が王子だという理由で、特別扱いはしない者だが……今はそれが苦しい。

どうせ隠しておけるものでもないので、端的にあったことの実事だけを述べることにする。

「……倒れたから医務室に置いてきた」

その言葉を言った時の、クラスの反応は顕著だった。教室中が一気に喧騒に包まれる。

ここの奴らは妄想力というか……とにかくそういうのがすさまじい。結婚相手を探すという目的もあるせいだろ。男女間の出来事にやたらと反応し、恋愛事に結びつけたがるのだ。

「ま、まさか……」

「王子だから相手も断れなかったんじゃ」

「えー、でもあのレストシア様よ」

「いや、でも倒れるって……」

様々な憶測が飛び交う教室を、軽蔑するように眺める……と同時に少し反省する。

いくら王家に関わることだからといっても、いきなり教室から連れ出すのはやりすぎた。

明日からの彼女の学校生活に支障が出なければいいのだが……

女嫌いの自分がそんなことを考えることは滅多にないのだが、さすがに今日会ったばかりの人間が自分のせいであらぬ誤解を受けるのは良心が痛む。

（それに……）

だがその思考を途中で妨げたのは、自分の幼馴染だった。

「レスト、お前何をしたんだ!？」

その男……ライルは自分の胸元を乱暴に掴みながら、至近距離で

怒鳴ってきた。

いつもは穏やかな若草色の瞳が今は、怒りに燃えている。

「何も、していない」

その姿に内心驚きながら、表面上は冷静に返す。首が締まって苦しいのはこの際気にしない。

幼馴染という関係で小さい頃からお互いを知っているが、ここまですで真剣に怒っている顔を見るのは初めてだった。気付けばいつの間にか教室も静かになっている。

チラリと担任の方を見るが、どうやら止める気はないようだ。相変わらずおもしろそうな顔をして、腕を組みながら傍観を決め込んでいる。

保健医といい……本当にこの学園の教諭は、実力はあっても性格はろくな奴がない。

教師にあるまじきその姿に仕事をしろと文句も言いたくなかったが、今はその余裕もないようだ。

目の前には怒り狂う幼馴染の顔がある。

「何もって……じゃあ、何があっただんだよ!？」

(そんなことは私が知りたい)

言葉にはならない心の声を吐きながら、未だ激昂するライルの手を振りほどく。

どう考えてもこの状態のライルにまともな話を通じるとは思えないし、なによりまともな話を言える気もなかった。

そうして説明することをあっけなく放棄し、自分の机の前まで歩いてカバンを拾う。

「何もなかった。王宮に行ってくる」

はたして“何も”してないと言えるかは自分自身よくわからなかったが：自分の言葉を聞いて倒れたのは確かだ。

その中のなにが原因かはわからないが、少なくとも今の自分にはできることがある。

王家の者としての責任と、少女に対するかすかな贖罪の両方が動く理由になった。

未だ何か言いたそうなライルと、「おい明日はちゃんと来いよ」と少しずれたことを言う担任の声を背後に、ざわめく教室を去った。

「誰もいない、な」

人気がない、豪華なシャンデリアに国宝級の調度品が並ぶ廊下を見ていると、それだけで帰りたい気分になってくる。

王宮は相も変わらず胡散臭い場所だった。悪鬼巢窟、魑魅魍魎の巢。まさにそう呼ぶにふさわしい。

城の外見は真っ白でもその中身は真っ黒だ。

己の欲しか考えない愚か者どもが跋扈する場所。

そんな場所で生まれ育った自分の性格がひねくれるのも仕方ない。

足早に廊下を進むが……急に嫌な予感がした。

それでも貴族の古狸たちに見つからないよう、抜け道を伝ってここまで来たのだが：違う道を通ろうと踵を返す背後から不意に聞こえた声に、その目論見が失敗したことを悟る。

「よお、レスト。お前がこっちに帰ってくるなんて珍しいな」

「……………兄上」

ギルネシア・オルス・ハインレンス。今年で20歳になる自分の兄であり、この国の王太子だった。

そして今、最も会いたくない人物でもあった。

おそらくいつも通り待ち伏せしていたのだろう。

そしていつものようにニヤニヤ顔をしている兄について舌打ちしたくなる。

いつでもそうだ。自分はこの兄の手の上で転がされている。

そして次に兄から発せられた言葉は、そんな自分の惨めな現状を表すにふさわしいものだった。

「なんだ、ついに俺の嫁になる女が見つかったのか？」

「……………」

その唇から放たれた絶妙な低音は、これまでどれだけの女性たちを虜にしてきたのだろうか。

端正な顔立ちにきらめく金色の髪、左目の下には泣き黒子がそれを助長している。

甘いマスクは王宮で『黄薔薇の君』の呼称を持つ。

貴族の女性から絶大な支持を集めているこの男は、自分が王宮に帰るたびに、どこからかそれを聞きつけこうして待ち伏せしているのだ。

そんな兄と自分は、髪と全体的な顔のパーツはよく似ている…と言われる。

だが、唯一自分と似ても似つかない点は、その瞳だった。
兄のそれは、エメラルドのような翠色をしている。

……あるいは普通の貴族であれば、なんと言われるでもなくただの綺麗な色として受け入れられただろう。

だが、その色は王族としては致命的でもあった。

そう兄は王族としては魔力が少ない。

一般の魔法使いには十分なれる程度だが、連綿と続く王族の系譜の中ではそれはあまりにも微力だった。

代々王族ではマリア王妃と同じ“紫の瞳”を持つか否かで、その存在価値が決まるといっても過言ではない。

いつのまにそんな暗黙の了解ができてしまったのかは知らないが、今は同順位の貴族でさえ魔力の強い者とそうでない者に位の格差が出るのだから、ある意味必然なのだろう。

“聖女の系譜”の証でもある紫の瞳は、その神聖な価値を持って、この300年王家の権威に多大な影響を与えてきた。

だが数百年の時が過ぎたことによりその血も薄まり、遺伝を受ける者も少なくなってきた。

その事実には王家も少しずつ焦り始めていている。

だから……自分は学校に入れられた。

花嫁を探すために。それも自分のではない。兄の花嫁を、だ。

それは魔力の高い者が伴侶となれば、その子どもに聖女の瞳が発言する可能性が高くなるという理由からだった。

それだけでも馬鹿馬鹿しいが、それ以上に馬鹿馬鹿しいのは、本来第二王子である自分がそんなことをする必要はない、ということ

だ。

王太子の花嫁ならわざわざ自分が探しに行かなくても、あちらから立候補してくる。

現に今も兄のもとへは各国の王族・貴族から次々と縁談が舞い込んでいるはずだ。

もっとも噂ではその全てを断っているようだが。

ともかく花嫁探しなんてものはほとんど口実のようなもので、この人をおちよくるのが好きな兄の命令で、自分は4年間も学校に通うはめになった。

13歳の春に「よお、レストお前ちよつと学校行つて来い。俺の花嫁探しに」と言われた時の衝撃は忘れられない。まるで近くまでおつかいに行かせるような軽さで言われた時は、何の冗談かと思った。

だが……不思議なもので、今ではむしろあの学校の寮こそが自分の帰る場所のように思っている。

クラスの人間のやかましさには辟易しているが、それ以外は王宮に比べれば随分過ごしやすい場所でもあった。

それだけは、目の前にいる兄に感謝している。

「……違います。少し調べたいことができたので」

「なんだ違うのか？ 報告では強い魔力の転校生が現れたとか」

（すでにそんなことまで伝わっているのか）

さすが、王太子直属の密偵といったところか。

だが、この様子ではまだ容姿についての報告はあがっていないの
だろう。

おそらくあの使い魔のせいだろうが。

「……平民出身のがさつな女です。兄上に見合うような女ではありませんよ。それでは失礼します」

嘘だった。

平民出身なのは本当だったが、少なくとも容姿は王宮で見たどんな貴族の女性よりも勝っていた。

自分自身クラスメイトの噂話を聞いても、最初は全く興味が湧かなかった。

もちろん事前情報から古代魔法を使えることは知っていた。

だが、いくらなんでもこの誰ともわからない平民の女を王太子妃にできるわけがないし、なにより兄への反抗から卒業するまで絶対に花嫁など見つけるものか、という意地があった。

でもあの瞬間……急にクラスが静まり返った違和感にふと顔をあげた時。紫の瞳に囚われた時から、どうしても視線が外せなくなっ
た。

男のような口調は、逆に孤高な存在としての気位を感じさせた。
つやめく黒髪は高価な黒曜石のようだった。

そして何より

幼いころから寝物語で聞かされた聖女様の話。
その聖女様と同じ瞳と名前をもつ美しい少女。

そんな存在が目の前にいて、驚かないはずがなかった。

あの時の自分はきつとひどい顔をしていただろう。クラスの間全員が少女に注目していたことから、誰にも見られていないだろうことが唯一の救いだ。

ともかくあの少女は平民であることを除けば、これ以上ないほど王太子妃にふさわしい人材であった。

むしろその平民という位が最後の砦だ。

あの滅多にない紫の瞳と魔力量は、王族のみならず貴族にとっても格好の餌である。

彼女に対する罪悪感と、聖女への畏敬からあの場はごまかしたが……いつまで隠せるかはわからない。

そして、その存在を知った時の兄の対応も現時点では予想がつかなかった。

一方で王宮の古狸たちの行動は簡単に予想できる。

きつと自分達のところに囲おうとするだろう。

だが、学校は中立地帯であるし、おそらくライルの庇護もあるから、こちらもしばらくは大丈夫だろう。

それでも

「やつかいだな……」

あの稀有な少女の存在は、もしかしたら王位継承問題にまで関わってくるかもしれない。

古狸達の中に、自分を王にしようとしている派閥がいることも知っている。

王家としての権威を何よりも重要視する、権威至上主義の集まり

だ。

たしかに紫の瞳を持つことから、魔力については自分が勝っている。

その上この顔だ。

300年前の賢王にそっくりの容貌から自分も賢王になるのでは、というよくわからない推論をする輩は大勢いる。

だが、それ以外の……王としての資質は明らかに兄の方が上だった。

現にこれまでも紫以外の瞳を持った賢王は存在した。

自分を推す馬鹿どもはその点を全くわかっていない。

外面と内面、どちらを重要視するのか。

その意味で、あの少女はこの問題に一石を投じることになるかもしれない。

……できることならこの醜い争いには、関わってほしくなかった。

おそらく巻き込まれれば彼女も自分同様、人間性を顧みられることはなくなる。

それは何よりもつらいことだと知っている。

同じ苦しみを増やしたくはなかった。

(……自分はなぜここにいます)

それは物心ついたときからずっと考えてきた疑問だった。

本当に笑えてくる。このアストレイ国王に似た忌々しい顔も魔力も、そして地位さえも何一つ自分で望み手に入れたものではない。むしろその全てが自分の人格を否定しているようにしか思えなかった。

この王宮に自分の居場所などあるのか。

宝物庫への道を進みながら、レストは終わりのない思考のスパイラルに陥っていった。

一方去っていく弟の姿を眺めたこの国の王太子は、誰もいない空間で一人満足そうな表情をしていた。

「あれは何か隠しているな。まったく、可愛くない奴め…いや、だからこそ可愛いのか。……………なあ、そう思わないか？」

顎に手をかけて、近くの柱の影に声をかける。

すると誰もいないと思われた空間から、すぐに質問とは違う答えが返ってくる。

「ギルネシア様……そろそろ」

「わかっている。久々の弟いじりは終いだ。政務に戻るぞ」

そう言い、一転王太子としての仮面を張り付ける。

その雰囲気も先ほど弟の相手をしていた時とは全く違っていた。鋭いまなざしと厳格な雰囲気は、この王宮で長年暮らしていくうちに身に着けざるを得なかったものだ。

そうして廊下を歩きながら、日課となっている報告を受ける。

「本日の報告ですが……第二王子につけていた護衛が眠らされておりました」

「ほう……誰の仕業だ？」

「それが、誰もその姿を見ていないとか……気付いた時には眠っていた、とのこと。かなりの実力の持ち主でしょう。ですが……御覧の通り、第二王子には何の怪我也なかったようですね」

「ふむ、やるな……調査してみるか」

「……いい加減その過保護やめませんか？ レストシア王子もいい歳なんですから」

それまで事務的に受け答えをしていた近衛は、ここにきてようやく人間らしい発言をした。

それもかなり切実に。

「……だが、王族として護衛は必要だろうか？」

「学園は中立地帯ですし安全ですよ。教師には上級魔法士も多いですし、なによりフラスト様がいるでしょう。あなたが担任に推薦したんじゃないかったですか？」

「……だが」

近衛歴7年目になる男は、主である王太子の性格を熟知していた。ここで一気に勝負を仕掛ける。

「あんまりしつこくすると嫌われますよ。今回も命を狙った犯行ではないですし、おそらく聞かれたくない会話があったでしょう。どうか、これ以上ストーリーカーをするのはお止めください」

いまだ不満そうな顔をする主にはこの「嫌われる」という言葉が
なにより効いた。

……最も既に嫌われていることに気付いてないのが残念なところだ
が。

「む……仕方ない。たしかにレストもお年頃だしな。兄には知られ
たくないこともでてくるだろう。しばらくは我慢しよう」

「……それでも“しばらくは”なんですね」

もはやため息しかでない。

この兄弟はいろんな意味で温度差がひどすぎる。
すれ違いもここまでいくと天晴れだ。

ただ、毎日「今日のレストシア王子は」……という報告をしなけれ
ばならない自分達の身にもなってほしい……それは近衛部隊全員の
切実な思いだった。

第7話「王宮」（後書き）

そんな感じでストーリーカーその2、第一王子の登場でした。
個人的には近衛のにーちゃんが好きです。

しかし急いで書いたので、変な表現とかないか心配です（汗）
あったらぜひ教えてください。

あとここまできて思ったのが「若い女の子が書きたい！」でした。
物語の進行上仕方ないとは言え、あまりにも女の子の登場が少な
ぎた！
なのでその欲望を叶えるためにも次回からは若い娘を出していきま
す！

それではこれからもよろしくお願いします。

第8話「不可思議な朝食」

部屋のドアを開けた瞬間、その人物と目が合った。

どうやら向かいの部屋の住人も、ちょうどドアを開けたところだったらしく、自分と同じように取っ手に手をかけたまま固まっている。

薄紫の瞳は驚きで見開かれ、その金色の髪は朝の陽光を受けて、まるで光の精霊のような輝きを放っていた。

「……………」
「……………」

…なんとも気まずい沈黙が流れる。

双方一言も話さないまま見つめ合う姿は、傍から見たらどう映るのだろうか。

妹と同じ瞳と数秒向かいあった後、そつと溜息をつく。

（朝から運がいいのか悪いのか）

教室で会ったら昨日のことを詫びようと思っていたが……まさかこんなに早く遭遇するとは思っていなかった。

なにはともあれ、この重苦しい沈黙をどうにかせねばならない。あまり心の準備はできてなかったが、とりあえず何かを話しかけようとする。

しかし、口を開こうとした瞬間、新たな第三者に邪魔をされるこ

とになった。

「あ、お前昨日の!？」

自分の後ろからひょっこり出てきたキラが、その人物を指さす。

……これは後で人を指さしてはいけないと教えなければならない。
相手が王子ならなおさらだ。

指さされたレストシア王子は、キラの登場に益々驚愕したようだが、それをきっかけによりやく呪縛が解けたようだった。

彼は気まずげに視線を逸らしながら告げてきた。

「……その、昨日は悪かった、な」

……まさか、あちらから謝罪の言葉が出るとは思っていなかった。
昨日とは一変して、王族らしくないその殊勝な対応について動揺してしまう。

「い、いや、こちらこそ。いきなり倒れて申し訳なかった」

「ご主人様が謝る必要なんてないですよ!全部こいつの、あぶ」

昨日と同じく、慌ててその口を塞ぐ。

キラは何かを言いたげに私を見上げてくるが、せっかく円滑に事が進んでいるのだ。ここでわざわざ再燃させるのは得策ではない。

一方王子は、わずかにその形のいい眉根を寄せたが……それ以外にキラの言動には気にするそぶりを見せずに話を続けた。

「指輪のことも悪かった。城で調べたところ、マリア王妃の指輪は

ちゃんと宝物庫に保管されていた。おそらくきさ…君のはレプリカかなにかだろう。随分と精巧なレプリカだとは思うが……その、身体はもう大丈夫か？」

呼び方が“貴様”から“君”にレベルアップしたことも含めて、どうやらいつのまにか懸けられていた“王妃の指輪盗難容疑”は晴れたようだった。

気付かない間にとんでもなく危ない橋を渡っていたことに驚愕する。

その一方で“レプリカ”の指輪についてうまく説明するため、朝から頭を働かせることになった。

「ああ、昨日は少し体調が悪くてな。心配をかけてすまない。……この指輪はある人の形見なんだ。詳しくは知らないが、王宮の関係者だったようだ。おそらくその伝手で作られたものだろう。その、やはり王宮に提出したほうがいいのか？」

「いや……本来ならあまり褒められたことではないが、昨日の詫びもかねてその指輪については不問に処そう。もとより王家に深い関わりがある者以外は、あの指輪の存在は知らないしな」

「そうか……ならよかった」

「……………」

「……………」

そこで会話が途切れる。話題がなくなったせいでもあるが……それ以上に、この場に流れる殺伐とした雰囲気のせいでもあった。そして、その原因は今私が口を押さえている相棒にある。

キラが先ほどから殺気の籠った視線で王子を睨みつけているのだ。王子はその視線を受け止め……いや、むしろ対抗するように毅然とした態度で相手を見下ろしている。

二人の間には見えない火花が散っているようで……正直非常にいたたまれない。

（一体昨日何があったんだ？）

自分が気を失っている間に、この二人に何があったのか……訊きたいような訊きたくないような。

まあ、キラはもともと人嫌いであるし、特に王族・貴族には厳しい方でもあるのだが。

いや、そんなことを考える前に、まずはこの状況をなんとかしなければいけない。一触即発の両者を仲裁できるのは今のところ自分だけなのだ。

そうして死の静寂が場を支配する中、意を決して言葉を紡ごうとした瞬間……本日二度目となる妨害（この場合はむしろ救援？）が入った。

「……あー、そこでガン飛ばしあっている御兩人。そろそろ行かないと朝飯食いつぶされるぜ？」

いつから見ていたのか。2つ隣の部屋の壁にもたれながら、ライルが呆れたようにこちらを眺めていた。

(……なぜこんなことに)

正面に座るご機嫌顔と、その隣の不機嫌顔をチラリと一瞥する。そして自分の隣は先ほどから一心不乱に菓子パンを食べる相棒の姿がある。

目の前にはおいしそうな朝食があるが……いまいち食欲が湧かないのはやはり先ほどから流れるこのなんともいえない微妙な空気のせいだろう。

そう、あの後なぜかライルも交えて4人で朝食をとることになったのだ。

寮の一階にある食堂は数百人を収容できるつくりとなっているが、やはり朝のこの時間は人で溢れかえっていた。

もっとも、なぜか自分達の周りだけ人が寄ってこないが……それでも視線だけはやけに感じるのが嫌なところだ。

人からの視線には慣れているつもりだったが、これほど多くの同年代の視線に晒されたのは初めてだ。きっと王子や公爵家の長男がいるせいだとは思うが、さっきとは違う意味で落ち着かない。

この刺すような無数の視線の針で全身に穴を開けられては、食欲がなくなるのも、口数が少なくなるのも自然な流れだろう。

「……………」

「おいおい。お前ら付き合いたてのカップルでももう少し……いや、俺は認めないけどな」

よくわからない例えを出しながらライルが言葉を発する。内容は

ともかく、その発言のおかげで張りつめていた空気が少し弛緩した気がする。

おそらく普段からこういつた視線には、慣れているのだろう。特に気にする様子も見せず、普段通り話す姿はある意味尊敬に値する。

その幼馴染の言葉に触発されたのか……おそらく誰よりもこういつた視線と長く付き合ってきた人物が会話をつなぐ。

「何の話だ……そういえば、自己紹介が遅れたな。私はレストシア・クライス・ハインレンスだ。レストと呼んでくれて構わない」

（王子を呼び捨てにしているのか？）

そんな疑問を持ったが……どうせ今の自分にはなんのしがらみもないのだ。既に王家に媚びへつらう理由もなくなったし、なにより本人がいいというのならいいのだろう。

その言葉を素直に受け取ることにした。

「ああ、よろしくレスト。アリア・セレスティだ。私もアリアでいい」

だがそう言った途端、レストはなぜか微妙な顔をして黙ってしまった。

「……どうしたんだ？」

その理由がわからず率直に質問すると、正面に座るライルが顔を近づけそつと耳打ちをしてきた。

「ほら、いつか言っただろ。聖女に過度の妄想抱いてる奴がいるってそれがこいつ。きつと『聖女様と同じ名前を呼び捨てになんて……』とか思ってたんだろ」

「……ライル聞こえてるぞ」

レストが睨みつけてはくるものの、その頬はかすかに赤く染まっている。

どうやら凶星のようだ。

（なんて難儀な）

まさか王家の人間から、聖女として崇められる日がくるとは思わなかった。

第二王子のこの様子では、いまや王家の人間といえども300年前の真実は知らないと考えていいのだろうか……だとすれば正直複雑な気分だ。

もし私がそうだと言ったら……聖女なんて本当は虚像に過ぎないと知ったら、一体どんな感想が飛び出るのだろうか。

現時点ではありえない未来だが、多少興味が湧いた。

「まあ、名前が嫌なら苗字で呼べばいいさ。あとこっちはキラ。アリアの使い魔だ」

思考に没頭する自分に代り、ライルが相棒のことを紹介してくれる。その先にはプリンなるデザートに夢中になっているキラがいた。

「こいつ、昨日となにか雰囲気が……まさか、二重人格か？」

レストが呟いた言葉は、幸か不幸か他の二人には聞こえなかった。しかし、言われた本人の優れた聴覚にはしっかりと届いたようで、ピクッと反応したキラは、プリンを咀嚼しながらすさまじい殺気を放つ。

その瞬間、食堂にいる全ての人間の動作が、ピタリと止まる。今まで感じたことのない殺気に、本能で危機を察したのだった。

「こら、キラ！ いきなり殺気をだすな！ 他の人が驚くだろう」

「はい」

軽い返事とともにキレイに殺気を仕舞うキラと、殺気に竦むどころか逆に叱る女主の態度に、男2人は冷や汗をかきながら密かに憧憬の念を抱いた。

ちなみに4人（正確には3人と1匹）が仲良く？食事をとっている風景を見た学生たちは、昨日出回った『王家と公爵家の幼馴染対決、泥沼の三角関係』という噂は嘘のようだと推測した。

しかし、最後に放たれたものすごい殺気に、今度は『黒髪の美少年が参戦！？まさかの四角関係！？』という噂が流れることになる。

そのことを、この時の4人はまだ知らない。

第8話「不思議な朝食」（後書き）

す、すいません。

若い女の子出せませんでした（泣）

じ、次回こそは…

第9話「ともだち」

朝食の後、3人そろって教室に行くと（キラは自由行動）、既に登校していたクラスメイト達はギョツとした顔でこちらを振り向いた。

無理もないだろう……この組み合わせはどう考えてもおかしいと思う。

第二王子と公爵家の長男はまだいいとして、どうして昨日来ばかりの転校生がその隣にいるのか。自分でも正直謎だ。

「アリアの席はここ。今日からよろしくな！」

「セレスティ、わからないことがあつたら遠慮なく訊くといい」

「ああ、二人ともありがとう。よろしく頼む」

レストは結局私を苗字で呼ぶことに、決めたらしい。

本当に聖女を意識しているのかと思うと、それはそれで複雑な気分だったが……この際別人のことだとも思って開き直るしかない。

クラスメイトの視線が突き刺さる中、指定された席に向かう。

どうやら私の席は窓際の後ろから4番目、ライルのひとつ前らしい。その隣、つまり自分の斜め右後ろには、レストがいる。

すぐ外には薄紅の花を散らす巨大なユスラの木。

そして少し離れたところに学園の正門が悠々とそびえ立っている。眺めもよく、なかなかいい席みたいだ。

「やあ！」

唐突に聞こえたその声に振り返ると、自分達を遠巻きに眺めているクラスメイトの中から、ひとりの青年が両手を広げてこちらに歩み寄ってくる。

その青年は、少し垂れ目な茶色の瞳を細めながら、喜色満面な表情で軽やかに登場してきた。癖っ毛気味な金髪は肩より少し長い程度で、後ろで一本にまとめられている。

そのまま颯爽と自分の目の前まで来ると、彼は膝をついて、左手を胸に右手をこちらに差し出す謎のポーズをとった。

「君が来るのを待ってたよ！ 僕はフィリック・ダン・リンメル！」

そのしぐさは、どこかの三文芝居のようで……はるか昔に読んだ物語の中の王子の求愛シーンにそっくりだった。

おそらく真面目な顔をしていればそこそこの美男といえないこともないが……その限りなく軽い雰囲気と、救いようのない言動の数々が全てを台無しにしている。

「ああ、やっぱり近くで見ても美しい！ その瞳、伝説に詠われた聖女様のようだ！ 君の美しさの前では月さえも霞むだろう！ どうかこの愚かな僕に――」

……それ以上は脳が聞くことを拒否したので、省略する。

ともかく彼のマシンガントークはとどまることを知らなかった。

「素晴ら……花の……とき……！！……夢の……！！……この……至上の……！！……！！……」

いまだ理解の範疇を超えた美辞麗句が滝のように流れているようだが……ここまで来るといつそ感心する。形容詞の語彙が豊富でうらやましい限りだ。

惜しむらくは、周りの女子の冷たい視線に気づいていない点だろうか。

……なんだか気の毒になってきた。

しかも

（このどうしようもなく軽い感じ。どこかで見覚えがあるような）

頭をひねる私の姿に何か勘違いしたのか、ライルが咎めるように青年の名を呼ぶ。

「おい、フィル！ いい加減にしろよ、アリアが困ってるだろ！」

「いやあ、だつていつの間にか王子とも仲良くなってるしさあ。結局昨日の真相もわかんねえし。それに今日は新しく黒髪の美少年もライバルに加わったって話だぜ！ 恋人がいるのに既にこの競争率……俺も出遅れちゃいけないだろ?!」

「何わけのわかんないこと言ってるんだよ。しかも『僕』とか気持ち悪い一人称使いやがって」

「よけいなこと言うな！ ああ、アリアちゃん勘違いしないでくれ。いつもはもつと優雅で品行方正なんだよ！ それにしても本当に綺麗だなあ……そうだ！ 今度君のために詩をつくってもいいかな！？」

先ほどと同じく途中までは完全に流したが、最後の一言で忌々しい記憶が蘇った。

(……ああ、ようやく思い出した。“あれ”に似ているんだ)

ようやく合点がいった。

そして意味を深く考えるまでもなく、思ったままのことを口にする。

「お前、変態か」

「へっ？」

そう、彼はあの聖女の詩を作った変態伯爵にそっくりだった。

顔はそうでもないが……この無駄に軽く、無駄に馴れ馴れしい感じは、奴の性格を継承しているようにしか思えない。

もしかしたらどこかで血でもつながっているのかもしれない。

そう考えると……なんだか今度は憐れに思えてきた。

そのままかわいそうなものでも見るように、変態青年、ないしフィリックを観察すると、彼は腕を差し出した状態のまま石像のようにピシリと固まっていた。

おかしいな反応を不審に思い、他に目をやると……ライルは机をバンバン叩いて爆笑している。見ればレストも口を押さえて下を向いたまま肩を震わせていた。

「確か、に、間違つて、は、いない……ぶは、なあ、レスト？」

息も切れ切れになりながら、ライルが同意を求めるように隣を振

り仰ぐ。

「くくつ……ああ、女と見れば見境なく声をかける奴だ。変態に違いない」

「変態……生まれて初めて言われた」

フィリックは両手について頂垂れている。なぜか放心状態に陥っているようだ。

そこまでおかしなことを言っただつもりはなかったが。

(……………まあいいか)

あまり気にしないことにした。

そういえば『春になるとおかしな人が増えるから気をつけなさい』と、昔誰かに教わった気がする。きっとその類なのだろう。

そんな周りは放っておいて、まずは念願だった自分専用の席に座る。

そして我慢しきれず机にほつぺたをくつつけて、その感触を楽しむ。

真新しい匂いとひんやりとした温度がひどく気持ちよかった。うつとりするようにそのままそつと目を閉じる。

今日から（正確には昨日からだつたが）私は学生なのだ。

まさかこんな日がやってくるとは、夢にも思わなかった。300年前は、毎日が生きるか死ぬかの戦いで、未来はもちろん明日のことさえわからない日々が当たり前だった。

そんな日々を過ごしてきた自分が、今日からこの学園で生徒として過ごしていく……なんとも数奇な運命だ。つい目を閉じたまま苦笑してしまう。

（今の私は完全におかしな人に見えるだろうな）

しかし、わかっていても止められそうにない。

数奇な運命……今は、それも案外悪くないと思えてしまったから。

「あ、あの」

……この怪しい状態の自分に声をかけるとは、なかなか肝が据わっている。

今度は誰だと思いながら、閉じていた目を開けると……自分の前の席に座っている赤毛の少女が恐る恐るといった様子でこちらを見ていた。

先ほどの青年に比べると、本人には悪いが随分地味な印象がある。肩より少し長めのふわふわの赤毛。その青い瞳は、今は不安そうに揺れている。

ローブの下に着ている服もこの貴族だらけのクラスにしては、質素、な気がした。

だが、その垢ぬけてない雰囲気、むしろ私には親しみやすかった。

「あなた、平民よね？ ミドルネームがないし」

「ああ、そうだが……？」

その途端少女はパツと顔を綻ばせた。それは野に咲く花のように素朴で、可憐な笑みだった。自分にはないその可愛い表情に、一瞬うらやましいという感情がちらつく。

「よかった、私もなの！ このクラスには他に平民出身がいなくて……」

どうやらこの少女はこの貴族ばかりのクラスで唯一の平民らしい。

（私と同じ異端分子か）

王城の中で過ごしてきた苦い記憶を思い出す。貴族ばかりの中で過ごす苦しみは、誰よりも知っているつもりだ。

今の私はライルという後見がついている点で恵まれている。キラという相棒もいるし、レストも…なんだかんだでよくしてもらっていると思う。

でもこの少女にはそんな知り合いはいないのだろう。それが普通だ。

きつと苦勞してきたのだろう。過去の自分と重なる平民の少女に、親近感と庇護欲が湧くのも当然だった。

「そうなのか、大変だったな。アリア・セレスティだ。平民同士これからよろしく頼む」

「ええ！ 私はミア・グレンよ。よろしくねアリア！」

本当にうれしそうに話すその様子は、よっぽど肩身の狭い思いを

してきたに違いない。

その笑顔を見て、これからは自分が彼女を支えていこうと心に誓った。

「ところでアリア。王子様達と仲が良いようだけど……なにかあったの？その、昨日も倒れたって聞いたし」

「ああ、それはレストのせいじゃないんだ。昨日は、ちょっと体調が悪くてな……まあ、話してみればいいやつらだぞ。平民だからといって差別はしない」

「そうなの？ でもやっぱり恐れ多くて。それに私アリアほど美人じゃないし……」

「美人？ ミアの方がずっとかわいいと思うが？ なんなら今度あいつらと一緒に御飯でも食べるか？」

「……もしかして無自覚？」

最後の問いかけには答えることなく一人ぶつぶつ呟くミアは、やがて何かを決心したようにこぶしを固めた。

小さい声だったが、聞き間違えでなければ、「私が守ってあげなくちゃ」とつぶやいた気がする。

（いや、守るのは私の役目では？）

そう思い一人で納得しているミアに、おそろおそろ話しかける。

「あの、ミア？」

「……え、ええ、そうね。今度、頑張つて話しかけてみる。ふふ、でもよかった。このクラスで初めての友達ができたわ」

「……………とも、だち？」

それまで考えていたことを全て吹き飛ばす威力が、その一言にはあった。

その4文字をかみしめる。300年前、願うことすら叶わなかったものだ。

それが今手に入った、のだろうか？

正直あまり実感は湧かない。

(…………でも、案外そんなものかもしれないな)

そうは思いながら、さっきとは違う意味で口が孤の形になっている自覚があった。

「おはよう諸君。よし、出席とるぞー」

ちようどよく担任のフラスト先生が入室してきたおかげで自分の変な顔…泣き笑いのような顔をミアに見られることがなくてよかったと思う。

「じゃあホームルーム始まるから」と前を向いたミアの背をじっと見つめた後、しばらく目を閉じた。

そつして心を落ち着かせて、今度は後ろの席のライルを振り返る。

「…………ライル」

「ん、なんだ？」

頬杖をつきながら、満足そうな顔でこちらを見ているライルと目を合わせる。

どうしても今、伝えたいことがあった。

「初めて“ともだち”ができた」

その言葉を聞いたライルは、どこか意外そうな表情をした後、ふつとやさしく微笑んだ。

それは我が子が初めて何かを成し遂げた時の親のような、慈愛に満ちた頬笑みだった。

その笑みに後押しされるように、今抱いている素直な気持ちを言葉にのせて伝える。

「その……ここに連れてきてくれて、本当にありがとう。ライルに会えてよかったよ」

「……………すごい殺し文句だな」

「ん？ 何か言ったか？」

「……………いんや。でもさ、ひとつ言っただい」

急に真面目な顔になった彼が、少し前のめりになってこちらを覗きこむ。

若草色の瞳がいつもより真剣で、少しどきりとする。

「あ、ああ」

そうしてライルは、少し拗ねたように……でもどこか楽しそうにその“確認”をしてきた。

「俺は既に友達のもりだったんだけど？」

その言葉に一瞬ポカンとする。だがすぐにその意味を理解して……

（まいった……私の完敗だな）

本当に人間相手の自分は弱い。

たったこれだけの言葉でこんなにも心揺さぶられるのだから。

私の様子を見て“してやったり”という顔をしているライルに、“答え”を返す。

「……………そうだな。“ともだち”第一号はライルだ。」

「うむ、わかればよろしい」

偉そう胸を張るその姿に思わず笑ってしまふ。

そして、そんな自分自身に驚いた。

（こんなに、心から笑える日がくるなんて……）

この時代に目覚めてから、本当に驚きと喜びの連続だ。だが、こんな日常も悪くない……と思う。

「次、朝からいちやこらしているアリア・セレスティ」

生まれて初めての出席確認は、なんとも不名誉な呼ばれ方だった。

でも、今はそれさえもうれしくて仕方ない。ただこの場にいることが……生きていることがうれしかった。

「はい！」

「お、随分いきのいい返事だな。……よし、全員いるな。じゃあ、ホームルーム始めるぞー」

その担任の声を合図に、生徒たちはいつも通りおしゃべりをやめて、話を聞く体制にうつる。

ただいつもと少し違うのは、窓際の後ろから4番目の席に関心が向いてしまうことだ。

……だが、その少女もいずれクラスの一員としてあたりまえの存在となる。

開けた窓からユスラの花びらがそつと舞いこんでくる。

ひらりとアリアの机に着地した薄紅色の花は、まるで彼女の門出を祝福しているようだった。

第9話「ともだち」（後書き）

ようやく出せた女の子！

でもまだまだ少ないですよー。

これからもちよいちよい増やしていきたいと思ってます。

さて、なんやかんやで3章はここで終了です。

ようやく物語の導入部分が終わった感じですかね。

4章からはファンタジーらしく、魔法がバンバン？出てくる予定です。

ここまで読んでいただいた皆様には最大級の感謝を。

そして、これからもよろしくお願いします。

ではでは。

4章 第1話「目標」

「じゃあ、また後でね」

「ああ、昼食でな」

ここ……ハインレンス王立魔法学園に入学してから2週間がたった。

今はちょうど1限目が終わったところで、この後は選択授業が待ち構えている。

私は精霊魔法、ミアは神聖魔法の授業を受けるためそれぞれの教室に移動しなければならない。

「アリア、あの人には気をつけてね。あと、知らない人についていっちゃだめよ」

「わかってるよ。ほら、もう授業始まるぞ」

「あ、ほんとだ！急がなくなっちゃ」

そう言っただけで慌てて駆けていく友人の後ろ姿を、苦笑まじりに見送る。

心配してくれるのはありがたいのだが、あの幼子にするような注意はなんとかならないものだろうか……まるでキラが二人になったようだ。

……キラといえど、数日前に引き合わせた時、ミアとキラはすぐに意気投合していた。

よくは知らないが、どうやらお互いうまがあつたらしい。

こちらを意味ありげに見ながら「2人で頑張りましょう！」と、堅く手を握り合っていたのが謎だったが……まあ、仲がいに越したことはないので、あまり気にしてない。

そのキラも最近は何かと忙しいらしく、昼間はあまり見かけなくなってきた。

私の期待していた通り、何か暇つぶしになるものでも見つけたのかもしれない。

それは自体は別にいいのだが……問題は何をしているのか訊いても、はぐらかしてばかりで答えてくれないことだ。

「遊び相手が見つかったんです」とは話してくれたものの、肝心の相手については、全く情報がない。

「世話になってるようだから、私も一言あいさつでもした方がいいのでは」と提案しても、やはり首を縦に振ってはくれなかった。

モジモジしながらも決して口を割らないその様子に、『もしかしたら一緒に悪いことでもしてるんじゃないか』と心配になり、一度はミアに相談したほどだ。

返ってきた答えは、「え、えーと、そう！ キラ君もそういうお年頃なのよ！ 時には主人のもとを離れて自由を満喫したいんじゃないかしら？！ やっぱり使い魔にだってプライベートは必要よ！ アリアもそう思うでしょ？！」というものだった。

勢いに押されて「あ、ああ」と頷いてしまったが……なんだか誤魔化された気分だった。

どうやらミアも何をしているのか知っているようだったし、少しだけ疎外感を感じた。

……でも、ミアの言葉も一理ある。

毎日私の世話ばかりでは、きつとキラも疲れる。

ここは主として何も聞かないでおくのが、正しい道なのかもしれない。

(…………でもやっぱり気になる)

らしくないとは思いながらも、(一応)保護者として心配するの
が、親心？というもの。押すべきか……それとも引くべきか。究極
の二拓を選ばなければならない。

「むう」

「……って、聞いてますの Aria さん!？」

…………まったく聞いてなかった。

思考に夢中になっていたせいか、話しかけられていたことにすら
気づいてなかった。

顎に手を当てた状態のまま、声のした方を振り向く。

振り向いた先には、特徴的な灰銀の髪が視界いっぱいに広がって
いる。

薄紅の瞳が想像以上に間近にあって、かなり驚いた。

(…………厄介なのに捕まってしまった)

昨今の悩みの種が、そこにいた。

急いで逃げ道を探すが……やはり、そうそううまくは見つからない。

退避は不可能。迎撃……は無理そうなので、こうなれば守備を固めるしかほかない。

「……なんだローズ」

「ですから、精霊魔法の講義と一緒に受けて差し上げててもよろしくてよ、と先ほどから言ってるんです！ まだ慣れていないあなたのために、特別にわたくしが手ほどきしてあげますわ！」

両手を腰に当てて、貴族らしく尊大な態度で“提案”をしてきた少女の前で、気付かれないようそつと溜息をつく。

（……やはり苦手だ）

ミアからも注意を受けていたが……ローズマリア・ランシィ・ベルドット。

最近やたらと話しかけてくる名門ベルドット公爵家の長女であり、話し方からもわかるとおり生粋のお嬢様だ。

ミアもクラスに入ってからずつとこういう風に話しかけられていて、対応に困っていたらしいが。

ローズは腰辺りまで伸ばしているウェーブのかかった灰銀の髪と、薄紅色の勝気な瞳が印象的な少女だ。

なにやら自分の名前の由来にもなったマリア王妃と同じ？ 灰銀色の髪が自慢らしいが……私から言わせれば、その髪色はむしろ魔王シヴァにそっくりだった。さすがにそれは言えなかったが……

そのせいもあってか……最初の自己紹介では「どうぞマリアと呼

んでくださいな」と言われたが、次の瞬間には「わかった。よろしくたのむ、ローズ」と反射的に答えていた。

たとえ別人でも妹と同じ名前で呼ぶ気にはなれなかったのが一番の理由だったが、「あなたもですの!？」という反応から、他の人間もローズと呼んでいることが発覚する。

……どうやらあまりにも『癒しの王妃』といわれた人物とイメージが異なるため、皆そちらを呼ぶらしい。

ある意味うらやましい話だ。

私なんか嫌がおうにもあの『聖女』と同じ名前で呼ばれるのだから。

「さあ、まいりましょう!」

返事をしてないのに勝手に歩き出すローズの背を見て、もう一度気付かれないように溜息をこぼす…本当に、貴族というのは自由気ままである。

「ふむ、全員おるかのぉ? では講義を始めようか」

精霊魔法を教える“爺先生”ことパウル老が、いつもどおりほのぼのしたオーラを出しながら、講義を始める。

その心地よい声を聞きながら、この数日で習ったことを頭の中で復習する。

……この学園に来てから2週間、過去とのギャップに戸惑うことも多かったが、おおよそ基本的な魔法の知識も手に入った。

やはり当初想定していた通り、人の持つ魔力は随分と減少しているようだった。

歴史学の授業で習ったことだが、主な原因は280年ほど前に起きた王都の大火事らしい。

なかなか興味深い話ではある……ただ、あの授業は担当のケイン先生がやけにちゃらんぼらんで、いまいち信憑性に欠けるのが難点だ。

どこまでが歴史の真実で、どこからが彼の想像なのか……その境目がいまいちわからなかった。

まあ、とりあえず今はこの時代に慣れることを優先しようとは思っているが、いつか暇ができれば自分で調べてみたい事ではある。

ともかく、そのような経緯もあつて今の時代の人々の魔力量は、300年前のそれよりかなり低くなっている。

だが、魔力が少なくなつた代りに、人はその優秀な頭を使って、300年でまた違った方向に魔法を発展させていた。

いくつもの実験を積み重ねた結果、手間はかかるが、少ない魔力で一定の威力を発動できる魔法を生み出したのだ。

それは魔法の分類についてもそうだが、発現方法についてもだった。

詠唱、魔法陣、その他媒介となる道具を使ったやり方などそのバリエーションは豊富だ。

そうして、集大成としてこれら現代の魔法体系が生まれた。

【基本魔法】……六大属性を扱う属性魔法と、無属性魔法に分類される。

六大属性は光・闇・火・水・風・土のことで、生徒たちはこのうち一つないし、二つの属性を自分の専門分野として専攻する。

無属性はそれ以外のもので、補助的な作用をもたらすものが多い。

ちなみにレベルは、初級（基礎）、中級、上級とあり、それぞれ学園のクラスに対応している形になる。

【神聖魔法】……神に祈ることによって奇跡を起こす魔法：らしい。ライルが愛馬に使ったのがこの魔法で、300年前には普及していなかった魔法でもある。特に治癒に特化したものが多く、この国のほとんど全ての魔法使いが使えるらしい。

……ちなみに私は全く使えなかった。
だからこそ選択授業では、精霊魔法を取るしか道がなかったのだ
が。

教科担任のグナイド教諭からは「信仰心が足りんだ！」とお叱りを受けたが、全くもってそのとおりだ。

自分は神などこれっぽっちも信じていないし、これからも信じるつもりはない。

だから「一生使える気がしません」と開き直ってみたのだが……
どうやらその答えがお気に召さなかったらしい。

いまだグナイド教諭には、会うたびにありがたい神のなんちゃら物語を聞かされている。正直疲れる。

その他にも使い魔契約を結ぶための召喚魔法、そして今はほとんど使い手のいない古代魔法などがある。こちらは呼び方は変わったが、その概念は昔とほとんど変わっていないかった。

あえていうなら、やはり使い魔は一人一匹という制限ができていたことくらいだ。

その理由は、わからないままだが。

ちなみに私が300年前使っていた魔法のほとんどは、今は古代魔法として希少な魔法となっていた。

例えば、飛行魔法はぎりぎりまだ使い手がいるらしいが、転位魔

法に関しては、使い手はおろか実際可能なかどうか、という存在自体が危ぶまれるものになっている。

下手に試すと身体の一部だけ転位してしまう、という恐ろしい噂のせいで誰もやろうとする人間がいらないらしい。

「 じゃからして、精霊は常にわしらを見ているとともに 」

パウル老の穏やかな声が教室に響く。

今講義を受けている【精霊魔法】も、昔とほとんど同じ認識をされている魔法の一つだ。

精霊魔法は自然界の魔力が凝縮して意思もったかたち、精霊を使役する魔法…と一応教科書には書いてある。

ただ、私から言わせてもらえば、地界の精霊は話せないのだからからお願いするだけで、決して使役するものではないのだ。

現に傲慢に命令してくる人間に、精霊は力を貸さない。

パウル老の講義では、この点を特に重視して教えている。これは通説を改めている良い点だと思う。

ちなみに私の場合は、力を借りたらそれに見合うだけの魔力を対価として与えているのだが……一般的には意志の力一つで行使できるものとされている。

……そして、頼み方以外のもう一つの条件として、精霊魔法を使うには精霊に好かれなければならない、というのがあった。

これは一種の才能のようなもので、生まれつき持っている魔力の質に係るものらしいが…それについては現代でも説明されていない。

ただ、精霊に好かれるような純粋な心も必要だ、とはよく言われている。

（だからこの娘も悪い人間ではないはずなのだが……）

「さっきから何をジロジロ見ているんですの？」

「……いや、別に」

隣に座るローズがいぶかしげな顔をしている。

気まづくなつて視線をそらすと、少し離れた席に座っているレストが、「前を見る」といったジェスチャーをしていることに気付いた。

レストとローズは今年から精霊魔法の講義を受けることになったらしいが、そのほかのライル、ミア、フィルは去年に引き続き神聖魔法の講義を受けている。

こればかりは運のようなものだろう。

そして前方の教卓に顔を向けると、パウル老がにこやかにほほ笑んでいた。

穏やかでありながら、強制力を伴った笑みだった。

……この講義はそもそも受ける人数が少なく、全学年でも20人程度しかない。だからおしゃべりをする就非常に目立つのだ。

「ほおっほお、ちょうどいい。では、ちよいと実践してもらおうかのお……ベルドット君」

「は、はい！」

急にあてられたローズは、少し驚きながらもその場でピシッと起立した。

「君は火の属性だったの。精霊に呼びかけてみなさい」

「は、い」

緊張気味の彼女は、少し戸惑いながらも言葉に魔力をのせて精霊を呼ぶ。

【いらっしゃい】

しかし、確かに火の精霊が集まって教室が少し温かくなった気がするが……本当に微々たるものだった。

(……なにかおかしいな)

失礼かもしれないが、意外にも呼びかけの仕方に問題はなかった。よく一方的に命令して、精霊からそっぽを向かれることもあるのだが……そういう場合の反応とは少し違う。

どう言えいいのかわからないが、何か、“つまっている”という表現が一番近い気がする。

ただ、それ以上のことは私にもわからなかった。

パウル老もそれを感じたようで、釈然としない顔でローズの周りを観察していた。

だがやはり、原因はわからないようだった。

「ふむう、いまいち集まりが悪いのお」

「す、すいません」

悔しげに唇を噛みしめるローズに、パウル老は優しく語りかける。

「なに、謝ることではない。初めての呼びかけじゃし、これから少しずつ慣れていけばよい。次は、セレスティ君。君は火と闇だったの。では、闇の精霊に呼びかけてみなさい」

「……はい」

正直あまりやりたくなかったが、指名されておきながら「できません」で終わらせることはできない。なによりローズの手前もある。

クラス中の視線が突き刺さる中、『必要最小限でいいから』と念じながら、小声で“彼ら”に呼びかける。

【……………おいで】

その瞬間、教室は闇に呑まれた。

いきなり真っ暗になった教室内で、生徒たちは当然のようにパニックに陥る。

「いて！ 誰か俺の足踏んだろ！？」、「ちょ、誰よ今私のお尻触ったの！？」という苦情の数々が、あちらこちらから聞こえる。

(……………やっぱりだめか。すまん)

心の中でそつと謝罪する。

なんとなくこうなるだろうとは予想していたが……不可抗力とはいえ、やはり自分にも責任はある。

最近私の周りには常に何かしらの精霊、特に火と闇の精霊がこつ

そり張り付いている。

どうやら私が目覚めたことを知ったらしい精霊たちが、呼ばれるのを今か今かと待っていて……ずっとスタンバイしているのだ。

きつとこれのせいだとは感じながら、来てくれた精霊たちにはいつものように魔力を渡す。

『わーい、ありがとう』とでも言っているように大はしゃぎしている精霊の姿に、喜ばいいのか、悲しめばいいのか……

「こ、これはすごいのお……しかし、ちと呼びすぎではないかのお。これでは逆に危ないの……これ、皆落ち着きなさい」

真つ暗闇の中、パウロ老のしわがれた声が教室内に響いた。

「すみません」

（また言われてしまった）

目下の問題はこれだ。

“やりすぎ”は、なにも精霊魔法に限った話ではない。

現代の普通の魔法を使っても、その威力が一般的なものの数倍になってしまうのだ。

例えば、この前など蠟燭に火をつけるつもりが、それを置いていた机ごと一瞬で蒸発させてしまった。

300年前は気付かなかったが、どうやら私は、細かい作業が苦手らしい。

ライルは「強いほうがカッコいいじゃん」とか言って慰めてくれたが……つまりはコントロールができていない証拠だった。

それをこの2週間でまじまじと見せつけられた。

どうにも現代でいうところの古代魔法に慣れてしまっているせい
か、一発の魔法に込める魔力の量が異常に大きくなってしまっただ
だからたとい発動はできても、その後の微調整ができない。

私は現代人にならず古代魔法を発動させるコントロールはあっても、
発動させた後の、本当の意味でコントロールを持っていなかった。

これは職業魔法士として生きていくには、ある意味致命的な弱点
でもある。

なぜなら魔物が少なくなっている現代の依頼では、より緻密な魔
法コントロールが求められることが多いからだ。

周りを気にすることなく、全力で魔法をぶっ放せばよかったあの
頃とは違う。

現代で生きていくためにも、繊細な魔法コントロールを身につけ
る。

これが今の私の目標だった。

（やはり、これからはコントロールの時代だな）

未だ周りが騒がしい中、アリアは一人腕を組んでうんうん頷く。

そうして、またしても思考の渦に沈んだ彼女は気付かなかった。

「どうして、ですの……」

隣から聞こえてくる、絶望にも似たその声に。

4章 第1話「目標」（後書き）

今回サブタイトル思いつかなかった（汗）

そんなわけで、やっと4章突入しました！

プライベートで忙しかったのも、ようやく終わりそうなので、これからは、もうちょっと早く更新していきたいなあと思っています。

第2話「いつもの朝食」

「ローズの元気がない？」

「ああ。というより、以前に比べて話しかけてこなくなったといえ
ばいいのか……だから、その、何かあったのかと思ってな」

そう、ここ数日あのローズマリア・ランシー・ベルドットからの攻
(口)撃がパツタリと止んでいるのだ。

今までが騒がしかったせいか……その格差にどうにも調子がずれて
しまう。

あの毎日のように響く甲高い声に慣れてしまうと、今の静かな生活
は何か物足りなく思えてしまうのだ。

どちらかといえば鬱陶しく感じていたはずなのに……人間とは思
議な生き物である。

そういう理由から今や日課となっている朝食の席で、こうして昔か
ら彼女を知っているライルに相談してみることにしたのだ。

「うーん、そう言われてみれば、確かに最近妙に物静かだよな。だ
けど、ローズに元気がないなんて、ハンバーグに肉が入ってないく
らいの珍事だぜ……ちなみに、それっていつ頃からなんだ？」

唸るライルは本当に不思議そうに頭をひねっている。どうやら幼馴
染の彼にとっても非常に珍しい事態らしい。

『それハンバーグって言わないんじゃない？』という突っ込みはさてお
き、とりあえずここ最近の記憶を探ってみる。

「たしか……精霊魔法の講義を受けたあたりから、か？ うまく精霊を呼べてなかったが。まあ、初めてだし普通だとは思うがな」

「ああ、あの時か……そのあとは、セレスティが精霊を呼びすぎて大変だったな」

レストが一週間前の光景を思い出すように、しみじみと語った。確かにあの後、暗闇が晴れると教室のあちこちがぐちゃぐちゃになっており、片付けるのが非常に大変だった。

「うぐ、すまない」

レストは学校一の魔力保持者であると同時に、その他の分野でも常にトップを誇る秀才でもある。その彼に注意されては、反論の“は”の字も出せないのが当然だろう。

そんな自分達のやりとりを眺めながら、ライルが難しい顔のまま口を開いた。

「精霊魔法ね。もしかしたら、あいつ……」

「何か心当たりがあるのか？」

「ああ。ほら、ローズって上級クラスでは珍しく一つの属性しか使えないだろ？ それが昔からあいつの悩みでさ」

「そう言われてみればたしかにそうだが……」

確かにローズはこのクラスでは珍しく火の属性一つしか持っていない。

平民のミアでさえ土と闇の二属性を持ち、その他ではライルが風と火、レストは光と水、フィルは水と土、と見事に全員ばらついている。

しかし、それと今の話がどう繋がるのかがよくわからなかった。

自分の頭の上にある疑問符に気付いたのか、ライルが話を続ける。

「まあ、とは言っても属性ばかりは自分の力じゃどうしようもないじゃん？ だから、ローズはせめて火属性関連については、誰よりもうまくなろうと昔から躍起になってるんだよ」

「……ああ、なるほどな」

いかにも彼女らしいものの考え方だった。

「それにほら、この前アリアがすごい火属性魔法を使っただろう？」

「あの机を数秒で灰に変えたやつか？」

レストがああ精霊魔法の少し前に行われた授業のことをぶり返す。
こちらが私のとっては耳の痛い話だった。

「そう。それ以来、俄然やる気を出してさあ。今まで火属性の魔法はローズが一番だったからなあ。しかも、アリアは闇属性も持っているから、余計にライバル心燃やしているんだよ」

「そ、そうだったのか……だからあんなにしつこく話しかけてきたのか」

そして、あの微妙に喧嘩腰の態度もそのせいだったのか。私の苦笑

いを見たレストも、それに同意するように頷いた。

「私も彼女は少し苦手だ。他の女子ほどではないが、会うと何かとしつこい」

「レストは女全般が苦手なだけだろ。まあローズは……いや、なんでもねーや」

何かをいいかけたライルは「俺が言っていることじゃないよな」と呟いて、そこで押し黙ってしまった。

そう、確かにレストはクラスの子を避けている。

何やら結婚がどうこう言っていたが……まあ、私にはあまり関係なさそうだったので、そこは聞き流した。

ただ一つ言えるのは、貴族の世界というのは、本当に複雑怪奇だということだ。

だがそういった事情とは無関係に、最近の彼は、私とミアという平民二人と話をするちよつと変わった王子になっている。

ちなみにミアがこの場にいないのは、彼女が自宅通いの生徒だからだ。

……ともかく、そのせいかは知らないが、私たちにはクラスの間人間が話しかけてこない。

もっともこのメンバーと、ローズ、そしてフィルは例外だが。

王子が話しかけているからか、それともやはり平民だからか。理由はわからないが、一部の人は、なにやらそわそわしながらこちらをよく見ており、その一方で逆にびくびくしているグループもある。

後者は主に女子が多いのだが、どちらにせよ話しかけてくることはない……全くもって謎だった。

「あー、でもやっぱりアリアもそう感じていたのかー」

それまで黙っていたライルが、両手を頭の後ろで組んで天井を仰ぎながらぼつりと呟いた。

「どつという意味だ？」

聞こえているとは思わなかったのか……少しづつが悪そうに頬をポリポリ掻きながら、彼は言葉を続ける。

「あー、あいつさ、誤解されやすいんだ。なんてゆうかな……うん、いわゆるツンデレってやつかな」

「“つんでれ”？」

また新しい言葉だった。

最近こういった語彙が増えるのが、楽しみの一つでもある。

300年前にはなかった言葉を使うと、自分がこの時代できちんと生きている気になるのだ。

「そう、自分の気持ちをうまく表現できないんだよ」

「ふむ……」

（なるほど、ああいうのを“つんでれ”というのだな）

ローズの姿を思い出す。なんとなく意味もわかったところで、さっ

そく今度使ってみようと密かに心に決めた。

「まあ、アリアに声をかけているのは、何もライバル心からだけじゃない、ってことさ」

「……よくわからない」

では何のために話しかけてきているのか……今までこんな経験がなかったせい、ローズが何を考えているのか全く理解できなかった。

「そのうち気付くさ」とライルは笑いながら言うが、どうにも気になって仕方なかった。

だから、隣でさっきからアンパンに夢中になっている第三者に、一応意見を求めることにした。

「キラはどう思う？」

「ふわにがでふくわ？」

「こら、口に物を入れたまま話すな。ローズのことだ」

頬がパンパンになるほどアンパンを詰め込んでいたキラは、ごくんと喉を鳴らして、ようやくそれを呑みこんだ。

ただでさえ大きな皿に、山のように盛っていたアンパンは、私たちの会話の間にすべてキラの胃の中に収まったらしい。

しかも、それらを完食したにもかかわらず、その目はいまだ新たな獲物（甘いもの）を狙う狩人だった。

この小さな身体のどこにそんなに入るのか……いや、そんなことよりも朝からこの量はどう考えても食べすぎである。

そういえば、この前リボン先生から“糖尿病”なる恐ろしい病気に
ついて教えてもらったばかりだ。

神族にまで当てはまるのかは謎だったが、そもそも普通の神族はい
くら好物だからといって、ここまで人間の食べ物を食べたりはし
ないものである。

……もしかしたら、既にどこかに異常が出ているのかもかもしれな
い。

（やはりそろそろ食事制限をさせるべきか）

そんな私の恐ろしい思惑など知る由もないキラは、甘いものを探し
て目を光らせながら質問に答える。

「ああ、あの人は大丈夫ですよ。僕が保証します」

きっぱり言い切るその態度に疑問が生じるのは、当然といえば当然
だった。

（そういえば、ライルの時もこんな会話をしたな。あの時は確か…）

「……もしかして勘か？」

胡乱な目で問いかければ、キラは不思議そうに首をかしげた。

「違いますけど」

「そうか、なら安心だ」

「なんでえ！？」

それはもちろんキラの勘の場合、そのほとんどが、かなりの高確率で外れるからである。

そして、珍獣でも見るような目つきでキラの方を向いていたレストがその後続いた。

「まあ、私も彼女は悪い人間ではないと思っている。現に公爵家の長女として、王宮での評判はいい。それに、あの家は特に貧民層の支援に力を入れているから、国民からの信望も厚いしな」

「うちもそこそこ頑張ってるつもりだけど？」

「ああ、そうだな。デイレイド公爵家も多額の資金提供と人出を割いている。この二大公爵家を筆頭に今、わが国では貧民層の生活環境の改善や、浮浪者の削減に力を入れているところだ」

「それでも、なかなかうまくはいかないもんだけだなー」

ライルは何かを思い出すように、遠いところを見つめている。きっと私が初めて王都を訪れた時のこと。あの時の浮浪者のことを考えているのだろう。

「そうだったのか……」

なんだか意外なところから、意外な話を聞いた感じだった。こつこつと話を聞くと、300年前はどうしても好きになれなかったこの国も、少しだけ好きになれそうな気がする。

300年前の貴族といえど国民の税金を食い物にし、その全てを自らの保身と娯楽に費やしていたものだ。奴隷制度についても三度の

飯だけは保証されるが、そこに自由は一切存在しない。本当に、ただ人形のように言われたことだけをして生きているだけだ。

（そう考えると、これも皮肉な話……なのかな）

奴隷制度を推奨した第一人者でもあり、私を地獄にたたき落としたあの極悪宰相と馬鹿王……の子孫であるライルとレストが、今度は弱者のために骨身を削っている。

時代が変われば人も変わる。わかつてはいても、やはり時々違和感を感じるものだ。

唯一この気持ちを共有できる相手といえば、おそらくキラ一人だろう。

そのキラはといえば

「っ貴様！ それは私のだぞー！！」

「ふん、よそ見してるのが悪いんだよー」

会話を取られた腹いせか、それともただ喰い意地が悪いだけか……レストのデザートを奪ってあっかんべーをしていた。

二人の和やかな？ 攻防戦を見ていると、なんだか真面目に考えていたのが馬鹿らしくなってくる。

「ライル。これも“つんでれ”か？」

「……………ちよつと、違う…かな」

どうやら微妙に違うらしい。“つんでれ”はなかなか奥が深いよう

だ。

しかし、この二人…口では罵り合っているものも、なんだかんだで最近仲がいいと思える。

結局レストが「くっ……今回だけだから」と言っけてキラにデザー
トを譲ったのがいい例だ。

（喧嘩するほど仲がいい、というやつか？）

やはりキラの主としては、喜ぶべきことだろう。

その一方で少しだけ妬けたのは、ここだけの秘密だ。

「…セレスティ。使い魔のしつけはしっかりして……どうしてそんなにうれしそうな顔をしている？」

「ん？ ああ。仲が良くてうらやましい、と思ってな」

「「違う（います）」」

「「ぴったりじゃないか（じゃん）」」

私とライルの声も重なり、4人がお互い顔を見合わせる。

ライルが笑いだしたのを皮切りに、全員がそれぞれの笑みを見せる
…もちろん私も。

それ以降は、笑いが絶えることはなかった。

第2話「いつもの朝食」(後書き)

ぎりぎりアウトですかね(汗)

明日にはもう1話投稿しようかと思っています。

第3話「誤解」

朝食を終え、キラと別れ、いつものように三人で教室まで行き、席に座ってカバンを開く。

ここまでは、いつもと同じ朝の日課である。

だが、そこからはいつもと違っていた。

開いたカバンの中に、あるべき存在が入ってなかったのだ。

…そういえば昨日はミアが部屋に遊びに来て、いつもやっている次の日の準備をすっかり忘れていた。

壁際に掛けられている時計に目を向ける。朝のホームルームまで、まだ時間はたっぷりあった。

「ちょっと忘れ物をしたから、部屋まで取りに行ってくる」

「いつてらー」

「時間はあるからゆっくり行って来ればいい」

そしてライルとレストの声を後に、部屋まで最短距離をのんびりと歩き始める。

それは数日前ライルが寝坊した際に、三人で走ったルートだ。

（あんなに走ったのは、魔王との決戦以来だったな）

あの時の必死さを思い出して、つい一人で笑ってしまう。今となっ
てはいい思い出だ。

…そうして、がさがさと庭を突っ切っている途中、偶然その光景を

目撃した。

【おいでなさい】

人気がない庭の隅で、唐突に凜とした声が響く。

（魔力の気配……あれは……ローズ？）

どうやら精霊魔法の練習をしているようだった。

今朝の話題の人物に早速遭遇するとは、運がいいのか悪いのか……

魔力をのせた言の葉に願いを込め、ローズは目を閉じ祈るように精霊を呼ぶ。

その横顔は真剣そのものだったが……残念ながら、結果はこの前の授業と同じだった。

（やっぱり……何かおかしい）

授業で見た時もそうだったが、精霊たちの動きが普通ではなかった。どんな作用が働いているのかまではわからないが、ともかくあれでは精霊魔法とはいえない。

ちなみに地界の精霊たちの姿というのは、彼らと長い（私の場合は深い）付き合いをしていると自然と見えてくるものだと言われている。ただ、この学校では精霊魔法の使い手自体が少ないのもあって、彼らをぼんやりとでも視認できるのは、私やパウル老を含めて数人だ。

ローズはまだ目では見えないものの、その感触で失敗を感じたのか……崩れ落ちるように地面に座り込み、そのまま草を強く握りしめた。

「どうして、できないの……私にはこれしかないのに……！」

「……………」

貴族らしい綺麗な指によって引き抜かれた草が、パラパラと地面に散らばる。

……その姿は妙に印象的で、目に焼き付いて離れなかった。

そのまま声をかけずに教室に戻ったものの、結局その日の授業には全然集中できなかった。

右斜め前に座るローズの背中が、過去の自分と、何か同じものを背負っている気がしたのだ。

「さて……うまくいくな」

放課後、寮の敷地の片隅で、周囲に空間を遮断する結界を張り準備する。

彼女は地界に呼ぶだけでも相応の魔力を必要とする存在だ。

だから魔力が足りるかどうかが一番の問題だが……この3週間でまだ少し魔力が回復している。おそらくぎりぎり呼べるはずだ。

意識を集中させ、この前の授業で勝手に拝借した魔力を底上げする魔石（効果は微々たるものだが）を片手に、ヴィシア式魔術を発動する。

【ヴィル・ミクン・ゾルギア・ギユイ・フレイランス（来たれ 灼熱の乙女 炎の祝福を 今我が手に）】

ポツと、小さな炎が空中に現れ、それを合図に地界にいる火の精霊が集まってくる。彼らの女王を迎えるためだ。

炎は徐々にその勢いを増し、自分と同じくらいの背丈にまで成長した時点で、段々と人の姿を形作る。その周りでは火の精霊たちが情熱的に舞い踊り、心なしか周囲の温度も上昇してきた気がする。

そして……宙に現れたのは炎の化身。その圧倒的な存在感に周囲の空気が震える。

見た目でいえば18、19歳くらいだろうか……気の強そうなつり上がった臙脂色の瞳、深紅の髪は一つに結びあげられ、背中には炎の翼と、全身赤尽くしの女性だ。

外見こそ若いが、その圧倒的な美貌と古風な鎧を纏う姿は、まさしく戦女神と呼ぶにふさわしい威厳と自信に満ち溢れていた。

集結した火の精霊たちは、おおそ300年ぶりに凱旋した女王の姿に狂喜乱舞している。

そう、彼女は聖獣・神族以外の天界に住む最後の存在であり、属性の頂点に立って天界を統べる者。

それぞれの土地を統括している6大精霊の一角、火の大精霊だった。

「遅い！！ 一体何百年待たせる気！？」

「……………第一声がそれが、フレイア」

さて、何から話そうかと思案していたのに、どうやら無駄骨に終わったようだ。

それにしても……腰に手を当て上空からこちらを睨みつけるその姿は、ひどくご立腹の様子である。

「あたりまえでしょ！ あんたが魔王とやり合って死んだって聞いた時は、本当にびっくりしたわ！！ どうしてあの時呼ばなかったのよ！？ 私たち全員殺る気満々で準備していたのに！！！」

話しているうちにヒートアップしてきたのか……背中の翼もその火力を増し、周囲の温度もうなぎ上りに上昇中だ。
なにせいつもは勇猛果敢な火の精霊たちでさえ、女王の癪癢に若干距離を置き始めているほどだった。
腰が引けてしまうのを誰が責められようか。

しかも

（殺る気満々で準備って……）

なんだか恐ろしい言葉を聞いてしまった。

大精霊たちが殺る気満々で準備？ ……想像できてしまうのが逆に怖い。

……だが、ここで引き下がるわけにはいかなかった。

「あれは人間と魔族の対決だ。精霊は中立の存在だろ？ いくらなんでも巻き込むことはできない」

そう、天界にも地界にも存在する精霊は、古くから中立の存在としてその地位を確立してきた。だから最後の最後で彼らの力を借りないのは、自分なりのけじめでもあったのだ。

なにより……最後の魔王との戦いは、いくら大精霊といえどもその存在が危ぶまれるほど激しい戦いになることが予想された。

最悪死ぬのは自分一人で十分、という思いもどこかにあったのは事実だ。

「嘘つきなさい、死にたがっていたくせに！ おかしいと思ったの

よね『今まで世話になった』とか急に言うから！ 理由を聞こうとしたら強制的に還されるし！！ 私たちがどんな気持ちであんたの訃報を聞いたと思ってるの！？ まったく、その強情な性格どうにかしなさいよね！ それにね、はるか昔 はともかく、少なくとも魔族は300年前から精霊も喰うようになっていたわ！ つまり私たちの仇敵よ！ ついでにいうと私たちだって格下の聖獣や神族に手柄を取られちゃ天界で立つ瀬がないの！！ おわかり！？」

「あ、ああ……」

ものすごい勢いで捲し立てられ、つい頷いてしまう。

それにしても、まさかそんなところまで知られているとは思ってもみなかった。

“死にたがっていた”……確かにそうだ。あの時の私は早く罪の呪縛から逃げたくて、死という自由を密かに求め続けていた。大精霊に助力を求めなかったのも、それを止められることを危惧していたのかもしれない。

……こうして言われて、初めて気付く。

300年前の私は、こうやって残される者の気持ちなど全く考えていなかった。

（アスト王子……マリア……）

あの二人は私が死んだと知った時、少しは悲しんでくれただろうか。答えてくれる声はなくても、確かめる術がなくても……それでも、思わずにはいらなかった。

「……にしても、本当に生きてるとはね。チビどもから聞いた時は、眉唾物だと思っていたけど……一体何があったのよ？」

「ん？ ああ、実は……」

少しクールダウンしたフレイアに、簡単にこれまでの経緯を伝える。

「へー、そんな偶然もあるのねー。まあ、私たちにとっては好都合だからいいけど。……ああそうだ。闇以外のやつらが荒れてるわよ。あんたが火と闇以外の精霊を呼ばないし、魔法も使わないから。まあ、私は火だからそれでもかまわないんだけどね。そんなわけで天界じゃ今、大精霊同士が大ゲンカ中よ。さっきも水の奴と一戦かましてきたばかりなんだから」

そんな戦いが勃発しているとは知らなかった。

……もし、大精霊の中でも最も気の短いフレイアを省いていたら、天界が大惨事になっていたかもしれない。その点だけは幸運だろう。ただ、もう一人気性の荒いことで有名な風の大精霊の存在が気がかりだった。

寡黙だが心の優しい闇の大精霊が餌食になってないか……少し心配だ。

「ま、まあ、ほどほどにな。私の方はそういう設定だからどうしようもないんだが……そうだ、できればあまり大勢でこないでほしいと配下の精霊に言っておいてくれないか？ どうにも威力が強すぎるな……」

「それはしょうがないじゃない。あんたと久しぶりに会えてチビたちも喜んでんのよ。あれでもあんたに限っては、ちゃんと順番待ちしてるのよ？ みんなあんたの魔力よ……じゃなくてあんたに会いたくて仕方ないのよ。……ていうか魔力少くない！？」

(……結局魔力目当てか?)

今度から精霊との付き合い方を見直すべきか……悩むところだ。

「……魔力は、封印の影響で少なくなっているんだ。そのうち元に戻るさ」

「それは良かったわ! あんたの魔力本当においしいのよねー! 一度あれをもらうと、もう他のところにはいけないわー……ところで、その極上の魔力をもらっているあんたのこの使い魔はまだあいさつにこないのね」

獲物を狙うハンターのような目つきであたりを見回すフレイア……キラがこの場にいらなくて正解だったかもしれない。

「あー、正式な契約を結んでないから、魔力をあげているわけではないのだが……まあ、ちょっとした用事を頼んでいるんだ」

本当はただ大精霊に会ったのが嫌らしく、毎回逃げているのだが……理由はよくわからない。

天界に帰りたいがらないこととなにか関係あるのかもしれないが……とりあえずこれ以上追及されないためにも、話題を変えることにする。

「……えーと、契約といえば、今は一人につき一匹だけらしいな。いつの間にそんなルールが決まったんだ?」

「ああ、それね。あんたが例の封印をしてからすぐよ。人間が魔族との戦いのために馬鹿みたいに呼ぶから、こっちで規制かけること

にしたの。ついでに、よく知らないけどある時期から複数の使い魔を呼べるほどの資質を持った人間が異常に少なくなってるね。なんか人間も私たちみたいに属性決まってきたらしいし……まあ、自然な流れでそうだったのよ」

「そうだったのか……じゃあ、本題なんだが」

「今さら！？ もう、仕方ないわね。なんなのよ？」

私自身もすっかり忘れていたが、今回フレリアを呼び出したのは彼女に起こっている不可思議な現象について訊くためだった。

「ああ、ある少女についてなんだ……」

そして、ローズの精霊魔法について今までの状況も含めて説明する。フレリアは話を聞くにつれて、その顔をニヤニヤしたものへと変えていき、最後には握りこぶしを口の前でつくって、意味ありげにこちらを見てきた。隠された口元は孤の形をえがいているに違いない。

「ふーん」

「なんだその反応は？」

「いいえ、あんたもようやく他人に興味を持つようになったと思ってるね」

「……………悪いか？」

少し気恥ずかしくなり、視線を逸らしながら言い返す。

「いいえ、むしろいいことよ。私たちもあんたの無頓着具合にはやきもきしてたのよ。興味を持つてことは、それだけ現世に執着を持つてこと。そして、それが生きる原動力につながるのよ」

「そうか……そうだな」

やはり随分と心配をかけていたらしい。

今まで心配をかけた分、これからは彼女たちを裏切らないように前を向いて生きていこう。

「大丈夫だ。もう自分から死に行くような真似はしないと誓おう……それで、どうなんだ？」

「例の子ね。さっき調べさせたわ。あんたほどじゃないけど、なかおもしろい子よ」

「“おもしろい”とは？」

「ええ、つまりその子はね……」

「火の精霊に愛されているんだ」

「……どういう意味ですの？」

翌日、昨日と同じ所で練習をしていたローズに話しかけた。彼女は唐突に現れた私に、最初は不信感を抱いたようだが、話が精霊のことだとわかると、その表情はすぐに真剣なものへと変わった。

「ローズの魔力とその気性は火の精霊たちと相性がいい……というより良すぎるんだ。だからローズが呼び掛けると、彼らは一斉に集まる。そうすると、狭い入口に精霊たちが殺到しすぎて“つまっている”状態になってしまふんだ。それがうまく精霊が集まらなかった……というより、そういう風に見えていた原因だ」

そう、実際精霊は集まっていたのだ。ただ、一つの場所に集まりすぎて重なって見えていただけである。彼らはもとはつきりとした形を持っているわけでもないの、気付かなくても無理はなかった。

どうやらローズの激しい？気性は、火の精霊のお気に入りらしい。

「そう、でしたの……では、どうすればよろしいのですか？」

「今までは周囲にいる精霊全てに呼びかけていただろう？ それをやめて、まずはある一定方向だけに呼びかけてみればいい。そうすれば許容量オーバーで入口がつかまることもなくなる」

「一定方向……」

「本当は入口を広く作って、集結した精霊を自分の周囲に均等に拡散させるのが一番なんだが……これは慣れてないと難しい。まあ、普通はそれが必要になるほど精霊は集まらないものなんだ……そうらは、おいおい慣れていけばいいさ」

そう、精霊魔法は確かに精霊の力を借りる魔法ではあるが、実はその効力は全て術者を經由して現れている。術者が魔力をのせた言葉で呼びかけ、精霊はそれを目印に集まる。その時、実際精霊がその力を発揮するには、術者が無意識に展開している魔力の通り道を経由する必要があるのだ。

実際は精霊たちが勝手に通って行くので、ほとんどの魔法使いはそれを意識する必要がない。ただし、今回のように異常な数の精霊が集まる時は、どうしてもその入り口を広げるための訓練をしなければならなくなる。教科書にはのっていない知識だ。

これは、よくよく考えれば、自分も昔一度通った道であつた。

今でこそ無意識に入り口を広げているが、最初の頃は今のローズよりひどい状態で、精霊魔法の才能がないとさえ思っていたほどだったのだ。

その時は、実はいろんな属性の精霊が狭い入口に一齐に集まって、つまると同時にそれぞれの効力を相殺していたらしい……それも300年前大精霊を召喚して初めて知ったことである。

ともかく、そう考えると、ローズの苦労もよくわかるものだった。

「それと、ここまで好かれる人間は、なかなかいないらしいぞ。入口を広げるコツさえ掴めば精霊使いとしては、かなり上位を狙えるそうだ」

なんといつでも火の大精霊のお墨付きである。つまりローズは、普通魔法も含め、火属性のエキスパートになれる将来有望な魔法使いということだ。

ちなみに「じゃあ私はどうなんだ？」とフレイアに訊いてみれば、「あんたはただでさえ、精霊に好かれてるのに、極上の魔力までくれるから、ホントいいカモ……じゃなくていい魔法使いよ。まあ、なんたつて大精霊の私たちまで呼べるんだからよっぽどよね」という、いろんな意味でシヨックを受ける回答をもらった。

私の話を聞いたローズは、半信半疑なのか顎に手をやりながら、「

一定方向…入口…広げる…」など一つ一つを確かめるように呟く。

「……ところで、どうしてそんなことを知っているんですの？」

「あー、それは私も昔同じ状態だったからだ。今は改善してるがな」

「……でもこの前は精霊の呼びすぎで怒られていませんでした？
あれは入り口を広げすぎているのではないんですの？」

痛い所を突かれた。

「うつ…そ、それはだな。入口を広げるのはできるんだが、狭めるのが苦手だな……どうにも変な所で不器用らしい」

そもそも今までは狭める必要性がなかったという理由もある。

それに、例え狭めることができたとしても、せっかく来てくれた精霊を玄関先で追い返すというのは、どうにも良心が痛むのだ。

さらにいえばライルを助けた時に力を借りた火の精霊たち……彼らにも後日きつちり魔力をあげたのだが……そこから私の目覚めと、
「おいしい魔力がもらえる」という噂が精霊たちの間に浸透しているらしく、現在も順番待ちをして呼ばれるのを今か今かと待っているらしい。なんと頭の痛い話だ。

じゃあ、魔力を渡すのを止めれば少しは改善されるのではないか、という話なのだが……300年前からの習慣であり、また”借りたら返す”という私の信条もあって、そちらもできなかった。

こちらはいろいろと情けなさ過ぎて、ローズにはとても話せなかった事情である。

「ぶつ、なんですかそれは……変な人ですわね」

私の苦しい言い訳は、どうやらローズのツボに入っただけ。あんまりにも笑うものだから、私も少しムツとして言い返す。

「そうは言うが、ローズも十分変な人間だと思うぞ。貴族のくせして平民にやたら構うし、そのくせ言ってくることは貴族らしい尊大なことばかりだしな。一体何がしたいのかさっぱりわからん」

もつなるようになれと思い、今まで思っていたこと素直にを暴露する。

だが……てつきり怒ると思っていたローズの反応は、ある意味予想外のものだった。

「そ、そういう風に思われていたのですか?!」

彼女はショックだと言わんばかりに、狼狽した表情を見せる。

「……無自覚だったのか?」

「え、ええ」

……どうやら私たちの間には何か誤解があるらしい。

(“言われて初めて気付くこともある”か……)

昨日の自分がいい例だった。

「そうだったのか…じゃあ、正直に言わせてもらっぞ」

そこからは二人で授業をサボり、お互いの心情を暴露し合った上で、

ローズの訓練を手伝った。

腹を割って話さなければわからないこともある……生まれて初めてそれを知った日だった。

そして、もう一つ思ったことは……300年前も、もっとアスト王子やマリアと話しておけばよかった、ということだ。

彼等との間に誤解があったかはわからないが、きつとお互い言い残した言葉があったはずだ。こうして死んでしまっただけは何も伝えることはできない。

たとえアスト王子に拒否されても、マリアに恨まれていても、それでも勇気を持って話せば良かった。

(……もしあの時に戻れたら)

そうして、ローズと散りゆくユスラの花を見つめ、変えることのできない過去に思いを馳せるのだった。

第3話「誤解」（後書き）

そんな感じでローズと和解しました。

個性あふれる大精霊は、これからもちよこちよこと登場していく予定です。

次はミア視点が入る……かな？

第4話「和解」(前書き)

更新遅くなってめっちゃすみません(滝汗)

実は風邪にやられまして……久しぶりにひくと悲惨ですね。

皆さんもお気をつけください。

今回は予告通りミア視点です。

ちょっと長いかもしれませんが。

第4話「和解」

「じゃあね、ミアちゃん」

「うん、バイバイ」

最近、こうやってクラスの子ともあいさつを交わせるようになった。これまでは、あの公爵家のお嬢様のお気に入り？として認識されていたらしく、そのせいで声をかけづらかった……って聞いた。

ベルドット公爵家といえば国内でも最上位の家格。しかも、その一人娘が、かのローズマリア様。

顰蹙を買うような真似をすれば、自分の家にどんな影響が出るかわからない……そんな理由から、彼女にからまれる？私を“かわいいそんな平民”と憐れみながらも遠巻きに眺めていたらしい。

そわそわしながらよくこつちを見ていたから、いったい何だろうって不思議だったんだけど……まさかそんな事情があったなんて。貴族も案外大変なのね。

そんな彼らのそわそわが解消された理由は、もちろん件の公爵令嬢様にある。

この頃のローズマリア様は、ちょっとお変わりになられた気がする。

前は（相手が身分差に萎縮していたせいもあるけど）一方的にまくしたてる感じだったんだけど、最近は随分と落ち着かれて、なんていうか……思慮深くなられている。

そのせいもあってか、ある日を境に私にも前ほど話しかけてこなくなった。

時々何かを言いたげに私の方を見てくるんだけど、結局何も言わないままその日が終わる、っていうパターンがここ数日続いてたりする。

ものすごく気になるけど、こっちから話を振るのもなあ、と思って私も何も言えず……時間だけが経過しているのが今の現状。

でも、そんな経緯もあって、ここ数週間はクラスに来るのも嫌じゃなくなってきた。

最初の頃、アリアが転校してくる前は、本当毎日が憂鬱で仕方なかった。

平民は一人だし、友達はできないし、公爵令嬢様はしつこいし……そんな不平不満の数々を発散する場もなく、ただひたすらこの特異体質を恨んでいた気がする。

自分で選んだ道なのにね……これも、若気の至りってやつかな。

そもそも平民の私が、貴族だらけの上級クラスに進学できた最大の要因は、この特異体質にあった。

それは成長とともに徐々に魔力が増えていく体質。

普通の人は生まれた時から魔力量が決まっているものだけど、数万人に一人の確率で私のような身体の成長に合わせて魔力量が変動する人間が現れる。原因はわかっていないらしい。

私の場合、ここに入学した時は上級クラスにあがれるほどの魔力はなかったけど、初級クラスを卒業して中級クラスへの進学時、この特異体質が判明した。

そして、中級クラスを卒業する時量ってみると、ぎりぎり上級クラスににあがれるまで、魔力は増えていたってわけ。

それでも最初は行くかどうかすごく迷った。

上級クラスはいわば貴族のクラスだし、私以外で上級クラスにあがれる平民はいないとも聞いていたから。

でも上級クラスを卒業すれば、職業魔法士としての道は確実に開ける。

そうやって魔法士になって得たお金があれば、弟たちにちゃんとした教育をさせてあげることができる……それが決め手だった。

私の家には、母とまだ幼い4人の弟たちがいる。

父が数年前に死んで、母はその分家事をしながらも、私たちのために毎日汗水たらして一生懸命働いている。

私自身もアルバイトはしているけど、やっぱりそれだけじゃ足りないし、日々の生活を送るだけで精一杯だ。

かわいい弟たちの将来のためにも、私は立派な就職先を手に入れなきゃいけない。

だから、2年我慢すれば……という思いで上級クラスへの進級を決めた。

でも、やっぱり現実は甘くなかった。

なんでか知らないけど、来て早々公爵令嬢様に目をつけられ、付きまといわれる日々が続いたのが、その何よりの原因。

嫌みにしか思えないどうでもいいことを報告してきたり、アリアが転校してきた日もわけのわからない自慢話(?)みたいなことを延々と聞かされた。

一体私にどんな反応を求めているのか……さっぱりだった。

でも相手はやんごとなき身分の御方だし、下手に扱おうものなら何をされるかわからない。母や弟たちのことを考えると、怖くて何も

言い返せなかった。

これが下町の同年代だったら、ズバツと糾弾できるんだけど……それができない自分が悔しくて、どうしようもなく惨めだった。

……そんな神経のすり減っていく毎日だったから、アリアが来てくれた時は本当にうれしかった。

平民が来るって聞いてたから、ワクワクして待ちかまえていたんだけど……最初見た時は、あんまりにもきれいだっただから天使がやって来たのかと思った。

それはもう背中から後光が見えちゃったくらい。

真っ直ぐ伸びた黒髪はすっごく艶めいていて、紫の瞳は宝石みたい綺麗で……顔もどこの女優さん？っていうくらい整っていた。

その上、古代魔法まで使えるなんて……すごすぎてもう同じ人間とは思えない。

古風な上に男っぽい話し方も、なんでかとても似合っていて、本当にからなにまでうらやましすぎた。

“天は二物を与えず”って言うけど、あれ絶対ウソだね。不公平だよ神様。

しかも私と同じ年なのに恋人がいるときた。

もう、いろんな意味で完敗……ていうか不戦敗だった。

まあ、その“恋人”を紹介された時は「シヨタコン!?」ってつい叫んじゃったんだけど。

幸か不幸か二人とも意味がわからなかったらしく、首をかしげている。

「ええと、年少の男の子と仲良くすることよ!」ってなんとかごま

かしたけど、今じゃその発言を、ちょっとだけ後悔してる。

だってアリアってば新しく覚えた言葉をすぐに使いたがるんだもの。変なところで使われたら……多分責任とれない。

ああ、想像するだけで恐ろしい。

今度からは気をつけよう。

もつともキラ君は、見た目があれでも神族だから年少ってことはないはずだけどね。

でも誤解もあったけど、たとえ恋人じゃなくても二人の絆は強いと思う。

お互いをすごく大事にしているのが、傍からでもよくわかるもの。この前部屋に遊びに行ったら、同じ部屋で寝泊まりしてるって聞いてすごくびっくりした。

普通使い魔でも同じ部屋で寝泊まりしたりしないはず……まあ、そもそも常に地界に顕現している使い魔が珍しいんだけど。

しかも洗面台の所にアリアの字で『菓子を食べたら歯磨き15分！』って書いてあって、つい笑っちゃった。

私も使い魔とこんな関係を築けたらなあ、って密かに目標にもしてたりする。

そのアリアたちは、これまでずっと森で暮らしていたらしい。

住んでいた家が火事で焼失して、なんやかんやでライラック様と出会って、この学校に編入することになったらしいけど……一連の話を聞いてると、アリアがすごい天然だってことに気付いた。

最初は外見が人間離れしていたから、その分人間くさい面があつてちょっと安心……とか思っていたけど、こっちはこっちで神がかつていた。

だって、特定のお相手「パートナー」使い魔って……かなりぶっ飛んでるよ。

極端から極端にいくつていうか、誰でも知っているようなことを知らなかったり、その一方で誰も知らないような昔の知識を持っていたりつていう、ものすごいアンバランスぶりだった。

そのせいか彼女の隣では、常にハラハラドキドキが止まらない。

初めて我が子をおつかいに出す親の気持ちつて、きつとこんな感じだろうなあ。

そもそも私がこうなつたきっかけは、転校初日に勇気を出して彼女に話しかけた時にあつたと思う。

アリアを“美人”つて評する私に対して、「ミアの方がかわいい」と言われた時のこと……

それはよく女子がする社交辞令のような“かわいい”じゃなくて、本音でそう信じている感じだった。

あの時私は誓つた。「守つてあげなくちゃ」つてね。

美少女だけど天燃つて……うん、これ絶対男子の大好物。

これは同じ平民として……ううん、このクラスでできた初めての友達として、何としてもこの天然少女を守つてあげなきゃつていう気持ちになつた。

人間守る対象ができると思うもので、それまでは自分のことでもんもんしていたけど、その日を境にやる気がみなぎつてきた気がする。

だから同じことを考えていたキラ君ともすぐ意気投合して、会つて数秒で『アリアを守ろう同盟』を結ぶほどだった。

もつとも私は、アリアに一般常識を教えて注意を促す程度で、キラ君ほどデンジャラスな活動はしてないんだけどね。

アリア至上主義のキラ君は「ご主人様をいじめる奴は、僕がいじめ
てやる」と頼もしい(?)宣言をしていて、実際その通りに活動し
ている。

最近“彼女たち”がおとなしいのも、キラ君が頑張っているおかげ
だ。

アリアは気付いてないようだけど……このクラスには”王子様至上
グループ”っていうのが存在して、レストシア様に近づく女には容
赦ない制裁を加えている恐怖のいじめっ子集団を形成している。

アリアは転校初日の騒動はもちろん、それ以外でもよくレストシア
様と話すことが多いから、これ以上ない格好の標的になっていた。
だから私も心配していたんだけど……その心配はいつの間にか杞憂
に終わっていた。

私もこの前偶然目撃したんだけど、アリアの教科書を隠そうとして
いた例のお嬢様達の一人に、キラ君が殺気を滲ませながら“警告”
していたのだ(もちろんアリアのいないところでね)。

魔法で影を固定して動けないようにしながら、「次やったら、お嫁
にいけない顔にするからね」と笑顔で脅していた。

口元は綺麗な孤を作っているのに、目が全く笑っていなかった。
当事者じゃなくてもビビるほどのそれ。ましてや当人は、ガタガタ
震えながら、辛うじて動く首を上下にブンブン振るだけで精一杯だ
ったようだ。

キラ君………恐ろしい子！

純朴そうな見た目に反してなかなか黒いわ。

アリアは「遊び相手と一緒に悪いことをしてるのでは？」とか不安
に感じているらしいけど……正解は“それぞれが悪いことをしてる

”です。

どっちにしろ話せません。

プライベートが必要とかすごく苦しい言い訳しちゃったけど、これじゃ仕方ないよね？

ちなみに最近私も王子様達と話すようになったけど、そういった被害は受けていない。もしかしたらこれもキラ君のおかげかもしれない。

貴族だろうが容赦しないその手際は、既に学園で隠れた恐怖の代名詞として名を馳せている。

まあ、私はビクビクしているグループは（多分）皆一度キラ君の肅清を受けた子なんだろうなあ、とか思いながら今日も平和に学園生活を送っています。

でもそんな腹黒ツ子にも負けず、一人だけ未だ懲りてない人がいたりする。

それはとある伯爵家のお嬢様で、階級主義が服を着ているような人なんだけど……”王子様至上主義グループ”のリーダー格で、非常にプライドの高い、典型的な貴族ともいえる人だった。この人だけは飽きもしないで、嫌がらせをしよう（もちろん王子様にはばれないように）と躍起になっている。

自棄になって変な事しなきゃいんだけど……少し心配だった。

その他、アリアに盛大なポエムを送っていた伯爵家のフィリック・ダン・リンメル様については、「あれはただの馬鹿。基本無害だから、ほっといても平気」って言ってたっけ。否定できないところがすごい。

あの公爵令嬢ローズマリア様についても「悪意がないから大丈夫」って話してた。

そうなのかなあ？ でもキラ君の見る目は確かだと思うし、もしかしたらそうなのかもしれない。

……ていうか、今更だけど、どこから見ているんだろう？キラ君授業とか出てないよね？

まあ、キラ君のことだからどんな手段を使っけていてもあまり驚かないけどね。

そんなこんなで、アリアが来てから随分と私の学園生活も変わった気がする。

この国の第二王子であられるレストシア様や、ディレイド公爵家の後継ぎであるライラック様といった貴族の方々とも話すようになってきたのが、一番の変化だ。

正直例え同じクラスでも、生きているうちに彼らのよう最上位の身分の方々とお話する機会なんて絶対ないと思っけていたけど……それもこれもアリアのおかげだと思う。

ライラック様はとても陽気なお方で、「ライルって呼んでくれ」って言われたんだけど……さすがにアリアのように呼び捨てにはできないから、恐れ多くも“ライル君”って呼ばせてもらっけている。

レストシア様は（王子様至上主義グループのせいもあったけど）滅多に女性と話されないから、てつきり女嫌いなのかと思っけていたけど、どうやら違っらしい。

昼食を一緒に取るようになってからは、それがよくわかった。

王子様とお話するなんて、夢のまた夢だと思っけていたけど……想像していたより随分気さくな方で「学校に在る間は、同じ級友だ。身分は関係ない」っておっしゃられた。

キラ君とも仲良し（？）らしく、時々二人でじゃれっけてるのを見ける。

いつもつまらなそうにしてたレストシア様の表情が豊かになったのも、もしかしたらアリア達のおかげなのかもしれない。

ちなみに呼び方はさすがに「レストシア様」にしている。ちよつと嫌そうな顔をしていたけど、庶民代表としてこればかりは譲れない。

つつい敬語も使っちゃうけど、この方たちに対しては、それも仕方ないかなと諦めている。

そんな感じで、私の貴族に対する偏見もだいぶ薄まって、今までのように必要以上に緊張することもなくなった。

あいさつを交わすようになった子たちも、あまり貴族としての位が高くないせいもあるのか、平民である私にもフレンドリーに接してくれる。

でも、あの公爵令嬢様とだけは、いまだよくわからないギクシヤクシた関係が続いていた。あの人の考えていることだけは、本当にわからない。

王子様至上グループのように、これ見よがしなイジメを仕掛けてくるわけでもなく、かといって上位貴族にありがちな平民を無視するわけでもなく……一方的に話してきて、ある程度満足したら去る、という謎の行動パターン。

あの行動の真意が全く理解できなかった。まあ、公爵令嬢様のやることなんて、所詮庶民には理解できないものかもしれない。

でも、最近その公爵令嬢様と親友の仲がいい、というのが私の不安に拍車をかけている。

最初は私のように、付きまとわれている感じだったから、気をつけるよう注意をしていたんだけど……この頃はアリアの方からも積極的に話しかけて、なんだか二人で楽しそうにおしゃべりしているの

だ。

この前二人が揃って学校を休んだ日があったけど、多分その日から二人の関係に変化が生まれた気がする。

そんな親友が心配といえば心配だったし……それ以上にちょっと悔しくて、妬いていた。

（アリアの初めての友達は私なのに……）

だから今日こそは勇気を出して、その真相を訊こうと決めていたのだ。

「ねえアリア、ローズマリア様と最近仲良いよね？ 何かあったの？ まさか無理やりとかじゃ……」

我ながら『さすがにそれはないだろう』と思いながらも、一応問いかけてみる。

案の定アリアは「まさか」と否定した上で、こう切り出してきた。

「ミア……ローズはな、“つんでれ”なんだ」

「……ツ、ツンデレ？」

「そう、自分の気持ちがうまく表現できないんだ。だから」

どこか得意げに語っていたアリアは、不意に何かを思いついたように、ある人の元まで歩いていく。

その足の先にいたのは……件のローズマリア様だった。

二人はしばらく何かを話し、その後ローズマリア様はひどく強張っ

た（私にはそう見えた）表情でこちらを見てくる。
そして、あるうことがこちらに向かつて堂々と（私には…以下略）
闊歩してきたのだ。

（あばばば……ど、どうしよう!？）

藪を突いたら、公爵令嬢が出てきた。

あの恐ろしい形相、絶対何か怒っている。

打ち首獄門を覚悟でこのままこの場に居座るか、それとも今逃亡して明日の朝苦しむか……

助けを求めるようにアリアを見つめても、当の親友はニコニコしているばかりで全く役に立たない。

まさかの裏切りに泣きそうになりながら、究極の二拓が頭の中でグルグル回る。

（逃げる、戦う、逃げる……ていうか戦うってどうやって?）

そんなくだらないことを考えているうちに、気付けば目の前にその人物がいた。

銀灰色の長い髪に、印象的な薄紅色の瞳。

小奇麗な格好に身を包んだ彼女は、貴族らしい威厳のある佇まいを持っていて……以前の私は話しかけられるたびにひどく緊張していたものだっただ。

（一体何を言われるんだろう……）

死刑判決を待つようにビクビクしながら彼女の顔を窺う。

目の前のローズマリア様は、何か逡巡するようなそぶりを見せた後、慎重に口を開いた。

「そのミアさん……」

「はい！」

「私、あなたに謝らなければいけないことがありますの」

「……………はい？」

まさかの発言に自分の耳を疑ってしまった。

（私が謝るんじゃないくて？）

思わずそう言いそうになるのを押さえて、言葉の真意をはかろうと必死に頭を回転させる。

だが、その後も益々頭を混乱させるような“謝罪”は続いた。

「あなたに不快な思いをさせてしまって、申し訳ございません。よかれと思って話しかけたのだけれど、逆にあなたにとってはご迷惑だったようですわね。私のせいで随分と窮屈な学園生活をさせてしまったようで……………ごめんなさい」

そう言つて頭を下げる。

これには教室に残っていたクラスメイトたちもびっくりだ。

だってあのベルドット公爵家の令嬢が平民に頭を下げたのだから。

「え、ええ……………えええ？」

未だ状況を理解できない私は、意味を成さない言葉を発するのが精一杯だった。

それを察したのか、ローズマリア様は恥ずかしそうに言葉を重ねた。

「私どうも人の心というものがわかっていなかったらしくて。最初クラスで平民はあなた一人だと聞いた時、それではさぞ心細いだろうと思いましたの。」

貴族と平民ということで双方に壁もあるかと思ひまして……

それなら、公爵家の私が率先して話しかければ、他の皆さんもそうするだろうとばかり考えて……でも、どうやらそれは間違いだったようですな。

しかも、私は自分のことばかり話していて……その言い方にしても、貴族としての物言いに慣れていたせいかな、あなたにとっては御不快なことばかりだったでしょう。

どうか浅はかな私を許してください。

今まで誰もそんなこと教えてはくたさなかったから……いいえ、これでは言い訳ですね。アリアさんが言うてくたさなければ、私一生気付かないままでした。傲慢でしたわ」

その長く重い独白に、私の頭はハンマーで殴られたような衝撃を受けた。

……確かに平民である私に、最初に声をかけてきてくれたのは彼女だった。

わかりにくかったかもしれないけど、よく考えれば悪意がないことくらいすぐに気付けたはずだ。

（私ってば……もしかして馬鹿？）

勝手に付きまとわれているとか被害者面して、優しさに気付けなかった。

公爵令嬢という表面だけを見て、深い人間性まで見ようとはしていなかった。

何もわかっていなかった。自分のことばかり考えていたのは私の方

だ。

「ローズマリア様……どうか顔をあげてください。その、申し訳ございませんでした！　そのようなお気づかいをして下さっていたとは、露とも気付かず……私の方こそ、その、ごめんなさい！」

「いいえ、私ばかりににくいことをしたのがいけないのです。私いつもこんな風に失敗していたのですね。ようやく貴族以外の友達ができない理由がわかりましたわ」

その堂々とした宣言に、つい笑ってしまいそうになる。

多分公爵家という高い身分もあって、今まで誰も彼女に正面から物言える人がいなかったんだろう。私みたいに。

（ああ、こんなに気持ちのいい人だったんだ）

この人なら大丈夫だと私の勘が告げていた。

キラ君のは全然当たらないそうだけど、私の勘はなかなか外れないのだ。

「あの……よろしければ私と友達なってくださいませんか？」

「まあ、本当ですか！？　喜んで！」

とてもうれしそうに話す彼女は、アリアに続いて2番目の平民友達ができたことに歓喜し、そのままひとつの願いをしてきた。

「ねえ、できれば愛称のほうで呼んでくださらない？　様付けも敬語もいらないうえ。同じクラスの仲間でしょう？」

「…そうよね。ありがとうローズ」

自然とそう返せた私に、なぜか数秒沈黙した彼女は、ガクツと肩を落として小さく呟く。

「……………やっぱりあなたもですの？」

「へ？」

「い、いいえ、なんでもございせんわ！と、ともかくこれからも何か不快に思うことがあったら、すぐにそうおっしゃってください！私もう、こりこりしてますの」

ブイと横を向いたその顔は赤くなっていた。

「ぷ……………なるほど。たしかにツンデレかもね」

なんだかおかしかった。

貴族だからって今まで避けてきたのは私の方だった。

少し手を伸ばせば、わかること。こんな近くに答えはあったんだ。

ふとアリアの方を見ると、彼女は私たちの様子に満足気な顔をしていた。

確かにアリアがけしかけてくれたおかげだけど…………でも今回のことはちょっと意地悪だよね。

（今度仕返ししよう）

天使のようなアリアの顔を眺めながら、小悪魔のようにいたずらを考えるミア。

……その横顔は、ひどく楽しげだった。

第4話「和解」(後書き)

風邪をひいてたこともあるけど、今回の話は意外と難産でした。
普通の女の子ってどんなだろう？って想像しながら書いたけど……
やっぱり難しかったです(汗)

次回からは今までの遅れを取り戻せるよう頑張ります！

第5話「空中遊泳」(前書き)

今回はいつもどおりアリア視点です。

あとサブタイトルは、ほぼ適当です(笑)

第5話「空中遊泳」

「……………ない」

何度確認しても、そこにあるはずのものがなかった。

少し焦ってカバンの中身を机の上にぶちまけてみるが、筆記用具が散乱する中に目的の物は見当たらない。

帰りの準備をしていたローズとミアが、不思議そうに首をかしげているが、それを気にする余裕もなかった。

なにせ、自分にとってはこれ以上ないほどの緊急事態なのだ。

「どういたしましたの？」

「……………指輪がないんだ」

今日は、最後に魔法薬の実験の授業があつて、いつもしているそれを外していた。

教室に置いていたカバンの中に入れたはずなのに……………それが、影も形もないのだ。

一応机の中やその周辺も探してみるが、やはりどこにもない。

「あの、いつもしてる指輪？ どこかに置き忘れたとかじゃなくて？」

「いや、そんなはずは……………おかしいな……………【キラ】」

『はい、なんですかー？』

少量の魔力を込めてその名を呼ぶと、すぐに返事が返ってきた。影を使っても交信できるように、キラが魔法をかけているおかげ……なのだが、一瞬聞こえたおかしなBGMがやけに気になった。

「……今なにか変な声が聞こえなかったか？　なにか、悲鳴のような……」

『きゃ〜ごめんなさい！』といった女の声が聞こえた気がしたのだ。

しかも、なんだか随分と切羽詰まった声だった気がする。まるで、命の危機でも感じているかのような……

『そう、ですか？　空耳だと思いますけど……そ、それより何かあったんですか？』

何かを誤魔化すようなその声色に、怪しいと思わないでもなかった。

だが、よく考えれば今はそれどころではない。追及は後にして、まずは最優先の要件を述べることにする。

「ああ、指輪がなくなっただけ。悪いが探してもらえるか？」

『あれですか……うーんと、ちょっと待ってください』

「頼む」

こうしてわざわざキラにお願いしたのは、理由がある。

既に今の自分にはほとんど魔力が残っていない、という残念な理由が。

未だ“やりすぎ”の癖がとれず、毎日授業でギリギリまで魔力を消費してしまうのだ。

だから今回はキラに任せるしかなかった。

もつとも、あれは私がいつもつけているせいかな、私の“匂い”……というか、魔力の残滓のようなものが染みついている。

それを目印に探してもらえば、それほど手間のかかる作業ではないはずだった。

そのまま数秒待つと、期待通り、優秀な相棒はすぐに探し物を見つけてくれた。

『ありましたよ。これは……屋上、ですね』

「屋上？ どうしてそんなところに……？」

『さあ？』

キラも、わけがわからないといった風に返事を返してくる。たしかに心当たりの“こ”の字もないその不可解な場所は、謎としか言いようがない。

「……まあ、行ってみればわかるか」

『あ、僕も行きますよ』

「わかった。じゃあ途中で合流しよう」

そうして通信を切ると、ローズが待ち構えていたように質問して

きた。

「どうでした？」

「あー、なぜかは知らんが屋上にあるらしい。これから取りに行ってくるよ」

「私たちも行こっかー？」

ミアが心配そうに提案してきたが、さすがにそこまで付き合わせるのは気が咎めるといふものだ。

「いや、大丈夫だ。キラもついてきてくれるしな。じゃあ行ってくる」

「うん、気をつけてね」

「いつてらっしゃいませ」

そしてアリアが出て行った数分後、入れ替わりになるように、今度は外側からドアが開く。

「ういーす……あれ、アリアは？」

「あらライル。アリアさんなら、ついさっき出て行きましたわよ」

「なーんだ、一緒に帰ろうと思ったのに……残念」

「多分そのうち帰ってくると思いますよー……あれ、でもレストシア様とは一緒に帰られないんですか？」

ミアの素朴な疑問に答えたのは、幼馴染の彼ではなかった。

「レスト様は、時々おひとりの時間を持たれるのですよ。きつとりになることで浮世の垢を落としておられるのですわ。あの方は……いろいろと気苦労の多い方ですから……おかawaiiそうに」

彼の人を思つてか、憂いの表情を見せるローズ。

その一方でライルは、変なフィルターがかかった解釈に、かわいそうなものを見るような視線を送る。

そして、その内心で『これは“ただぼけーと散歩しているだけ”と言つても絶対信じないだろうなあ……』と、そつと語つた。

……だが、幸か不幸かライルの視線に気づくことなく、女子二人の会話は続けられる。

「へえ、そうだったんだ。確かに言われてみればそんな感じが……
…あ、でもローズ、よくそんなこと知ってるねー」

「え、それは、その……」

途端にあたふたするローズの姿に、ミアの乙女の勘が冴えわたつた。

羊の皮をかぶった小悪魔は、口元に手を当てニヤリと人の悪そうな笑みを浮かべる。

「あつれれ、ま・さ・か？」

「ち、違います！そういう意味では……！」

「まだ何も言っていないんだけどな〜？」

「あつ……！？」

笑みを深めた平民の少女と、目を泳がせる公爵令嬢。既にその勝敗は決していた。

それでも墓穴を掘った公爵令嬢は、なんとか取り繕おうと必死に言葉を探そうとする。

「だから、それは、あの……」

しかし、その哀れな姿を見た幼馴染は「やれやれ……」とため息をついて、あっけなくトドメを刺してしまった。

「諦めろよローズ、もうバレバレだから」

「……そこ、お黙りなさい……！」

ビシッと相手を指さし、女王の様に毅然と命令する、名門ベルドット家の令嬢。

その声だけならば、思わず平伏してしまいそうほどの覇気が出ていた。

……だが、名前のように頬に真つ赤な花を咲かせたその顔は、いまいち迫力に欠けていたとかなんとか。

「今、ローズの声が聞こえたような……？」

「僕にも聞こえましたよ。あの人、声大きいですねー」

その素直な感想について苦笑する。

「確かに……それで、この先か？」

ここは、4階からさらに階段を上った場所。もちろん来るのは初めてだった。

目の前には立ち入り禁止の扉。つまり、ここを抜けると屋上である。

「ええ、そのはずです」

「よし、じゃあ行くか」

なんだか悪いことをしているような気分になりながら、そつと取っ手に手をかける。

予想に反して、ギシギシと音をたてながらも扉はあっけなく開き、爽やかな風が吹く屋上へは、易々と侵入を果たせた。

そして、そこにいた人物に目を丸くする……てつきり誰もいないと思っていたその場所には、既に先客がいたのだ。

（あれは……確か同じクラスの……）

一人の少女が屋上の隅で突っ立っている。
話したところなかったが、その容貌には見覚えがあった。

（確かギユ……ギユ……なんだっけ？）

あと一步のところで思いだせない。微妙に悔しい。

もどかしくて仕方ないが、今はしょうがないから“ギユなんちゃら”と勝手に命名することにした。

その“ギユなんちゃら”も、扉の軋む音でこちらの存在に気づいたのか、驚いた様子で振り返ってくる。

「ど、どうしてここが!？」

「……へえ、君か。懲りないね」

いつもより低いキラの声に、彼女は一瞬怯えるように身体を強張らせた。

なぜだろう。二人に面識があるとは思えないのだが……

「お、脅しても無駄よ！ 私に何かしたらお父様が黙っていないんだから!！」

「? ……あー、悪いがあなたの父君に興味はないんだ。とりあえず、その手に持っている指輪を返してもらえるか？ 大事なものなんだ」

よくわからない言葉の羅列を一蹴し、端的に要件だけを言う。

どうして彼女が指輪を持っているのかは知らないが、この状況からして、“落し物を拾ってくれた”という雰囲気ではなさそうだ。

不吉な予想を頭に浮かべながら、“返してくれ”というように手を伸ばす。

「ふ、ふん、そうでしょうね！ 毎日つけてるし、暇さえあればいつも見ているもの」

（……そんなに見てたか？）

無自覚とは恐ろしいものである。今度からは気をつけようとそつと心に誓った。

……だが、そうして黙りこくっていたのが悪かったのか、いつの間にか“ギユなんちゃら”は勢いを取り戻していた。彼女は指輪を見せつけるように持ち、意気揚々と語りだす。

「例の恋人からもらったものかしら？ こんなものまでもらったおきながら、よく恥知らずな行動がとれるものよね！」

「待て……何を言ってるんだ？」

（恋人って、あの恋人だよな？）

自分とは最も縁遠い名詞の登場に、疑問符がポンポンと浮かんだ。本気で意味がわからない。

彼女が指輪の贈り主を知っているわけがないし、知っていたとしても、恋人でもなんでもない。私の一方的な片思いだ。それに恥知らずな行動、という言葉もまた謎だった。

だから、つい珍獣を見るような目になってしまつのも仕方がないことだろう。

ちなみに、隣のキラの機嫌も急下降しているのが肌で感じられた。この分だと沸点までもうすぐだ。

「なによその目は！？ とぼけないでよね！ レストシア様やライラック様だけじゃなく、今度はローズマリア様までたらしこんで！」

「だからどういう意味なん」

「ふん、あくまでそういう態度をとるの！？ だったらいいわ！ こうしてあげる！」

そして、意味不明な話ばかりをする“ギユなんちゃら”は、人の話を遮ったあげく、しまいにはとんでもない行動に乗り出した。

「あっ！」

「なっ！！」

あろうことが、持っていた指輪を放り投げたのだ。それも建物の外側へと。

（この高さから落ちたら……！）

4階建ての校舎の屋上。

いくら頑丈な指輪でも、ただでは済まないだろう。

傷がつくくらいならまだしも……最悪壊れてしまふ可能性もある。

もつとも、そこまで考える前に身体は既に動きだしていた。

「ご主人様！？」

キラの驚く声を置き去りにし、人生史上最速のスタートダッシュを切って、屋上を一直線に駆け抜ける。

（間に合え！）

内心で叫びながら、勢いそのままに手摺のない屋上の床を蹴り、躊躇することなく一気に宙へと躍り出る。

そして、身体を地面と水平にするようにして、放物線を描きながら今まさに落ちていくこうとする指輪に飛びついた。

「え、ちよつと！？」

飛び出した後ろからそんな声が聞こえたが、うろたえた声はすぐに驚愕のものへと変わる。

「う、そ……！？」

「はぁ……間に、合った」

浮遊感に身をまかせながら、手の中にある指輪を確認してそっと息を吐く。

飛行魔法……咄嗟のことだったから無詠唱で使ってしまったが、なんとか間に合ったようで良かった。

（……だけど、もし間に合ってなかったら……）

そう考えると静かな怒りがふつふつと込み上げてきた。いくら自分でも、さすがにこれは許容できそうにない。

振り返って、あわあわとこちらを指さす彼女を睨む。

まるで幽霊でも見たかのような態度だ。まったくもって失礼極まりない。

これはひとつ説教でもしないと気が済まなかった。

「まったく、なんてことをするんだ“ギユなんちゃら”！」

「っギユ？ い、いえ、それよりもあなた、どうして浮いて……！」

そうして驚愕の声を出す彼女に、なおも言葉を重ねようとしたその時だった。

キラがいち早く“それ”に気付き、慌てて叫ぶ。

「ご主人様！ 早く戻ったほうが……！！」

「へっ？」

一瞬その意味がわからなくて、馬鹿みたいに気の抜けた返事を返してしまった。

だが、皮肉にもその返事を合図に、まるで示し合わせたようなタイミングでガクツと身体が傾く。

そうして空中でバランスを崩したところで、ようやく私も“それに気付いた。”

「……あ」

そうだ、すっかり失念していた。

飛行魔法は常に自分を宙に浮かしているせいで、魔力消費量が高

い。

しかも難易度もそこそこあるのに、今回は無詠唱で使ってしまった。

さらに、今日は授業でかなり魔力を消費してしまっている。

これらの要因が重なった結果　今の私の魔力量では……………もって数秒だった。

「う、わっ！」

急激に浮力を失った身体は、重力に引かれるまま、地面に向かって一直線に落下を始める。

「ご主人様！！」

視界の隅で、こちらに手を伸ばすキラの姿が見えた。

だが、その驚愕した顔は一瞬でフレームアウトし、すぐに視界は上空へと固定される。

それも強制的に。

（ウソだろ！？）

真っ逆さまに、落ちていく己の身体。

そして、飛べるはずもないのに翼のように舞い上がる黒髪。

その隙間から見えた空は……………いつそ憎たらしいほど綺麗だった。

第5話「空中遊泳」（後書き）

えー、おそらくすぐ続きが気になりそうなところで切っちゃったんで、なるたけ早く次話更新したいなあと思ってます。

ちなみに”ギユなんちゃら”さんは結構策士でして……

キラの方には囃（『きゃー、ごめんなさい』の人）を使っていた、という裏設定があったりします。

まあ、意味なかったですけど（笑）

誤字・脱字等ございましたら、是非教えてください。

第6話「着地」(前書き)

サブタイトル超適当ですいません(汗)

誰かいいサブタイトル思いついたら、是非教えてください。

第6話「着地」

その時……上級クラス5年の教室では、三人の少年少女が学生らしい話題に花を咲かせていた。

いつの世も、恋愛話は格好の話のネタになる……特にそれが人様のものとなれば尚更。

その結果、うち二人にとっては最高な、そして残りの一人にとっては最悪な会話が繰り広げられることになった。

「へー、でもまさかローズがレストシア様をねえ……ねえねえ、きっかけは何なの!？」

「だ、だから違いますと……!!」

「そりゃあ、こいつが7歳の頃の話でさ」

「っちょ、勝手に!! や、やめなさい!!」

「ほおほお、それでそれで!？」

慌てるローズをよそに、得意気に語りだすライル、そしてそれに食い付くミア。

既に教室はこういった話をする時特有の、ある種独特な雰囲気支配されていた。

すなわち誰にも話を止められない、止めることを許さない、あの雰囲気である。

それでも、勝手に盛り上がる二人をよそに、そのおしゃべりな口

を押さえようとローズは孤軍奮闘する。

「っ、避けるな――!!」

しかし、必死の健闘むなしく無駄に運動神経のいい幼馴染は、余裕を持ってその手を回避した。

「あらやだ、お嬢様言葉がくずれてますわよ。ローズさん」

そして「おほほ」と意地の悪い笑みを浮かべたライルは、満を持して、その恥ずかしい過去を暴露しようと口を開く。

「あれは王宮で開かれたパーティーで」

だが、「ぎゃー!」とローズが令嬢にあるまじき悲鳴を上げるものの、幸いにもその先が語られることはなかった。

不自然に言葉を切った彼が、急に立ち止まり、「あれ?」と呟いてゴシゴシと目を擦ったのだ。

瞬きを繰り返し、何かを確認するような仕草をするライルに、今まさにその首を締めようとしていたローズは、眉を顰める。

「どういたしましたの?」

「いや、今、窓の外に何か見えたような……」

珍しく自信のなさそうなライルの証言に、ローズとミアはキョトンとした表情を浮かべた。

とりあえず、そのまま首を180度まわし、後ろを振り返ってみ

るが……その瞳に映ったのは、ユスラの木と学園の正門、その奥に見える城下の街並み。

別段変わりばえのない、いつも通りの風景だった。

「何も変わったものはありませんけど……」

「一体何が見えたんですか？」

「うーん、なんか人？ が落ちてったような……」

物騒な話に一瞬空気が固まる中、本当に自信がなさそうなライルは、首を傾げたまま続ける。

「一瞬だったから顔はわかんなかったけど、なんか黒髪ぽかった気が……でも、多分見間違いだよな！？」

そうして彼は片手を頭の後ろにあて、へらつと笑った。そのおどけた態度に、緊張していた空気が少しだけ弛緩する。

それに合わせるようにミアも『ないない』というように手をヒラヒラさせた。

「それはさすがに見間違いですよー。だってここ、3階ですよ？」

「だよなー！ そんなわけないよなー！」

「「あははー」」と二人のどこかわざとらしい、空笑いが放課後の教室内に木霊した。

ミアは何か違和感を感じながらも、後押しするように言葉を重ねる。

「そうですよー。いくらなんでも人、が」

だが、その彼女の言葉が途中で途切れたのには、理由があった。強張った表情のローズと目があつたという理由が。

……そこでようやく彼女も思い出す。親友が去り際に残した言葉を。そうしてすぐに一つの可能性に思い当たり、顔からはサッと血の気が引いていく。

見ればさつきまで名前通りだったローズの顔色も、いつの間にか、青い伝説の花へと変わっていた。その花は色を変えないまま、茫然とした様子で呟く。

「……アリアさん、さつき“屋上に行く”って言っていましたよね？」

「「「……………」」」

顔を見合わせた三者の脳裏では、既に同じ予測が生まれていた。それも最悪の予測が。

だがその一方で、頭の隅に残された冷静な部分が、すぐに“それを否定する。”

すなわち『そんなこと起こるわけがない』と。

もっとも、そこには“そうあってほしい”という願望も含まれていたが。

しかし、皮肉なことにも今度のトドメもまた同じ人物から刺されることになる。

そして、残りの二人もそれにつられるように言葉を紡ぐのだった。

「……そういえばさ、さっき一瞬だけどキラの声も聞こえなかったか？」

「…ええ、なにか叫んでいたような」

「うん。何か切羽詰まった感じだった」

「「「……………」」」

今一度顔を見合わせる三人。

だが今度の沈黙が場を支配したのは、わずか数秒だった。

黙りこくった三者は、やがて示し合わせたように一斉に動き出し、そのまま我先に、押し合うようにドタバタと窓際に駆け寄った。

あまりに慌てていたためか、一つの窓から窮屈そうに仲良く横並びで顔を出すことになったが、そんなことを気にする者は一人もいなかった。

そして、それぞれすごい形相をした彼らは、下を覗き込みながらその名を叫ぶ。

「「「アリア（さん）！？」「」」

（空が、綺麗だな……）

こんな時なのに馬鹿なことを考えているな、とは思つ。
でもそれは、この憎たらしいほど綺麗な空が悪い。

その透き通った美しさが、このどうしようもない絶望的な現実を
忘れさせるのだ。

風を切って落下していく自分の手は、慣性により上空へと向けら
れている。

それはまるで……その手の届かない遥か遠い存在に、恋い焦がれ
ているようだった。

「……っ、間に合わない!!」

悲鳴のような声が鼓膜を震わせ、意識は急速に現実へと引き戻さ
れた。

同時に、慣れ親しんだ魔力を感じる。……それは、どこか迷走し
ているようにも思えた。

その意味に気付いて、思わず口角がゆるむ。

（キラ………ありがとう）

どうやら地上にある物体に干渉しようとしているらしい。

だが、無生物の影への干渉は、生物のそれよりも時間がかかるも
のだ。到底間に合わない。

私の影は移動が速すぎて捕えられないし、地上の物体への干渉も
時間が足りない。

……つまり、万事休すということだ。

（死ぬ、のか？）

一瞬が永遠へと引き延ばされる中、一人胸中で呟く。

どこか冷静に事態を客観視していた己の眼前に、“死”という究極の一字が突きつけられた気がした。

それを意識した瞬間、思わず目を閉じ手の中の指輪をギュッと握りしめる。

……だとしたら馬鹿馬鹿しい話だ。まさかこんな形で死ぬとは予想していなかった。

（まだ……死にたく、ない）

それが本音だった。

せつかく人生が楽しく思えてきたところなのに、これはあんまりだ。

今はやりたいことだっていっぱいある。……まだ、生きていたい。

だが、そうは思いながらも、もはやどうしようもないことを頭の片隅では理解していた

なにより、走馬灯が見え始めたのがいい証拠だ。

死ぬ時はそれまでのことが走馬灯のように浮かぶというが……どうやらそれは本当らしい。

魔王との決戦では見ることもなかったそれが、今になって見えてくる。

嫌いな人、憎い人、優しくしてくれた人、友達になってくれた人、そして愛する人……300年前と現在が入り混じりながら、個性豊かな面々が泡のように浮かんでは消えていった。

そうして最後に浮かんだ顔は……

「っ……！！」

唐突だった。

諦めたように回想に耽る己の耳朵に入ったそれは、声にならない声だ。

一瞬自分があげたものかと思ったが、次の瞬間それは間違いだと直感する。

力強い魔力の波動を真下から感じたのだ。

だが、『なんだ？』と疑問に思ったその直後には、衝撃が全身を襲っていた。

ボスンッ、ドッ、と思った以上に気の抜けた音があたりに響く。

「……………い、たい」

反射的にあげた声に、自分自身で驚く。

しかも思ったよりも地面が……………温かい？

いや、これは地面ではない。何か温かくて柔らかいものが真下にあった。

しかもその“もの”はトクン、トクンと胎動しているではないか。

（これは……………命の、音）

その鼓動は随分と早かった。

恐る恐る目を開ければ、目の前には何か布のようなものがあり、その底面は上下に運動しているのが肌で感じられた。

啞然としたまま顔を横に向ければ、背景に土ぼこりが舞う中、すぐそばに自分の手がある。

「生き、てる？」

信じられないような気持ちで、指の一本一本を確かめるように動かす。

……動く。それに指輪も無事だった。

「どう、して？」

そのもつともな疑問に対する答えは、すぐそばであがることになる。

「ぐっ……」

自分の下から聞こえたぐもった声に思わずギョツとする。

そこにいたのは……

「レ、レスト!？」

第6話「着地」（後書き）

えー、多分皆さん予想通りの展開ですよ（汗）

しかも次回まで続きます（超汗）

本当は1話にまとめようとしたんですけど、

それじゃ長くなりそうで……あうー、なかなかうまくいかないものです。

次回こそ、ヘタレ＆真っ黒が活躍？する……予定です。

なるだけ早くあげようと思います（汗だく）

第7話「三者三様」(前書き)

書いてくうちにどんどん長くなっていく……
今回はタイトル通りな感じですよ。

第7話「三者三様」

「レ、レスト!？」

ガバッと身を起こせば、己の真下にはレストの身体があつた。

今はちょうどその胸に手を当て、腹の上に跨っている状態である。

傍から見れば、まるでレストを襲っているような……ともかく、とんでもない体制だったろう。

しかし、混乱の極致にある脳内は、それさえも思考の隅へと追いや
る。

実際、今現在の大半の興味と視線は、微かなオーラの残る彼の腕へと向けられていた。

(これは……魔力の残滓?)

……それを見て、なんとなくだが事態が理解できた。

おそらくレストは、腕に咄嗟に魔力を纏い、そのまま私を受け止めたのだ。

詠唱破棄に近いそれは、学園一の魔力の持ち主だからこそできた荒技である。

普段の私にとっては大したことじゃなくても、この時代の人間でこれができるのは本当に少数だろう。

(まったく、キラ顔負けの幸運だな……)

たまたま下にいたのがレストで心底良かったと思う。

いや、息が切れてるから走ってきてくれたのか……だとしたら本当

に感謝してもしきれない。

まだ混乱する頭の中で一気にそこまで考えると、不意に上から名前を呼ばれた。

「「「アリア（さん）！？」「」」

「？……あ、みんな」

見上げれば三階にある教室の窓から、ライル、ミア、ローズが窮屈そうに顔をだしている。

己の無事を確かめてか、三者は揃ってホッとした顔を見せた。

その直後、今度は真下から発せられた唸り声に、急いで視線を落とす。

命の恩人のお目覚めだ。

「っセレスティ、怪我はないっ　　！？」

彼はしかめっ面をしながら顔をあげ、そしてすぐに絶句した。

……まあ確かに、助けた相手が我が物顔で己の腹の上に座り込んでいたら、驚いて当り前だろう。

さすがにまずいと思い、慌てて腰を浮かす。

「え、ああ！　す、すまないレスト、そっちこそ怪我はな　　」

「きゃああああー！！」

「……はい？」

またまた上から聞こえた悲鳴に言葉が遮られる。

さつきから上下運動を繰り返す己のそれは、まるで首ふり人形のようだ。

ただでさえ忙しいのに、次から次へと湧きおこる面倒にいい加減うんざりする。

（今度は何だ……？）

徐々に大きくなるそれを不吉に感じながら、混乱気味に頭上を見上げ………その光景になぜか苦笑いがこぼれた。
あまりの事態に脳がついていけない。

「うそ、だろ？」

なんと、さつきの少女が真つ逆さまに落ちてくるではないか。

ライル達がギョツとして、野生のリスのようにサツと身体を引つ込める。

おそらく反射的な行動だろう。誰も責められない。
それよりも、問題はこちらだ。

「っ！？」

慌てて受けとめようとするが……魔力を使いきっている状態では、どうしようもないことに気付く。
レストも私の下にいるせいで、手も足も出せない。まさしく退っ出きならぬ状況とはこのことだ。

恐怖に引きつった顔は、もはや目前まで迫っていた。

「お、おい！？」

戸惑いか抗議か。そんな声が下から聞こえたが、あいにく耳を貸す余裕はない。

いくつもの修羅場をくぐり抜けてきた頭が、『これはだめだ』と冷酷に判断した結果だ。せめてレストだけは守ろうと上から覆いかぶさるように抱きつく。

だが、そうしてふと下を見れば己の影が揺らめいていることに気付いた。

（これは？）

見覚えのあるそれに眉を顰めて、今一度視線を上へと戻す。

予想通り……あわやぶつかるところで、私の影が伸び彼女を乱暴に包み込む。

間一髪のところでは地面との接吻を免れた少女は、泣き笑いのような顔で「あ、ああ」と言葉にならない呻き声を漏らした。

この悲劇のような茶番劇を作り出した犯人……キラもすぐに降りてきて、同じように影を使って器用に着地する。こちらは余裕綽々の表情だ。

状況から鑑みて、キラが彼女を突き落としたに違いない。

……いくらなんでもやりすぎである。つい声を荒げてしまう。

「キラ、危ないだろう!？」

「どうしてですか?こんな奴……こうなって当然です。むしろ本当にぶつけてもよかったくらいですよ」

そのいつもとは違う、想像以上に冷え切った反応に愕然とする。

「キ、ラ……？」

されがさも当然かのように、己が突き落とした女に侮蔑の視線を送る相棒。

今まで見たことがないその冷たい眼差しに、なぜかゾツと悪寒が走った。

こんなに近くにいるのに、その存在を遠く感じる。
さつきまで恋い焦がれていた美しい空とは少し違う。
まるで夜空に浮かぶ孤独な月のような……そんなキラの横顔に、言
い様のない寂寥感が募る。

「それよりご主人様、お怪我はないですか？」

だが、こちらを振り向いた彼は、それまでの態度が嘘の様に心配そ
うな顔を向けてきた。

一瞬の幻でも見たのかと思わせる、その急な変化に戸惑う……が、
そこでようやく真下にいる存在を思い出した。

「あ、ああ。でもレストが」

「私は大丈夫だ」

そうは言うものの、いつもの冷静沈着な彼とは少し違う気がする。
走ってきたせいかもしれないが、やけに動悸が激しい。ついでに、
もうひとつ気になっていることもあった。

「でも顔が赤いぞ？ それに」

「レ、レストシア様!？」

またしても自分の言葉を遮ったのは、放心状態で尻もちをついていた“ギユなんちゃら”だ。

レストの声で正気に戻ったのか、彼女は驚愕で顔を歪めている。

「ギユール伯爵令嬢？ 一体何があったんだ？ どうしてセレスティが……？」

ギユール。そういえばそんな名前だった。

肘をつき少しだけ身を起こしたレストが、戸惑いながら質問する。

キラはまたガラリと態度を変え、苛立たしげに顎をしゃくってその意を示した。

「この女が原因だよ」

「…………それは本当か？」

心なしか、そう訊くレストの声も一段低くなっていた。

彼はキラのただならぬ様子も、意外と冷静に受け止めているようだ。

いつもは喧嘩している二人の妙に息の合った様子に、どうすればいいかわからない。

自分だけが取り残されているような気がして……思わず手の中の指輪を見つめる。

そして「なるほど」という声に顔をあげれば、私を見ていたであろう薄紫色の目がスツと細められ、怒気を帯びた顔が別の方向へと向けられるところだった。

「どうしてそんなことを？」

「だ、だって恋人がいるのにレストシア様に媚を売って！！ 卑しい平民のくせに！！」

髪を振り乱して必死に釈明するその姿は……なぜか哀れみを誘った。

それでも、なんとなく事情はわかった。

300年前もよくあったことだ。

もっともあの時は今よりずっと過激で、アスト王子の信者である貴族の令嬢が、毒蛇やらなんやらを送りつけてくることが日常茶飯事だった。

そうして考えてみると、この学園生活の中でも時々悪意ある視線を感じたことはあった……気がする。

だが、平和ボケとでもいえばいいのか……命に関わらないならどうでもいいと無視していたのが今回につながったのかもしれない。

ともかく、そんな理由から媚だの卑しいだのについては、慣れているしどうでもよかった。……が、“ある部分”に関してだけは、どうしても一言訂正を入れておきたかった。

「さつきも言っていたが恋人って……そんなもの生まれてこのかたできたことがないぞ」

「……………え？」

「……………そう、なのか？」

ギョール伯爵令嬢だけでなく、レストまで驚いた表情をしてみせる。

どこでそんな誤解を受けたのかは知らないが、私は間違いなく恋人いない歴〃年齢の人間だ。残念ながら胸を張って言えることではなかったが。

キラは「言わなくていいのに……」と嘆いているが、それでも経歴詐称はよくない。

『今更?』と思われるかもしれないが、聖女の件はともかく、できる限り嘘はつきたくないのだ。

「いや、まあいい……それよりすまなかった、セレスティ」

しばしの間茫然としたレストは、次いで片手で顔を覆い、意味のわからない謝罪を口にした。

「む? どうしてレストが謝るんだ?」

おかしなことを言い出した友人……そのすぐ近くにある顔を覗き込む。

レストは、なぜかますます顔を赤くさせて、逃げるように身を引こうとする。

もっとも、私が入から押さえつけている上に、元々密着しているから逃げられるわけがない。

「そうです! レストシア様が謝る必要などありません! ていうかあなたいい加減レストシア様の上から
「いい加減黙れブス」

叫ぶ令嬢を、キラが影を使って強制的に沈黙させる。

そのいささか乱暴なやり方に、抗議しようとするが……さっきのことを思い出してしまい、結果その声は想像以上に控えめなものとな

った。

「キラ、ちょっとやり過ぎじゃ」

だが今度は、若干落ち着きを取り戻したらしいレストが、そのささやかな抗議を遮った。

「そうだ。まずはあなたが謝るべきだろう、ギョール伯爵令嬢。この学園において身分は関係ない。確かに上級クラスは貴族が多いが、それも純粹に魔力量と実力によって選別された結果だ。それに……もとより生まれが貴族だからといって、あなたがセレスティより尊いという理由になるか？ 馬鹿馬鹿しい。ともかく、“卑しい”などという言葉はこの学校、いやこの国では二度と使わないでほしい。君も知っているだろう？ 我が国は今浮浪者を失くす政策に力を入れている。そのためにも、これから貴族はより彼らの立場に立った支援をしなければならぬのに……それがこのようでは、先が思いやられる」

吐き捨てるような辛辣な物言いに、口のきけない彼女は青ざめ必死に首を振るばかりだ。

だがこれには、さすがの私も驚いた。

ともすれば貴族制度さえ否定しかねないその発言を、まさか王子である彼から聞くことになるとは思わなかった。

ただただ啞然として、その怜悧な面差しを見つめる。

……しかし、そうして王者の風格さえ匂わせた第二王子は、最後の最後でどうしても聞き捨てならない台詞を口にするのだった。

「が、今回の件は私にも責がある。今になってようやくわかった。

やはり王子である私と友好を持つことで、周りに与える影響は大きいのだろう。……………不注意だったな。これからはなるべく話しかけないよう、に　っ!？」

「何を言っているんだ!?　この娘がどう言おうと、私たちは“ともだち”だろう!？」

あまりに馬鹿なことを言い出すレストに、ついカツとなり、興奮のままに肩を掴んで地面に押し倒す。

ドスツと音がすると同時に、まるで外界から遮断するように、己の黒髪がカーテンのように左右からこぼれた。

驚愕したレストは、さっきの毅然とした態度はどこへいったのやら、「いや、あの、ちょ……………」と急激に真っ赤になりながら、あたふたし始める。

だが、そんなのは知ったことではない。

真上からこれ以上ないほど見開いた、その薄紫の瞳を睨みつける。

「さっき“身分は関係ない”とのたまったのはどの口だ!?　私はお前が王子だから“ともだち”になったわけじゃないぞ!」

第一この程度の嫌がらせでどうにかなるほど柔い精神はしてない。

300年前の方がよっぽどひどかったくらいだ。

もとより、300年越しにやっとできた“ともだち”……………それをこんな馬鹿げた理由で失うなんて冗談じゃなかった。

一方押し倒されたほうは、何か思いもよらない言葉をかけられたかのようにしばし茫然とする。

そして次いで、病気じやないかと思うほど顔を赤く染めながら、せ

わしく視線を彷徨わせ始めた。

「そ、それは、だが」

なんともじれつたいその答えに、己の中の何かがプツンと切れた。その胸倉を両手でガツと掴み、勢いよく自分の方へと引き寄せる。

「だがもへちまもあるか！ いいか、何を言われようが私はお前と“ともだち”をやめるつもりはないからな！！」

わずか数センチの距離で相対するその瞳は、やはり妹のものと一緒だった。

そして驚愕に彩られたその顔は、昔数度だけ見たアスト王子のそれに似ていた。

そんな懐かしい二人の面影を残す王子は、パクパクと口を開閉させながら、どこか反射的に答えを返す。

「え、あ……………はい」

「よし！」

その返事にようやく満足し、掴んでいた両手を放す。

レストは「うわっ！」と結構勢いよくドスツと倒れこんだが、あまり気にしない。

一方、黙ってそのやりとりを見ていたキラが、ここにきて口を挟んでくる。

「まあ、ご主人様を助けたから今回は見逃してあげるよ。そんなこ

とより……………早くご主人様の下から退いてくれない？」

「……………っ、お前もなかなか無茶を言うな！」

言いながらギロリと睨んでくるキラに、レストが頭を押さえ、口元をヒクヒクさせながら返した。

いまだ地面に転がっている状態のレストは、例の如く私に上から押さえつけられている。

普通は上にいる自分に避けろというところなのに……………確かに、理不尽極まりない話だ。

(……………って、原因は私か！？)

ここに至ってようやく、とんでもない体制をとっていることに気付いた。

『一体いつまで乗っかってるんだ私は！？』と内心ツツコミながら、慌ててその身体の上から移動する。

「す、すまない！」

「……………いや、いいんだ」

やっと腹の上から重りが消えたことに、ホッとしたのだろう。レストは顔を赤らめながら、深くため息をついた。

だが起き上がった彼の仕草で、忘れていたことを思い出す。

「そつだレスト！ その腕、痛めているのではないか？」

最初に腕をかばっていた気がしたので、心配していたのだ。
案の定レストは「ああ…」と頷くが、まるでなんでもないように付け加える。

「別に騒ぐほどの怪我でもない」

「そんなのダメだ！ キラ、悪いけど治癒魔法をかけてやってくれないか？」

レストはあまり顔には出さないからわかりにくいが、もしかしたら骨にヒビが入るくらいの怪我はしているかもしれない。
なにより怪我を負わせた原因は私にある。

自分でできないのは齒がゆいが、その代り今回は相棒に頼むことにする。

だが、そのキラといえば、若干言にくそうにモジモジしながら呟いた。

「……………僕、治癒系は使えないんです」

それは初耳だった。

確かに得意不得意はあるだろうが、キラほどの上級神族で治癒系魔法を使えないなどなかなかあることではない。

モジモジしていることといい、『まさか相手がレストだから』という一抹の疑念が生まれたが……………少しだけ申し訳なさそうなその表情に、すぐにそれを払拭する。

「そうか……………なら」

だがそこで、玄関口の方から聞こえる、ドタバタという複数の足音

へと意識が引つ張られた。

勢いよく駆け込んできたその三人組は、自分達の目の前で砂を巻き込みながらズザ と急ブレーキをかける。

「アリア大丈夫!？」

「レストも生きてるか!？」

「ギユールさんも……無事ですな。まったく、どうしてこのようなことになったのですか!？」

それぞれ息を切らしながら、矢継ぎ早に質問してくるミア、ライル、ローズの三人になぜか安心し、そして脱力した。

「あ、それは保健室で話すよ。レストの治療も必要だし……とりあえずここを移動しよう」

さすがに、もうここで治療はさせられない。
そうして砂埃が舞う中、一気に騒がしくなった一行を引きつれて保健室へと足を進める。

ギヤーギヤー騒ぐ三人に囲まれながら、ぐったりと疲れたアリアは、視界の悪いそこを振りかえることもなく立ち去った。

……だから気付かなかった。
相棒がその後についてこなかったことを。

砂塵の中、残されたのは気配を消した少年と、消された少女。

主の姿が完全に視界から消えたことを確認したキラは、ゆっくりと振り向く。

「……………ねえ、覚悟はできてるよね？」

動けないよう拘束していた影を解き、その口も話せるようにした彼は、代りに周囲に目くらましの魔法をかけた。

「ひっ……………!!」

「さっきの、怖かった？ でもね、まだまだだよ。これからもっと怖いことが起きるんだから……………」

一歩ずつゆつくりと、だが確実に近づいてくる美少年は、既に生死をさ迷った少女にとっては十分恐怖の象徴だった。

「あ、あ、ああ……………」

「正直いうとね、僕も常闇の世界は怖いんだ。でも、だからこそ」

その先は聞きたくなかった。

恐怖の絶頂に達したギョール伯爵令嬢は、後ずさりながら必死に叫ぶ。

「い、いやこっちに来ないで!!」

どうしてこんなことになったんだろう。

少女は震える身体を叱咤しながら、悪夢のようなこの状況を嘆いた。

お気に入りの服は、砂まみれになっていた。

昨日お手入れしたばかりの爪も、今では地面を掻くばかりで見るも無残だ。

だけど、普段なら気にしているそれも今は全く気にならない。

否、気にする余裕なんてなかった。

……ちょっと生意気な転校生を懲らしめようとしたただけだ。

だって私たちの王子様に、手を出すんだもの。痛めつけるのが当然というものだ。

いつもそうやって彼の周辺を“整理”してきた。以前は失敗したけど、あの時はここまでの恐怖なんて感じなかったし……ともかく私は間違っていない。間違っているわけがない。

今まで、思い通りにならないことなんてなかった。

頼めば、お父様が「しょうがないな」と笑って、全てどうにかしてくれた。

そう、お父様が……どうして忘れていたんだろう。自然と口角が上がる。

「そうよ！ お父様に言うわよ！ そしたらあんな平民なんて、すぐに退学なんだから！」

これで形勢逆転だ。こう言えば、いつも相手は引き下がるのだ。

時に悔しそうに、時に恐ろしそうに……それを見るのが好きだった。私はあなたたちとは違う。そう愉悦に浸れた。

だが期待とは裏腹に、目の前の美少年は一瞬キョトンとした顔を見せた後、やがてニツコリと笑い、まさかの返答をしてきた。

「大丈夫。君のお父さんも、ちゃんとおしおきしてあげるから。こんな悪い子を育てるなんて、やっぱり親にも責任あるよね」

状況さえ違えば、あるいは天使のほほ笑みと称してもよかったかもしれない。

だが底知れない狂気を孕んだその瞳は、ぞっとするほど酷薄だった。手を伸ばしてきた少年を目の前にして、思わずギョツと目を閉じる。彼はどうやらそのまま己の額に手を当て、何かを探っているようだった。

「あーあ、ほんと君つてば、ずいぶん悪いことしてきたんだねえ。こんなにひどいって知ってたら、最初から容赦しなかったのに……僕が目もくるったかな？」

その口調に、何をされたのかを悟った。

（まさか……記憶を読まれた!?）

だがわずかに残された理性は、そのありえない事態を真っ向から否定する。

「う、嘘よ！ そんなことできるわけが！？」

そこでようやく目を開いた少女は、生まれて初めて”それ”を知ることとなる。

己の物とは比較にならないほどの、”それ”を。その……どこまでも純粹な悪意を。

ますます笑みを深くした彼が、耳元でそつと囁く。

「おやすみ。どうかいい夢を……」

後日、ギユール伯爵令嬢は病氣療養で休学することになった。

アリアが、保健室に來なかつたキラを怪しんでも「さあ？」とすつとぼけるばかりだつた。

レストにしても「まあ、相手が悪かつたんだろつ」と、どこか諦めたように語るだけである。

妙に團結する二人に、アリアは首をかしげるが……結局何がどうなるわけでもなかつた。

天気は快晴。東から流れる春風が心地よいこの季節。
ハインレンス王立魔法学園は……今日も平和だつた。

第7話「三者三様」(後書き)

キラ黒!!

自分で書いておきながらなんですけど、彼はホント真っ黒です。

その点、王子は安心のヘタレです。んでもって、主人公は天然爆発娘ですね。

今回は三者の奇跡の共演(すれ違いバージョン)?というテーマで書かせてもらいました(笑)

さて、いつの間にやらお気に入りも1000人を突破いたしました、本当にありがとうございます。

まさかこんなにたくさんの方に読んでいただけたとは思っていません。だったので、今若干ビビりながら書いてます(汗)

それでは皆様今後とも、彼らをよろしくお願いします。

あ、誤字脱字等ございましたら、是非教えてくださいね。

5章 第1話「召喚の儀」(前書き)

更新遅くてすいません(汗)
しかも今回ちょい短いです。

明日にはもう一話あげようかなと思ってます。

5章 第1話「召喚の儀」

「いよいよね！」

「昨日は興奮して眠れなかったわー」

昼下がりの校庭。

常にならないほどの喧噪にあふれかえったそこで、30人ほどの生徒が興奮気味に思い思いの言葉を紡いでいた。

召還の儀。

それは、滅多にない上級クラス6年との合同授業でもあり、魔法使いが各々のパートナーと対面する儀式でもある。

少年少女たちが期待に胸膨らみながら語り合う微笑ましい光景に、なぜか保護者の様な感慨を覚える。

「なあにがぐでつてくるかな」

待ちきれない様子で即興の鼻歌を披露しているのは、ライルだ。

彼は数日前から異常にテンションが高く、それこそ毎日理想の使い魔話に付き合わされたほど、今日という日にかかる期待も大きかった。

……まあ、その気持ちはわからないでもない。なにせこれから一生を共にする相棒に出会うのだ。

準備のために去る背中を、苦笑気味に見送る。

だが、そうしてクラスメイトたちが準備に奔走する中、己の五歩横には同じく何をするでもなく、その光景を眺めている人物がいた。

「……あれ？ レストはやらないのか」

「言ってなかったか。私にもすでに神族の使い魔がいる。もっとも、王族に代々仕えてはいるが、忠誠心の欠片もない自由奔放なやつだな」

さすがは王族といったところか。専属の、しかも神族の使い魔がいるとはなかなか驚きである。

だが主の方は、大いに不満があるようだ。使い魔のことを思い出しているのか、真一文字に結んだ口がその心情を語っていた。

「あー、それは大変だな」

同じく個性的な使い魔を持つ者として、その苦労も多少わかる。わかるのだが、次に己の口から出たのは、全く違う問いかけだった。

「ところで……どうしてそんなに離れるんだ？」

「……………」

今度は無言の返事を返されるが、さすがに超能力者ではないので、それだけでわかるはずもない。

チャンスだと思って、ここ最近どうしても気になっていたことを訊いてみたのに……こんなことなら、いつかの装飾品屋の男に、心を読む秘儀でも教えてもらえばよかった。

それにしても、視線すらあわせてくれないとはどういうことだろう。これはあれか、いわゆる黙殺というやつか。

前は、さすがにここまでひどくなかった。そう……おそらく先日の一件以来だ。

理由はわからないが、このように微妙に距離を取られるようになったのだ。

「レスト？」

未だ無言を貫く彼に近づき、多少強引にその視界の中に入りこむ。

「っ！？」

するとそこでようやく私の存在に気付いたようで、レストは驚愕するとともにバツと勢いよく後ずさった。

（そんなに 勢いよく避けることないじゃないか……）

そう思わないでもなかった。

いや、今のはいきなり近づいたから、それで驚かせたのかもしれない。

気を取り直して、今度は警戒心の強い野良猫に近付くがごとく、慎重に一步を踏み出す

「……………」

「……………」

……結果は同じだった。いや、なお悪い。

まるで狂暴な魔物に遭遇したがごとく、ジリジリと後ずさるレスト。その表情は、ひどく強張っている。

そのまま無言の攻防が数分続いたが、結局近づけば近づくほど逃げられることが証明されただけだった。

（なんだか……傷つくな）

明後日の方向へと固定されたその顔を、困惑気味に見つめる。

よく見るとレストのそれは、このままではタコの仲間入りを果たすんじゃないかというくらい、真っ赤だった。

もしや熱でもあるのか、それともやはり“あれ”に対する怒りか。

「レスト、やはりこの前のことを怒っているのか？ 確かに、いきなり飛び降りてきて怪我までさせてしまったのだから、怒るのも当然だが」

「い、いや、違う！」

……違うらしい。

しかし、だとすればこの不可解な態度はどこから起因しているのだろう。

これまた無言で先を促すと、レストは不承不承といった様子で口を開いた。

「それは」

「それは？」

「……………だ、誰か来たようだぞ」

どうにも話を逸らされた気がしないでもない。

だが、いいところで邪魔をしてくれた人影は、確かにこちらを指して歩いてきた。

「やあ、アリア・セレスティさん」

にこやかにあいさつをしてきた人物は、失礼だがあまり印象に残らなそうな顔をしていた。

だからむしろ顔よりも、なぜ自分の名前を知っているのかという方が気になった。

「……どうも。あなたは？」

「今回君のサポート役を務めさせてもらう6年生のギャスパ・ウツド・オークだよ」

サポート役……確かにそんな話は聞いていた。

召喚の儀式には時に危険が伴う。だから一人一人に先輩をつけてその補佐をしてもらう、という話を。

もともと自分には関係ないことだと思って、話半分に聞いていたのだが……この先輩が来た理由がわからない。

「そう、ですか。ですが、私には既に使い魔がいるのでー」

「ああ、知ってるよ。今回は見学だってね。まあ、便宜上一緒にいるだけになるけどよろしく。それでも競争率は高かったんだよ」

「はあ……」

そうして馴れ馴れしくも肩に手を置いてきた男を、どう扱えばいいのだろう。

こんなことならキラについてきてもらえばよかった。

助けを求めてレストを見れば、いつの間にか彼の方にも化粧の濃さそうな女の先輩がついていた。どうでもいいが胸がデカイ。

ベタベタと寄り添ってくる先輩に、レストは迷惑そうに眉を顰める。

……どうやらあちらはあちらで大変そうだ。

だから『お互い苦労するな』という意味合いを込めて視線を送ったのに……なぜか目があつた瞬間すごい形相で睨みつけられた。

(……………あれは、まずい)

やはりレストは怒っている。

しかも、あの彼がこんな殺気まがいの視線を送るなんて、これはただごとじゃない。

今のところ特に身に覚えはない。ないが、王子でありながらおそろく私たちの中で一番常識人なのがレストだ。

その彼が怒る時はいつもそれなりの理由がある。

たとえばキラがお菓子を奪ったり、ライルが悪戯をしたり、フィルがむやみやたらと女子を口説いたり、などなどだ。なんだかしょうもないことばかりだが、それでも彼は律義に雷を落とし続けている。

でも、そこにはいつも“優しさ”があつた。怒られる方もそれがわかつているから全くへこたれないのだ。その証拠に、ライルなんて『あいつは怒るのが趣味。まあ、愛故のお叱りってやつさ!』と

Vサイン付きで語っていた。

だから、自分もいつかその愛ある怒りを受けたいなと密かに思っていたのに……

そんな彼が、殺気混じりの憤怒を露わにしている。そこにいつもの“優しさ”は感じられない。これすなわち緊急事態だ。

きっと私が何か彼の逆鱗に触れることをしてしまったのだろう。このままではギョール伯爵令嬢の二の舞になる。

（早急に原因を究明すると同時に、関係改善のための策を講じないと……）

そうして誰に相談しようかと思案に耽っていると、フラスト先生がよく通る声があたりに響いた。

「よし、全員配置についたな。じゃあ、事前に教えたとおり詠唱を始めろ」

「……はい！」「……」

ついに儀式が始まるようだ。

目下の問題はひとまず置いておこう。

友人たちの晴れ舞台を見届けるためにも……

5章 第1話「召喚の儀」（後書き）

今回の突っ込みは「レストお前いくつだww」でしょうね。
うちの王子は初心にもほどがあります。

あ、ちなみにレストの使い魔設定ちよつとだけ変えました。
クール 自由奔放に。

とはいっても彼女が登場するのは、結構後になる予定だったりしますが……

明日にはもう1話あげれるように、今から頑張ります！

第2話「対面」（前書き）

ぎ、ぎりぎりセーフ。

第2話「対面」

召喚の儀については、昔とそれほど変わっていないらしい。

召還者は一人につき一つの召喚陣を用意し、特殊な詠唱と魔力を介して地界と天界をつなぐ。一方天界の聖獣・神族は己の好みの魔力を探し、それに呼応する。基本はそんな流れだ。

ある種お見合いのようなものだが、その違いとして、基本的に召還者は己の力量以上の相手は呼べないこと、そして言い方は悪いが返品不可ということがあげられる。

【来たれ我が友 この呼び声に応え いざ儚き人の生を 我と共に歩まん】

高々とした詠唱がされ、各々の召喚陣は発光を始めると同時に、その輪郭をぼやけさせた。

生徒たちは少しの不安と、それ以上の期待を滲ませながら、緊張した面持ちで己の陣を見守る。

おそらく今天界では、それぞれの聖獣・神族たちがどの呼び声に応えるか選定している最中だろう。

そうして、永遠にさえ感じる数秒を経て、校庭のあちこちで幻想的な光が生まれ始めた。

七色の光溢れるこの瞬間は、この世で最も美しいといわれる光景の一つだ。

そして、これは合図でもある。

待ちに待った対面の時が、ついにやってきたのだ。

未熟な魔法使いたちは、大きな歓声とともに唯一無二の相棒を迎える。

「きゃあ、かわいいー！」

その聴き覚えのある黄色い声に、意識が引つ張られた。はしゃぎながら駆け寄ってきたのは、初めての女ともだち兼親友だ。

「アリア、見て見てー！」

「クー、マスター、スキ、スキ」

大興奮のミアの肩には、小さなリスのような生き物が乗っていた。どうやらク という名前らしい。

その長い耳と尻尾を包むふさふさとした茶色の体毛は、土属性の証拠である。

言葉が片言なことから、おそらくまだそれほどの力を持つてはいないようだ……召喚した主があれだけ喜んでいるのだ。聖獣冥利に尽きるというものだろう。

聖獣の方にしても、最初からあれだけ懐いてるのも珍しい。相性が良い証拠だ。

ぴょんぴょん跳ねる相棒と、さつそく戯れるミア。その幸せそうな姿に、自然と笑みがこぼれる。いいパートナーに巡り合えたようで、本当に良かった。

そのミア達の奥では、美人の先輩と一緒に、女好きの彼がパートナーを迎えているところだった。

「わらわはサラスティ。新しい主はおぬしかえ？」

「おお、これが俺の使い魔！？　なんて美しい！！」

諸手を挙げて歓迎しているのは、フィルだ。

その使い魔は、鱗のない魚のような外見をしていた。水の様に半透明な身体といい、おそらく属性は見たままだろう。

大きさは大型犬と同じくらいだが、その身体はふよふよと空中に浮いており、なかなか珍しいタイプであることが窺い知れる。

その透き通るような青色の身体は、太陽の光に反射することで天上に輝く星のような煌めきを放っていた。綺麗なものが大好きなフィルにとっては、うれしい限りだろう。

だが、呼び出された聖獣はといえば……己を褒め称える主を一瞥した後、冷ややかにこう呟いたのだった。

「これはまた……なんともアホそうな主をひいてしまったのお」

ベースが魚ということでわかりにくい……心なしか、うんざりした顔をしている気がする。もしかして、前の主もこんなだったのだろうか。既にその周りには、そこはかとなない哀愁が漂っていた。

それにしても、出会って数秒でフィルの本性を見抜くとは……なかなか賢い聖獣だ。

おそらくその声色から雌だとは思うが、早くも主を尻に敷きそう

な様子に、不謹慎ながら安心した。なにせ、あのフィルの暴走を止めてくれる女房役が参上してくれたのだ。周りの人間にとっては、これ以上ない僥倖である。

もつとも使い魔にとつては、たまったもんじゃないだろうが。

まあ、こういうこともある。

使い魔は主人の魔力は選べても、外見や性格までは選べない。逆もまた然りだ。涙をのんで諦めてもらうしかない。

……そういえば、他の人はどうなったのだろうか。

あたりを見回せば、少し離れたところで一際大きな光が生まれたところだった。

「すげえ！ 神族だ！！」

周りのクラスメイトから称賛をもらっているのは、二人目の女ともだちローズだ。

見れば仔馬ほどの大きさだった火蜥蜴が、ちょうど人型へと姿を変えている最中だった。

まばゆい光の中から現れた男性は、人間でいうところの30代くらいだろうか。

落ち着きはらったその顔は、百戦錬磨の將軍のような風貌をしていた。

海の青を宿した双眸に後ろに流した深紅の髪は、その荘厳さを一層際立てており、立派な体躯と勇猛さを兼ねそろえたその姿は、非常に頼もしい存在に見えた。

さすが火の精霊に愛されているだけのことはある、といったところか。

だが、そんな誰もが憧れる神族を呼び出した本人は、上から下へとその姿を見下ろした後、一言こう呟いたのだった。

「……かわいくないですわ」

「そりゃないよ、お嬢さん」

一見厳めしいその顔も、笑うと一転親しみやすいものへと変貌した。

にしても……さっそく逆の例が現れたようで、苦笑いを禁じえない。

まあ、ローズも悪気があって言ったわけではないだろう。

神族が人型となった時の見た目は、本当に多種多様だ。

彼らには老人から幼児まで幅広い外見が存在するが……ややこしいのが、そういった見た目が必ずしも中身の年齢と連動していない点にある。老人の姿をとっていても、神族としてはまだ若いなんてことはしょっちゅうあるのだ。ついでに服については、それぞれの神族が、人間のそれを参考にして魔法で形成していると聞く。

どちらにせよ詳しいことはわかっていないが、通説ではその神族の精神年齢と同じ見た目をとっているのではないか、と言われている。

そんなとりとめもないことを考えていると、肩に手を置いていた先輩（既に名前が思い出せない）が急に怯えたように後ずさった。

不審に思ってその視線の先を追えば、ローズに二言三言何かを告げた例の神族が、こちらに近づいてくるではないか。

「あなたがアリア様ですね。私はフラウ。フレイア様から“くれぐれもよろしく”と仰せ使っております」

強面の彼はそう言って、容姿に似合わず優雅に腰を折ってきた。
属性の頂点に立つフレイアが直々に言葉を交わすとは、思った以上
に上級の神族らしい。

いや、それよりも……あたりをきよろきよろしながら、慌てて頭
をあげるように促す。

「あの、普通にしてくれて構わない。それと私のことは誰にも」

「そうですか……わかった。誰にも言わないから心配は無用だ」

「ありがとう」

物わकारのいい神族でよかった。だが、安心する私をよそに、今
度はその主人の方が不可解な顔をしながら歩み寄ってきた。

考えてみれば、召還したばかりの使い魔が、主以外の人間に用が
あるなど普通ありえない。ともすればいろいろと疑われかねないこ
の状況に、少しだけ焦りが募る。

「アリアさん、先ほどから何を話していらっしゃるの？」

「な、なんでもない。ただのあいさつだ」

慌てて誤魔化す私を不思議に感じたのか、ローズがなおも何か言
おうとした、その時……今度は大きな爆発音が校庭に轟いた。

「し、失敗だ！！ 中止しろ！！」

焦燥混じりの怒声が、事態の深刻さを物語っている。

それだけで何が起こったのかを理解できた。稀にあるのだ……“逆流”が。

それは召喚の儀式が危険といわれている所以でもあり、現に過去数人が犠牲になっている事故でもある。天界と地界をつなぐ召還陣が逆流を起こしてしまい、召還者が天界に呑み込まれてしまうのだ。

もとより『中止しろ』なんて言われて中止できるものではない。助けるには周りの人間の助力が不可欠なのに……全くサポート役の人間は何をしているのだ。

そうして憤慨しながら音のした方に顔を向けると……目に飛び込んできたのはとんでもない光景だった。

「っライル!？」

すこし離れたところで、汗を流しながら必死に抵抗しているのは、さつき笑顔で別れたばかりの友人だった。

今はなんとか踏ん張っている状態だが、その顔色は目に見えて悪くなっていく。

「あれは……まずいな」

あのままでは最悪天界に引つ張られて、戻ってこれなくなる。

しかもライルについている先輩は、初めての経験でパニック状態になっており、役に立ちそうにない。本当に、なんのためのサポート役なのかわかったもんじゃない。

心の中で悪態をつきながら、急いであたりを見回す。

教師は……ずいぶんと距離がある。あれでは間に合わないかもし

れない。

今一度ライルのほうを見れば、既に片足が魔法陣に呑みこまれているところだ。

もはや一刻の猶予もない状態に、気付けば己の体は突き動かされるように行動を開始していた。

「ちょ、アリアさん!？」

後ろから名前を忘れた先輩の声がするが、構っている暇などない。
“ともだち” 第一号を救出するために、混乱する生徒たちの間を縫うように駆けぬける。

「ライル!」

「アリ、ア? …… つダメだ、来んな!!」

両足を埋めた状態ながら、ライルは首を振って突き放すようにそう叫んだ。

今も、彼の身体はまるで蟻地獄にはまったかの様に、徐々に陣へと呑みこまれている。その恐怖といたら…… きっと計り知れないものがあるだろう。

それなのに、こんな時にも関わらず他人のことを気遣う男を、心底馬鹿だと思う。だが、そんな馬鹿だからこそ、助けてやりたいのだ。

ライルには悪いが、『来るな』と言われてその通りにするほど、私は従順な女ではない。

「いいからそこで待ってる! 今行く!」

「……っ、こんのわからずや！ 馬鹿っ子！！」

苦い顔をしたライルは、悪態をつきながら必死に身を擦じって召還陣から抜け出そうとする。

幼児みtainな悪口に一瞬力チンときたが、残念ながらその程度のこと引き返すつもりなど毛頭ない。

おそらく非常に危険な作業であることを彼も知っているのだろう。なにせ下手をすれば二人仲良くお陀仏だ。

……全くもって、馬鹿な男である。だが、今はその馬鹿さ加減が余計だ。だから、つついっちらも声を荒げてしまう。

「なんとも言え！ そっちこそ素直に助けろとは言えんのか、阿呆！ いいか、まずはこれ以上むやみに動くな！ あと、何を言われても引き下がるつもりなんてないからな！ わかったらそこで黙って待つてろ、馬鹿者！！」

未だかつて言ったことのない悪口に自分自身驚きながら、召還陣の前で魔力を全身に纏い準備する。

さすがのライルも己の喧噪に二の句が告げないのか、今度はポカんとした顔で突っ立っていた。もっとも下半身はもう呑みこまれていたが……

しかし、むしろ好都合だ。これで作業がやりやすくなった。

これからすべきことを頭の中で反芻しながら、意を決して魔力でコーティングした足を踏み出す。暴走する召還陣を踏み、慎重に両足をその中へと入れる。

その時だった。

足元の魔法陣が、突如として発光を始めたのだ。

「え？」

そして、『なんだ』と思った次の瞬間、己の視界をすさまじい光の奔流が埋め尽くした。

「なっ！？」

目が焼かれそうなほどの圧倒的な光の奔流が、真昼の校庭を浸食する。

私は、何もしていない。こんな事態は初めてだ。
いまだかつてない経験、そしてあまりにも唐突に起こった珍事には、さすがに対処の仕様がなかった。

そうして、おそらく数秒が経った頃だろう。
舞い上がっていた砂埃が晴れた後、突如として現れた“それ”に
場の空気が凍りつくのを感じた。

「なに、が……起こったんだ？」

至近距離であまりに眩しい光を浴びたため、まだ視覚がうまく機能しない。

未だクラクラする頭を押さえながら、仰向けに倒れていた身体を無理やり起こす。まずは、状況確認が先だろう。

……あたりは、随分と騒然としているようだった。

瞬きを繰り返しながら、残された感覚器官を働かせると、生徒たちの悲鳴のような声が耳へと入ってくる。

「あ、あ……！！」

「うそ！？」

「ど、どうしてこんなのが出てくるんだよ！？」

その声につられ、ようやく回復してきた視界とともに顔を上げる。さきほどから感じていた強い気配は、己の目の前にあった。

「……なんだ？」

大きな“何か”がそこにいるということはわかる。

未だばやける視界を、今一度強く瞼を閉じることで矯正する。そうしてなんとかその焦点を結ぶことに成功し、今度こそは、と思いながら前方へ目を向ける。

……翳る光の中から姿を顕したのは、想像だにしない生物だった。

天に届くのではないかというほどの、巨大な体躯。

エメラルドのように輝く鱗。頭頂部から生える猛々しい二本の角。鋭い爪に瞳孔の開いた瑠璃色の瞳。そして背中から生えた力強い翼……その全てが、ある一つの生物を表す特徴だった。

天界最強の生き物。

その力は並み居る聖獣・神族の頂点に君臨し、大精霊にすら匹敵するといわれている。

人ごときに召喚できるはずがない、孤高の存在。

その名は

「ドラゴン……?」

第2話「対面」（後書き）

フィルの扱いがひどくてすみません（笑）
でも彼は基本こんな扱いです。

ちなみに皆さんの使い魔が好きですかね？

私は、フラウがお気に入りです。ダンディ最高！！

そして、ついにファンタジ 定番の生物を登場させることができました。

もし、”ドラゴン” ってきて「あっ！」って思った人がいたら、
すごいです。

もう裸踊りしそうなくらい、すごいです！意味不明ですいません。
この真相は次の次あたりで明かされると思います…… たぶん。

第3話「正体」(前書き)

相変わらずサブタイトルはテキストです。

第3話「正体」

「に、逃げたほうがいいんじゃない？……！？」

「いや、ドラゴンが本気を出したら学園ごと吹き飛ばされる。どこに逃げようが無駄だ」

冷静なフラスト先生の忠告に、既に腰の引けているフィルは絶望と同時に若干の安堵を覚えたようだ。

だが注視してみると、そう言った先生の顔は苦々しく、額にも脂汗が滲んでいることがわかる。それは、今この状況がどれだけ危険なのかを如実に表していた。

今まで生徒が呼んだ聖獣や神族は、できたばかりの主を守るように寄り添うが、その怯えはこちらにまで波及している。ドラゴンの持つ圧倒的な威圧感は、彼らから戦う気力を根こそぎ奪っていたのだ。もはや、既にその大半が戦意喪失に近い状態にあるといっても過言ではない。

「で、ではどうすればいいのですか！？」

「は、話し合いとかはどうかな！？」

ミアとローズは、お互いを励ますようにがっちりと抱きしめあっている。

その前方には、さきほど二人が召還したばかりのクーとフラウの両使い魔が鎮座していた。

全身の毛を逆立て威嚇するクーに、「お前さん、ちつこいのになかなか度胸があるな」とフラウが感心したように腕を組む。こちらは貫禄の佇まいだったが、その瞳がこの場にいる他の誰よりも獰猛な光を宿していることに気付けた者は、はたして何人いただろうか。

その横ではレストがようやくといった具合に、腕に張り付いていた巨乳先輩を引きはがしたところだった。

……どうやら、彼女のおかげで身動きがとれなかったらしい。よく考えれば、そうでもなければ友人想いの彼が、ライルの危機を見過ごすはずがなかった。

だが、そうして解放された彼もさすがにこの事態には手をこまねくしかないようだ。

「さて、話し合いができればいいがな。だが」

その先は、言わないでも皆わかっていた。

ドラゴンは人に召喚されない。召喚できない。

誇り高い天界の王者。絶対的強者。そんな彼らが、人間の言葉に耳を貸すはずがない。

なにせ、過去には奇跡的にその召還に成功した主を殺したという逸話まであるのだ。

しかも今回は、召還が成功していないにも関わらずこの場に現れた。この時点で既に状況は絶望的だ。

（やるしかないか……）

静かに覚悟を決めていると、後方にある校舎の陰から聞き慣れた軽

い足音が聞こえた。

小さな体を疾駆し、半ば押しのけるように人波をかき分け現れたのは、もちろん相棒だった。

あいもかわらず来るのが早い。……できればもう少し遅れて来て欲しかった、というのが本音だ。

「ご主人様、さっき大きな魔力を感じ……て、ドラゴン!？」

さしものキラも天界最強の存在には、戸惑いを隠せないようである。だが、驚きに目を見張ったのも束の間。すぐにその目を険しいものへと変え、一步前へと踏み出した。

「ご主人様は下がっててください」

彼の蒼い瞳には、最強の王者へ命を賭けて立ち向かおうとする気概が感じられた。

そうして一步前に行くその小さな背中に、何とも言えない安心感が募るが……ここで甘えてはいられない。

「いや、私がやろう。下がってるキラ」

そう言つて、さらにその一步前へと躍り出る。

同じ聖獣・神族なら、彼らがどれだけ強大な存在か本能でわかっているはずだ。それを押してもなお守ろうとしてくれるキラには、感謝もするが……同時にあまりにも危うい。できればもっと自分のことを大事にしてほしい。それほど危険な相手なのだ。

だが、そうは言ったものの、正直勝てるかどうかは怪しいところだった。

以前ならともかく、今はなによりも魔力が圧倒的に足りない。節約

して使うことになるが、果たしてそんな余裕があるのかすら怪しいのが現状だ。

さらに、ここにいる人間全員を守りながら戦うことを考えると、かなり厳しいものがある。

最悪大精霊の力を借りることになるだろう。この場で彼らを呼べば、追及は免れないが……それでも死ぬよりはマシだ。

座して死を待つつもりなど、毛頭ない。

乾坤一擲。それこそ死力を尽くして、血路を開く。

それが己の使命のようにさえ感じていた。

……300年前は感じなかったこの感情を、なんと呼べばいいのだろう。

「全員さがれ！」

担任の鋭い声が、己の思考を遮る。

確かにおかしなことを考えている場合ではなかった。敵はすぐ目の前にいるのだ。

その敵……ドラゴンといえば、なぜか現れてからずっとこちらを見つめていた。

瑠璃色の瞳がまるで何かを見極めるように、細められる。

もしや完全にターゲットとされたのか……この場合はむしろ望むところだ。

どうにか人気のない所にまで誘導できれば万々歳といったところか。そうすれば、大精霊だって気兼ねなく呼べる。

だから、挑発の意味合いも込めてあえてその一步を縮めた。

「アリア、だめよ！ 逃げて！」

「セレスティ！」

「アリアさん！！」

ミア、レスト、ローズが必死に自分を呼ぶ。安心させるように視線で『大丈夫だ』と伝えるが……どうやら逆効果のようだ。それぞれ先輩に羽交い絞めにされながらも、今にもこっちに駆け寄って来そうだった。これは早めに片をつけなければ。

ちなみに、非常にどうでもいいことだが、フィルは脱兎のごとく逃げ出していた。まあ、だからどうということでもないが……彼の使い魔サラスティが呆れたようにその背中を見送っていたのが、やけに印象的だったただけだ。

そうしていると、不意にバサリという羽音が上空から聞こえた。どうやら、挑発に乗ってくれたようだ。

“それ”は膠着状態を崩すように、大きく羽を広げて何かの予備動作をし始めた。

その様子に、こちらもゆっくりと身構える。前方を睨んだまま静かに魔力を集束させて、来るべき時に備えた。

「キユオオオオオ　！！！！」

意外とかわいらしい声を上げながら、天に向かって咆哮するドラゴン。

その周囲には竜巻のように風が渦を巻き、巻き込まれた砂が己の視界を奪った。

「っちー!!」

思わず舌打ちが零れる。ドラゴンともあろう存在が、やけに姑息な手を使ってくる。

視界の利かない中、いつでも魔法が放てるように身構えていると、不意に前方に強い気配が現れた。

思わず攻撃しかけるが……気配の持ち主があまりにも小さくて一瞬躊躇ってしまった。

……それが命取りだった。ある意味。

突如として腰辺りにドスツとした衝撃を受ける。「うぐっ」という乙女にあるまじき悲鳴が出るが、誰にも聞かれなかったようで良かった。

それでも思いもよらない攻撃(?)に、堪らず尻もちをついてしまった。

「っっー体なん、だ?」

出鼻を挫かれた、とでもいうべきか。

地面に手をつきながらも、苦い感情が胸中に広がるのを押さえられない。もし今攻撃を仕掛けられたら、一巻の終わりだ。

(早く体制を立て直さない)

だが、そうして腰を上げようとして、ようやく妙な違和感に気付いた。

なぜか、己の腰元に質量を持った温かい感触があるのだ。

『おかしいな』と思いながら、そのまま視線を落とすと……………」
少女がいた。

ギョ　と自分にしがみついている。

(……………なぜこんなところに少女が?)

この校庭は、現在ドラゴンのいる超一級の危険地帯だ。こんないた
いけな少女が居ていい所では、断じてない。

(……………ああ、迷子か)

……………いやいやいや、迷子がこんなところにいるはずがない。馬鹿な
考えをすぐに否定する。

ひどく混乱しているのは自覚しているが、それにしてもあまりにも
非現実的な思考をしている。

いったん深呼吸をして冷静になろうとするが……………その前に次なる混
乱が起こる方が早かった。

件の少女が、目をウルウルさせながらこちらを見上げてきたのだ。
可愛い桃色のワンピースを着た少女は、感極まったという表情
で口を開く。

「やっと会えた！　お姉さま!!」

「……………は?」

そのまま、すりすりと頬を寄せてくる。その身体はキラよりもさら
に小さく、おそらく5歳ほどだろう。短い手足を最大限に伸ばし、
一生懸命しがみ付いてくるその姿はひどく愛嬌を誘う。ただし、こ

んな事態でなければ、だ。

少しだけ冷静になった頭で、今一度謎の少女の容姿を観察する。
エメラルドのような光沢のある髪は、足元近くまで伸びている。人間ではさすがにありえない色だ。そして、その零れ落ちそうなほど大きな瞳は、さきほどまで見ていたどっかの最強生物と同じ濃い瑠璃色。

ここまでくれば、自然とその正体も推察できるというものだった。

……だが、どう考えても詐欺だろう。声を大にしてそう主張したい。

「セレスティ、その少女は？」

「おそらく、さきほどのドラゴンかと……」

担任の問いかけに、こめかみを押さえながら答える。

あんまりと言え、あんまりなその見た目のギャップに、つい自信なさげに言ってしまったが……この波動は間違いなく、ドラゴンのものと同じだった。

「マジか!？」

「まじだ」

召還陣を挟んだ向かい側でライルが、驚いたように叫んだ。彼もさつきまで目の前にいた巨大な生物が、一転少女になったことにはかなり驚愕したようだった。

お互い尻もちをついた間抜けな状態だったが、とりあえず儀式に失

敗した影響は消えたようである。いつも通りの元気そうな姿に安心した。

……だが、問題はこちらだ。目の前では、早くも少女と少年の喧嘩が勃発していた。

「ちょ、こら！ お前、ご主人様から離れろ！」

「いーやあ！ お姉さま〜！」

いち早く正気を取り戻したキラは、用意していたらしい闇魔法を解いてすぐに駆け寄ってきた。その気配から、随分大規模なものを張っていたらしいことがわかるが、彼も殺気がない上に見た目が“これ”では、さすがに攻撃を躊躇ったのだろう。

それでもこの少女がしがみついている状況がどうしても許せないらしく、今は違う手段を敢行している。

口にするのも馬鹿らしいが……少女の足を掴んで、私からひつぺはがそうとしているのだ。

一方必死の抵抗を試みる少女は、そのか弱い見た目に反して、手の力だけで私の腰にしがみ付くという力技を披露した。胴体を含む下半身は完全に浮いているにも関わらずだ。ちなみに、実はこれが結構痛かったりする。

それにしても……これまたなんとも間抜けな構図だ。いろんな意味で、さっきまでの緊迫感が台無しだった。

ギャーギャー騒ぐ二人を前に、眩暈と頭痛の二重苦に蝕まれながら

も、なんとか意識を保つ。

あまりにも常識の埒外というべきことが続いたせい、すでに普通の感覚が麻痺しつつあった。

今なら魔王が復活しても、驚かない自信がある。

……だが、いつまでもそんな現実逃避を続けるわけにはいかない。まずは深いため息をついて、次に憤るキラを宥め、最後に少女を立たせて目線をしっかり合わせる。そしてさっきから気になっていた最重要事項を訊く。

「なあ、どうして私が“お姉さま”なんだ？」

「だってルナを助けてくれたもん！」

爛々と瞳を輝かせた幼女は、元気よくわけのわからないを言うてくれた。……また現実逃避したくなってきた。

どうやらこの幼女の名はルナというらしい。それがわかったただけでもまだマシか。

“助けた”とは言っているが、やはり身に覚えがない。いくら幼女の姿とはいえ、あれほど巨大な力を持つドラゴンを忘れるはずがないだろう。

そもそもここで目覚めてからまだ1カ月と少ししか経ってないのだ。その間のことすら忘れてるなら、自分の脳を疑うところである。

「すまないが、記憶にない。人違いじゃないのか？」

「そんなことない！！ お姉さまの魔力は忘れたことないもん！ ずーと待ってた！」

「ずっと、って……」

その単語がどうにも引つ掛かった。
今一度、記憶を根底から掘り返してみる。

（ずっと、昔、待ってた……）

そうして奥底に眠らされていた一つの箱に辿りつこうとしたその時、
横合いから見事な邪魔が入る。

「ちょっと、さっきから聞いてればなんなのさ！ ご主人様は君のお姉さんじゃないんだよ！」

主人の思考を遮って吠えるキラに、幼女……ルナはようやくまともに視線を合わせる。

「あれ、あなた……？」

コクリと首をかしげたルナは、もはや犯罪的に可愛かった。
なにせそのあまりにも無垢な瞳には、あのキラでさえも怯むほどだったのだ。

「……な、なに！ なんか文句でもあるの！？ い、いつとくけどご主人様は僕のだからね！！」

幻想に打ち勝つように、両手に腰を当て、胸を張って堂々と“自分のもの”宣言をするキラ。

……正直に言おう。恥ずかしいからやめて欲しい。

それに負けじとルナも真似をして、両手に腰を当て始めた。

だが、その姿は可愛らしいの一言に尽き、いかんせん迫力に欠ける。まあ、それはキラにしても同じだった。

「ち、違ふもん、私のだもん！　あなたより前に会ったんだから！」

その後小声で「たぶん」と付け加えたのは、おそらくキラには届いてないだろう。

彼はまるで裏切られたかのように顔を向けてくる。

いや、そんな風に見られても……一体私にどうしろと？

しかし……まさかこつちも“自分のもの”を主張し始めるとは、一体どういうことだろう。

どうにもおかしいな利権争いが勃発しているが、それ以前にこいつら私をおもちゃかなにかと勘違いしてないだろうか。もはや気分は、勝手にやってる状態だった。

むしろそうした不毛な争いよりも、気になったのがルナの最後の言葉だ。

（キラよりも、前？）

キラよりも前と言ったら、それはつまり300年前の話に遡ることになる。

（キラよりも前、ドラゴン……）

そうして、今度こそあと少しでわかりそう、という時にまたまた邪魔して来たのは、やはりというか相棒だった。今日はこんなのかりだ。

「ご主人様、どういうことですか！？ 僕の前にもいたんですか！？ そんなの聞いてないですよ！！ ちゃんと説明してください！」

まるで煮え湯を飲まされたかのように、キラが恐ろしい形相で詰め寄ってくる。

随分と興奮しているのか、普段はしないくらいの勢いで強く肩を掴まれブンブンと前後に揺すられた。

(……………なんだ、この修羅場は)

何も悪いことはしてないはずなのに、この糾弾。

揺れる視界の中で一人遠い目をしていると、今度は耳に随分とくつろいだ声が入ってきた。

「まるで、浮気現場を発見された恋人みたいじゃね？」

「ええ、私にもそう見えますわ」

「なんか和むねえ」

「まったく、人騒がせな……………」

「ドラゴンが幼女……………も、萌える！」

最後のは名前を忘れた先輩のものだが……………なぜかいたく気持ち悪かった。

どうやらルナのほのぼのする外見も相俟ってか、場は既に見世物と化しているようだ。

野次馬たちは呑気に見学と洒落こみ、この愛憎模様(?)入り乱れる修羅場を楽しんでいるかのようにさえ感じられる。

……………なんだかさっきまで血路を開くとか、死力を尽くすとか考えて

たのが、猛烈に恥ずかしくなってきた。
あの決意を返してほしい。

そして、傍観を決め込む友人たちに言いたいことは、ただ一つだった。

「……………誰か助ける」

さっきは危険を冒してまで助けようとしてくれたのに、この変わり様はなんだ。

どうしてこう、切実に助けてほしい時に助けてくれないのか…………どうにも理不尽だ。

そうして、静かに天を仰ぎ悪態をつく。

本日の天気も快晴。

視界に入ったのは……………これまた憎たらしいほど綺麗な空だった。

第3話「正体」（後書き）

ちなみに「キユオオオオ　！！！」ってのは、人間でいうところの「よっしやああああ！！！」みたいなものです。

そんなわけなので、ルナはちゃんとドラゴンの時も話せたりします。

さて、ようやく序章で蒔いた種を芽吹かすことができそうです。

ここに来るまで、すんごい長かったー！！

第4話「怪我の功名」(前書き)

ぎりぎりアウトですね………すみません。
そして今回もなぜか長いです………すみません。

第4話「怪我の功名」

遠巻きに眺めている連中に期待しても、きっと無駄だろう。ここは開きなおるしかない。

もう助けを求めるのはやめだ。300年前を思い出せ。いつだって一人でやってきたじゃないか。

どんな窮地に追い込まれても、誰の力も借りずに生きてきたのだ。きつと今こそ、その経験を最大限に生かすべき時に違いない。

そう、事態は己が力を持って打開するしかないのだ。

決意も新たに騒動の中心にいる二人へと意識を向ける。

今度こそ、このドラゴンの正体を掴んでみせる。そして、一刻も早くこの混沌と羞恥が入り混じる空間から脱出してやるのだ。

……そう、例えそこに早くも決意を翻したくなるような、脱力ものの光景が広がっていても、だ。

視線の先では、幼少コンビがまたわけのわからない自慢大会を開催しているところだった。子どもの様に……いや、実際見た目は子どもだが、本来はそんなことをする歳でもない彼らは、周囲の母性溢れる生温かい視線に気づくことなく、二人の世界に入っていた。もちろん、そこに甘さなど欠片もないことは言うに及ばず、だ。

「ルナは、お姉さまのためにずっとしゅぎょーしてたの！ ぜったいあなたより強いんだから！！」

「ふん、そんなのやってみないとわかんないだろう！ 第一、僕は君が天界でまったりしている間もず　つとご主人様のそばにいたんだからね！」

「ル、ルナだつてあの時弱くなかつたらずつと一緒にいたもん！それに“かりけーやく”だつてしてるんだから！」

「でもそれは昔の話でしょ。後から押し掛けて来たくせに、僕のご主人様をとろうなんて考えが甘いよ！まあ、当のご主人様だつて覚えてないようだしー」

「お、お姉さまはちゃんと覚えてる！ルナに優しくしてくれたし、頭もなでてくれたもん！」

「へーんだ、それくらいで自慢されても困るね！僕なんて、一緒にお風呂に入つたことだつてあるんだぞ！」

「！？」

言つに事欠いて、なんてことを言いだすんだこいつは。なにより、その勝ち誇つた顔を今すぐやめろ。イラツとくる。

ルナにしても、そこは悔しそうな顔をする場面じゃないだろう。明らかに反応するツボを間違えている。

ともすれば、10歳の少年が5歳の少女を言い負かしたともとれるこの状況。世間的には決して褒められたことではないが、なにせこのほのぼのとした雰囲気の中だ。体裁よりも、むしろキラの爆弾発言の方に興味が引かれるのは仕方のないことかもしれない。

案の定というか……最後の一言にギャラリーがざわつき始めた。そして、彼らを代表するように、ライルが驚愕混じりの確認を投げかけてくる。

「マジか！？」

「まじじゃない！断じて違う！」

まったく誤解も甚だしい。いくら相手がキラでも、さすがに風呂

まで一緒に入るわけがないだろう。

ただ単に、こいつが勝手に乱入してきたただけだ。しかも300年前、まだ子狼だった頃に……あんなものは無効に決まっている。

……というか、よく考えれば、内容もいろんな意味でギリギリではないか。うっかりばれたらどうしてくれるのだ。危ういにもほどがある。

これ以上余計な話を話す前に、一人悦に入っている馬鹿の口を塞ぐ。「んー！ ふごーー！」と何か喚いているが、完全に無視した。主人の心臓に多大な負担をかける使い魔に容赦など無用だ。

……ともかく、これでようやく落ち着ける。この馬鹿馬鹿しい争いに終止符を打つためにも、記憶を掘り起こす作業を再開しなければ……三度目の正直だ。

（ずっと待っていた、キラよりも前、ドラゴン……ドラゴンといえ
ば）

そうして、せっせと掘った先に発見した記憶の箱を、今度こそこじ開けてみる。

苦勞の末に見つけたものは……遙か昔の邂逅だった。

「もしかして……あの時のドラゴンの幼獣か？ 密猟者に追いかけられていた……？」

「そう！ やつと思い出してくれた！ お姉さまにおんがえしたくてずっと待ってたのー！」

よほど嬉しいのか、ルナはピョンと一跳ねし満面の笑みを浮かべ

た。

(……なるほど、ようやく合点がいった)

300年と2年ほど前だっただろうか。確かにキラと出会う前に、ドラゴンの子どもを助けたことがあった。

地界に落ちてきた典型的な“迷子”。

当時は両手で抱きあげられるほどの大きさだったのに、まさかあれほどの巨体に成長するとは、夢にも思わなかった。気付けなかったのも無理はないだろう。

それにルナの言った通り、あの時天界に還すための仮契約も結んだ。おそらく、その時の契約がいまだ有効なのだ。それを通して、私が生きていることも知っていた……というわけか。

しかし……だとすればキラに負けず劣らず、ものすごい執念である。

なにせ私がさつき召喚陣の上に立ち天界とつながっていたのは、時間にしてわずか数秒のことだった。ルナはその数秒で即座に私の魔力を感知し、逆流を押しつけて地界にやってきたのだ。

おそらくドラゴンでなければできない離れ業である。やはり、見た目に反して優秀であることは否定できないだろう。

「……で、セレスティ。事情はよくわからないが、このドラゴンはお前との契約を望んでいるのか？」

そんな風にようやく一息つけた所で、新たに波紋をよぶ一石を投じてきたのが担任だった。彼は周りの生徒たちとは違い、今のルナの外見にも警戒を解いてはいない。

さすがというべきか。いくら見た目が幼女でも、その正体は天界最強の生物だ。きちんとした契約が成されるまで油断しないその姿勢は、称賛に値する。

もつとも、私にとっては余計なひと言だったが……嫌な予感がひしひしとするのだ。

「……………そうなのか？」

ほとんど答えは予想出来ていたが、念のため問いかけてみる。案の定、目の前にいる幼女は、これまた元気よく肯定してくれた。

「うん！ “ほんけーやく” むすんでくれるまでかえらない！」

その言葉を聞いた瞬間、キラはジタバタ暴れて私の拘束を振りほどく。そんなに慌てて何をするのかと思えば……そのまま私の腰に後ろからしがみついていた。……何がしたいんだこいつは。

「だ、だめだめだめ！！ “ご主人様は僕の！”

一方ルナは、これまた対抗するように前から抱きついてきて……

「やだやだやだ！！ お姉さまはルナの！」

また始まった。本人を無視した無駄な所有権争いが。

しかも今度はサンドイッチ状態ときた。前後から力強く圧迫され、非常に息が苦しい。

こいつら私が呼吸を必要とする生き物ということを完全に忘れていないだろうか……あれか、もはや人権どころか生物としての存在

すら無視なのか？

少年と少女が低レベルな争いに、いい加減げんなりせざるを得ない。

なぜこんなにも子どもに好かれるのか……いや、問題はそこじゃないか。2人とも300年以上生きているのに、この幼さはなんだ。見た目は子ども、中身は300歳オーバーという残念なギャップ……こんなマニアックな趣向に、一体誰が得をするというのか。本当に頭が痛い。

「す、すごいじゃないかアリアさん！ ドラゴンと契約を結べるなん」

「先輩、ちよつと黙っていてください」

名前を忘れた先輩が興奮して話しかけてくるのを、八つ当たり気味に切り捨てる。悪いが、今は優しくする余裕などない。

なにせ下手をすれば、このままキラとルナの魔法合戦に発展しかねない状況だ。今はまだ口げんかで済んでいるが、いずれキラあたりが爆発するのは目に見えている。

こんな成りでも、実力だけは折り紙つきだ。もしこいつらが本気を出せば、被害は想像を絶するだろう。今の私が止めるのは、至難の業だ。

それを考えると、早めに決着をつけなければならない。

一度目を閉じ、そして固い決意と共にしっかりと開眼する……結論など最初から出ていたようなものだった。

申し訳なく感じながらも、眼下のエメラルド色をそつと撫でる。

「ルナ……すまない、私には既に手のかかる相棒がいるんだ。だからルナと契約を結ぶことはできない」

「ご主人様……！」

後ろの相棒が感動したように声を発するが、その理由はおそらくこいつが考えているよりもずっと切実だ。

……はつきりいつて、面倒見切れない。

キラ一人だけでもいろいろと大変なのに、そこにルナまで加わったらきつと私の身がもたない。

現にさつきから続く状況が、それを体現しているいい例だ。精神的にも肉体的にも無理だ。どう考えても捌き切れる自信がない。

それに、そもそも使い魔は一人につき一匹という原則なのだ。300年前ならいざ知らず、今それをやったら悪目立ちすること確実である。

それらを思量すると、ルナには悪いが他を当たってもらうしかない。

「や、やだ！ やだやだやだ……！」

ルナは小さな頭をぶんぶん振っていやがり、涙目でこちらを見上げてきた。その瞳はどこまでも無垢で澄みきっており、なんとも言えない罪悪感がちくちくと良心を突いた。

だが、ここは心を鬼にしてかからねば……駄々をこねるその姿に、言い聞かせるようにゆっくりと話しかける。

「ルナ、あの時の恩ならもういいんだ。どうか好きなように生きて

くれ……それが、私の願いだ」

それは本心だった。なににも好き好んで、私の様な厄介者の使い魔になることはないのだ。

ルナのような神族なら、きっと魔法使いの間でも引く手あまたに違いない。そうでなくても、天界で自由気ままに過ごしてくれてもいいのだ。いつまでも300年前の恩に縛られてほしくなどなかった。

キラにしてもそうだが……まったく義理堅いにもほどがあるだろう。

ルナも、納得はできないものの、おそらく私の意志が固いのを肌で感じたのだろう……口唇を固く結び、何かを考えるように黙り込んだ。

そうして、しばらく下を向いていた彼女は、一度ワンピースをギョツと握りしめた後、勢いよく振り返る。

「じゃあ、そこのお兄ちゃんと“けーやく”結ぶ!!」

その小さな指の先にいる人物は、まさかのご指名にポカンとしていた。

「…………へ？ 俺？」

私も全く同じ心情だった。どうしていきなりそうなるのか、意味がわからない。

「なんでライルなんだ？」

「お兄ちゃんともつながってるから!!」

間髪なく返って来た返事に一瞬思索し、そしてすぐに納得した。

(……ああ、なるほど)

おそらくそれは、私がライルの召喚……例えそれが失敗であったとしても、その途中で彼の召喚陣を踏んでしまったことに起因している。

基本的に、使い魔契約というものは、その聖獣や神族を召還した本人でなければ結べないものとなっている。理由は簡単。そうでなければ、己が力に見合った相手とは言えないからだ。

ちなみに私はその例外となる魔法を知っているが……まあ今はどうでもいい話だ。キラ以外に使う気もないし。

ともかく先に述べたルナの執念と根性のおかげで、結果的に二人の術者による不可思議な召還が成立してしまったのだ。

だから、私が拒んでいる以上私が主になるのは不可能だが、ライルにも主になる資格があるのは確かだ。加えて、ルナはライルにまだ使い魔がいないことを知っている。

そこで、ライルに主になってもらおうとしている、というわけだ。失礼だが、なかなか頭が回るようである。

「でも、俺ドラゴンが満足するほど魔力持っていないんだけど……」

「いい、ルナが勝手に来るから!!」

「あ……そう……じゃあ、いつか」

……もはやここまでくるとなんでもありだ。確かに今回も呼んでな

いのに勝手に来た。

普通使い魔は、主が相応の魔力を消費しその名を呼ばないと、地界に顕現できないものである。

だが神族になれば、自分の力で天界に還れるように、最上位の神族は契約を交わした主が地界にいるだけで、主が拒んでいない限りは自力で顕現することができるのだ。

それこそドラゴンの驚異的な力があってこそだろう。

しかし、あつけなく了承を返した“ともだち第一号”に、どうにも不安を隠せない。

なんといつても相手は“天界の暴れん坊”と呼ばれるドラゴンである。しかも自意識過剰でなければ、おそらくは私目当てでライルに契約を持ちかけているように見える。それはライルもわかっているだろうに……

「その……本当にいいのか、ライル？」

「んーまあ、いんじゃない？ 召喚には失敗しちゃったしな……それにさ、実は俺ドラゴンに乗るのがガキの頃からの夢だったんだよ！」

少年のようににはかむ彼は、むしろこの事態を歓迎しているようにさえ見えた。

普通なら一生叶うことのない壮大な夢。それが現実になりそうな予感に、ライルの目はキラキラと輝きを放っていた。

その瞳の奥には、ドラゴンという存在それ自体に対する純粋な好奇心があるだけだ。それを見て、なんだか安心した。

ちなみに、周りの「いーなー」、「ずりー！」という声も、その大半は男子のものであった。

……それにしても、数奇な契約もあるものだ。まあ、本人同士が納得しているのなら、もはや私が文句を言える問題ではない。それに、正式に主になれば、ある程度の命令には従ってくれる……はず。ただし、魔法使いの力量と、使い魔の能力差によるが……うん、多分現時点では絶対に無理だろう。

「わたしルナ!!」

「俺はライル。よろしくな」

そんな私の懸念など知る由もないライルは、ルナと目線を合わせた上で、その柔らかそうな碧緑の髪をなでた。

……意外と慣れている。そういえば弟妹がいると言っていたからそのせいかもしれない。

ルナも心なしに嬉しそうだ。どうやらライルのことを気に入ったらしい。

そうして改めて契約のための詠唱を終え、晴れて主従関係を結ぶに至った二人を眺める。

……そういえば、ルナは竜巻を起こしていたことからわかるとおり風属性である。その意味でいえば、風属性を持つライルにはぴったりの使い魔かもしれない。

「よろしくね、ライルお兄ちゃん!」

「お兄ちゃん、か……あー、なんだか妹がもう一人できた気分だわ」

「えへへ、じゃあ今日は疲れたからかえる! また来るね!」

現れたのも唐突なら、去るのも唐突だった。ルナは一瞬で召還陣

をつくり出し、その中へと消えていった。

……おそらく魔力の逆探知を使い半ば無理やり地界にやってきたせいで、かなり体力を使ったのだろ。なにはともあれ、ようやく静かになった。

散々場を引つ掻きまわしてくれた可愛らしくも強烈な台風が去ったことで、緩み切っていた空気はさらに弛緩する。

元の姿を見ていたせいかな……たとえ幼女といえども、そこにいるだけでドラゴンとしてのプレッシャーを醸し出していたのは確かだ。

「アリア……」

「ん、なんだ？」

己の使い魔を見送っていたライルが、若干気まずそうにこちらを振り返って来た。

彼は幾分逡巡した後、気を取り直すように頬を掻きながらに笑った。

「その……助けに来てありがとな！正直もうダメかと思ってたから、ホント助かったわ！」

「まっただ。今度からはもっと素直になれ」

「そうだぜライル！命あつての物種だからな！」

偉そうに返す私とライルの会話に乱入してきた声は、いつの間にか戻ってきた彼のものだった。

「あ、真っ先に逃げたフィル」

「……よく見てたね」

私とライルの歯に衣着せぬ物言いに、フィルは若干頬をヒクヒクさせる。別に責めているわけではないのだが……

だが、脅威？が去って上機嫌になった少年は、それに追隨するようにチクリと針を刺した。

「フィルは逃げるのも早ければ、帰ってくるのも早いんだね！」

「……あのー、キラくん。笑顔で毒吐くのやめてくんない？ 傷つくから」

「事実ですもの、仕方ありませんわ」

「うん、すごい逃げっぷりだったよね」

「ローズちゃんにミアちゃんまで……！」

それぞれの使い魔を還した二人が畳みかける様に言葉を重ねれば、そこにはいつも通りの光景が広がっていた。

……やはり平和が一番だ。

そうして、すぐに順応した生徒がいる一方、冷や汗を拭いた教師陣はまた違う感想を抱いていた。

「はは、まさか生きてドラゴンを拝める日が来るとは思わなかった。さつそくレポートにまとめないと……」

「クルト先生……意外と立ち直りが早いですね」

「なに、こういう性格でなければ研究はやっていけませんよ。そういうフラスト先生こそ大丈夫ですか？」

「……何が、でしょう？」

同じことを意図した質問でないことを察したバツシュは、数瞬の沈黙を経た後、心なしか低い声でそう問い返した。

その鋭い同僚の視線に、クルトは『地雷を踏んだかもしれない』

と思いながらも、取り繕うように言葉を返す。

「い、いえ、なんだか今日は元気がなかったような気がして……まあ、おせっかいでしたね。でも、ドラゴンが現れた時の冷静さはさすがでしたよ」

「まあ、こう見えて宮廷魔法士をしていた時もいくつか修羅場を経験していますから。無論、ドラゴンと相対するような事態は初めてですが……」

額に流れていた汗をぬぐいながら、バッシュは一人胸中でつぶやく。

そう、なんといってもドラゴンだ。全ての魔法使いにとって憧憬のまと。天界最強の生物であり、孤高の存在……それが、流れに逆らってまでこちらに押しかけて来たのだ。

事情はよくわからないが、それほどまでの魅力があんな娘にあるというのか。

どうにも不可解だ。そんな疑念を持ちながら、件の生徒へと視線を向ける。

「アリア・セレスティか……」

そこから数歩離れた所で、この国の第二王子も難しい顔をして考えを巡らせていた。彼の脳裏では、既にこれから起こりそうな事態に対する予測と対応が次々とたてられていた。

……そんな彼の出した結論は一つ。

「これは、口止めが必要か……」

そして、それぞれ別の思惑を込めた二人の視線の先で、級友に囲まれた彼女もまた思い出したようにポツリと言葉を発する。

「……………あ、ルナに口止めするの忘れてた」

その言葉は妙に虚しく、快晴の空へと響いた。

第4話「怪我の功名」（後書き）

さて、今回序章でチラツと出したドラゴン話を持つてきたように、この物語は、時々読者の皆様が忘れたところに伏線もどきを回収する、とっても不親せい……じゃなくてミステリアス……いや、これもなにか違うな。

うーん……そう、とっても挑戦的な作品となっております（ごまかした）！

後から見返して『おお、こんなところにいやがった！』とか宝探しのな感じで楽しんでいただければ、と思います。

第5話「邂逅」（前書き）

途中ほんのちよつとグロ表現が出てます。

まあ、前後のゆるいやりとりで誤魔化せる程度なんで大丈夫です。
今回は長いので、2つに分けました。

第5話「邂逅」

深遠なる闇が空を浸食し、孤高に輝く月が中天にさしかかる頃。
ハインレンス王立魔法学園にある寮の一室では、とある主従がい
つもより遅めの帰宅を果たしたところだった。

「はあ、なんだかどつと疲れたな」

倒れこむように、ベッドにダイブする。さすが王立の学園といっ
たところか……最上級の肌触りである。ようやく一息つけたことも
相俟ってか、心身に沁みわたる安らぎもひとしおだ。

なにせ今日は精神的にも、肉体的にも非常に負荷がかかった一日
だった。

疲れの原因はいわずもがな、今日の“萌え幼女ドラゴン召喚事件
”（フィル命名）にある。……ネーミングセンスがないのは、もは
や仕様と考えていい。

極上のふかふかに顔を埋めながら、さきほどまでの戦いを思い出
す。……ルナが還った後にまた一悶着があったのだ。

それは当然と言えば当然の流れ。そう、教師、研究者、そして生
徒という各方面からひどい質問攻めを受けたのである。老若男女誰
もかれもがあり余る好奇心を隠そうともせず、爛々と目を輝かせ迫
ってくる光景は、ある種の恐怖だった。根掘り葉掘り、一切合切を
訊き出そうとする彼らの辞書に“遠慮”という二文字は載ってなか
ったのだ。

それでも、矢継ぎ早に繰り出される問いにまさか馬鹿正直に答え
られるわけがなかった。結果的にのりくらりと嘘八百を並べるこ

とになるのだが、いつか言ったように元来私は嘘をつくのが苦手である。

話すごとに内容が変わってしまったのは、もはやどうしようもない失敗だ。それでも、なんとか恐怖集団の攻撃を捌き切った自分を褒めてやりたいくらいである。

そんなこんなで、ついさきほどようやくその魔の手から解放され、今に至るというわけだ。

本音の上では、このまま心地よい柔らかさに身体を委ね眠ってしまいたかった。だが、あえてその誘惑に抗い、睡魔と必死に格闘しているのにはわけがある。

自分が寝転んでいるベッドがまた少し沈んだことで、その時が来たことを悟った。

「ご主人様！ あのルナっていうドラゴンとは、どこで知り合ったんですか？」

（やっぱりきたか）

本日最後の質問は、予想通り相棒からだった。私のベッドの上で正座した彼は、じとりとした目線を持って、こちらを見下ろしている。それはライルが言ったように、まさに浮気を追及する恋人のようであった。

……キラの知らない間に会っていた私とルナ。どうやら、彼の中ではそれがどうしても見過ごせないらしい。嫉妬深いのか、それともただ単に知りたがりなのかは知らないが、その態度は『教えてくれるまで梃子でも動きません』という決意を示していた。……面倒な。

しかし、ただただ素直に教えてやるのも、なんだかおもしろくない。なにセルナ召喚後の騒動の片棒を担いだのは、他でもないこいつである。無駄に主人の心労を増やした使い魔に、ちよつと意趣返しがしたくなるのも当然というものだろう。

そうして、なにか良いのではないかと思索し、思い至ったのが先日ライルに教えてもらった話だった。……ちよどいい。試してみようか。

寝転んだ体制のまま肩肘をつき、自分自身意地の悪いと思える笑みを浮かべる。そして、上目づかいで探るように目を細めれば、準備は完璧だ。

そのまま焦らすように、用意していた台詞を吐く。

「ふーん……そんなに気になるのか？」

それは些細な反撃。いつもなら素直に教えてくれる主人が、いつもとは違う態度で訊き返しただけのこと。

それでも、効果はバツグンだった。予想だにしなかったカウンタ―に、キラは「え？」と驚愕をこぼし、次にしきりに目を彷徨わせ、最終的に期待通りの答えを返してくれた。

「べ、別に……」

口ではそう否定しながらも、身体は正直だ。モジモジしているものすごく気になっている。

……これはなかなか楽しいかもしれない。癖になったらどうしよう。

しばらくそのいじらしい”つんでれ?“を、“ほうちぷれー”なるものを駆使して堪能する。ライル曰く、『最近巷で人気の愛情表現の一種だぜ！　まあ、うまくいくかどうかは相手によるけどな（Vサイン付き）』らしい。

……うむ、現代的な趣向もなかなかどうして悪くない。

まあ、それでも意地悪はこれくらいにしておき、さっさと本題に移ることにする。もとより別に隠すような話でもないのだ。

疲れ切った身体に鞭を入れ、むくりと起き上がる。そして、キラの真正面に同じように正座した。なぜそんなことをするのか、と訊かれても……なんとなくだ、としか答えようがないが。

「……そうだな。あれは、お前に会う1年ほど前のことだったか

」

思い起こすはキラと出会う約1年前……つまり今から300と2年前の秋のこと。

それは私が15歳の時の出来事だった。

「……終わった、か」

時刻は夕方。周辺から魔物の気配が消え、森が静寂を取り戻した時だった。

あたり一面に魔物の死体が散乱し、独特の血臭が鼻をつく。その中には四肢が引きちぎれ、臓腑が飛び出した無残なものもあった。

だが、ほとんど原形を留めていないそれらも、己に何ひとつ感情

らしい感情を呼び起こすことはなかった。

……この悲惨な光景をどこまでも無感動に眺める私は、きつとどこかおかしいのだろう。他人事のようにそう思う。

でも、それもしようがない。世間一般的には異様な光景でも、ここまで見慣れてしまつては新鮮味に欠けるのだ。もとより自分のした行為の結果に驚くのもおかしい話。周りには自分一人しかないし、今更乙女のように騒ぐのも滑稽……そこまで考えて、自嘲気味に笑う。

一度麻痺した感覚は、もはやとり戻しようのない域まで達しているのか、と。

そのまま血を吸った地面を踏みしめて、機械的に歩き出す。

よくよく考えれば、こんな生活を始めてから、早2年が経つのだ。感覚が麻痺するには十分過ぎる時かもしれない。

魔物の掃討が終わつた後は、いつものように報告に戻らなければならなかった。あの実力の伴わない傲慢な隊長のところへ。

きつと、また嫌みたらしい文句を聞く羽目になるのだろう。そう考えると憂鬱だ。

……あれにもいつか慣れる時がくるのだろうか？ そうなれば、慣れというのも案外悪くはないと思えるのだが。

そうして落ち葉を踏みしめて数分が経つた頃、ふと何かの気配を感じて立ち止まる。

草かげからガサガサとした音が聞こえ、その感覚は確信へと変わった。

「まだ残っていたのか……」

軽く警戒しながら、手のひらに魔力を集束させる。一応姿を見てから攻撃しようと構えるが

「キュル？」

その、妙にかわいらしい声に拍子抜けしてしまった。そして、次いで現れたあまりにも意外な相手を見て、無意識に魔力を拡散させる。

数秒間、目を細めて眺めてみても、やはり“それ”を形容する言葉はひとつしか思い浮かばなかった。

「これは……ドラゴン……の子ども？」

「キュウ」

返事が威嚇か知らないが、蜥蜴似の生き物はまたかわいらしい鳴き声をあげた。

……それでも、やはり蜥蜴とは違う。なにせ蜥蜴には角も羽もない。小さいながらもちゃんと存在するそれは、伝説やおとぎ話で語られるドラゴンの特徴である。

その邪気のない水色の瞳を持った生き物は、草の影からこちらを観察していた。しかし……はつきり言っただけ全然隠れていない。ほぼ丸見えだ。

しかも若干怯えているのか、プルプル震えている。これでは、私が悪者のようではないか。

みたところ、まだ言葉もともに話せないようだ。それは本当に

生後間もない証拠である。なにせ潜在能力の強い聖獣は数年程度で話せるようになる、というのが一般的な理解なのだ。ドラゴンなら、なおさらだろう。

（しかし、世の噂では“天界の暴れん坊”と呼ばれているドラゴンも、幼獣のうちはこんなにおとなしいものなのか？）

幼獣の時だけおとなしいのか、それとも噂自体が当てにならないのか、多少興味を引く命題だ。

自然な動作で近づき、その場にしゃがみ込んで視線をあわせる。それでも幼獣は逃げなかった。少しだけ気分が良くなり、そのまま話しかける。

「お前、“迷子”か？」

「キユ？」

コクリと首をかしげる姿は、ひどく愛らしい。どうやら、なんとなくこちらの言葉は理解しているようだ。それでもやはりまだ会話にはならない、か。

“迷子”とは、幼獣によくある突発的な事故のことをいう。より厳密に言えば、天界での生活中、なにかのはずみで誤って地界に来てしまい、そのまま還れなくなることを指す。

原因は、よくわかっていない。一説には、天界に地界へと通じる“穴”のようなものが存在しているのではないかといわれているが、真相は謎に包まれたままだ。

そうした“迷子”も、運よく優しい魔法使いに巡り会えば、仮契

約という一時的な契約を結んで天界に還してもらえたりもする。

（だが、大抵は ）

「どこに行きやがった!？」

「そっちも探せ!！」

「あいつを捕まえれば一攫千金だぞ！ 絶対逃がすな!」

粗野な怒鳴り声が、静寂な空間を切り裂き、悠々とした森に響き渡る。

案の定というか……

「……やはり追われていたか」

「キューキュー!！」

“迷子”は、密猟者の餌食になることが多い。なぜなら、彼らは貴族や裕福層の間で愛玩動物として、そしてひどい時には研究者の実験対象として高値で取引されるからだ。

そのうえ幼獣のうちはまだ力も弱いし精神も発達していないため、捕まえるのもそれほど苦労もしない。王都など魔法使いの多数在籍する場所に迷いこむならまだしも、それ以外の所ではたいてい誰かに捕まり売り飛ばされるのが、悪しき風習となっていた。

しかも今回の獲物はドラゴン。希少価値でいえば、きっと今までどんな獲物にも勝る伝説の生物である。喉から手が出るほど欲しに決まっている。

……そうこうしているうちに、乱雑な足音はすぐそばまで近づいてきた。

「いたぞー!! ……つて、あん？ お前誰だ？」

「よお、ねーちゃん。悪いな、そいつは俺たちの獲物なんだ」

「そーゆーこつた。まったく、こんなところまで逃げるなんて悪い子でちゅねー」

「さあ、お兄さんたちと一緒に来てもらおうか？ 何、悪いようにはしないからよ」

「ああ、そうだ。ついでにこのお嬢ちゃんも一緒に売っちまわねえか？」

「そりゃいい！ よく見りゃええ別嬪さんだしな！ きつと奴隷としても高く売れるぜ！」

「ああ……でも売る前にちよつと味見してもいいよな？」
「さんせーい！」

聞き慣れた雑言だ。いちいち反応するのも馬鹿らしい。

ゲラゲラと下卑た笑いを撒き散らしているのは、いかにも山賊といった感じの男数人。私と幼獣を取り囲むように展開している彼らは、おそらく素人ではないのだろう。妙に統率がとれており、集団的行動に慣れている節がある。隙のない身のこなしといい、それこそどっかの騎士団に見習わせたいくらいだ。

だが……どうにも話が通じるような奴らではなさそうだ。

正直相手をするのも面倒だが、足にしがみついてくる“それ”を無下に扱うことも憚られた。

「まったく、次から次へと……」

今日は一日徹夜で、私はこれでも結構疲れているのだ。

欠伸を噛み殺しながら、四散させていた魔力をまた集束させる。

本来はもう少し平和的な手段を取るべきなのだろうが、今はそれを考えるのも億劫だった。

（さっさと片付けよう）

第5話「邂逅」（後書き）

『アリアさんSと萌えに目覚める、の巻』です。
本当にライルは碌な事を教えません（笑）
続きもすぐに投稿します。

第6話「夢と現」

勝負は、一瞬でついた。

「命だけは取らないでにおいてやる。感謝しろ」

魚市場のように転がる男たちを前に、どこまでも淡々と言葉を並べる。そこに勝者の驕りはない。ただただ事実を事実として宣告したに過ぎないのだ。

むしろ『森なのに、魚市場って少しおもしろいかもしれない』……そんなどうでもいいことを考えてしまうくらい、心には余裕があった。

一方、生殺与奪を握られた男たちは、ボロボロの身体を引きずりながら必死に後ずさる。

「ば、化け物！」

「く、くそ！ 一体なんだってんだ！？」

「て、てめえあとで覚えてやがれ！」

「この借りはいつか返すからな！！」

彼らは負け惜しみの手本のように、それこそ独創性のカケラもない捨て台詞を吐きながら去って行った。

同じく言われ慣れた台詞に呆れながら、やれやれとため息をつく。そうしてふと視界に入ったのは、己の足元をぐるぐると回る伝説の生物……の子どもだった。

「キューキューキュー」

心なしか興奮しているようだ。自分の魔力に当てられたのか、それともゴロツキどもの撤退に喜んでいるのか。よくわからないが、まあ元気ならそれでいい。

奴らの姿が完全に見えなくなったところで、もう一度ため息をつく。

「これでは、まだ魔物のほうがましだったな……ほら、仮契約を結んでやるから天界に還れ」

「キュル、キュルウー！」

しかし、てつきり喜ぶと思ったそいつは、なぜか頭をぶんぶん振り、何かを訴えるように騒ぎ始めた。

わけがわからず私が頭をひねると、ついには二本足で立ち上がり、謎のジェスチャーを始めるではないか。

「キュツキュ、キュルー！」

「筋肉……が、すごい？ ……いや、別にそれほどもないと思うぞ」

「キューキューー！」

「いで、ちょ、待て、体当たりするな！ わ、わかった違うんだな」
「キュキュ、キューキュー！」

「……ああ、食べると？ でも悪いが、ドラゴンの肉を食す習慣は……って、待て！ 齧るな！ 地味に痛い！」

そんなやりとりを続けること、およそ10分。

「……お前、もしかして契約しろと言ってるのか？」

「キュキュー！！」

『ようやくわかったのか』と言わんばかりの反応。足にしがみついて離れないその様子を見て、やっと理解できた。まったく、言葉を介さない意思疎通が、これほどまでに難しいものとは思ってこなかった。

……だが、ようやく理解できたとはいえ、その内容は眉を顰めるには十分なものだった。

（契約？ この私と？）

……どう考えても、無理だ。

そう結論付けるのに時間はかからなかった。

視線を下に向ける。目下には打算も悪意もない、どこまでも純粋な瞳があった。縋るようなその目に、どことなく罪悪感が募る。

（……それでも、譲れない）

覚悟を決めて、もう一度その瞳と視線を合わせる。

「悪いが、私は契約相手を持つ気はないんだ。……そもそも、お前はまだ言葉も話せない幼獣だろう？ 私を守ること、ましてや自分自身を守ることすらできない。私の生活には危険が付きものなんだ。そんな私の使い魔になっても、お前にできることは何もないよ」

「キュルウー」

自分でもそれをわかっているのか……その幼獣は、目をウルウルさせて弱弱しく鳴いた。

……いずれにせよ、この幼獣がドラゴンとして相応の力をつける頃には、私はこの世にいないだろう。そんな残酷な未来を教えるつもりはないが、それでもダメ押しのように付け加える。

「待っている存在がいるんだろ？ きつと親は心配しているぞ」

親という単語にピクリと反応する様子に、『やはりまだ子どもなんだな』という感想を持つ。また騒ぎださないうちに素早く詠唱し、半ば押し切るようにそのまま仮契約を結ぶ。そしてすぐに召還陣を形成すれば、故郷の気配を感じたのか、急にそわそわしだした。

それに苦笑しながら、最後に頭を撫で「ほら、行け」と、背中を軽く押してやる。期待通り幼獣は、名残惜しそうにこちらを振り向きながらも陣の中へと歩いていった。

「キュウウー」

「自由に生きろよ。誰に縛られることもなく、な」

発光していた召還陣が消え、あたりはまた暗闇へと包まれる。しばらくはその場佇んでいると、鬱蒼と広がる森の中に、風がこびりつくような血の臭いを運んできた。

それが、己を現実へと引きずり戻した。

……そう、これが私の世界だ。

私は、いずれ死ぬ。こんな生活を続けていては、とても長生きなどできないだろう。魔王の被害も近年急増していると聞くし、奴とやりあって死ぬ可能性も否定できない。妹のためにも、魔王だけは刺し違えても滅したいところだが……それもどうなるかはわからない

い。

（いや、今だって惰性で生きているようなものか）

生きているというよりは、死に損なっただけ、という表現のほうが正しいくらいに…… 3年前からきつとそうだった。こうして生き恥を晒しているのも、全てはあの子のため。私のすべては、彼女のためにあるのだ。

……あの幼いドラゴンを、そんな自分の人生に巻き込めるわけがない。まだ見ぬ己の契約相手もだ。
孤独のうちに死んでいくのが、咎人である私にはきつとお似合いだろう。

……誰かの助けなどいらない。
神も信じない。救いなど無意味だ。
唯一己を救えるとしたら、それは

「……戻るか」

いい加減、馬鹿馬鹿しいことを考えるのはやめて、場を後にする。
私も帰らなければいけないのだ。あの地獄へと。

……あそこが自分の居場所なのだ。あの場所でなければ生きていけない。生きる理由もない。あの塔を見て、妹が生きていることを確認することで、自分自身が生きていることを実感する。それが、私の許された生。

落ち葉を踏みしめ、また一歩足を進める。

どこまでも続く贖罪の旅路

死に場所を求めて彷徨う旅人

その末路に待ち構えるは……甘美なる死への誘い

……でも、それこそが、本懐。

「と、いった感じだ」

一応心情的な部分は省いて、事の顛末だけを簡単に伝えた。
そうして、お望み通りに教えてやったというのに、真正面に正座する相手といえは……微妙な顔をしたあげく、ここのたまった。

「……なんだか普通、ですね」

主語はないが、おそらくルナとの出会い方のことだろう。どんな劇的な出会いを果たせば満足なのか、こいつは。

……いや、そういえばこいつとの出会いは劇的だった。それはもう、今思い出しても青筋が浮かぶほどの。

「……そりやお前との出会いに比べたら、ルナとの出会い方なんて平凡すぎるほど平凡だろうな」

「むふふ、僕との出会いはご主人様の中でも忘れられない思い出な

んですね」

確かに忘れられないと言えば忘れられない出来事だった。当時は腹立たしいことこの上なかったが、それも今となってはいい思い出である。

とりあえず、『うっかり殺さなくてよかった』というのが感想か。

そのうっかり殺しそうになった相手といえば、自慢げな物言いは裏腹に、少し物憂げな表情をしていた。あの時のことでも思い出しているのか……珍しいこともあるものだ。

「……まあ、確かに印象深いものではあったな」

「ですよー。やっぱり出会いは大切ですよ！」

「お前の場合は出会った後も問題だったがな。『一緒に連れてけ』と異常にしつこかった」

なにせ風呂にまで乱入してくるストーカーぶりだ。それこそ比喻でもなく、火の中水の中、拳句の果てには魔物がひしめく戦場の真ただ中にも躊躇なく飛び込んできた真正の馬鹿、それがキラである。

それでも驚異的な幸運を持って、そのほとんどを無傷で生還するものだから、余計始末に悪かった。

そして、そんなキラに私もついには根負けし、ストーカーから同行者へと格上げするにいたったのだ。ついには身を守る術も持たなかった癖に、魔王戦まで付いてきた狼の幼獣。後先考えない馬鹿さ加減では、ルナの上をいくに違いない。

「ふふ、そんなに褒められると照れますね」

さっきの物憂げな表情はどこに置いてきたのか……本当に照れくさそうに頭をかくその姿は、私の勘を刺激させるには十分だった。

「褒めてない。まあその能天気な思考は、褒めてもいいがな」

「えへへー、まあそれほどでも。ともかく、浮気しないでください
ね」

皮肉も通じないほど都合のいい頭を持つ相棒は、上目づかいで釘を刺してきた。

（まったく、厄介な相手に目をつけられたものだ）

……でも、ルナには悪いが、今はもうこいつ以外の相棒など考えられない。

本人には絶対言わないが、何度追ひ払っても付いてきたこいつの酔狂には、少しだけ感謝しているのだ。

一年間、危険を顧みず側にいてくれた。そして、目覚めてからもキラが心の拠り所だった。

こいつがいるから、今の自分がある。

それだけは、確かだ。

口で言わない代り、その髪をくしゃりと撫でて感謝の意を伝える。……多分、本人はわかっていない。それでもうれしそうに顔しているから、まあいいか。

「心配しなくても、私にはお前ひとりで手一杯だよ。……ほら、も

う寝る。明日からはお前も授業に参加するんだろ？」

そう、明日からは魔法を使うものに限ってたが、使い魔と共に授業を受けることが許されるのだ。

「もちろんです！　おやすみなさい、ご主人様！」

「ああ……って、お前ここで寝るのか？」

自分のベッドがあるだろうに。元氣よく返事をしたキラは、正座の状態からそのまま匍匐前進で進み、もぞもぞと我が物顔で布団の中に入り込んできた。

「足が痺れてベッドまで歩けませうん」

少なくともウキウキとした声で言うセリフではない。どんないいわけだ。

それでも、そのあどけないほほ笑みを見ると追い出す気には到底なれなかった。

（本当に、世話が焼ける）

幸せそんな顔で布団に包まる共犯者の横顔を眺めながら、いつかのことを思い出す。

こうやって同じ床に就くのは、ライルの家以来だ。

（あの時から早一ヶ月、か……）

そう、まだたったの一カ月。されど一カ月が経ったのだ。生まれ変わった、というのは大げさかもしれない。それでも自分

の中の“何か”が確実に変わったのを自覚している。

他人の助けを拒絶していた自分が、今では当たり前のように誰かを助け、そして誰かに助けられている。キラに、ライル、レスト……もちろんミアやローズ、フィルにも、毎日のようにだ。

それは夢物語のような日常。

思っていたよりも世界はずっと広く、無限の可能性に溢れていた。日々新しい発見があり、それを学ぶのが楽しかった。この学園に来て、初めてそれを知った。

……そんな些細な日常が、明日も明後日も、そしてこれからも続いていくのだろう。

瞼を閉じる。

明日もきつと、快晴だ。

そんな確信があった。

第6話「夢と現」(後書き)

シリアスな話なのに、シリアスになりきれないのがjadeクオリティー。

しかもキラとの出会い話まだ考えてないのに、勝手にハードルあげるといふ暴挙を犯しました(笑) あとが怖いww

ドラゴン編はあと2話程度で終わる予定ですかね。

誤字・脱字等ございましたら是非教えてください。

第7話「緊急会議その2」(前書き)

ふつかーっ！

あいあむふりーだーむー

第7話「緊急会議その2」

時刻は遡り、てんやわんやとなった召喚の儀式からおおよそ3時間後。

学園のとある一室では、おおよそ一カ月ぶりの緊急会議が開かれていた。

……もつとも、飾り立てのない円卓に着席しているのは、いわば暇人と称していい十数名。彼らは一応会議という名目を借り、この場に集まっただけ……が、会議は会議でもその実態は主婦の井戸端会議のようなものである。各々好き勝手に今日の感想をくっちゃべるその会議は、およそ名門王立学園とは思えない無秩序で混沌に満ちたものだった。

「今度はドラゴンですか……なんというか、まあ……」

「本人は『昔助けたことがあって、その縁で来たらしい』とか言っていましたよね」

「しかし、人型を取った時は少女の姿だったらしいが、遠目から見ただけのドラゴンは明らかに数百年の時を生きているように思えましたぞ。それが、そう簡単に助けを必要とする状況に陥るものなですかの？」

「さあー？ 橋の下で拾ったと聞きましたが、詳しい状況は知りませんし」

「拾ったって……橋の下に落ちていたんですか！？」

「……なかなか想像しづらい状況ですな」

「あれ？ 私は川をどんぶらこと流れてきた、と聞きましたか？」

「……少女が？ それともドラゴンが？」

「いやいや、どっちにしろおかしいでしょう」

「なんだか支離滅裂ですし……どうにも嘘くさいですねえ」

同意するように何人かが頷く。

しかし、いくらそれについて議論を重ねたところで、結局堂々巡りに過ぎないことを出席者たちは理解していた。いずれにせよ、肝心の本人がこの場にいないくは、真相などわかりようもないのだ。

……いや、むしろこの際経緯はどうでもよかった。ハインレンス王立魔法学園の教師及び研究者は、総じて過去よりも未来を。これまでよりもこれからを重視する傾向を持っている。そんな、よく言えばポジティブ、悪く言えば考えなしの彼らの興味が、他のものへと引き寄せられるのに、さほど時間はかからなかった。

「まあ、ここでそんなことを話しあっても埒が明かないでしょう。そんなことより、ドラゴンとの正式契約は確認されている範囲において人類至上初の快挙なのですよ！　ここは素直に喜びましょう」

「確かに。契約自体はディレイド家の嫡男が結んだようですが、それもまたおもしろい。極めて特殊な契約ですし、研究しがいがありますよ」

「……そうですね。せっかく集まったのだから、どうせならもう少し建設的な話し合いをしましょうか。……そういえば、その彼女の成績はどうなんですか？　大体一カ月経ちましたよね」

新たな議題に対し最初に声をあげたのは、穏やかに会議を見守っていた重鎮だった。

「精霊魔法に関しては、素晴らしいの一言に尽きよう。まだ精霊のコントロールが完璧ではないが、それさえマスターすれば、王国一の使い手も夢じゃなかるうて」

貫禄たっぷり言い放った精霊魔法の権威パウル老は、想像以上の逸材の発掘にご満悦の様だった。「将来が楽しみじゃ」と顔を綻ばせるその姿は、まるで孫の成長を見守るおじいちゃんのようにである。生徒のみならず教師さえも虜にするそのほんわかとした言動に、場は緩い空気に包まれる。

……が、次の瞬間生ぬるい空気を切り裂くようにしゃがれた声が会議室に木霊した。

「神聖魔法は全然だがな！ やる気すら感じられん！！」

パウル老とは正反対の性質を持った、もう一人の重鎮グナイド教諭が声を荒げたのだ。

こちらは期待していただけに、その失望も大きかったようだ。“怒れる神父”の本領発揮と言わんばかりの怒声に、その場にいた若者は、自分が怒られているわけでもないのに平身低頭で「すいません」と謝りたくなった。

一方のグナイド教諭は、勢いそのまま「そもそも『一生使える気がしません』とはどういうことじゃ！ 信仰心が足りんわ！ まったく、これだから近頃の若者は　！！」と、老人特有の面倒くさい話を始めた。

無論、これには会議メンバーも黙っていない。なにせ、このままではグナイド教諭の“ありがたーいお説法（１時間コース）”に入することは確実である。

長くなりそうな気配を敏感に感じ取った彼らは、目だけのやりとりを通じ、即座に話を変えることを決定した。こういう時の団結力は無駄に強いのである。

「まあまあ、落ちついてください。あんまり激怒しては血管がはち切れかねませんよ。それはそうと言語学についてはいかがですか、カイルス先生？」

「え、ええ、そうですね。まあ、やはりと言いますか、我が国の言葉以外は全く話せないようです。隔絶された場所で生活していたようなので、当然といえば当然ですがね。妙に古めかしい表現を使うのもそのせいでしょう。……ただ」

カイルスがそこで言葉を切ったのには、理由があった。

それは1週間ほど前の授業のことである。彼女が教科書に載っていた超古代文字を指さし、『このヴィシア語の訳、間違っていますよ。正確には です』と指摘してきたのだ。

……たしかに、その部分は研究者の間でも解釈をめぐって何度か争いがあったところである。しかも彼女の主張は、この国で最も権威ある言語学者の説と同じものだったのだ。もちろん、一般的には普及しておらず、それこそ、その道の者でなければ到底知り得ない領域のもの。彼が驚くのも当然だった。

しかるに、『どうしてそんなことを知っているんだい？』というカイルスの疑問はもつともだったろう。しかし、彼女は急にハツとした後、『え？ あ、あー、昔チラツと勉強したんですよ』と視線を逸らしながら答えただけだった。

怪しすぎる。

そう感じた彼が追求の声をあげる前に、彼女は光の速さでその場を去っていた。

あとに残されたのは、手を伸ばしたまま硬直した哀れな教員一人と、どうにも煮え切らないもやもやとした感情が一つ。

そんな出来事が、彼の中で妙に印象に残っていた……のだが、所詮はそれだけのことである。わざわざここで言うことでもないか、と思い直した彼は、結局「なんでもありません」と首を振るに留まった。

「歴史学も似たようなものです。ここ最近の歴史は全く知らないようでしたよ」

「そうですか。なぜかマナーはできていましたけどね……とここでこそですけど」

なにがそんなにおかしいのか、前髪をいじりながらヘラヘラしているのは、歴史学担当のケイン。その甘いマスクが女子生徒に人気の、25歳の若手教師である。

そして、その向かいで釈然としない様子で呟いたのは、上級クラスの必須授業マナー講座担当のフィリスだ。彼女もまた24歳と若い、その穏やかで上品な物腰は男女問わず憧れの的である。そして、男子生徒の“理想の女性”投票（結婚バージョン）において3年連続首位に君臨する彼女は、ただいま新婚はやほやでもあった。それこそ悔し涙を飲んだ男は数知れず、とかなんとか。

上級クラスを卒業して魔法士になれば、それなりにお偉い方と面会したり、公式の場に出る機会も多くなる。そんな時のためのマナー講座だ。

もっとも、上級クラスの人間はそのほとんどが貴族であり、彼らにとっては教養のようなものである。そんな復習がてら受ける貴族とは違い、平民は大抵苦勞するのがこの授業のどうしようもない特色でもあった。

だが、どういうわけか噂の転校生はいくつかの点で、教師さえも目を見張る完璧な淑女っぷりを披露したのだ。特に舞踏会でのダンスやマナーにおいては、古式ゆかしい正統派の作法を完全にマスターしており、それこそ文句のつけどころもなく、むしろこちらが見習いたいくらいであった、というのがフィリスの言である。

その後も次々と噂の彼女、アリア・セレスティの評価がなされるが、ほとんどは最高と最低の極値へと二分化された。

「実技に関しては皆さん既にご存じかと思いますが、やはり他の追随を許さない傑出した才能を持っています。なにせ我々と同じように詠唱をしても、彼女の場合威力が数倍になって発動しますからね。精霊魔法と同じくこちらにもコントロールが今後の課題とはなりますが、そちらの才能も鑑みれば、それこそ我が校始まって以来の逸材といっても過言ではないかもしれません」

「ええ。火と闇の属性両方において、今までほぼ固定されていた順位を塗り替えましたしね。彼女に触発されて他の生徒もやる気を出しているようですし、いい影響でしょう」

「まあ、筆記科目全般に関しても知らないことは多いみたいですが、あの様子ならすぐに追いつくでしょう。幸いそれほど頭は悪くないみたいです」

編入試験時の筆記テストにおいて、歴代最低得点を叩き出したことはまだ記憶に新しい。当初教師たちの間では『知識が足りないのか、それとも頭が足りないのか』という非常に失礼な疑念が横行していたほどである。

だが、それも一カ月経った今では綺麗に払拭されていた。砂が水を吸うように、どんどん知識を吸収する彼女は、むしろ教えがいの

ある生徒として教師たちの間でも評判になっていたのだ。

「それでも、魔法具について存在すら知らなかったことには驚きましたけどね。ひどく感心していましたよ」最近は便利なものがあるんだな』って」

「……………なんだか、おばあちゃんみたいな発言ですね」

「「「「……………」」」」」

この場合の沈黙は、すなわち同意を示していた。

確かに、彼女はまだ年若いのに時々時代についていけない老人のような発言をする。それを不憫に感じていたのは、どうやら一人ではなかったようだ。

「で、でも、そういったわからないところも優秀な友人達からいろいろ教えてもらっているようですし……………」

「まあ“優秀”、というよりは“有名”の方が正しいでしょうけど」

「たしかに」と苦笑気味に賛同する声が、ところどころからあがる。

第二王子に公爵家のツートップ、特殊体質の平民に伯爵家の女好き次男坊。それに加えてどこかずれている美少女転校生とくれば、もはやこれ以上ないほど目立つメンバーだ。類は友を呼ぶとはきつとこのことだろう。

「しかし、この前の飛び降り事件といい……………まったく、話題に事欠かない子だ」

「あら、でもあれは事故だったと聞きましたが？」

「本人いわく、ね。大事がなくてよかったですけど……まあ、基本的には真面目な子なのですけどね」

「だからこそ始末に負えないのかもしれないかもしれませんよ」

「なにせ真面目に問題起こしますからね。……ホント、びっくり箱のような子ですよ」

「なるほど、言い得て妙ですなあ」

「ふふ、確かに開けてみないと中身がわからないし、心臓にも悪いですわ」

「それでも憎む気にはなれないのが、不思議なところじゃのお」

そんな風に、愚痴と擁護が半々ではあるが、一様に長閑でまったりとした会議ともいえない会議が続けられた。

だがその数分後、コンコンというノックとともに現れた新たな役者の登場により、場の空気は塗り替えられることになる。

「失礼する」

「学園長？ それに」

「……殿下！？」「……」

慌てて立ち上がり礼をしようとする一同。

それを手で制し「いや、いい。学園では一生徒として扱ってくれ」と言ったのは、この学園内で最も高い位を抱く人間だった。

しかしながら、その立ち姿は、一生徒として扱うにはあまりにも堂々としすぎている。若いながら生粋の王族としての威厳を持つ彼を、一般生徒と同じように扱えるのは、それこそ学園長と彼の担任、後は老人組くらいである。

「そ、それで、本日はどのようなご用件でこちらへ？」

唐突に現れたこの国の第二王子レストシアに、一同を代表するよう
にカイルスが尋ねた。

その問いに最初に答えたのは学園長だった。「アリア・セレス
テイについてだそうよ」と前置きをした彼女は、そのまま後方の若
者を促す。それを受けたレストはひとつ頷いて、話を切り出した。

「ドラゴンを召還したこと自体は、たしかに素晴らしい実績とい
えるが……それでも今回は少し目立ち過ぎた。ここあたりで手を打
つておかないと、他に引き抜かれる可能性も出てくるだろう。早急
に対策を立てるべきだ。今日はその提案をしに来た」

「……なるほど」

カイルスの呟きを筆頭に、他の参加者もすぐにその意図を理解し
て、同意するように頷いた。第二王子の名に恥じない聡明さを持つ
と評判の彼に、感心する者も少なくない。

要するに彼女の存在なり実力なりを、隠すべきだといっているの
だ。

「といっても古代魔法のことは、すでに広まっていますよ」

「ああ。だが、詳細な容姿についてはまだ知れ渡っていないだろう。
特にあの目の色については」

目の色。確かにあれだけでも貴族の良い餌だ。

一般市民には、いまやそれほど意識されていないが、聖女の伝説
を信じている貴族の間では、紫の瞳は今でも特別な意味を持つて
いる。いわゆる“神の娘”云々というやつだ。

それでも、いまや上級クラスの貴族は、よほどの馬鹿でない限り、

第二王子や公爵家の嫡子と仲の良い彼女に手を出すことはないだろう。

だがそれ以外の者は違う。

古代魔法の使い手がこの学園にいることは、既に“魔法士協会”も知っていることだ。つまり、事によっては他国にまで情報が出回っている可能性もある。

そんな状態で、今回のドラゴン召喚や紫の瞳のことまで周知されたら、一体どうなるだろうか。答えは目に見えている。

これは確かに等閑にしている問題ではない。

彼女は風変わりなトラブルメーカーであると同時に、この学園のかわいい生徒でもある。まして、その魔法の才は国の宝と言っているほど稀なもの。そんな才能の塊が、貴族に取りこまれた日には、目も当てられない事態になること間違いない。

きっと子供を産むため、もしくはその家を繁栄させるためだけの道具として利用され、その才を埋没させることになるだろう。それはこの学園にとっても、そして国にとっても大きな損失になる。

……もつとも、アリアが権力に阿る人間でないことは、既に周知の事実だった。それはこの1カ月、彼女の友人たちに対する態度を見ていればよくわかる。だから、きっと“そういう”打診が来ても、彼女は一刀両断するに違いない。

だが、それでも彼女は平民だ。いつ何時権力の荒波にのみこまれても不思議ではない。そして、そんな生徒を守るのも教師の役目である。

顔を見合わせた面子は、ようやく会議らしく引き締まった表情をつくった。やる時はやるのが、彼らの長所だ。現にこうして目標を

定めた後は、湯水のごとく次々と意見が出されていった。

「さて、どこまで抑えられるか……」

「人の口に戸は立てられないものですよ」

「ならば強制的にやるしかなかろう」

「学園の門に簡単な錯覚を起こす、幻惑系の魔法をかけるのはどうでしょうか？」

「……できないことはないわね。対象は彼女の目の色と今回のドラゴンの召喚者についてかしら？」

「うん。一度術式を彫って定期的に魔力を補充すれば、それほどの手間でもないよ」

「だが本人にはどう説明する？ あの娘は魔力の気配に敏いようだし、おそらく気付くぞ」

「素直に教えてしまえばいいのでは？」

「でも、あまり素直に教えて必要以上に警戒させるのも……やっばりのびのびと育ってほしいですし」

「うむ、確かにのお。子どもは元気が一番じゃ」

「とりあえず適当に言えば大丈夫でしょう。世間知らずな子ですから、きつとコロツと騙されますよ。彼女を取り巻く環境については、期を見て話しましょう」

何気にひどいことを言っではいるが、それも生徒への愛故……と彼らは勝手に解釈していた。そうして術式や当番を決め、ある程度議論が煮詰まったところで、会議はお開きとなる。

レストが、満足そうな顔で「では、よろしく頼む」と出ていくと同時に、会議の参加者もそれぞれ席を立つ。

「そういえば……どうしてわざわざ殿下がいらっしゃったのでしょうね？ たしかに彼女とよく話しているのを見ますけど……」

フィリスの疑問に答えたのは、相変わらずにやけ顔を貼り付けたケインだった。

「そりゃあ、あれでしょ、青春でしょ」

「……ああ、青春ですか。いやあ、いいですね」

「というか、殿下もちゃんと青春していたんだ。なんか安心ですー」
「ふむ、若い者はいいいのぉ」

去りゆく第二王子の後ろ姿を、生温かい目で見送る大人たち。

そして同じく孫を見守るように目を細めていた学園長も、「さて、戻りますか」と呟き腰をあげようとしていた。

その時「ああ、学園長」と思い出したように声をかけたのは、上級クラス5年を受け持つバツシュ・フラストだ。それまで何か探るように会議の行く末を見守っていた彼は、実にさりげない動作で彼女に近づいていく。

「これ、今月の修理費です」

そうして彼女に手渡されたのは、薄っぺらい紙一枚。

「修理費？」と聞き覚えのない単語に眉を顰めるも、結局彼女は何の心構えもなく、不用意にその紙を覗いてしまった。

……そして、当然の如く白目をむく。

そのままふらりと倒れかかる彼女を、近くにいた教師が慌てて支える。ニーナはその介助を受けながら、ふらふら覚束ない足取りでバツシュのもとまでいき、珍しく声を荒げた。

「な、なんですかこの額は!?!」

紙を持つ手がぶるぶると震える。もし紙が声を持っていたら、悲鳴をあげているところだろう。

だが、今の彼女に、引きちぎられそうな紙の行く末に心を割けるほどの余裕はなかった。なんの修理費かは知らないが、どう考えてもゼロが二桁ほど多いのだ。

何度確認しても、悪夢のような数字は消えてくれない。

一方、そんな彼女の剣幕を軽く受け流したバツシュは、いけしゃあしゃあと言い放った。

「いやあー、うちにはかわいい顔をした破壊魔がおりまして」

その言葉に、退出しようとしていた教師たちが「ああ」と顔を見合わせる。名前を言わなくてもわかる。そう、犯人はさきほどから話題にあがっていた“彼女”だ。

毎日校舎のどこかで聞こえる爆音は、もはや日課となっている。最近では『今日はまだ聞こえないぞ』、『そろそろだろ』、『あれが聞こえないと最近落ち着かないんだよな』という、わけのわからない評判にもなっていた。

もちろん、そんな呑気な感想が出回っていたことを、驚愕に震える学園長は知らない。基本デスクワークや客人の相手が多い彼女は、爆音と結界が壊れていることは知っていたが、それ以上に物的被害が出ていたとは、思いもしなかったのだ。

“素行の良い問題児”というなんとも扱い辛い生徒。純朴な娘であり、二ナ自身もそんな彼女が決して嫌いではなかった……のだが、さすがにこの時ばかりは五寸釘を打ちたくなった。

そうして、数秒間の複雑な葛藤を経て、やがて全てに達観した彼女は、遠い目をしながら静かに呟く。

「……………特別予算、王宮に頼もうかしら」

今すぐにといいわけではないが、いずれにっちもさっちもいかない状況になるのは覚悟しておかなければならない。

その時は王宮の財務担当との折衝、という名の激しいバトルが待ち受けている。憂鬱で仕方ないが、最終手段として殿下のコネを使うという方法もある。どうやら随分と彼女のことを気にかけているようだし、うまく働きかけてくれることを期待するばかりだ。

生徒を頼りにすることを情けなく思いながら、ため息まじりに空を見上げる。

夕刻を告げる薄紅色の空が、ひどく綺麗だ。

学園長ニーナ・シンク・ヒーストン。

彼女の頭の痛い日々は、まだまだ始まったばかりだった。

第7話「緊急会議その2」（後書き）

3週間もお休みしてごめんなさい（土下座）

でも、ようやくやることも終わって、小説書く時間もできました。
これからはもうちょい早めに更新できると思います。

第8話「真昼の惨劇」(前書き)

や、やっと更新できた(汗)

タイトルこんなですけど、中身はまるっきりギャグです。

第8話「真昼の惨劇」

一晩経って、翌日の学食。

いつものメンバーで朝食をとっていた時、唐突にその質問は来た。

「そーいやアリア、ルナとはどこで知り合ったんだ？」

ぎくりとする。懸念が本物になった。

そういえば、ライルはあの後すぐに保健室で検査を受けたから、私が四苦八苦しながら皆に説明した内容を知らないのだ。

（さて、どうしたものか……）

喉に詰まりそうになったパンをゆっくりと飲みこみながら考えを巡らす。

昨日使った『橋の下で拾った』やら『川を流れてきた』やらをここでまた言うのも憚られる。主となったライルに、そんな程度の低い嘘がばれるのは時間の問題だ。

しかし、だからといって代りになるような嘘をすぐ用意できるわけもなく……結局、食物が喉を通過するわずかな間に考えつけたものは、お粗末な返答だけだった。

「あ……………昔だ」

「ご主人様、それじゃ逆効果ですよ」

「だが、ルナに口止めする前に適当なことを言って、後で齟齬が出るのもまずいだろう？」

昨日すっかりルナに口止めするのを忘れてしまったツケが回って来たのだ。しょうがない。とりあえず本人に会う前に下手な事は言えまい。

そうして、こそこそキラと内緒話をしている私を不思議に思っただろう。ライルがさらに言及しようとしたその時、天から助けが降ってきた。

そう、ちょうどいいタイミングで“彼女”が来てくれたのだ。

「今ルナのお話してたのー？」

ライルの背後、何もない虚空に突如として召喚陣が出現する。そこからピヨンという効果音が相応しい勢いで飛び出してきたのは、一連の騒ぎの主役だった。

陽気な声と共に現れた幼女は、そのまま後ろから抱きつくように小さな腕をライルの首に巻きつける。

噂をすればなんとやら。もう回復したのか……さすがはドラゴン。一方、背後から全体重を込めて首を絞められたライルは、「ぐえ」とカエルのつぶれたような声をあげた。このままでは窒息コースまっしぐらである。

食堂でまったりしていた生徒たちも、突然の闖入者に面食らっている。だが、ここ最近騒動に慣れた彼らはすぐに復活し、たちまち「あれが昨日の」、「召喚者なしに来たんだっけ？」と噂を囁き始めた。

「ルナ！ いきなり出てくるなよ！」

「えへへー　ねえー、どんなお話してたのー？」

ぶらさがるルナをなんとか下ろし、窒息の憂き目を免れたライルは、首をさすりながら怒鳴る。まあ、当然の反応だろう。

だが、その相手の反応といえば、天真爛漫を絵に描いたような愛くるしい表情を見せ、無邪気に笑っただけだった。無論、そこに反省の色は微塵もない。

そんな悪びれない様子に彼も諦めたのか、彼女の頭に手を置き、「しょうがないな」と苦笑した。さすがは弟妹の世話をしてきただけのことはある。寛大だ。

しかし、感心したのもつかの間、ライルはルナの頭に手を置きながらこちらに振り向いた。

「今、ルナとアリアの出会いについて話してたんだよ。な、アリア？」

「え？　あ、ああ」

……まずい。このままでは非常にまずいことになる。

これでは天からの助けどころか、地獄への招待状ではないか。唯一事情を知るキラの方を見ると、こちらも顔がひきつっていた。

（なんとかしないと……）

そうして二人で目の前の小悪魔に、必死に視線で意思疎通を試みるが……いかんせん相手が悪かった。

「言うな」というアイコンタクトも全く通じず、無情にもルナは

上機嫌に語り始めたのだ。

「そうなんだー あのねー、ルナとお姉さまの出会いはい」

「「ちょ、待 ！」という私とキラの二重奏など歯牙にもか
けず、彼女はそのまま当時の興奮を再現するように、身振り手振り
を交えて小さな体を必死に動かす。

「むかしねー変なおじさんたちがルナをドドド ておいかけてきて
ー、そこでバババーンってお姉さまがきてバビューンてやつつけ
ちゃったの！」

「「……………」」

「……………そっかー。そりゃ、良かったなー」

……………想像の斜め上をいくなんとも残念な回答に、さしものライル
もそう返すのがやつとのようだった。

それでもエメラルドの髪をわしゃわしゃ撫でながら、大人の答え
を返すあたりは偉い。いや、さすがに声は棒読みだったが……。

しかし、危なかった。冷や汗と共にそつと胸をなで下ろす。

思っていたよりルナの頭が弱……………じゃなくて、精神年齢が幼くて
助かった。若干昔よりひどくなっているように感じるのは気のせい
だろうか？

……………ともかく、このままではいろいろな意味で心臓がもたない。
念には念を入れておいた方がいいだろう。

「ルナ。ちょっと来い」

「なーにー?」

ちよいちよいと手招きすると、トコトコとひな鳥のようになってきた。こういうところは素直でいい。

そうして、ライルたちから十分に距離を取ったところで、向き直る。さて、なんと言うべきか。

「……あのな、ルナ。私との出会いや昔のことをライルや他の人には言わないでほしいんだ」

「なーんーでー?」

首どころか体全体を傾けて、大げさに疑問を表現する少女。本当に300年どんな環境で成長してきたのか不思議でならない。

「それはだな……あー、私とルナの大切な思い出だからだ。二人だけの秘密にしたいんだ。だから他の人には内緒だ。いいな?」

子どもにいい聞かせるにしても苦しい理由だったが、他に思いつかなかったのだから仕方ない。ルナの頭に入り切らせるため、簡潔かつわかりやすい言葉で表現したらこうなったのだ。

だが意外なことにもそれが功を奏したのか、目の前の少女は目を輝かせて何度もそのキーワードを口にした。

「ひみつ……ひみつ……うん、わかった!!」

どうやらその“ひみつ”という語感が気に入ったようだ。失礼だが単純で良かった。これでようやく一安心できる。

「ひみつーひみつー」

彼女はそのままおもむろに、調子の外れた鼻歌を口ずさみながら、食堂を探検し始めた。

地界のものが珍しいのか、あちこちキョロキョロしながら楽しそうに歩き回っている。ずいぶんと好奇心旺盛な性格らしい。

「それにしても、まさか伝説と呼ばれていたドラゴンをこの目で見る日が来るとはな……」

それまで黙っていたレストがぼつりとつぶやく。

そして、声に反応した私と目が合い、また慌てて視線を逸らされる。……相変わらずの反応である。

レストといえば……あの後、時間ができたからミアにこの件を相談してみたのだ。

しかし、その彼女の第一声は、『三角関係キター！？』という謎の叫びだった。心なし目が輝いていたように見えたのは、気のせいだったのだろうか。

そして、『は！？ いかんいかんつい……そうよ、私が守るって誓ったんだから……いや、でもレストシア様なら……うゝん、でもまだ確定じゃないしなあ』と、ぶつぶつつぶやくこと数分。

どうにも放っておくと永遠に一人の世界に入ってしまったので、「結局どうすればいいんだ？」と尋ねることで、現実に帰ってきてもらった。

私の問いかけにハツとしたミアは、しばらく悩んだ後、『いいのよ、アリアはそのままです。あ、あとローズには絶対相談しちゃだめ

よ！　というか私以外はダメ！』と力説した。“絶対”のところに特に強調していたので、そこはよほど大切な部分なのだろう。気を付けよう。

そうして、『まあ、慣れればそのうち自然になっていくから大丈夫』という言葉信じ、今に至るといふわけだ。

……まあ、正直何を言っているのかよくわからなかったが、ミアが言うならまず間違いないだろう。

どうやら一時的な症例らしいし、私ができることと言えば、早く元のレストに戻ることを祈ることだけだ。やはり“ともだち”に、いつまでも変な態度を取られるのは嫌だし、できれば早めに治ってほしいものである。

あらぬ方向へ視線を固定したレストを見ながら、そんな回想に耽っている、ライルがこれまた違う方向を見ながら口を開いた。

「俺はむしろ最強って言われてるドラゴンが、こんな幼女の姿をとることに驚いたよ」

彼は学生の朝食を興味津津に眺めているルナを、妹を見守る兄のような優しい目で追っていた。

しかし、その意見には激しく同意だ。私の個人的なイメージにおいては、ドラゴンの人型といえば筋骨隆々の大男と相場が決まっている。まさか幼女の姿をとるとは……若干夢が壊された気分だった。

その意味も込めた微妙な目でルナを眺めていると、昨日の召還の儀で一緒だった先輩（名前は忘れた）が、ちょうど彼女の正面に立ちはだかったところだった。

唐突に現れた彼は、これまた唐突に棒付きキャンディをルナに与

えた。……どこから取り出したのだろうか、あんなもの。

しかし、一番の問題はその名前を忘れた先輩が、なぜかハアハアしながらルナを凝視している点にあるだろう。

ペロペロとおいしそうにキャンディーを舐める少女と、それを恍惚とした表情で鼻息荒く見守っている青年。………なんだか気持ち悪い。

あんな人間を形容する言葉は、それこそひとつしか思い浮かばなかった。

「あいつ変態だ」

「変態ですね」

「……あとでルナに言っとくよ。『二度と近づかないように』って」
「ついでに『知らない人から物をもらうな』とも教えておけ」

レストが、嫌なものでも見るように顔を顰めた。
それにしても、“春になったらおかしな人が現れる”という話は、やはり本当だったのだ。まさか、こんなに早くフィル以上の変態を拝む日がこようとは……この学園、本当に大丈夫なのか。

そうして変な空気が流れる中、ふと思い出したようにライルがその話題を出した。

「あ、でもさー、実際最強っていったらやっぱ“禁忌の子”になんのかな？ ま、こっちはそれこそ存在自体怪しいけどさ」

「何だそれは？」

「知らないのか、セレスティ？ 魔獣と聖獣の間に生まれた子のことだ」

「……ああ、今ではそう言うのか」

“禁忌の子”。それは現代において魔獣と聖獣の混血児を表す言葉のようだ。昔とは呼び方が変わっていて、一瞬なんのことだかわからなかった。

だが、中身が意味するところは同じだろう。

それは、数千年に一匹の確率で生まれるという非常に稀な生き物のこと。聖獣が地界で魔獣と出会い、交わり、子を成した結果。

元々出生率の高くない両者が、種族を超えて新たな命を生み出すのだ。まさしく奇跡と呼ぶにふさわしい存在でもある。

伝承によれば、その混血児は生まれた時から神族並みの強大な力を持っていると言われている。さらに、成長すればその力はドラゴンすらも超越するという本当か嘘か怪しい言い伝えもある。

どんな作用が働いて、そんな反則的な力を持つに至るのか……研究者たちの間でも、何度か議論されてきたテーマであるが、実物がないので結局いつも結論が保留のままお蔵入りしてきた。

そんなドラゴン以上におとぎ話のような存在で、その生態もほとんどが謎に包まれているのが、現代でいうところの“禁忌の子”なのだ。

「禁忌の子……」

キラが、そうどこか忌々しげに呟くが、結局その先を口にするこ

とはなかった。

……まあ、普通の聖獣や神族の反応はこんなものだろう。一応の中立を謳っている精霊とは違い、魔族と彼らは昔から決して相いれない仇敵といわれている。その相手と通じていれば、裏切り者と罵られても仕方ないのかもしれない。

（……そういえば、あの二人はどうなったのだろうか）

混血児の話で思い出した。誰にもこの話はしたことがなかったが……私は過去に一度だけ、族種の違う男女の組合せと遭遇したことがあるのだ。

魔物を故意に見逃したのは、後にも先にもあの一度だけだったからよく覚えている。あの二匹の仲睦まじい様子を思い出すと、種族の違いなんて些細な問題に過ぎないような気がする。

もし彼らの間に子供が生まれていたら、それこそ今言う“禁忌の子”になっているはずだ。……そんな都合のいい話があるわけもないだろうが。

（どちらにせよ、キラの手前安易に口にすべきでもないか）

顔を歪めるキラを視界に映しながら、そう結論付けた。

数時間後

「ルナ　！！　頼むからそれ以上物を壊すな　！！！！」

「きゃははー　　たのしいー！！」

場所は昨日と同じ校庭。天気は予想通り快晴。使い魔と契約してから、初の魔法授業である。

太陽光が燦々と照らす中、校庭では幼女が元気いっぱいに駆け回り、それを茶髪の青年が慌てながら追うという、一見長閑な風景が見られた。

……もつとも、現実はそんなかわいいものではない。

本人はおいかけてもしているつもりなのか……運動神経のいいライルですら追いつけないほどの速さでルナは爆走している。それも、余りある魔力と元気を爆発させるというおまけつきで。

そう、無邪気な小悪魔は、木々やベンチを次々となぎ倒しながら、校庭を縦横無尽に蹂躪しているのだ。彼女はその小さな体軀には不釣り合いなほどの魔力を帯びて、今この時も瓦礫の山を量産していた。

目の前では楽しそうにはしゃぐ使い魔と、暴走幼女をなんとかしようと汗だくになりながら奮闘する主による、終わらないおいかかけが続いている。だが、主の涙ぐましい努力もほとんど効果を成さず、被害は広がるばかりだった。

……ライルには心底同情する。まあ、自分の意思で主になったのだから、これからも頑張ってもらうしかない。

「いいかサラスティ、俺のことはフィリック様と呼ぶんだぞ！ まあ、その前に“星々のように美しい”とか“薔薇のように麗しき”という修飾語がつくとさらにいいけどな！」

「了解じゃ。“逃げ足だけは早い”フィリック」

「…………あれ？　なんか今幻聴が聞こえたような気がするんだけど」

「気のせいじゃ。“学園一臆病な”フィリック」

そのずけずけとした物言い中には、爪先ほどの敬意も感じられない。どうやら昨日の一件で、彼の主としての威厳は地に落ちたらしい。

ふよふよ浮くその姿さえ、どこか相手を小馬鹿にしているように見えるから不思議である。サラスティが主人に送る視線が、よくクラス的女子がしているのと同じ類であるのは、きつと気のせいではないだろう。

毒舌を吐く己の使い魔に、フィルは若干涙目になりながら「ははは」と乾いた笑いを零した。……フィルには悪いが、なかなかいいコンビかもしれない。

「よろしいことフラウ。目指すは学園一、いえ、王国一の火の使い手ですよ！」

少女は灰銀の髪を靡かせながら腰に手を当て、もう片方をビシッと遙か遠くにある光点へと向けた。……まるでどこかの青春活劇のようだが、なぜか様になっていたりする。

一方、彼女の背後でその様子を興味深げに観察していた大柄な男は、「くっ」と押し殺した笑いを零した後、優雅に頭を下げた。それは忠誠を誓う騎士のようであり……これまたひどく様になってい

た。

もつとも、それは軽い口調で言われた次の言葉で台無しになったが。

「はいはい、お望みのままに。我が姫」

「なな、なんですって？」

バツと後ろを振り向いたローズは、みるみるうちにその顔色を変えていく。

公爵令嬢として育てられてきても、さすがに真っ向から“お姫様”呼ばわりなどされたことはないのだろう。耳まで真っ赤になった彼女は、「い、今なんと……」と、どもりながら聞き直した。

だが、そんな主人の慌てふためきぶりを楽しむように、フラウは飄々と返す。

「いやー久しぶりに主を持つが、なかなか愉快的な姫さんのようであった。退屈しないで済みそうだし、これもフレイア様のおかげだな」

……最後にでてきた女の名に、狼狽していたローズの身体がピシリと固まる。やがて、ゴゴゴゴという効果音が聞こえてきそうなほどの怒気を纏い始め、髪の毛がその波動に反応するように揺らめきうねった。

理由はよくわからないが、フラウの言葉はどうやら彼女の逆鱗に触れたようだ。

そうして完全に目の据わったローズは、地の底から這い上がるような声で問いかける。

「……“フレイア”とは、誰ですか？」

そんな彼女の迫力にも負けず……いや、むしろますます愉快そうに目を細めたフラウは、「おつといけない。口が滑った」とわざとらしく零し、その口元を押さえた。だが、手で隠したそこは歪んでいるに違いない。

……要するにからかっているのだ。フレイアの名前もきつとわざと出したのだろう。

フラウの見た目はおっさんで、上級神族であることからおそらく実年齢もそこその歳のはずだ。大人の貫禄と言えば聞こえはいいが、普通はそんないい歳をしたおっさんが初心な少女を揶揄するものではない。とんだ食わせ者である。

「ちよつと答えなさい！ 私があなたのマスターですよ！ ……
つて！？ こら、待ちなさい！ 逃げるなー！！」

そうして出来上がったのは、颯爽と逃げる使い魔とそれを必死に追いかける主人の図だった。

スカートをためかせて全力疾走するローズは、いつまでも追いつけないことにしびれを切らしたのか、ついには魔法まで使いだした。

だが、フラウは火属性の上級神族。無論、彼女十八番の火属性魔法が効くはずもなく、文字通り周りに火種が飛ぶだけであった。

……何が言いたいのかというと、つまりは周囲に甚大な被害をもたらすおいかっこがまた一つ始まったのだ。

「クーちゃん、お手！」

「ハイ、マスター」

「きゃあ、かわいいー！　よくできましたー！！」

「ホメテ、ホメテ！！」

こちらは周りの喧騒をよそに、実に和やかな触れあいをしていた。パチパチと手を叩いて、己の使い魔を褒めちぎるミア。それに答えるようにピョンピョンとうれしそうに跳ねるク。……何かが激しく間違っている。

「じゃあ、次は」　と早くも新しい芸を教えようとする親友に、不安を抱かずにはいられない。完全にペット扱いだ。

……まあ、お互いが満足しているならそれでいいだろう。なににより平和的なところが他と違っていい。

「ハインレンス、お前の使い魔は？」

「あれは頼んで出てくるようなかわいい性格はしていません」

「……………そういえば、そうだったな」

担任とレストの短いやりとりは、そこであっけなく終了した。おそらく担任もその使い魔のことを知っているのだろう。諦観にも似た表情を浮かべた両者は、軽いため息をついた後、また目の前に広がる惨劇を眺め始めた。

……………どうやら止める気はゼロらしい。かくいう私もそうだが。

他のクラスメイトもまだ支配が未熟なせいか、その使い魔たちあえて表現するなら、放し飼い……………いや、ほとんど野生化に近い状態であった。ともかくそれぞれが手のつけられないほど自由奔放に暴

れまわり、未熟な主たちはそれに振り回されて、てんてこ舞いになっている。

……そんな光景を見ての感想は、ひとつしか出てこなかった。
視線を前に向けたまま、隣で同じく傍観に徹している相棒に話を振る。

「なあ、キラ」

「なんですか？」

「お前が相棒で良かったよ」

「……………僕もそう思います」

そう、しみじみと語る二人の前で、またひとつ巨木が景気よく吹っ飛んでいった。周囲では火事も発生しており、まさに今、校庭では阿鼻叫喚の地獄絵図が広がっていた。

だが、それを尻目に、昨日のお返しとばかりに傍観に徹するのは黒髪の主従……と、その他被害を免れた数名。

彼らが協力すれば、あるいはこの騒ぎもすぐに收拾されていたのかもしれない。だが残念なことに、そのメンバーの中に己が身を粉にしてでもこの現状をどうにかしたい、という正義感溢れる人間はいなかった。『別に命の危機じゃないし、巻き込まれたくない』というのが彼らの本音である。

……結局その日の魔法の授業は、惨憺たる有様だった。毎年恒例といえば恒例の事態ではあったが、今年は特に某ドラゴンによる壊滅的な被害が目立った。彼女は最強生物としての能力を遺憾なく発

揮し、結果“天界の暴れん坊”の名は伊達じゃなかったことが、この日証明された。

もつとも災厄ともいえる被害を受けた当人たちにとっては、嬉しくともなんともないことだったが……破壊の限りを尽くした少女は、また学園の予算をも食い尽くしていたのだ。

例年にも増して莫大な修理費は、ただでさえ心痛重い学園長をより一層悩ませることとなる。

第8話「真昼の惨劇」(後書き)

今日はもう1話くらい更新できる……気がします(汗)

次回はちょっとシリアスも入る、かな？

*** 人物紹介（前書き）**

多少ネタバレあります。

*人物紹介

・アリア・セレスティ（17歳）

ハインレンス王立魔法学園 上級クラス5年 聖女（?）

白銀の髪（今は魔法で黒髪にしている）に紫の瞳 属性：全属性（学園では火と闇属性ということにしている）

ただ一人の家族である妹を救うために、自らの命を犠牲にして魔王シヴァを封印する。しかし、300年後の世界でなぜか唐突に目覚め、困惑しながらも新たな人生を歩み始めることに。現代では魔王を封印した聖女として人々の崇拜を集めているが、本人はそう呼ばれるのをひどく嫌がっており周囲にも正体を隠す。

見た目こそ美少女だが、性格・話し方ともに漢らしい。基本的に天然で、悪意には敏感、好意には鈍感という残念な感性を持つ。また莫大な魔力の持ち主でもあるが、封印の影響で当初はよくガス欠気味に。もっとも、魔力自体は徐々に回復しており、段々と本来の力を取り戻しつつある。

300年の時差（?）から現代の常識を知らなかったり、逆に誰も知らないことを知っていたりと周りには不思議がられる。ただいまなんとか現代の生活に馴染もうと奮闘中。が、あまり成功していない。

・キラ（300歳くらい。見た目は10歳ほど）

黒髪に蒼色の瞳 アリアの使い魔 神族 獣型：狼 属性：闇

300年間眠り続けるアリアを守っていた（?）忠狼。外見は紅顔の美少年だが、中身は真っ黒。ご主人様至上主義で、アリアのために暗躍することしばしば。その実力もかなりのもので、基本アリア以外彼を止められる人間はいない。

闇属性なのに暗いところが苦手。好物はお菓子。お菓子のためならなんでもする。

・マリア（300年前の時点で15歳）

白銀の髪に薄紫の瞳　アリアの妹　第16代ハインレンス王国王妃
300年前アリアの“生きる理由”であった少女。後にアスト王子と結婚して『癒しの王妃』と呼ばれる。アリアほどではないが強大な魔力を持ち、その魔力は瞳の色と共に後世へと受け継がれていく。

・アストレイ・ウイン・ハインレンス（300年前の時点で19歳）
金髪に碧眼　アリアの初恋の人　第16代ハインレンス王国国王

300年前のハインレンス王国第一王子で、アリアに王妃の指輪を贈った人物。後にマリアと結婚するが、その真意は不明。

・ライラック・ユア・デイレイド（17歳）

茶髪に若草色の瞳　アリアの同級生　デイレイド公爵家の長男　属性：風・火

愛称はライル。魔物に襲われていたところをアリアたちに救われ、彼女を学園に招待した。アリアたちが一文無しだと聞き、助けてくれたお礼と称して当面の生活費を無利子で（ほぼ無理やり）貸す。

300年前アリアが毛嫌いしていた極悪宰相の子孫。陽気な性格でどんな人でもすぐ打ち解けることができる。イタズラ好きで、ある意味貴族らしくない。

・ルナ（302歳。見た目は5歳）

エメラルド色の髪に瑠璃色の瞳　ライルの使い魔　神族　獣型：ドラゴン　属性：風

300年前、まだ幼獣の時に地界に迷いこみ、密猟者に狙われていたところをアリアに救われた。その時の恩を返そうと、召還の儀で無理矢理押し掛けてくる。そして、なんやかんやでライルと契約。幼女の見え目通り、性格は天真爛漫。人の話をあまり聞かず、強大

なドラゴンの力も相俟って、周囲への被害は甚大。特にライルの心労は計り知れない。

・レストシア・クライス・ハインレンス（１７歳）

金髪に薄紫の瞳　アリアの同級生　ハインレンス王国第二王子　属性：光・水

愛称はレスト。ライルとは幼馴染。学園では生徒一の魔力の持ち主といわれている（ただし、本来はアリアの魔力のほうが上）。魔法の才がある＆王家の密命（次期国王の嫁探し）のために嫌々ながら学園に入学。基本無愛想で、クラスメイトからはその身分の高さからも敬遠されがち。

律儀かつ生真面目な性格で、ライルやフィルにはよく雷を落としている。王子だが、一番の常識人で苦勞人。ちなみに聖女マニアで幼いころから聖女を崇拜している。

薄紫の瞳と強大な魔力は、マリアの血を受け継いでいるせい。外見はアスト王子そっくりだが、そう言われることを嫌う。

・ミア・グレン（１７歳）

赤髪に茶色の瞳　アリアの同級生　平民　属性：土・闇

アリアにとっては、初めての女ともだち。上級クラスで唯一の平民で、成長につれて魔力が増える特異体質の持ち主。本来なら初級クラスで卒業するはずだったが、魔法士になって大金を稼げば幼い弟たちの生活費や学費も賄え、母親にも楽をさせられると思い、上級クラスへの進学を決意する。

アリアとは同じ平民として仲間意識が芽生え、すぐに親友になる。意外と小悪魔的な性格の持ち主。

・クー（８歳くらい）

茶色の体毛に水色の瞳　ミアの使い魔　聖獣　獣型：リス　属性：土
言葉が片言なこともあり、聖獣としての力はそれほど強くない。

しかし、召喚された当初からミアに懐いており、その相性はいい。ミアにはほぼペット扱いされているが、気にしていない。

・フィリック・ダン・リンメル（１７歳）

薄金色の髪に橙色の瞳　アリアの同級生　リンメル伯爵家の次男

属性：水・風

愛称はフィル。お調子者なうえに大の女好きで、女とみれば誰でも口説く変態。女性には優しい一方で、野郎にはかなり厳しい。授業中は大体寝ているか、女の子観察をしているかのどちらかだが、なぜか成績はいい。意外と手先が器用で、魔法具をつくるのが得意。最近の悩みは使い魔が冷たいこと。

・サラスティ（７０歳くらい）

透明な青色の体に薄い藍色の瞳　フィルの使い魔　聖獣　獣型：魚に似ている　属性：水

「くじゃ」という独特の話し方をする毒舌家で、その言動からメスだと予測される。主であるフィルには敬意の欠片も抱いていない。魚の姿をとっているがその表情は豊かで、フィルにはよく呆れた顔をしている。

・ローズマリア・ランシィ　・ベルドット（１７歳）

灰銀の髪に薄紅色の瞳　アリアの同級生　ベルドット公爵家の一人娘　属性：火

愛称はローズ。ライルとは従兄弟同士。クラスで孤立するミアと仲良くしようとしたが、生粋のお嬢様として育ったため庶民の話ができず、内容は貴族の自慢話のようなものになっていた。しかし、アリアを通じてようやくミアにもわかりにくい気遣いが伝わり、それを契機に二人と仲良くなる。

基本どんな相手に対しても公平で、言いたいことはズバズバ言う性格。実は上級クラスにおいてただひとり１属性しか使えないこと

が密かなコンプレックス。レストにホノ字。

・フラウ(?)

深紅の髪に海色の瞳　ローズの使い魔　神族　獣型：蜥蜴　属性：火
火属性の上級神族で、火の大精霊フレイアとも面識を持つことからその地位も高いと思われる。主をからかうのが趣味で、よくローズの怒りを買っている。

・バツシュ・フラスト(35歳)

深緑の髪に常盤色の瞳　アリアたちの担任　元宮廷魔法士　属性：土・火

常に飄々とした態度を崩さず、アリアからは“食えない男”と認識されている。そのいい加減な性格にも関わらず、意外にも生徒からの人気は高い。アリアの出自を疑っている。

・ニーナ・シンク・ヒーストン(72歳)

白髪に茶色の瞳　ハインレンス王立魔法学園の学園長　属性：水・光
一番の苦勞人。最近はおっぱら破壊魔による学園の財政危機に頭を悩ませている。

・ギルネシア・オルス・ハインレンス(20歳)

金髪に翠色の瞳　レストの兄　ハインレンス王国第一王子　属性：光
“黄薔薇の君”と称されるほど端正な顔立ちをしており、貴族の娘たちからは絶大な支持を受けている。王族にしては魔力量が少なく、それが原因でレストとの間に密かに後継者争いが生じている。
弟大好きブラコンだが、その本人に嫌われていることに気づいていない、ある意味かわいそうな人。

6章 第1話「訪問者」(前書き)

*今回はアリアの担任バツシユの視点です。
いつもよりはちょっと短い、かも？

6章 第1話「訪問者」

その日、俺は珍しく呼び出しを受け、この学園で最も豪勢なつくりの部屋へと赴くことになった。

重厚な木造のドアを2回ノックすると、すぐに「どうぞ」という声が返って来る。その声を合図に、微妙に立て付けの悪いドアをギシギシと音を鳴らしながら開けた。

（これ、直さないのか？）

と考えたところで、そういえば今学園は極貧状態だったということを出す。……この部屋の住人に多少同情せざるをえない。1カ月前の魔法授業の時、少しくらい被害を抑える努力をすればよかったか、とらしくもなく反省した。まあ、終わったことはしょうがないが。

そうして、趣味のいい調度品に囲まれた室内へと足を踏み出す。その部屋の中央では、立派な革張りのソファーに、二人の人間が向かい合わせに座っていた。

「お呼びでしょうか、学園長」

「よく来ましたね、バッシュ。今日はちょっと相談がありました」

その時だった。学園長の話を遮るように、対面に座っている青年がバツと勢いよく立ち上がった。

「あなたが古代魔法を使える人ですか！？ あれ、でも女の人だっ

て聞いて……？」

困惑気味に俺を見つめる青年は、まだ若かった。おそらく二十代前半だろう。

だが生憎、野郎に見つめられて喜ぶ趣味はない。学園長に訝しげな視線を送ると、彼女は『わかっています』という風に俺に視線を返し、正面の青年に向き直った。

「彼はその人の担任ですよ」

「そう、ですか」

若干シヨボンとしながらソファに腰を戻す青年は、ひどく落ち着かない様子だった。

……嫌な予感がする。厄介事の予感だ。自慢じゃないが、こういう時の予感は外れたことがない。

一応無表情を装ったつもりだったが、学園長にはその嫌そうなお才一ラを見破られていたのだろう。軽くため息をつかれ、着席を促された。……さすがというべきか、年の功には敵わない。

「まずは、彼の話を聞いてください」

青年の名はエリック・モルディ。両親は既に他界し、今は唯一の肉親である妹を救うために、大陸中を旅しているらしい。この学園に来訪したのもその目的のため、とのことだ。……彼の妹は滅多にない、とある症例にかかっていた。

彼、エリックの話した経緯はこうだ。最初は医者に行ったのだが、『これは医者領域じゃない、魔法士に診せるべきだ』と診断された。言われたとおり魔法士に診せると、今度は、『これは普通の魔

法士には無理だ。現代魔法ではなく、古代魔法にならまだ治せる可能性がある』と判断された。そして、その後は魔法士の言葉を信じて大陸にいる古代魔法の使い手を巡った……が、やはり“それ”を治せる人間はいなかった。

そうして『もうだめか』と諦めていた時に、新たな古代魔法の使い手の噂を聞いて、わざわざここまでやって来た、とのことだ。

たらい回しのようにあちこち駆けずりまわったエリックとその妹には同情するが……正直、これは厄介事以外の何物でもない。

なにせ症状を聞く限り、既に進行はかなり進んでいるし、そもそも“それ”は一度かかったら、かけた相手を殺さない限りは治す方法がないと言われているものなのだ。きつと二回目に診せた魔法士は、この青年の必死な形相に苦し紛れの返答をしてしまったのだらう。

気持ちはわからないでもないが……それこそ何百年前の魔法使いならいざ知らず、現代の古代魔法の使い手が、“それ”を治したという話は聞いたことがない。

（だが、この場でそれを教えたら死に兼ねないな）

正面に座るやつれた顔を見ながら、どうするべきかと思案する。なにせこの青年が望む古代魔法の使い手といえば

「お願いします！ その人に会わせて下さい！」

「はあ。と、言っても彼女は」

言葉を濁す自分に旗色の悪さを感じ取ったのか、エリックは地に額を擦りつける勢いで頼みこんできた。……なんて断りづらいことを。

「お願いです、会ってくれるだけでもいいんです！ あいつの言っていた余命まで時間がない！ もう、ここしか希望がないんです！」

「あいつ」？」

何気なく訊き返してみると、彼は憎くて仕方がないという口調でそいつのことを語りだした。

その口から出た奴の特徴は……忘れもしない仇のものと一致していた。

約一時間後

「次……は、セレスティか。おい、お前ら下がれー」

そう注意を促せば生徒たちも心得たもので、蜘蛛の子を散らすようにわらわらと一齐に“退避”を始めた。一目散に建物の陰に隠れる生徒もいれば、中には防御魔法まで使いだす生徒もいる。

……だが、いい心がけだ。むしろそれくらい盤石の備えをするべきなのだ、彼女には。

視線の先で一人ポツリと残された少女は、鉄壁の守りを敷く同級生の様子に、多少ムスツとしながら「今度こそは……」と呟き詠唱を始めた。

【我願いしは焰 猛き破壊の炎となりて 今こそ我が敵を滅さん】

詠唱が進むとともに、これまた馬鹿みたいに純度の高い魔力が一点へと集束される。それでもなお、溢れ出る魔力が彼女の周囲で渦巻いているのだから、未恐ろしいものである。

そして、案の定というべきか、爆音を伴って打ち出された“それは、的はもちろんのこと結界までいともたやすく突き破り、いくつかの木々を巻き込んだ拳句、最終的には外壁まで粉碎した。ちなみに最近なぜか無駄に威力も上がってきて、古代魔法ではないにも関わらず、当たり前のように結界を破壊するようになった。

「おー、こりやまた派手にやったな」

砂でできていたのではないかというくらい木っ端微塵になった外壁を眺め、相変わらずの威力に舌を巻く。どうやら破壊魔による破壊活動は、本日も絶好調らしい。

まあ、これが名物になっていたりもするのだから、この学園も十分おかしいが。

（これでまた今月の修理費が嵩むことになる、か）

他人事のように思った。学園長の心痛もまた増えることになるが、自分の懐が痛まないなら基本どうでもいいのが俺という人間だ。まあそんな自分がすることといえば、せめてもの情けで結界を補強するくらいである。

さっきの学長室のドアを見て反省した件も、既に頭の中からは消えていた。……所詮はこういう人間なのだ。

（それにしても、全く得難い才能だな）

個人的な意見ではあるが、卒業後は是非宮廷魔法士に推薦したいところだ。もともと学園内では、既に研究者や教師がそれぞれ彼女の進路についての熾烈な争いを繰り広げているが……そんな周囲の期待などおそらく彼女は知らない。

それでも、とりあえず課題である魔法のコントロールと知識さえ身につければ、どこに出しても恥ずかしくはない魔法士になるだろう。卒業まで時間はまだたっぷりあるし、ゆっくりやっていけばいい。

そんなことを考えていると、ズーンと沈んだ少女の背後、防御魔法を張っていた一団から賑やかな声が聞こえてきた。セレスティと親しい友人のグループだ。

てつきり、落ち込む彼女を元気づけようとするのか……と思いきや、その内容はさらに追い打ちをかけるものだった。

「よっしゃ壁ぶっ壊した！ 賭けは俺の勝ちー！ 約束通り昼飯おこれよフィル！」

「ちえ、木だけで止まると思ったのになぁー」

「ライル、フィル！ お前たちまた賭けごとをやっていたのか！？」

「ねーねー、“かけ”ってなーにい？」

「今度ルナにも教えてやるよ。てか真面目な顔で防御魔法張ったレストに言われるのもなぁ……って、あれ？ アリア、まさか落ち込んでる？」

「あ、でも、すごく格好良かったよ、アリアちゃん！ なあサラスティー！？」

「うむ、なかなか見事じゃった」

「そうよアリア！ 前回よりさらに威力が増してるってすごいわ！
なかなかないよね！？ ね、クーちゃん！？」

「スゴイ！ アリア、スゴイ！」

「そ、そうそう、私感動してしまいましたわ！ ほら、フラウも！」

「ああ、さすがはフレイア様の……っと、いけない」

「ちょっと、気をつけてよね！ と、ともかく元気を出して下さい
ご主人様！ 僕も勝ったから、今日の昼ごはんはタダですよ！ タ
ダ！」

とってつけたような慰めは、むしろ真逆の効果をあげていた。こ
こまで裏目に出るのも珍しいが……こういうのは悪意がないからこ
そ、厄介である。

もちろん言われた本人の身体には、グサグサと不可視の矢が突き
刺さっている。友人たちはもちろんのこと、果ては己の使い魔にま
で裏切られたせいで、心は重傷を負っているようだ。

いっそ気の毒になってきた。友に恵まれているのかいないのかよ
くわからない。

あまり顔には出さない彼女の感情の機微も、実は意外にわかりや
すかったりする。

オーラとでも言えはいいのか、なんとなく全身からその時の喜怒哀
楽が伝わってくるのだ。彼女の友人達もそれは既に会得済みなの
だろうが……いや、なにも考えまい。

（今はそれよりも）

顔が苦くなるのを抑えながら、その哀愁漂う後ろ姿に声をかける。
学園長と二人で出した決断だ。仕方ない。

「セレスティ、後で話がある」

「うっ………はい」

辛気臭い顔で地面を見ていた彼女は、俺の言葉に一瞬ビクリと肩を揺らした後、観念したようにまたガツクリと頂垂れた。

6章 第1話「訪問者」(後書き)

学園長が憐れ過ぎますね(涙)

でも、きっとそのうちいいことあるぞ。

次回も引き続きバッシュ視点になる予定です。

第2話「奇跡」(前書き)

お、遅くなりました(土下座)

第2話「奇跡」

この上級クラス5年を受け持つて、早2カ月になる。きっかけはギルネシア殿下のブラコンだったが、まさか自分が教職に就こうとは夢にも思っていなかった。

まあ、そんな感じで始まりこそ半強制的だったが、今はそれなりに楽しくやっているつもりだ。教師も存外悪くない、最近はそう思えてきた。

……もつとも、今回の様に厄介なことにならなければの話だが。俯く生徒を前にして、軽く嘆息する。

しかし、この編入生はよく問題を起こしこそすれ、そのどれもが悪気あつての行為ではない。

ましてや今回の件は、決して彼女のせいではないのだ。愚痴るのはお門違いというものだろう。

（さて、どうしたものか……）

顔は美少女、中身はひどい世間知らず。森で育ってきたという異色の経歴を持つ少女は、現に今も怒られるとでも思っているのか。どこことなくシュンとして、上目づかいにこちらを見上げてくる。

その小動物の様な姿が、どれだけ男心を撥るものか自覚していない。さすがに、生徒ということで俺の守備範囲からも外れているが……友人たちは、そこらへんのことをちゃんと教えているのだろうか？

まあ、最近はクラスの奴らともうまくやれているようだし、あまり心配はしていない。

最初の頃はいろいろあったようだが、それらも俺が何かするまでもなく自分達で解決してしまった……いや、自分達で、というよりは彼女の使い魔が、か。

キラという名の使い魔は、一時期ひどく“やんちゃ”をしていたようだが、どうせ貴族のお嬢にはいい薬になるだろうと放っておいた。いわゆる放任主義、という名の面倒臭がり屋のいいわけである。

それでも、さすがに伯爵令嬢に“オイタ”をした件についてはきちんと注意をしたのだ。だというのに、あのクソ生意気な使い魔とくれば、反省した様子など欠片もなく、あげくの果てには『持て余していたくせに。むしろ感謝してほしいくらいだよ』とのたまいやがった。

微妙に事実なもの、妙に腹立たしい。教師だっているいろいろ大変なんだよ、とつい愚痴りたくなるのも当然だろう。

もし、あれが部下だったら問答無用で”再教育”をしているところだが、貴族の坊ちゃん嬢ちゃんには、さすがにそこまでできない……まあ、必要な時はやるが。

いずれにしても、まったくもって生意気な使い魔だ。俺の使い魔に比べたら……いや、やめておこう。

（あれからまだ1年しか経っていないのか……）

今も胸底に残るのは、忘れられない懐かしい面差だった。

そんな郷愁に浸っていると、いつまでも話を切り出さない俺に焦れたのか、教え子は恐る恐るという風に口を開いた。

「あの、先生……？」

そうだった。今はこの問題を解決する方が先だ。

「ああ、悪い。実はお前に頼みたいことがあってな」

もつとも、あえてその詳細は話さなかった。

余計なプレッシャーをかけるべきではない、というのが一番の理由だ。

学園長とも話したが、他の高名な古代魔法の使い手でさえさじを投げたのだ。いくら類まれなる才能を持つ彼女でも、今回の件は荷が重すぎる。

それを踏まえた上で、最大限譲歩した結果がこれだ。セレスティには、『ちよつと具合の悪い娘がいて、その子を診てほしい』としか言っていない。そう、まるでなんでもないことのように。

正直、俺自身会わせるかどうかは随分悩んだが……本人達も必死の思いでここまでやってきたのだ。そのまま帰らせるのはあまりにも酷だろう、という結論に至った。

「ええ、いいですよ」

そんな苦渋の決断など知る由もなく、てっきり怒られると思っていたらしい彼女は、ホッとした顔をみせた後、なんの質問もせずにそう二つ返事で快諾してしまった。

自分で持ちかけておいてなんだが、普通はもっと怪しむべきだろう。また、らしくもなく迷う。

そうして重い足取りのまま、例の子どもがいる場所へと足を向けることになった。

背後についてくる気配を感じながら、ふと思いだしたのが1カ月前の会議のことだ。

（……今度は関係者以外立ち入り禁止にする必要があるかもな）

「おう、邪魔するぜ」

「失礼します」

「フラスト先生、アリアちゃん。いらっしゃあい」

「こんにちはリボン先生。さっそくですが、その例の子は？」

「ええ、こつちよお」

保健医、クラリス・リボン。

彼女のことは、その兄を通じて昔から知っている。だから、その微妙な変化にも気づくことができた。

その独特のユルイ話し方こそ変わらないが、いつもは柔和な笑みをたたえている面持ちは、さすがに今は沈痛なものとなっていた。

……彼女も既に例の娘を診てわかっているのだろう。もはや手の施しようがないことを。

案内された保健室のベッドには、まだ幼い少女とその横に寄り添

うように佇むエリックがいた。

彼らは突然現れた美少女の姿に、ひどく仰天しているようだ。

「初めまして、アリア・セレスティです」

「あ、あなたが古代魔法の……！？」

エリックは彼女の全身をまじまじと眺めながら、確認するようにこちらを振り仰いできた。俺が黙って頷いても、まだ信じられないような顔をするのだから困ったものだ。

彼にも妹を診せる条件として、セレスティに過度に期待しないこと、そしてその病状、特にその余命について伝えないことを約束させている。

もちろん、そこにはまだ若い彼女に救えなかった時の重荷を背負って欲しくない、というこちら側の思惑があるのだが……そんな条件をエリックがちゃんと覚えているのかは怪しい。なにせ狐につままれたような顔で、目の前の美少女を凝視しているのだ。

彼はセレスティの若さと、その一度見たら忘れられそうにない顔のせいで完全に意識が飛んでいるようだった。

一方、そんな兄の様子を知ってか知らずか、ベッドに寝かされた少女はか細い声で彼女に話しかけた。

「お姉ちゃん、天使様？ ユーナのこと迎えに来てくれたの？」

おそらくまだ10歳ほどだろう。ユーナという名前の少女は、ハツと意識を取り戻した兄の手を借り、なんとか上体だけ起き上がった。

だが、少しだけ嬉しそうにはにかむ姿は、その内容と相俟ってひ

どく痛々しい。

痩せこけた頬に、生氣を感じさせない瞳。その奥には死にゆく者特有の、諦めにも似た感情が隠されていた。こんな若い少女が宿しているものじゃない。

「滅多な事を言うな。ほら、ちょっと診せてみる」

子どもに対しては、いつもどおりというか。このどこかぶっきらぼうとした物言いに今は救われた気分だった。

キツパリと不吉な問いを否定したセレスティは、さっそくその白魚のような手を伸ばして、幼い少女の容体を確認し始める。

そして、普通の娘なら失神するんじゃないかというくらい惨たらしい患部を、ひどく冷静に観察した彼女は、その形の良い眉を顰めてこちらを振り返った。

「これは呪いですか？ それも上級魔族からの」

「！！ どうしてそれを！？」

エリックが発した驚愕の声に、腐敗した腕を一瞥しながら「やっぱり」と頷くセレスティ。

まさか、見ただけでこの珍しい症例の原因を言い当てるとは……正直驚いた。

「まあ、何度か見たことがありますし……もしかして、“これ”全身に回ってます？」

彼女は、大の大人でさえ目を逸らしたくなるようなそれを横目に、実に淡々と尋ねてきた。その目に、怯えや焦りといった色は見えない。

い。

（”何度か”？）

その単語に、ここ最近膨らんでいた彼女に対する疑念が再燃する。
おかしい。どう考えてもおかしい。

森で暮らしていた彼女に、この世にも珍しい症状を見る機会があったとは到底思えない。それも複数回も。

「う……あの、それは……」

困惑した声に一旦思考を中断すれば、『言っているのか』と許可を求めるようにエリックがこちらを見つめていた。

（ここまでばれてしまつては仕方ないか）

覚悟を決めて、その残酷な真実を告げる。

「……その通りだ。既に全身の組織が呪いに浸食されている。顔以外はどこも似たような状態だ」

ここまで言えば、おそらく彼女もわかるだろう。

そう、ほとんど末期に近い状態なのだ。それこそ助かる見込みなど万に一つもない、と言っているほどの。

実際よくここまで来れたものだと思う。まだ幼い少女には地獄の苦しみだったはずだ。きつとエリックも、藁にもすがる思いでここまで連れてきたに違いない。

だが……それでも、今回ばかりはどうしようもない。もはや人にできることは何も残されていないのだ。

あとは、安らかに逝けることを切に願うだけである。

（それでも、できることなら隠しておきたかった、な）

視線の先で難しい顔をしている彼女は、まだ若い。

本来ならまだ人の生死に関わらせるべきではないのだ。それもこんな形では……下手をすれば一生のトラウマにもなりかねない。

「そうですか。そこまで進行が進んでいるとなると……」

顎に手を置き、俯きがちにセレスティは呟いた。

「あ、あの……それで、どうなのでしょう？」

重苦しい沈黙に耐えかねたエリックが、ついにその質問をしてしまった。

不安そうな顔を見せる彼は、それでも最後の希望を捨てきれないようだった。気持ちはわからないでもない。だが彼女にそれを言わせるのは……

「実は私、治癒系の魔法が少々苦手です」

言いにくそうに口を開いた教え子。

その後に続く言葉がわかってしまったのだらう。エリックは、ヒュッと息を吐いて、なんとか呼吸を整えた。

「……………そう、ですか」

絶望に打ち震えた声が、静謐な室内に空しく響き渡る。

彼もきつと心のどこかでわかっていたはずだ。もはやどうしようもないことを。そして、これが最後通告であることも。

如何ともしがたい空気が、室内に重くのし掛かる。

とりあえず、今ここで取り乱されるのはいろいろと具合が悪い。ひとまず退出を促そうと、静かに手を伸ばす……が、次に彼女の口から出た信じられない言葉のせいで、中途半端な格好のまま固まってしまった。

「だから、完治させるまで3日ほどお時間いただきますが、よろしいですか？」

「……え？」

示し合わせたように大人3人分の声が重なる。
その顔といたらさぞや見物だったろう。全員が全員、まるで何を言われたのか理解できないとばかりに、惚けた顔を披露したのだから。

そしてバカ面を見せる俺たちには頓着せず、彼女は申し訳なさそうな顔で話を続けた。

「すみません。もっと早いほうがいいでしょうけど、なにぶん魔力が……あ、いや、やっぱりなんでもないです」

「ほ、本当ですか!？」

「はい？」

ガシッと肩を掴んできたエリックに、今度はセレスティが気の抜けた返事を返した。

……にしても、全くといっていいほど会話がかみ合っていない。
いや、無理もないだろうが。

驚いて声も出せないリボン先生の代りに、俺が確認する。

「セレスティ、本当に治せるのか？」

自然探るような目つきになってしまふのは仕方のないことだろう。
彼女が質の悪い嘘をつく人間でないことは、十分知っているつもりだ。

だがここで下手に希望を持たせるのは、双方のためにならない。
はつきりさせる必要がある。

「はい、時間はちよつとかかりますが。解呪に2日、皮膚組織の治癒に1日といったところでしょうか。まあ、その後の経過を見るためにもあと数日必要ですが」

彼女はユーナの方を見ながら、より具体的な数字を提示してきた。
できるできないの話ではない。まるでそうあるのが当然かのような口振りだった。

これには、さすがの俺も絶句する。高名な魔法士が1年かかって
もできないものを、たったの3日でやろうというのだ。

こんな事態でなければホラ吹きと言われてもおかしくない早さである。

同じような感想を持ったのか、リボン先生が「うそぉ」と小さくこぼす。

一方で興奮したエリックは、全身を震えさせながらもう一度セレスティに詰め寄った。

「ほ、本当に！？ 本当ですか！？」

「え、ええ」

その勢いに押されるように、彼女は少し困惑しながらも今度は力強く頷いてみせた。

それを見たエリックは、「治る、本当に、治る……」とまるで自分に言い聞かせるように何度も声に出して確認した。
握りしめた拳がブルブルと震えているように見えるのは、きっと錯覚ではないだろう。

「ねえ、お兄ちゃんどうしたの？」

自分の裾を引っ張る妹の手を、包み込むように握り返した兄は早口でまくし立てた。

「ユーナ、もう大丈夫だぞ！ この人がお前の病気を治してくれるんだー！！」

「本当？ もう痛いのが我慢しなくていいの？」

そしてユーナの邪気のない視線を受けたセレスティは、軽く笑いながらその頭にポンと優しく手を置いた。

「ああ、今までよく頑張ったな。まずは、痛いのおさらばする魔法をかけるぞ」

そして【麻痺 痛覚】と呟いた彼女の手から、高密度に圧縮された魔力が流れ出る。

「これで治るまでの3日間は痛みを感じないはずだ」

どうやら麻酔効果のある魔法を使用したらしい。

だが、一見易々と行使されたこれも、俺たちの常識から見ればとんでもない奇跡といえるだろう。

なにせ今まで麻酔効果は薬によってしか得られないとされてきたのだ。しかもその薬自体が高価な上に、持続時間もせいぜい数時間が限度である。

しかも、効果が表れるまで時間がかかるといわれているのに……

「わあ、痛くない！ お兄ちゃん、痛くないよ！！」

(……早い、いや早すぎる)

奇跡のような行為があまりにも淡々と行われたため、まるで自分の中の常識が間違っていたのではないかという錯覚に陥ってしまう。これは本当に現実なのだろうか。

「あ、ありがとうございます！！」

エリックの声が、保健室にはふさわしくないほど大きく響きわたる。彼も口ではああ言っていたものの、さすがにすぐには信じられ

なかったのだろう。

だが、実際の魔法を見て確信したのか、その瞳はいまや爛々と輝いていた。これは、希望を見つけた人間の目だ。

（もしあの時……いや、馬鹿か俺は）

エリックの歓喜に引きずられたように、不意に己の中にひとかけらの羨望が生まれてしまった。

もし、あの時この娘がいてくれたら……そんな愚かでどうしようもない願望を持つとは、俺もよほど気が動転しているようだ。

「フラスト先生」

そんな状態だったから、いきなり本人から声をかけられて驚くのも無理はないだろう。むしろ動揺を飲み込んで、普段通りに言葉を返した自分を誉めてやりたいくらいだ。

「……なんだ？」

「こういうわけなので、3日ほど学校を休みます。いいですか？」

何を鼻にかけることもなく、どこまでもまっすぐな瞳で彼女は問いかけてきた。

この娘は、自分がどれだけ常識から逸脱したことをやってのけたのか全く理解していないようだ。

「……ああ、もちろんだ。立派な人命救助だしな」

「ありがとうございます。よし、じゃあさっそく解呪にとりかかるぞ」

「つよ、よろびくお願いじます!!」

「ます!!」

元気よく返事する兄妹の姿に、セレスティは目を細めて「大げさだな」と苦笑した。

確かにボロボロと涙をこぼすエリックは、男泣きを通り越してすごいことになっている。

だが……これまでの道のりを考えれば、この反応も決して大げさとはいえない。

献身を捧げた最後の家族。その妹が痛みに苦しむのを、これまでずっと手をこまねいて見ていたしかなかったのだ。

その呪縛から、今やっと解放される。その感動は、きっと言葉では言い尽くせないものがあるに違いない。

（だが、問題は……）

「リボン先生」

「なんでしょうかあ、フラスト先生？」

小声で名を呼んだ俺に、セレスティの魔法を見ていたリボン先生は、その視線を外さないまま返事を返してきた。

よほど興味があるのだろう。彼女はその一挙一動をも見逃すまいと、食い入るように観察している。

「あの魔法、どう思います？」

視線の先には、迷いのない手つきで、見たこともない魔法を使いこなす生徒がいる。

一瞬こちらに視線をよこしたりボン先生は、少し間を置いた後、言葉を選ぶように語り始めた。

「うーん、正直信じられないですう。さっきの麻酔効果のあるものにしても、私は聞いたことないですしい。上級魔族の呪いを解けることについても同じですよ。なにより皮膚組織の治癒っていいましたけど、ユーナちゃんのあれは組織が壊死しているに近い状態ですから、ほとんど再生なんですよねえ」

「……そうですか」

リボン先生はその言動とは裏腹に、魔法と一般的な医学の両方に精通している非常に優秀な医師だ。

その証拠に、最初こそ思わぬ事態に混乱していた彼女は、今やこの状況を誰よりも冷静に分析していた。深海のように濃い紺の瞳は、研究者としての鋭い知性を湛えている。

その彼女にして、「ありえない」という評価が下されたセレスティの魔法。いや、この場合は彼女の存在自体もその対象に含まれていると考えるべきだろう。

「どうなっている……」

胸に去来したのは、途方もない存在に対するどこか複雑な感情だった。

恐怖や不気味とは少し違う。だが特別というよりは、異端。そう称すべきだと本能が告げていた。

(ドラゴンの件といい、少し探る必要があるかもしれない)

第2話「奇跡」(後書き)

バイト 風邪 バイト 風邪の無限ループ(涙)

次は人物紹介をあげたい、ですね。

あと次話はアリア視点に戻ります。

誤字・脱字等ありましたら、是非教えてください。

第3話「思案」

あたたかな春の日差しが降りそそぐ中、正門の前を横切り校舎の中へと足を進める。

正門といえば……学園の門に変な魔法がかけられてから、早1ヶ月が過ぎたことになる。微かな魔力を匂わせながらも、自分以外の生徒はその存在にすら気づいていない魔法。かくいう私も何の魔法がかけられているのかまではわからなかったのだが、結局害はなさそうだと思い放っておいた。

それでも、つい先日だっただろうか……興味本位で担任に訊いてみれば、彼はいつもの飄々とした口調でこう言いきった。

『新しい魔法の実験をしている』

だ、そうだ。

しかし、生徒を実験台に使うとは、なかなか強かな研究者もいたものである。もっとも、それを許す学園側も相当なものだが……

そんなどうでもいいことをつらつらと考えていると、いつの間にやら本日の目的地に到着していた。

いつもの教室とは違う真っ白なドア。その扉を開けば独特な薬品の匂いと共に、いつもどおりの元気な挨拶が迎えてくれた。

「おはようお姉ちゃん！」

「おはようございますアリアさん、今日もよろしくお願いします！」

「ああ、おはよう」

人懐っこく、どこか自分の妹に似ているユーナ。そして、そんな妹想いのエリック。同じように妹を持つ……いや、持っていた人間として、手を貸すのもやぶさかではない。

「お姉ちゃん、明日はもうお外で遊んでもいい!？」

「随分と気が早いな。残念だがあと2、3日は安静にしないとダメだ」

「えー!!」

「こら、ユーナ。あまりアリアさんを困らせるなよ。どうせあと数日で外に出られるんだからいいじゃないか」

「むー、じゃあお兄ちゃん、その時は新しいお洋服買ってね!」

「えっ」と口元を引きつらせたエリックに、過去の自分を重ねて苦笑する。弟妹の我儘に振り回されるのも、先に生まれた者の務めだ。

魔族の呪いにかかっていたユーナは、この2日間で随分と回復した。もともとおてんばな性格だったらしく、最初の頃に比べると今のように笑顔も口数も随分と増えた。なにせ、最近は『元気になったらすること』リストを書き、その膨大な量にエリックが頭を悩ませるほどである。

もつとも、彼にしても困った顔をしながら口元は常に緩やかな孤を描いており、その心情は簡単に推し測ることができた。

「よかったなユーナ。じゃあ、今日の治療を始めるか」

「うん！」

「お願いします」

昨日までで呪いの解呪は完了したから、後は今日1日かけて皮膚組織を治癒すれば元通りの健康体だ。数日経過を見て大丈夫そうなら、彼女が望んだ通り外で遊べるようになるだろう。

（本当はもう少し早く治してやりたかったけど……）

その理由のひとつ、『治癒魔法が苦手』というのもあながち嘘ではない。なにせ自分自身に使用できない治癒魔法は、これまで私にはほとんど縁のない魔法だったのだから。

だが、今回のケースに限っては魔力量の方が問題だった。

魔力量の方も順調に回復してはいるのだ。それこそ、最初はあまりにちまちま回復するので、一体全快まで何年かかるのかとやきもきしていたが、ここ最近はどうやら体が慣れてきたようでその回復量も増え続けている。

……まあ、そのかわり魔法の威力も相対的に上がってしまい、コントロールの上達進度とのイタチごっこが続いていたりもする。先日の外壁破壊然り。

ともかく、そんな経緯もあってかさすがに授業で魔力を使いきることはなくなってきた。この分だと長く見積もっても、一年あれば元の魔力量に戻るだろう。

だから現代レベルの呪いであれば、魔力が問題になることはまずなかったのだ。

言い換えれば、今回はその呪い自体がなかなかどうして厄介な代物だった、ということになる。

蜘蛛の目のように複雑に絡み合った術式は、術者の陰険さ具合がよく現れている。その上、下手に手を出せば、一発で天に召されるような仕掛けになっていたのが非常に勘に障った。以前の魔力量なら強引にやっても良かったが、今はそれもできないのが口惜しい。

ちなみに、先日様子を見に来たキラも同意見だったらしく、『いつももらったの?』とユーナに問いかけた彼は、5ヶ月前という答えに『ふーん』とぼやけた返事を返しながらも、始終不機嫌な顔をしていた。

おそらく魔族の残り香がプンプンする呪いの近くにはいたくなかったのだろう。足早に去ろうとしたキラは、去り際にふと立ち止まって『あ、一応忠告くらいはしておっかな』と呟き、エリックに何か耳打ちしていった。

そして、なぜか顔面蒼白で、もげるんじゃないかというくらいガクガクと首を揺らすエリックの姿に、満足気に頷いていつも通り遊びに出掛けた。

それ以来だろうか。エリックは会話こそ普通にするが、常にどこかビクビクしており、決して一定の距離から私に近づこうとしない。まるで一時期のレストのような状態である。

……いったい何を言ったんだ、あいつは。

どうもしつけ方、もとい育て方を間違えた気がしてならない。私が封印中の300年でいろいろあったのかもしれないが、なにやら変な方向にたくましくなっている気さえする。なにせ最近怪しい行動が多すぎるのだ。

（今からでも矯正は可能なのだろうか）

そうして、遠い目をしながらここにいない相棒の教育に頭を悩ませていると、目下からかわいらしい寝息が聞こえてきた。

「あ、こらユーナ……」

「ああ、起こさなくていい。眠ったままでもできるさ」

視線を落とすと、さっきまでの賑やかさはどこへいったのか、今度
はあどけない寝顔を披露するユーナがいた。

かわいものだ。きつと昨夜はいろいろと楽しみで眠れなかったの
だろう。

兄もそれがわかっていいのか、慈愛に満ちた目で苦笑気味に謝罪し
てきた。

「そういえば……今まで訊いてなかったが、どうしてこんな呪いを
かけられたんだ？」

ちようどいい機会だと思い、この厄介な呪いをかけた持ち主のこと
を尋ねてみる。今まではユーナの手前少々訊きづらかったのだ。

途端に顔を曇らせるエリックに、口に出すべきではなかったかと一
瞬後悔したが、それでも彼は重い口調で”その時”のことを語って
くれた。

「僕はその日ちようど用事で出かけていて、帰宅した時にはすべて
が終わった後でした。だから、これは妹から聞いた話になるんです
けど」

そう前置きした彼は、視線を足下に固定したまま俯きがちに話を続ける。

「その魔族は最初、旅人のように振る舞っていたそうです。うちは山村にありましたから、時々そういう人が立ち寄ることもあって、その時もいつものように歓迎したと聞きました。……だけど、それが間違いでした。それまで歓談していた奴は、ユーナを見て唐突に本性を現したんです。抵抗する間もなく村人はユーナを除いて全員殺され、両親も妹の前で……最後に妹に呪いをかけた奴は、笑いながら『お前の命はあと半年だ。精々それまで足掻くといい』と言ったそうです。あいつは、本当に悪魔のような奴で……僕たちが何をしたっていうんだ！」

そして、震える手で己の膝頭を叩いたエリックは、最後に「僕がその時ついていたら……」と悔しげに呟いた。

客観的にみれば、その時不在だった彼は幸運だ。きつと武器を持ったこともない彼がそこにいたところで、あっけなく殺されるのが関の山だろう。それは本人もわかつているはず。

だが……それでも心は自分を許せない。もしその時その場にいたら、何かが変わっていたかもしれない。

そんな過ぎ去った可能性をいつまでも追い続けてしまうのは、自分一人が難を逃れ、生き延びてしまったという負い目があるからだろう。

終わらない懺悔と後悔に苛まれるその姿は、まるで鏡に映る私のようだった。

「……エリック、それでもお前がこうやって生きていることでユー

ナは一人じゃなかった。ユーナにとって、それは救いだっただ。現にお前が諦めずにここまで連れてきたおかげで、彼女は笑顔を見せてくれるようになった。未来のことも語るようになった。……過去を忘れるとは言わないが、おまえたちはまだ若い。少しずつでもいいから、前を向くべきだ」

口をついてでたのは、まるで自分自身に言い聞かせるような安っぽい言葉だった。正直これでエリックが立ち直るとは思っていない。何せ私自身未だ抜け出せていないのだから。

……結局、最後は自分自身でケリをつけるしかないのだ。

ユーナにしても普段は明るく振る舞っているが、ここに来る以前は、よくその時のことを思い出して、一人震えていたらしい。それも兄に心配をかけまいと、声を押し殺して泣くのだ。

目の前で両親が殺されたショックを一人で抱え込む彼女も、その胸に巣くう闇は深い。本当の意味で立ち直るには、まだまだ時間が必要だろう。

だが……この二人ならきつと乗り越えられる。お互いを支えあって共に未来への一步を踏み出すだろう。そんな、根拠のない確信があった。

（そう、私たちは違うんだ……）

思考が陰鬱な方向へと流されそうになるのを、なんとか寸前で阻止する。私の悪い癖だ。300年前のことにいくら想いを馳せようと、今更どうしようもないのに。

ひとつため息をついて、気持ちを切り替える。今はそれよりも、例の魔族のことだ。

旅人に化けていたというのは、おそらく魔族お得意の変身魔法のことだろう。相手を油断させ効率よく”狩り”をするために、よく奴らが使う魔法だ。

その正体は、素人目にはまず見破ることはできない。なにせ上級魔族にもなると、熟練の魔法使いでさえ欺くのだ。一般人が気付けるはずもない。

しかも

「快乐的に人を殺す魔族、か」

そう称したのには、いくつか理由がある。

確かに魔族にとっての一番の獲物は人間だと言ってもいい。他の動物より魔力量が多いし、武器や魔法を用いなければ個体としての強さはそれほどでもない。それこそ上級魔族ともなれば、赤子の手を捻るが如く易々と一般人を殺し、喰うこともできるだろう。

そう……だからユーナを生かし、あまつさえ呪いなんて面倒なものをかける必要性など、どこにもないのだ。

本来魔族のかける呪いは、力量の高い相手を弱らせて喰うための下準備のようなものである。

もっとも、そこに力量差があり過ぎると取り込んだ力に呑みこまれて自我を保てなくなってしまう。だから魔族も喰う相手を選ぶのだ。……ユーナの場合は明らかにそれと違う。確かに魔力はそこそこあるようだし、おそらくその村では一番の保持量だったのだろう。

だが、まだ幼い彼女はその使い方を知らない。ただの無力な子供だ。わざわざこの呪いをかけなくとも、上級魔族ならその場でユーナを

殺すことも喰うこともできたはずだ。

なのに奴はそれをしなかった。

この不可解な行動と、エリックの話から推測できることはひとつ。

（完全に、命を弄んでいる）

なにせ村人にしてもただ殺されただけで、喰ってはいないのだ。彼らの微々たる魔力には興味がなかったのかもしれないが、ならばわざわざ殺す必要もなかったはず。

おそらくユーナが生き残ったのは、奴の遊びなのだろう。

まったくもって性質が悪い。

それこそ……生かしてはおけないほどに。

そうして若干目の据わった私とは裏腹に、少し落ち着いたらしいエリックはその後の経緯を語り始めていた。

「その後は家売って、両親の残してくれた全財産を持って各地を回りました。アリアさんと同じ古代魔法の使い手にも何人も会ってきましたが、どなたも『これは自分の手に負えない』とおっしゃられて……でも、最後の最後でアリアさんのようなすごい使い手に会えて、本当に幸運でしたよ」

「そ、そうか」

他の古代魔法の使い手でもダメだったのか……いや、下手に手を出さないだけの観察眼があっただけまだいい。彼らががむしゃらに魔法を使っていたら、きっとユーナはこの場にはいなかっただろう。

それを踏まえると、今回知らなかったとはいえあまりにも自然に呪いを解いてしまったのは失敗だったのかもしれない。

……まあ、しょうがないか。

今回は事が事だし、出し惜しみする余裕もなかったのだから。

だが……やはり280年前の大火事の影響で、現代の魔法は魔力量はもちろん、呪いをはじめとする知識の面でも大幅に後退してしまったようだ。

（一体、280年前になにがあつたんだ？）

大火事の詳細について調べようにも、学園にある資料では限界があった。キラに訊いても『僕はずっとご主人様のそばにいたからよくわかんないです。あの洞窟から王都の方が赤くなっていたのは見ましたけど……』と答えるばかりだ。

やはり、これはどこかで調べる必要があるかもしれない。

そうして思案に耽っていると、『あのー、アリアさん？』という声と共に心配げなエリックの顔が視界に広がった。

「え？ ああ……そ、そういえば私はまだ自分以外の古代魔法の使い手に会ったことがないんだ。どんな人たちなんだ？」

取り繕うように慌てて適当な話をふれば、彼はキョトンとした顔を見せながら、その記憶を掘り起こしてくれた。

「えーと、ご存じかと思いますが、皆さんとても有名な方ですよ。例えば“蒼き雷帝”ラジアート様とか“雪原の妖花”ジュリアン又

様とか」

「……………それは、すごいな」

いや、すごいというか……恥ずかしい。誰がつけたのか知らないが、もう少しなんとかならなかったのだろうか？

もともと、私の……というか聖女の二つ名もなかなか恥ずかしいからあまり強くは言えないが。

（いや、そもそもこういうのは自分で決めれるわけではないからな）

きつと彼らも被害者に達しない。そう考えると妙な仲間意識が芽生えてきた。

そうして一人勝手に納得していると、微妙な顔をしたエリックが言葉を選ぶように慎重に口を開いた。

「皆さんなんというか……個性的な方でした。ああ、ここ近くで言えば、隣国ガルバニアは第三王子が有名ですね。こちらはさすがにお会いすることはできなかったんですけど……たしか”闇夜の支配者”でしたっけ？」

個性的発言の前の沈黙が若干気になったが、ここはあえて聞かなかつたふりをしよう。

「ああ、ガルバニアか」

ガルバニアといえば、昔からある神聖国家だ。私の住んでいたテルニア村が、その国との国境沿いにあったからよく覚えている。

名前通りといえいいのか……小耳に挟んだ話では、現代でいう神

聖魔法が発達した国になっているらしい。その国の第三王子が古代魔法の使い手。二つ名から察するに、おそらくは閻属性の持ち主だろう。かわいそうな二つ名をつけられた仲間同士、なんだか親近感が湧いてきた。

「そのうちアリアさんにも二つ名がつけられることになるんでしようね。ふふ、今から楽しみです」

「できれば一生つかないほうがいいけどな。そうだ、完治後なんだが……どこかに行く予定とかはあるのか？」

「え、いいえ。しばらくはハインレンスにしようと思っていますけど……？」

「そうか。なら、しばらくはこの街に留まってほしい。それと後で渡したい物があるんだ」

「あ、はい」と、どこか釈然としない返事を返すエリックだが、とりあえずは了承してもらえたようでよかった。

そう……この件にはまだ懸念が残っている。

可能性がないわけではない。備えあれば憂いなしともいう。念のため準備だけはしておいたほうがいいだろう。

いくつかの方法も考えたが、その途中不意に思いだしたのは、先月の魔法具の授業だった。

（……うん、現代のやり方に慣れる意味でもちょうどいいし、ここはひとつフィルにも協力してもらおうか）

とにかくにも、このレベルの呪いをかける魔族を仕留めるのは、

おそらく現代人にはかなり荷が重いはずだ。

その意味でいえば、モルディ兄妹は運が悪かったといえるだろう。だが、例の魔族にしても、この時代において私と縁を持つとは相当運が悪いに違いない。

いずにせよ、キラの前に矯正が必要な相手だ。

授業の代金は、せいぜい命で払ってもらうことにしよう。

第3話「思案」（後書き）

どうも、お久しぶりです。いろいろあって投稿が遅れてすいませんでした（汗）

あと、この終わり方だと次話で戦闘とか期待されちゃうかもしれないですけど、そう思われている方にはおそらく拍子抜けの展開になってしまいますんで、あらかじめご了承ください。

あ、ちなみに二つ名は全然思いつかなかったので、「中二的二つ名めーかー」なるものを使用させていただきました（笑）

いろいろ組合せてみたんですけど……いやはや面白かったです。

第4話「仇敵」(前書き)

けっこう長いかもです。

ちなみに前半は三人称で、後半はアリアの一人称になります。読みづらかったらすいません。

第4話「仇敵」

モルディ兄弟がハインレンス王立魔法学園を訪れてからおよそ2週間後。

その日は、昨夜の雨に続いて薄暗い曇天が空を支配していた。

「そうして、神のお告げを聞いた聖女アリア様は、世の平和のためにひとり立ち上がりました。自らの犠牲を顧みることなく、戦場に颯爽と現れ当時の王国騎士団“太陽の矛”とともに魔物を討伐していく彼女は、清廉で慈悲深く、まさしく聖女と呼ぶにふさわしい精神の持ち主だったといわれています」

そしてまた、この上級クラス5年の教室では、昼休憩あけの歴史学担当ケインの講義が開かれていた。

ちゃらんぼらんな授業で定評のある彼が珍しくまともに授業をしているのは、第二王子が目を光らせていることに起因している。なにせ第二王子レストシアの“聖女様”への陶醉ぶりといえば、この学園で知らぬ者がいないほど有名な話だった。

下手な講義などしてみようものなら、件の王子様から苦情が来ることは間違いない。いくら普段おちゃらけたケインでも、それは勘弁願いたいところだった。

その一方で、本日の講義の主役である噂の“聖女様”といえば、最初の頃こそその純度100%の嘘っぱち伝承にいろいろ物申したいことはあったのだが、ここ最近はいっそのことなにもかも諦めて開き直る、という特技を編み出していた。

むしろ、今の彼女にとってはそんな些事よりも昼食後の生徒を襲うこの甘い誘惑にどう打ち勝つかが問題だったのだ。

だが、まどろみの中で必死に戦うも、退屈かつ嘘だらけな内容の授業に、徐々に抵抗の意思は奪われていく。

あるいは降参の白旗をあげるのも、時間の問題だったのだろう。こつくりこつくりと首がリズムを刻み始める頃には、緩やかな敗北に身を任せ夢の国へと旅立とうとしていた。

……のだが、とある感覚が彼女を一瞬にして現実へと引き戻すことになる。

それは、あまりにも唐突だった。彼女はバツと飛び起き、そのままの勢いで立ち上がったのだ。

椅子が盛大に倒れる音とともに、透き通るような声が昼下がりの静かな教室に木霊する。

「かかった!!」

「うお!？」

「セ、セレスティ、どうしたんだ突然？」

後ろで同じく舟を漕いでいたらしいライルはビクンと肩を跳ねらせ、真面目に授業を受けていたレストも突然の珍事に目をまん丸とさせる。

しかし、そんな彼らの疑問などどこ吹く風。さっきまで寝ぼけていたとは思えない俊敏な動きで、彼女は窓に手をかけながら教室の前方を振り返った。

「ケイン先生！ フラスト先生に『例の魔族が現れた』と伝えてく

ださい」

「え、あ、はい……でもセレスティさん、窓を開けて何を？」

勢いに押されてか、今まさにチョークを持って黒板に文字を書くところだった彼は、その姿勢のままぎこちなく頷いた。

かろうじて付け加えられた疑問は、あるいは本能的な警鐘だったのかもしれない。

『この娘、何かする気だぞ』という。

当の本人といえ、戸惑うような視線と湿った風をその身に受けながら、鷹揚にこうのたまった。

「ご心配なさらず。ちょっと魔物を狩ってくるだけです」

「いやいやいや、何言ってるのよアリア」

「寝ぼけているのですか？」

突然わけのわからないことを言い出した級友に、ミアとローズが不信な顔で問い返す。だが、それすらも意に返さず、どこか急いでいる風の彼女は「じゃ、行ってくる」と手を振り……周囲が度肝を抜くような行動に躍り出た。

窓枠に足をかけ、ためらいもせずその身を宙へと投げ出したのだ。

「え、嘘　！？」

「きゃ　！！」

考えてもみてほしい。はたから見れば飛び降り自殺である。このまさかの事態に、彼女の友人が甲高い悲鳴をあげたのを誰が責められようか。

だが次の瞬間、そんな彼女たちを宥めるように、落ち着いた声とともに濃密な魔力の気配が届いてきた。

【飛行】

階下から今一度ゆつくりと姿を現したその姿に、窓際にいた生徒はかすかな安堵と、その数倍の衝撃を受けることになる。

「…………マジ？」

目を見開いて、眼下をのぞき込むライル。その声に反応してクラスメイトの大半が窓枠まで駆け寄ってくる。

そして次々と驚きの声をあがった教室は、もはや授業どころの騒ぎではなかった。

しかし、教師であるケイルもそれを止めようとはしない。なにせ普段は余裕たっぷりの彼ですら、今や生徒には到底見せられないようなアホ面を披露していたのだから。

一方クラスメイトの興味を一身に受けた彼女は、睨むようにある一方向を見ながら数秒空中に佇んだ。無論、その下に彼女の身体を支えるものはなにもない。

そして、我に返った彼らが声をかける暇もなく、そのまま矢のような勢いで飛んでいってしまう。

「あれは……飛行、魔法？」

呆然としたケインの声が教室に響く。

ここに来ておよそ2ヶ月の編入生。最初は突然の奇行に、次は生まれて初めてみる希少な魔法に彼の思考は完全にパニックになっていた。

「セレスティ、飛べたのか……」

そんなケインより幾分落ち着き、しかしどこか腑に落ちない様子で呟いたのはレストだ。以前屋上近くで数秒だけ浮遊していたように見えたのは、やはり錯覚ではなかったのだ。

しかし……だとすればあの時と今の光景に違和感を覚えてしまう。彼はその違和感のもとが掴めずにいた。

そうこうしているうちに、ものすごい速度で飛ぶ彼女の影は街の方へと消えていく。

心配げにその後ろ姿を見送ったのは二人の少女。振り返ったミアとローズはお互い怪訝な顔をつきあわせながら疑問を投げかける。

「ねえ、どうしていきなりあんなことしたのかな？」

「ずいぶんと急いでいたんですけど……先ほど何かおかしいことでもありましたか？」

「おかしいこと……あ！ そーいや、ペンダントが光ってた気がするな」

思い出したように語るライルの単語に、ピクリと反応する人間がひ

とりいた。その彼 完全に居眠りをしていたフィルは目を擦りながら窓際に近寄る。

「そのペンダントって、もしかしてこの前俺が作ったやつかなあ？」

「へ、あれお前が作ったの？ …… ってことは魔法具なんだな？」

「そりゃな。でも実は全部で三つ作っててさ。防御魔法を施したのが二つ。アリアちゃんが魔力を込めたからすげー強度に仕上がってさ。あれなら古代魔法だって防げるぜ。あとは、それが発動したら反応するよう細工したものが一つ。それがアリアちゃんがしてたやつってわけ…… ぐふふ、初めての共同作業ってわけだよ」

よくぞ訊いてくれた、といわんばかりに自慢げに語るフィルは、寝起きでテンションがおかしいのも相まって、始終気持ち悪いうすら笑いを浮かべていた。

しかし、彼のこういった言動にも慣れているライルは、最後の変態的な発言も軽くスルーし、感心したように呟く。

「あー、お前あーゆー魔法具作るのだけは得意だもんな」

「だけ、は余計だ。まあ、この天才フィリック様にかかれれば朝飯前よ。女の子からのお願いされればどんなものでもつくってやるさ」

歯をニツとさせて決めポーズをつくる彼は、しかしながら周囲の空気を全く読めていなかった。クラスメイトも若干引き気味である。だが周りと同じように呆れた顔をつくったローズは、このままでは埒があかないと話の軌道を修正する。

「まあ、そんな話はどうでもいいですけど…… つまり、アリアさん

のペンダントが光ったということは、防御魔法が発動したということですか？」

「半分あたりかな。対象に一定以上の攻撃が加わった時、もしくは魔物が一定範囲内に近づいた時が防御魔法の発動条件になってるんだ。しかもその時学園の敷地外にいてもアリアちゃんのペンダントに反応するように設定して欲しいって言われてさー。あれには苦労したぜ」

「へー、本当に器用ね。……って、あれ？ それって、つまりさっきの魔物狩りの話も……？」

しばしの沈黙を経て、彼女たちの中で過程と結果が結びつく。それを見てふんぞり返っていたフィルも、ようやく事の重大性を理解するに至った。

「……………あれ？ やばくね？」

そうして、ダラダラと汗を流し始める魔法具の作成者と女子二人。その中で一番最初に沸点を迎えたのはミアだった。拳を震わせながら般若のような形相で不満を爆発させる。

「もーあの子はー！ 一人で突っ走って怪我でもしたらどうするのよ！？」

「とにかく、早くフラスト先生に伝えませんか！」

「後で説教よ！」「本当ですわ！ まったく何回空から落ちれば気が済むんですの！？」と愚痴りながら駆け出す女子二人を、「お、俺も！」と躡きながら追いかけるフィル。

そんな風に三人がバタバタと慌ただしく出ていった後、混乱を収める者のいない教室は、まるで朝市のような雑然とした喧噪に包まれた。

誰もかれもが好き勝手にしゃべり始め、そのあまりの騒がしさにレストも一端思考を止めざるを得ない。

そして、そんな彼が眉を寄せながらふと横を向くと、そこには彼女のいなくなった方角をジッと見つめるライルの姿があった。

……なんとなく面白くない。自分でもよくわからない感情にとらわれながら、ここ最近でようやく彼女とも普通に接することができるようになったレストは、傍らに立つ幼馴染に声をかける。

「……あまり心配そうではないな、ライル」

「ん？ まあ、アリアの強さは知ってるしな。なんたって、特技が魔物狩りだし。てか、そーゆーレストこそずいぶん余裕じゃねえ？」

「別に……キラがついていれば、大事には至らないだろう」

顔はどこか不満げだが、断言するその声に迷いはなかった。レストとキラ……この二人は仲が悪いなりにお互いのことを認めてるんだろ？ とライルは内心で呟いた。もっともそれを口にすればまたツンデレ的発言が飛び出すに違いないので、今はやめておいたが。

「キラかー、そーいや最近見なかったな」

「おそらくこの件で動いていたのだろう。でなければ主人至上主義のあいつがこんな長期間彼女の側を離れるわけがない」

「確かに……でも、ま、そういうことなら心配はいらないか」

「……………ふん」

その後、彼らは何を言うでもなく彼女の消えた方向を眺め続けた。
幸先の悪い天気の中でも、その瞳に宿る自信が揺らぐことはついになかった。

「【キラ】、状況は!?!」

『今、交戦中です！ 市街地から引きはがしてます』

「わかった、すぐ向かう」

来るかどうかは五分五分だったが、念のためにキラを近くに張り付かせておいてよかった。いや、より厳密に言えばキラが自分から立候補してくれたのだが。

てつきり呪いに近づかなかったから、例の魔族と関わるのが嫌なのだとばかり思っていたが……さも当然のように『ご主人様は学校があるから、僕が代りにあの二人の護衛をしますよ』と言った時は、驚くと同時に感動してしまった。

あの他人に無関心な（しかもエリックには脅し？までかけた）キラがそこまでしてくれるとは……やはり矯正なんて必要ないのかもしれない。

そのキラが今追跡している相手……私の懸念通り、例の呪いをかけ

た魔族は、ユーナが死ぬ直前、苦しみ貫かせた上で喰おうとしていた。本当にいい性格をしている。

（ますます生かしてはおけない……）

そいつをこうやって追いつめることができたのは、キラとこの首から下げている魔法具のおかげだ。フィルとの合作である赤いペンダントの形をした魔法具は、なかなか便利な代物だった。

ハインレンス王立魔法学園には学園長特製の結界が張ってある。内からも外からも学園を守るその結界は、生徒と校舎の安全を保つ一方で、実はとある弊害を持っている。おそらく弊害だと思っているのは私ぐらいだが……結界があることによって魔力の断層ができてしまい、敷地外の魔力が察知しづらくなるのだ。

これはキラとの連絡用に使っている魔法にも支障をきたすようで、学園で授業を受ける私とその敷地外で活動するモルディ兄妹&キラでは連絡が取りづらくなってしまいうけである。

ちなみに、これはある日キラとの連絡が取れなかったことから判明したのだが、その時あいつは街で新作お菓子の食べ歩きをしていたらしい。……その金がどこから出ているのかは謎だ。

……話しがずれたが、フィルには無理を言ってその点を改善してもらった。ついでにどうせ作ってもらうなら、ただ連絡用の魔法具をつくってもらうより、より安全な防御魔法を施したものをつくってくれとお願いしたのだ。これなら万が一キラが彼等とはぐれた時も安心である。

だが、やはり結構な無理難題をふっかけてたようで、彼は『うーん、学園長の結界と波長を合わせて……いや、でもそうするとあっちがなあ』と小難しいことをブツブツ一人で呟いていた。正直、私はその内容の10分の1も理解できなかった。彼は感覚的に魔法を

使う私とは正反対のタイプなのかもしれない。

最後の『やべ、閃いちちゃった！！俺天才じゃね！？アリアちゃんもそう思うよね！？』というあの発言さえなければ素直に尊敬できたのだが……なにはともあれその器用さと文明の利器に感謝だ。

（……にしても速いな）

回想を止めて現実集中する。なにが、というときラと魔族の移動スピードがだ。

本来は転移を使いたいところだったが、二人（二匹？）ともものすごい速さで移動しているせいで座標が特定できない。おそらくこの状態でやっても失敗するし、実は魔力量的にも結構厳しかったりする。だからこうして地道に飛行魔法で彼らを追っているのだが……なかなか追いつけない。

だが、『これは何か別の策を講じないとダメか』と考え始めたところで、キラの気配がある一点で止まった。

（しめた）

そうして、できる限りのスピードで向かった先は、街外れの人気のない空き地だった。派手に倒された木々や抉れた地面を見る限り場所はどこで間違いない。おそらくキラが誘導したのだろう。

多少の不安を滲ませながら、急いであたりを見回せば、森の方を向いてぬかるんだ地面に一人ぼつんと立つ相棒を見つけた。

「キラ！」

「ご主人様………すいません、取り逃がしました」

振り向いたキラは、申し訳なさそうに肩を落とした。見る限り、どうやら怪我はしていないようだ。よかった。

その彼の周囲にはまだ生々しい戦闘の跡が残っていた。氷漬けにされた岩や炭になった木々。全属性を使う魔物の特徴をこれでもかというほどアピールしている。

「そうか、逃げたのか……」

少し集中して気配を探ってみても、例の魔族らしき魔力はどこにも感じられなかった。おそらくまだ去って間もないはずだが……どうやらよほど気配を絶つのに長けた奴らしい。これは誤算だった。

「すいません。僕がもつとしっかりしていれば……」

「いいよ。私の読みが甘かった。それよりも怪我はないか？」

キラでさえ取り逃がすということは、相当の力を持つ奴だということだ。これは魔物の力を舐めていた私の落ち度だろう。

「はい、大丈夫です」

「ならいい。……なあ、また来ると思うか？」

「いいえ、多分ユーナのところにはもう来ないと思います。いいところまで追いつめたし、手傷も負わせましたから。命の危険を冒してまで人間を喰うような奴には見えませんでした」

なら上出来だろう。当初の目的はあくまでユーナの身の安全の確保だ。街に被害も出さずに追っ払えたなら、最低限の目的は達成できたといつていい。

まあ、万が一次また来ても、今度は私が相手をすればいいだけだ。

それでもキラは不機嫌な顔を隠そうとしない。彼にとっては、自分一人で仕留められなかったことが屈辱だったようだ。なにせ未だ魔族が逃げたと思われる森から視線を動かそうとしないのだ。

どうにもプライドの高い相棒に苦笑しながら、その小さな頭に手をのせる。

「なに、お前はよくやったよ。偉いぞ」

そうしてぐりぐり頭を撫でてやると、キラは複雑そうな顔をしながらもようやくこちらを見てくれた。一瞬私と目が合うとバツが悪そうにもう一度下を向き、でも身体だけは寄りかかるように傾けてくる。

「……はい」

「よし、じゃあ帰るか。そうだ、帰りがてら菓子でも買っていくか？ 今日頑張ったから3つまで買っていいぞ」

途端にピクリと反応する相棒に今度こそ本気で笑いそうになる。

「……………本当ですか？」

「ああ本当だ。なんだ、それともこのまま学校までまっすぐ帰るか？ 勝手に授業を抜け出してきたから多分二人して説教されるぞ」

「いや、是非寄り道していきましょう！ その方が絶対いいです！」

ブンブンと頭を振って力説するキラは、もはや菓子のことしか頭にないのだろう。

まったく、扱いやすく困る。スキップしながら『ご主人様、はやくー！』と急かすキラの背をゆっくりと追いかける……最後に一度だけ魔族の消えた方向を振り返りながら。

（次は必ず仕留める）

そうして、新たな決意と共にその場を後にした。

……と、そこまではよかったのだ。
問題はその後。例の如く菓子屋の前でキラがあーでもないこーでもないと思っている時だった。

まさか、そこで駆け付けた担任に拳骨をくらうことになるうとは、夢にも思わなかった。
生まれて初めての経験だったこともあり、頭に走った分も含めて、いろんな意味で衝撃的だった。

聞けば、フラスト先生も密かに王宮の魔法士を護衛につけていたらしい。それを突然現れたキラが魔族とともに姿を消したせいで、てんやわんやの大混乱になり、当初考えていた計画が台無しになったそうだ。

……そういうことは早く言ってほしかった。
いや、独断で動いたのは自分も同じだが、まさか菓子屋の前で小一時間説教されるとは……いい晒しものだ。穴があつたら入りたいとはあのことである。

その説教を止めてくれたのは、王宮の魔法士に保護されたモルディ兄妹だった。その時は彼らが天使に見えたのだから、私も相当参っていたのだろう。

「助かった……危うく菓子屋の前で干からびるところだった」

「えーお姉ちゃん、おおげさだよー」

「いや、あのおっさん、あのままだと絶対夜まで続けてたね。にしても僕とお菓子の甘いひと時を奪うなんて……許せない」

「……あの、キラさんがなんか怖いんですけど」

目の据わったキラが放つ殺気に、エリックがぶるりと震えた。どうやらお菓子の恨みは恐いようだ。彼はきっといつかフラスト先生に復讐するに違いない。

もともと、私もその時は止めはしないだろう。なにせそれくらい恥ずかしかったのだ。

「いつものことだ、気にするな。だが怪我がないようでよかったよ」

「ええ、アリアさんがくれたこのペンダントのおかげですね」

「そうか……でもそれももう用済みだな。おそらく今後お前たちのところにあの魔族は来ることはない」

「そーゆーこと。とりあえず安心していいよ」

私とキラの報告を聞いたエリックは、一瞬驚きに目を見張り……その後静かに瞳を閉じた。そして今一度瞼を開いた時には、何かを決

意した強い瞳がその存在を主張していた。

「そうですか……本当に何から何までありがとうございます」

「別にたいしたことはしてない。ああ、もしよかったらフィリック
つて奴にも礼を言っておいてくれ。そのペンダントを作ってくれた
友達なんだ」

「是非そうします。それと……ひとつご報告があるんです。僕たち
ハインレンスに住むことにしました」

「ん、そうなのか？」

「ええ、父の知り合いが住んでいて、そこで働くと思っっています」

詳しく話を聞いてみると、なにやらここ最近はおつぱら就職先を探
していたらしい。

もう働くことを考えていたとは……若いながらに立派である。私も
見習わなければ。

そうして感心するように見つめていると、エリックは照れたように
はにかみながら、右手で妹の頭を撫でた。

「それに、なによりユーナの強い希望がありますしね」

妹を映すその瞳は、ひどく優しいものだった。それに気付いている
のかは知らないが……ユーナはそのまま元気いっぱい、ある“宣
言”をする。

「あのね、ユーナね、おねえちゃんみたいなさっごい“まほうつか

い”になるの!!」

その意外な内容にそつと息を飲む。未来に希望を持てなかった彼女が最初に掲げた目標がこの私とは……。

「そうか。なら今度魔法でも教えようか？」

途端に目をパツと輝かせるユーナの姿に、ついキラとともに笑ってしまふ。

まさかそう来るとは思わなかったが……存外悪くない気分だった。

第4話「仇敵」(後書き)

さて、今回出てきた(正確には出てきてないけど)魔族さんは、これからもちょこちょこと出没する予定です。多分某探偵漫画の黒の組織ぐらいの頻度で登場する……かも。わかりにくいたとえですいません(汗)

実は結構キーパーソンならぬキー魔族さんだったりするんですけどね。

あと感想なんですけど、ここ最近パソコンに触る機会自体が減ってます、お返事を書くのがとても遅くなっています。本当にすいません(土下座)

でも、もし「しょーがねーから待ってやんよ」という心の広い方がいらしたら、是非ご感想ください。

誤字・脱字のほうも引き続きよろしくお願いします。

第5話「アルバイト」（前書き）

お久しぶりです。皆様ご無事でしょうか？
私もなんとか生きてます。絶賛避難民ですが超元気ですよ！

第5話「アルバイト」

「アルバイト？」

スプーンを片手に持ったミアが、意外そうな顔で問い返してくる。

「そうだ。学園の生活にも慣れてきたし、そろそろ学費を稼ごうと思っただけ」

「へー、でもなんかいきなりねえ」

たしかにいきなりといえはいきなりかもしれない。だが、きっかけこそモルディ兄弟にあつたが、これには私なりのきちんとした理由もあるのだ。

「まあなんだ、いつまでもライルに借りをつくるのはよくないだろう？ 入学費用もだが、それ以外の生活費も今立て替えてもらっている状態なんだ。ライルは気にしなくていいと言ってたが、やはりいつまでも甘えるわけにはいかないしな。そんなわけでライルには内緒だぞ」

「わかりましたわ。ちなみにどのようなアルバイトがよろしいんですの？」

「できれば魔法関係の仕事がいいんだが……自慢じゃないが、それ以外のことはさっぱりできん。あ、ちなみに一番得意なのは魔物の殲滅で――」

「ふーん。まあ、得意なのはこの前の一件でなんとなくわかったけ

ど」

ギリリと睨んでくるミアの視線が怖い。正直魔物よりも怖い。自然と持っていたフォークを置いて、背筋をピンと伸ばす。
もはや条件反射だった。

（まだ許してくれないのか……）

あの後、学園に戻った私たちを待っていたのは、さらなる恐怖だった。校門で出迎えてくれたミアとローズは、私たちに怪我がないことを確認すると同時に、それはそれは恐ろしい鬼女と化したのだ。いやにきれいな笑顔で『ちょっとお部屋まで行きましょうか』と誘われた時も、なんとなく不穏な気配は感じていたが……まさか、そのまま説教2時間コースに突入するとは。

あの苦行といったら……キラともども正座しながら『この2人は二度と怒らせまい』と堅く誓ったほどである。

その時の足の痺れを思い出し、若干怖じ気付きながらミアを見返す。すると彼女は『仕方ないわね』という風に苦笑しながら息を吐いた。

「そもそもそんな危険なアルバイトないと思うわよ。あと、私が働いてる飲食店もこの前兄妹でアルバイトを雇ったばかりだから、ちよつと難しいわ。ごめんね」

「兄妹……？　もしかしてモルディ兄妹のことか？」

まさかと思いながら一応訊いてみる。この時期に兄妹で働く者などなかなかないはずだ。

案の定、ミアは寝耳に水といわんばかりに茶色の瞳を瞬かせた。

「え、なんで知ってるの!？」

「この前助けた兄妹が彼らなんだ」

意外なつながりにお互いしばし沈黙する。すると、黙々と食事をしていたレストやフィルもすかさず話に加わって来た。

おそらく今まで静かだったのは、ミアの勘気に巻き込まれるのを避けるためだったのだろう。さすが空気を読むのが上手い。

「あの例の兄妹か？」

「すげー、世間って狭いなあ」

「そうだったの……あの2人働き者だし、助かってるわ。これもある意味アリアのおかげなのね」

表情の柔らかくなったミアに、ほんの少し安堵する。あの2人の現状もわかったし一石二鳥だ。今度また会いに来てくれると言っていたし、その時はミアも混ぜてわいわいやりたいものだ。

「ああ、元気でやってるようで良かったよ。ローズたちはどうだなにかいいアルバイトとか知らないか？」

「私はちよつと思いつきませんわ」

「うーん、俺も……あ、メイドならいけるよ、俺専属の!」

「それはごめんこつむる」

一拍もしないうちに切り捨てる。あまりにも危険だ……主にフィル

が。もちろんキラになにかされるという意味で。

現に今も一瞬、菓子パンに夢中になっていたはずのキラの目が妖しげな光を帯びた。

……まったく、こいつの過保護にも困ったものだ。

ちなみに今はちょうど昼休憩の時間で、いつも通り皆で学食に屯しているところである。

その中にライルが含まれていないのは、彼が今学園長に呼び出されているからだ。内容はルナがこの前遊んでいて壊した納屋についてだそうだ。まったくドラゴンの主というのも大変である。

まあ、学園長は優しいから説教も30分程度で終わるだろう。私もこの前の件で呼び出されたが、その時はむしろ飛行魔法について詳しく訊かれて焦ったものだった。『一子相伝の魔法だから』とかなんとか始めから終りまで適当に誤魔化したが、どうやら現代では皆発動時のコントロールで躓くらしく、消費魔力について言及されなかったのは幸いだった。

そんなことを思い出していると、何か考え込んでいたレストが躊躇しながらも口を開いた。

「……どうしてもというのなら、王宮で一つ斡旋できないこともない。というより魔法士団の研究所になるか。研究者で一人覚えのある奴がいてな」

「もっとも、あまりお勧めはしないが」と付け加えた彼は、どうやら現在進行形で迷っているらしい。珍しいこともあるものだ。

「王宮、か……」

正直あまりいい思い出はない……が、すでに300年前のことだ。いつまでも引きずっても仕方ないし、そろそろ割り切らないといけない時期だろう。

どうせ今の自分には関係ないところだし、逆に心機一転を図る意味でこの話に乗ってみるのもいいかもしれない。

「ちなみにどんなアルバイトなんだ？」

「ああ、古代魔法を研究している者でちょうど被検体……じゃなくて研究の協力者を探しているらしい」

「……それ大丈夫なの？」

キラが胡乱な目つきになるのも無理はない。さっきからどうにも怪しい単語がちらほら出るし、返すレストの言葉も歯切れが悪いからなおさらだ。

まあ、私としては研究の協力程度ならやっても構わないんじゃないかなかと思う。要は力の使いすぎに気をつけられただけの話だし。仕事としては楽なほうだろう。

「ちょっと変わったやつだが……害はない、気がする。だが、それよりも問題はその瞳の色だな。せっかく隠しているのに……」

「瞳？」

「いや、なんだ。王宮でその目の色はいろいろと不便なんだ。紫は神聖な色として信仰の対象にもなっていて……その、つまり利用しやすとする人間も多い。だが、まさかずっと目を隠していくわけにもいかないしな」

ローズやフィルはなんとなく事情を察しているのか、『ああ』といった顔で頷いている。

神聖な色……そういえば、300年前もそんな話をどこかで聞いたことがあるような、ないような。そこらへんの記憶がおぼろげではつきりしない。そもそもそんな扱いを受けてこなかったらから仕方がないのかもしれないが。

「まあ、それなら問題ないよ。目の色を変えればいいだけだろ？」

「できるのですか？ そんな魔法聞いたこともありませんわよ」

どうやらこの魔法も現代では廃れているらしい。

かくいう私も封印から目覚めたばかりの頃は、魔力量の関係でできなかったが……おそらく今なら余裕で行使できるはずだ。

「ご主人様は天才ですから、そんなの片手でちょちょいのちょいですよー！」

「へー飛行魔法といい、本当に規格外だねーアリアちゃん」

自慢げに語るキラに、フィルがポテトをつつつきながら軽く応える。飛行魔法の件もあり、最近は何慣れてきたのか珍しい魔法を使ってもあまり驚かなくなった。

キラは若干不満そうだが、私にとっては好都合だ。

「あー、天才かどうかは知らんが、森で暮らしていた時にいろいろ身に付けたただけ。時間だけはあったからな」

この手のでっちあげも最近はお手の物になってきた。いや、多分あまりいいことではないのだが、私の場合は事情が事情なので許して

ほしい。

一連のやりとりを受けてか、レストはそれまでの迷いを消して了承の意を伝えてくれる。

「そうか……なら大丈夫だな。明日連絡を入れてみよう」

そしておよそ1週間後。

多少の手間をかけてキラとお揃いの蒼い瞳を宿し、王宮へと赴く。普段は厳重な警備もレストの顔パスでらくらくと通過することができた。

そうして門をくぐった私たちを出迎えてくれたのは、威厳を誇示するように展示された一級品ぞろいの調度品だ。

今まさに目の前には、庶民では一生お目にかかれないような、きらびやかな世界が広がっていた。清掃の行き届いた室内には豪華な絵画や数々の芸術品がまるで見本市のように置かれている。このひとつひとつが、きっと庶民の年収の何倍もの価値を持つのだろう。

だが、この世の粋を集めた耽美な空間も、ひとたびそのメッキを剥がせば人間の欲と陰謀が渦巻く舞台となる。

ここがどんな場所かは、骨身に沁みて理解しているつもりだ。

「300年経つても、相変わらずか」

その証拠に、こうして人気のない廊下を歩いている途中でも、その独特な雰囲気を感じ取ることができた。時折すれ違う人々もレストと共にいる私たちを値踏みするように観察してくる。

どうやら豪華絢爛を極めた内装も、見え隠れする欲を隠すことはできないようだ。外觀こそ真っ白になったが、そういう意味で中身はあまり変わっていない。

「この先が研究所だ」

レストに案内された先　その廊下の両サイドには歴代の王族の肖像画が飾られていた。わざわざこんなところを通らなくても思わないでもなかったが、口には出せない。

……どうやらここ何代かは、金髪に紫の瞳が多いようだ。レストがこの瞳を隠せと言ったのもなんとなく頷ける。

だが、特に興味もなく足早に通り過ぎようとしたその矢先、見覚えのある顔を見つけてしまった。

（アスト王子とマリア……！？）

二人の肖像画だった。おそらく20代前半だろうか？

結婚式の時に描かれたのだろう。純白の衣装をまとい微笑む姿は、既に何度か見てきたその肖像画の中でも、自分の一番よく知ってる彼らに近かった。

そして何より……今まで見た中で一番幸せそうな笑顔だった。

不意打ち気味にくらった衝撃に、胸が軋む。史実では、この後娘と息子一人ずつに恵まれたらしい。その仲も睦まじかったらしく、今

では理想の夫婦の形としてもその名を残している。

だが、額縁の中で微笑む彼らを前に、己の胸中では判然としない感情が再燃してしまう。

(……何が割り切る、だ)

我ながら女々しいと思う。もはや触れることさえ叶わない彼らにこんなつまらない想いを抱くなんて。

だが乗り越えたはずのそれは、いまだ容赦なくその存在を主張し続けた。まるでそれが私への罰であるかのように……。

「……この肖像画を見るたびに、私は己の存在に疑問を持つよ。どうしてこんな顔に生まれてしまったのか。自分は一体何者なのか、とな」

気づけばすぐ隣にいたレストが、ぼつりとその心境を漏らしていた。立ち止まった私を見て彼も自然とそうせざるを得なかったのだろう。

そのアスト王子そっくりの顔に浮かぶ表情は、しかしながら絵の中の人物とは正反対のものだった。

名君アストレイ国王と同じ面差しを持つレスト。きっと本人にしかわからない苦悩があるのだろう。

でも、それを見た私といえ……つい苦笑いをこぼしてしまった。

私たちは悩む理由も生まれた年代も全く違うのに、こうして絵画の中の同じ人物に囚われてしまっている。

それは、はたから見ればあまりにも滑稽だ。そのことに気づいてしまった。なんとなくさっきまで沈んでいた自分が馬鹿らしくまで思

えてくるのだから不思議である。

それを教えてくれた礼というわけではないが、未だ複雑な顔をしている友人に、自信を持って断言する。

「レストとこのお方は全くの別人だよ。私が保証する」

確かにその造形こそ似通っているかもしれないが、本人を知っている私からすれば、二人はまるで別人である。この絵ではわかりにくい、細かいパーツは意外と違っていたりするのだ。近くで見えてきた私がいうのだから間違いない。

「セレスティ……」

レストが驚きと感謝を織り交ぜて見返してくるが、むしろ礼を言いたいのはこちらのほうだ。

その顔を眺め、今度こそはつきりと認識する。彼らは、アスト王子とマリアは既に過去の人間だ。

なにせその子孫が今こうして目の前にいるのだから……いい加減前を見なくては。

気づけば重くのし掛かっていた暗い感情は、どこかへと霧散していた。どうしようもなく眩しかった彼らも今は目を細めながら直視することができる。

そうして改めて、今度は素直な気持ちで絵を見ると、不意にうれしそうにマリアの笑顔が幼いころのそれと重なった。

（……そう言えば小さい頃マリアは『将来は王子様と結婚する』と話していたな）

壮大すぎるほど壮大な夢にその時は馬鹿にしていたものだが……まさか本当に叶うとは。子供の夢も案外馬鹿にできない。

「よかったな、マリア」

小さな呟きはすぐに大気へと溶けていったが、この想いが消えることはない。私はあの子の姉なのだ。私が祝福しないでどうする。なんだかいろいろと吹っ切れた気分だった。ここにレストがいてくれて本当によかった。

「何か言ったか？」

「いや、なんでも。それより先を急ごう。キラも……ってキラ？」

返事をしない相棒に疑問符を投げかけるが、やはり答えは返ってこない。

訝しげに振り向くと、キラはアスト王子とマリアの隣にある肖像画をジッと見つめていた。その横顔は、まさに心ここにあらずといった感じだ。

おかしい、いつものこいつらしくない。

その視線の先には豪華な衣装に身を包んだまだ若い少女が、花が綻ぶような満面の笑みを浮かべ佇んでいた。その表情はあまり王族の肖像画にはふさわしくないが、なぜかその少女には似合っている気がする。薔薇色のドレスは彼女のために作られたのではないかというほどよく似合っており、そのつり目気味の瞳とあいまって活発そうな印象を受けた。

「……なあ、レスト。キラが見ているのは誰だ？」

小声で訊いてみると、レストも若干驚いた顔をしながら返してくれた。

「あれはアストレイ国王とマリア王妃の娘、ユリア姫の肖像画だな」
なるほど。確かに髪は金色だが、その瞳に宿る色は紫だ。彼らの娘というのも頷ける。だが、どうしてキラがその彼女に釘付けなのかがまったくわからない。

（まさか……………恋か？ いや、だが、しかし絵画の中の人間だぞ）
後になって考えると、どうしてそんな突飛な考えに至ったのか自分でも不思議だったが……………ともかくその時の私は本気でキラの叶わぬ恋について悩んでいた。もっとも悩んだ末に出した結論が保留なので、あまり意味はなかったのだが。

ともかく内心かなり動揺しながら、できるだけ普段どおりに接しようとして一度深呼吸をし、意を決してキラに声をかけようとする。
……………しかし、その前にどこかあきれた表情のレストが「おい」とその小さな肩に手をかけてしまった。私の努力が……………。

一方のキラの反応は、予想以上に顕著だった。彼はビクリと体全体を揺らし、次にそれを誤魔化すようにレストを睨んだ。

「い、いきなり驚かすなよ、つんけん王子！ そ、それより早く案内しろよな！」

若干慌てたように指をさす様子は、やはりどこかおかしい。だが……………さすがに言いすぎだろう。

案の定、キラ曰く”つんけん王子”は眉間をピクピクさせながら、目を据わらせた。

「ほお、やはり貴様には一度礼儀というものを叩き込まねばならぬいな」

「なんだよ、お前が学園でご主人様につきまとっから僕の仕事が増えて大変なんだぞ！　ばいしょーとしてお菓子を請求する！」

話を変えようとしているのはわかるが、やはりいつものこいつらしくないお粗末な方向転換である。よっぽど動揺しているようだ。しかし、最後の一言は私心丸出だったが……はて、仕事とは一体なんの話だろうか？

まあ、考えてもわからないし、いずれにせよこうなってはもはや売り言葉に買い言葉だ。

「な、いつ私がつきまとった！？」

「つきまとってるじゃんか！　他のメスとは全然話さないくせに！　」

「メっ！？　あ、あれは……」

二人ともヒートアップしてきたのか、声のボリュームとともに魔力が霞みの様にあたりに充満してきた。

キラなんて既に影が揺らめいて、今にもレストに襲いかかりそうになっている。もちろん本気でやろうとは思っていないだろうが、さすがにマズイだろう。

自分のせい……かは知らないが、ともかくきつかけを作った責任もある。

「まあ、二人ともそろそろ」

そうして制止の声を発した直後だった。

突然、横合いから大きな魔力の波動を感じたのだ。それも一直線にこちらに近づいてきている。

「なっ!？」

無意識に感知したその威力は、現代の基準で言えばかなり強い。それこそ無防備に受け止めれば生死に関わるレベルのものだった。

レストはともかく、いつもなら絶対に気づいているはずのキラでさえ、今はまだ口論に夢中で気付いていない。私自身もまさかこんなところで攻撃を受けるとは想像もしていなかったせいに対応が遅れてしまっている。

気付けばすぐ目の前まで差し迫った氷槍は、目標めがけて肉薄していた。

その鋭利な刃先にいるのは……

「キラ!？」

第5話「アルバイト」（後書き）

今は実家で小説書いてるんですけど、急いでてあんまりデータ持ち出せませんでした。あと4話分くらいのプロットはあるんですけど……いつ帰れるかなあ（汗）

まあ、それはさておき『この世界に”アルバイト”って言葉あんの？』というツッコミがあるかもしれませんが……どうか気にしないでやってください！ そこらへんはテキトーです（笑）

第6話「襲撃者」(前書き)

2話連続投稿です。そしてアクの強い新キャラ登場です(笑)
近いうちに次もあげたいなあと思ってます。

第6話「襲撃者」

「キラ！！」

無慈悲な氷の刃は、一直線に相棒の体へと吸い寄せられていく。

すぐに魔法を発動させるが、油断していたせいで間に合うかどうかは微妙なタイミングになってしまった。

一方、私の声にハッとしたキラも、すぐ目の前に迫りくる刃に体を捻らせようとしたが……何かに気づいて、その場に踏みとどまってしま

う。

「馬鹿、避ける！！」

驚き声をあげるが、もう遅い。どんな熟練者でも魔法を発動するまでには、若干のタイムラグが存在する。キラが今魔法を使おうとしても

間に合わないし、回避もはや不可能だ。

嫌でも刃に貫かれるキラの姿が脳裏に浮かんでしまう。見慣れているはずの光景だが、相手が違ふところまで焦るものなのか。

だが……幸運にもその最悪な未来図が実現することはなかった。

ガゴツガゴツという音が連続して響きわたり、小さな体を貫くはずだった刃は不可視の壁に阻まれた。間一髪で私の張った防御魔法が

発動

したのだ。冷や汗が流れる。なんとか間に合った。

しかし、咄嗟に発動したせいで強度が不十分、かつ想像以上に相手の魔法が強力だった、という二つの要因が重なったせいでその勢いを完全に殺すことはできなかった。

相殺しきれなかった分によりキラは勢いよく後方へと飛ばされ、その小さな体躯を壁に叩きつけられて蹲った。「かはっ」と息を吐き小さく呻く相棒を視界に映し、一瞬にして激情が湧きあがる。

(……誰だ、やったのは)

もはや頭にあるのはその一点のみだ。普通なら怪我人の救護が先なのかもしれないが、命に別状がなさそうな以上、戦場で育った己の本能は敵の排除を最優先事項としていた。

そして獲物を探す私の目に映ったのは、倒れたキラとレストの間に割り込むように入ってきた一人の男。

「殿下！ 無事ですか！？」

突然乱入してきた大柄な男は、レストを守るように立ちはだかった。制服を着ていることから、おそらく王宮の関係者だと推測できる。……もっともそんなこと今は関係ないが。

「待て、この者たちは」

「この王宮で殿下に刃を向けるとは、なんたる狼藉！ 下郎め、成敗してくれる！ 【彼のものに神の裁きを】」

水色の髪を振りながら偉そうな口上を述べた男は、レストの制止にも聞く耳を持たず、あまつさえ低い声で死の言葉を紡いでいった。

「っこいつ」

まだ体制の整っていないキラに追い打ちをかけるように放たれるそれは、到底看過できるものではない。

火山の様に湧きあがる激情に逆らうことなく、一片の躊躇いもなく反撃する。

慣れた動作で滑るように魔力を凝縮させ、先に詠唱を始めた男と同時に魔法を発動させた。

詠唱の続きを聞いた限り、男はどうやらさっきと同じく氷系の魔法を使うようだ。芸がない。

キラには先ほどよりも強度を数段上げた火系の防御魔法を形成し、それと同時に男には影を送って電光石火の速さでその身体を拘束する。

「なっ！？ がっ！！」

狙い通り、相棒に向かって放たれた氷の刃は、灼熱の壁に阻まれて一瞬で蒸発した。もちろん周りに火の粉を撒き散らすような柔かな制御は

していない。この2カ月ちょっとで、古代魔法を連発できるほど魔力は回復したし、多少のコントロールも身についてきたのだ。

だが、今はそんなことどうでもいい。なにせ二人の肖像画がなければあたりを火の海にしても構わないほど、私の内心は燃え盛っていた。

カツカツと靴を鳴らしながら、無造作に獲物へと近づく。

「さて　確か”下郎”だったか？」

影でぐるぐる巻きにして地面に引き倒した男を、射殺するように上から見下す。レストが息を呑む声が聞こえたが、容赦をただけただい

い方だと思つてほしい。なけなしの理性を総動員していなければ、そのまま切り裂いてしまふところだった。

……だつて手を出してはいけないものに、手を出したのだ。許せるわけがない。

「お前こそ分をわきまえろ。その程度で刃向かうなど片腹痛いわ」

我ながら、自分のものとは思えない低く冷徹な声が発せられた。殺気にあてられたように一瞬男は肩を跳ねらせるが、すぐに戦意を取り戻

しこちらを睨みつけてくる。

「まだやる気が……いい度胸だ」

男の期待に応え、影を使いそのまま締めにかかる。

（とりあえず気でも失ってもらおうか）

いささか過剰防衛が過ぎると思っただが、自制心が働いているうちにこいつを沈黙させる方がお互いのためになる気がした。本当は手加減

などドブに捨ててしまいたいくらいなのだ。気絶させるくらい寛大な処置のうちだろう。

だがそう一人納得して合図を送ろうとしたその矢先、半ば予想通りの邪魔が入ってしまう。

「ま、待て、セレスティ！ クロード、この者たちは敵ではない！」

「むっ……レスト」

「は？ し、しかし殿下、さきほどは……？」

不満そうに口を尖らせる私とは対称に、無様に引き倒されたままの男は間の抜けた返事を返した。

双方の反応を見たレストは、眉間を揉みながら深く、そして重たいめ息をついた。……いくらなんでもその反応はあんまりじゃないだろう

か。まあ、彼もある意味とばっちりを受けているのだから仕方ないが。

レストは、まずクロードと呼んだ男の疑問に答えることにしたようだ。地面に転がされた男を呆れたように見返す。

「少しじゃれていただけた。全く、お前は昔から早とちりしすぎるのが欠点だな」

「そ、それは……………」

いまだ混乱気味の男の目は、私とレストとキラの三人を忙しなく行き来し、そしてもう一度縋るようにレストの方を向いた。若干暑苦しそ

うにそれを受け取ったレストは、その紺色の瞳を見据えながらトドメの一言を放つ。

「彼らは私の友人だ」

それを聞いた男はまるで信じられないといわんばかりに口をパクパクさせ、次にぶつぶつと何かを呟き始めた。耳を澄ませてよく聞いてみ

ると、どうやら「ゆうじん……………殿下の……………いや、まさか……………友人？」
と言っているようだ。

……………なかなか失礼な反応である。これを聞く限りレストにはよほど友人がいないように思えるが。

どうやら横目に観察した本人にも、それはばつちり聞こえていたらしい。それでもさすがレストというべきか、眉間をさらにピクピクさせ

ながらも口調だけは冷静に語り始めた。

まあ、それもあくまで口調”だけ”は、だが。全身から怒気を迸ら

せる今の彼には、私でさえあまり近づきたくない。

「お前とは後でじっくり話をしないといけないようだな。それより、他に何か言つべきことがあるのではないか？」

その言葉を受けた芋虫男は、手のひらを返すように平身低頭……とは言つても最初から地面にへばりついているのだからあまり変わらない

が、それでもあくせくしながら身を起こし、勢いよく頭を下げた。

「も、申し訳ございませんでした！！」

その一連の動作の中で、ようやくまともに男の顔を見ることになった。おそらく歳は二十代中頃。水色の髪は短く刈りこんであり、その落

ち着いた紺色の瞳と精悍な顔つきはいかにも仕事ができる男、といった感じなのだが……この体たらくでは台無しである。

「もういいだろう、セレスティ。離してやってはくれないか？」

「……………そうだな」

なんだかやる気がそがれてしまった。溜飲が下がったわけではないが、ここはおとなしく拘束を解く。レストの頼みだし、キラにも誤解さ

れるような落ち度があつたのは確かだからだ。

腕を一振りして影の拘束を解き、キラにかけてあった防御魔法も消滅させた。するとそれをジッと見ていたレストが、困惑したように問い

かけてくる。

「セレスティ……さっき無詠唱で魔法を行使しなかったか？ それも別属性の並行魔法で」

……やってしまった。無詠唱もそうだが、現代では違う属性の魔法を並行して使うのは難しいことだった。目の前の相手に集中になるあま

り、レストの目があることを失念するとは、まだまだ私も修行が足りない。

ともかく、こういう時はとぼけて話題を変えるに限る。

「そうか？ そんなことより……キラ、大丈夫か？」

「はい。ちょっと油断しました」

不服そうな顔をしているものの、むくりと起き上がったキラに怪我はないようだ。しっかりとした足取りでこちらに歩いてくる姿に安心す

る。これでもし大怪我でもしていたものなら、芋虫男を地獄にたたき落としていたところだ。

……案外私もキラの過保護を馬鹿にはできないのかもしれない。

「まったく、お前ときたら。どうして避けなかったんだ？」

「うっ、それは……」

そのままバツが悪そうに背後へと向けられた視線を追い、ようやくその意図が理解できた。

ユリア姫の肖像画だ。これを守るためにあの場に留まったのだ。

だが、このある意味感動的なエピソードを前にして、私の頭はひどく冷め切っていた。私もアスト王子とマリアの肖像画にはそれなりの愛

着があるが、それでもここまで馬鹿な真似はしない。絵画の中の人を守って死ぬなど、悲劇どころか喜劇にもならないではないか。

「お前はアホか！ 守ったところで、どっちにしろお前の血で汚れて、絵など見れなくなるに決まってるだろう。あの氷槍で貫かれても大して変わらんわ！」

「あのお、ご主人様。その言い方はちょっと傷つくんですけど」

「本当に怪我するよりマシだろう！ この際だからはっきり言うぞ。いいか、あれはもうこの世にはいない人間なんだ。だから」

そうして数分前の自分のことを棚にあげ、キラに絶対に叶わない恋をすることの空しさを説こうとしていると、遠くから男女の二人

組みが疾走してきた。

さっきのこともあり、今度はキラと二人で警戒しながら相手の動向を探る。

だが、そんな私たちの予想に反し、新たにやってきた二人は着くなり息を切らしながら子犬のようにキャンキャン騒ぎ始めた。今度はいったいなんだ？

「ちょっと、リボン！！ さっきの魔力は何！？ あなた一体何をしたの！？」

「そうですよ、リボンたいちょー！ あれ？ その人たちもしかして今日招く客人さんじゃないですか！？」

「……クロードと呼べ」

二人のテンションとは真逆に、芋虫男、もといクロードは無然とした表情で至極どうでもいいことを訂正した。だがそれは火に油を注いだ

ようなものだった。後からやって来た男女はレストがそこにいるにも関わらず、さらにでかい声で反論する。

「そこじゃないでしょ！ てかこの氷の残骸ってあんたの魔法でしょ！？ 全くいきなり走り出したと思ったら、こんな場所で魔法まですぶ

っ放して！ この馬鹿リボン！」

「そうですよーリボンたいちょー！ リボンの方がなんかかわいいって王宮の侍女たちにも評判っすよー！」

「っ、だからクロード隊長と呼べと言ってるだろうが!!」

これまたひどくどうでもいいことだが、段々論点がずれてきている。クロードという男も、さっきまでのしおらしさはどこへ行ったのか…

…アクの強そうな二人に彼の大声も加わって、どんどん場は騒がしくなるばかりだ。

もはやこつちを完全無視した三人の怒鳴りあいには、割り込む気も失せる。気が済むまでやらせておこう。

「それにしても姦しい三人だな。そもそもリボンのどこが嫌なん…
…ん？ リボン？」

どこかで聞いたことのある家名に頭を捻らせると、これまた重たいめ息をついたレストが申し訳なさそうにその驚愕の真実を語った。

「そう、あいつはクロード・リボン。あのクラリス・リボン……わが校の保険医の兄だ」

それを聞いた私とキラは、信じられない気持ちで今一度子供のような口喧嘩を繰り広げる男に目をやる。

あのポワンポワンとしたリボン先生と、この血圧の高そうな芋虫男が兄妹？ 本当に血がつながっているのかはなはだ疑問だ。

共通点といえば水色の髪と紺色の瞳、そして見た目と中身のギャップだろうが…… あげてみると意外に多い。

だが、それ以外の点においては全く

「似てないな」

「似てないですね。しかも、こいつが隊長って……この王宮そんなに人材不足なの？」

まさしく私とまったく同じことを考えていたキラが、その思いのままに疑問を吐き出す。ちょっとストレート過ぎるかもしれないが、この

有様を見ては遠まわしに訊くのも馬鹿らしく思える。それにこの答えには私も興味があるのだ。

だが、真剣に答えを待つ私たちの前で、苦りきった顔をしたレストが返したのは、ただ一言だった。

「……………それ以上は言ってくれな」

とどのつまり、彼も同じ気持ちというわけだ。

第6話「襲撃者」(後書き)

そんなわけで新キャラたちの登場です。
またおしゃべりな奴らが増えてしまった(笑)

……そろそろ無口キャラを出したい今日この頃。

第7話「実」戦”訓練」

「先ほどは失礼いたしました。私はクロード・リボン。ハインレンス王国魔法士団の隊長を務めています」

三人の中でも一際背が高く、そして最も神妙な面持ちをした男が恭しく頭を下げてくる。

その原因は明白だ。数分前、あまりにも長引くドタバタトリオの漫才に、ついにレストの堪忍袋の緒が切れたのだ。

空気を震わせる怒声は、学園の教師も裸足で逃げ出すような威圧感を伴っていた。

ギヤーギヤー騒いでいた三人も、これにはさすがにまいったらしい。……まあ、正直私もビクついたのだから無理もない。ここだけの話だが、キラも同じだ。本人は否定するだろうが、間違いない。

とにもかくにも後からやって来た二人はそこにきてようやくレストの存在に気付いたらしく、一人は「でででで殿下!？」と慌てて、もう一人は「あら殿下、いらしたのですか?」と失礼な反応をみせながらも臣下の礼をとった。

そして「貴様等にも後で話がある」というレストのありがたい死刑宣告があった後、ひとまず自己紹介をしようという話になり、今の状況に至るというわけだ。

三人並んだ中で、こちらからみて左にいる男。学園の保健医クラリス・リボンの兄にして、つい先ほどまで交戦していた人物は、今は別人のように丁寧な物腰になっている。

確かに平民でここまでの地位にのし上がったのなら、それ相応の実力と礼節を持っただけでも不思議ではないが……さっきの芋虫ぶりを見たせいかな、どうにもしっくりこない。

「同じく副隊長のディック・ヴィ・フルツ」

納得のいかない顔で奴を眺めていると、今度は真ん中の少し背の低い青年が口を開いた。

クロード・リボンと同じ制服を着た彼は、ニコニコと人なつっこい笑みを浮かべて敬礼している。

さっきまでこの世の終わりかというくらい慌てふためいていたのだが……どうやら立ち直りは早いようだ。

焦げ茶色の髪にそれとお揃いの瞳。そばかすと独特な語尾が印象的なこいつも、副隊長にしては随分と若い。

もっともこちらは貴族のようだし、コネなりなんなり使えば、この歳でこの地位を得ることもそれほど珍しいことではないだろう……というのはいさひなくれているか。

「あたしは、王宮つきの天才研究者ジル・メイア・ハートネスよ。ジルって呼んでね」

最後に残ったのは小柄な女性だ。見た感じ三人の中では一番年長だろう。

短めに切りそろえた黒髪に、真っ赤なメガネとルーージュがよく映えている。黒曜石を連想させる瞳は、まるで見る者を誘惑するように妖しげに輝き、彼女の魅力を引き立てていた。

加えてその服装も……一応白衣を纏ってはいるが、その下の露出が激しすぎる。正直研究者にはとても見えない出で立ちだった。

だが、一番の問題はその奇天烈な自己紹介にこそあるだろう。”天才”と聞いて真っ先に思い出したのは、同じクラスにいる”自称天才”の彼だ。

……300年前も含めて、私の経験上、自分で天才という奴にはろくな奴がいない。

天才と何かは紙一重というが、彼女もその類なのだろうか？

並ぶ三人をそれぞれ注意深く観察する。

一癖も二癖もありそうな彼らをまともに相手にするのは、きっと骨が折れることだろう。

なんとかならないものかと考えながら、一応こちらも簡単な自己紹介を済ませておくことにした。

「私はアリア・セレスティ。こっちは使い魔のキラだ」

「さっきはどうも。リボンたいちよーさん」

キラが腕を組んで嫌みまじりに視線を送ると、名指しされた相手は生真面目な反応を返してくる。

「うっ、す、すまなかった」

「私からも謝罪しよう。悪かったな」

レストが本当に申し訳なさそうにそう言うと、キラは「ふんっ」と鼻を鳴らした。

「本当だよ。まったく、部下のしつけくらいちゃんとしてよね」

「もつとも、キラにも悪いところはあったが……まあ、次は気をつけろ」

だが、『容赦しないから』と付け加えようとした矢先、こちらを向いた彼が興奮したようにまくし立ててきた。

「それにしても、さきほどの平行魔法は素晴らしい！ よければ今度我が隊の演習の見学、いや参加を」

「クロード、彼女は研究の協力者としてここへ来てもらったんだぞ。そんな危険なことをさせられるわけがないだろう」

レストが呆れたように話を遮るが……なんというかこの男、まったく懲りてない。

加えて、これはさっきから自覚していることなのだが、どうにも己の腹の虫が治まらないのだ。これは結構まずい気がする。

こんなに執念深い性格だったろうか？

自問自答しても、すぐに黒い思考に押しつぶされてしまう。理性で押しとどめようにも、思考はどんどん好戦的になっていった。

（いかにいかに。とりあえず話を変えよう）

「……ところで、さっき“魔法士団”と言っていたか？」

300年前は”騎士団”だったはずだ。確かに時代が変われば名称や役割も変わっていくだろうが、この魔法が衰退している中あえて”魔法師団”に拘る理由があるのだろうか。

そんな私の質問は随分と意外なものだったらしく、彼らは三者三様のリアクションで驚きを表現した。

「ほへ？ “月夜の盾” を知らないんですか？ 今時珍しい子っすね」

「 “月夜の、盾” ？ いつできたんだ？ 」

「本当に知らないの？ 300年前、聖女と魔王の戦いで当時最強だった“太陽の矛”が壊滅して、その後進として生まれたのが“月夜の盾”。それがハインレンスの伝統として今も続いてる、というわけよ。名前の由来は聖女が倒れたその夜がそれはもう見事な満月だった、って話からきててね。まあ、それも今となってはおとぎ話のようなものなんだけど」

青色の制服に月の紋様が入った彼らの制服を指さしながら、ジルが教師のようにつらつらと説明する。

残りの二人は『こいつ一体どこで育ったんだ？』といわんばかりに胡乱な目でこちらを見てきた。失礼な。

もつとも、この時私の脳裏の大半を占めていたのは蛇足のように付け加えられた言葉の方だ。

（違う。” おとぎ話” なんかじゃない）

確かにあの夜最後に見た光景は、それはそれは見事な満月だった。死を受け入れ、静かに瞼を閉じようとしたあの時の、かつてなく美しい黄金の輝きは、今でも覚えている。

（………… いや、あとひとつ “何か” を見たような）

見た、という記憶はある。だが、それがなにか思いだせない。もう少しというところなのに、その一歩がひどく遠く感じる。もどかしくて仕方ない。

……なんだかまたイライラが溜まってきた。これでは話題を変えた意味がないではないか。

どんどん仏頂面になっていく私をレストが心配そうに眺めてくる。だが、それがわかっていても今はどうしようもなかった。

そんなピリピリとした空気を察したのか、副隊長ことフルがやけに明るい声色で隣に話を振る。もっともその笑顔は完全にひきつっていたが。

「こ、これでもリボンたいちょーは史上最年少で隊長職についたんつすよ!」

「クロードだ。まあ、フラスト元隊長の推薦があつてこそだがな」
いちいち名前を訂正するこの男は、よほど自分の姓が気に入らないらしい。

(こいつの呼び名は決定だな)

言わずもがな”リ”から始まるものに、だ。

それにしても、思わぬところで担任フラストの前歴が発覚したものだ。ただ者ではないと思っていたが、まさか宮仕えをしていたとは驚きである。

「はいはい、男の自慢話はどうざいものはないわー。そんなことより！　あなたが古代魔法を使える噂のスーパーキーちゃんではないのよね！？」

「……噂になっているのか？」

「そーよ、なんたつて世界に数人しかない古代魔法の使い手ですからからね！　もう魔法士たちの間じゃ、ハインレンス王立魔法学園のアリアといったら超有名人よ。ただその容姿だけは、謎に包まれていたのだけど……ホント食べちゃいたいくらい美少女ね」

そう言い唇を舐めて猫のように目を細めた彼女は、まさしく妖艶と呼ぶに相応しいオーラを醸し出していた。

が、その表情と言葉の組み合わせを考えるこちらとしては、ただただ背筋に悪寒が走るばかりだ。

とかく優秀な研究者というのは、頭脳は明晰だが、人間としてマズイという共通点があることを私は知っている。正直これ以上お近づきになりたくない。

「ほんとつすよ！　俺同僚と噂が本当か賭けてたんだけど……ボロ勝ちさせてもらっちゃいました！　ありがとうございます！」

「あら、いーこと聞いたわ。今日の夕飯はあんたの驕りね」

「ああ、本当にいいことを聞いた。……後で没収だ」

「ジル姐さんもりボンたいちょーもひでえっすー！」

「でもラッキーよね。てつきり学園の研究者に取られると思ってい

たのに、こっちに来てもらえるなんて。本当に殿下には感謝してま
すわ！ あ、でもお殿下もよければ今度」

「それ以上近づくな変態。約束通り一連の研究は人目につかない所
で行い、外部にはもらさないこと。守秘義務は厳守しろ」

猫撫で声ですり寄って来たジルを、辛辣な言葉と視線を持って切り
捨てたのはいわずもがなレストだ。

普段女性に対して常に紳士的に接してきた彼のひどく冷たい態度に
は、ただただ目を丸くするばかりである。

しかし、レストの様子を見るに、このジルという女性とはそれなり
に親しい間柄と考えていいのだろうか？

もしくはただ単にジルがよほどぶっ飛んだ人間性の持ち主なだけか
というところだ。

……いや、そもそもレスト、その変態に私を引き渡そうというのか？

これだけでも給金が良くなければ考えものの労働環境だ。まあ、い
ざとなったら逃亡すればいいだけだし、多少のことには耐えられる
自信がある。

後は腹を括るだけだし、さっさと本題に入ろう。

「ふーん、まあいい。で、私は何をすればいいんだ？」

「ふふ、とりあえず古代魔法の威力と詠唱を記録させてもらっわ。
あ・と・はお楽しみ」

「……ようするに普通に使えばいいのだな？」

魔力量の測定などしようものなら全力で誤魔化すつもりだったが、今のところその可能性は低いようで安心した。おそらく学園で測定した数値を把握しているからわざわざ測り直す必要性を感じなかったのだろう。もしくは早く古代魔法を見たくて仕方ないのも理由のひとつかもしれない。

しかし、正直妙齡の女性からねっとりからみつくような視線を送られても全く嬉しくはない。しかもリボンとフルも期待に満ちた目でこちらを見てくるのだから、鬱陶しいことこの上ない。

いい加減このテンションの高さにはついていけん。これがジエネレーションギャップなるものか。最近の若者？というのはまったくもって不可思議な生き物である。

「そつだ。どうせなら実践形式で私たちと訓練するのはどうだろうか？」

名案とばかりに提案してきたのはリボンだ。

若干の呆れとともにその秀麗な顔を見返す。本当に懲りていない。

（研究者の性が“未知への探求”にあるとすれば、戦士のそれは“強さの追求”といったところか）

戦士として常に高みを目指そうとするその姿勢は本来なら褒められるべきものだ。

だが……今回に限っていえば、それも裏目に出る。

なにせこちらからしてみれば、まさに鴨が葱を持ってやってきたと形容するに相応しい状況なのだ。

この分野なら例え現代の若者であろうと負ける気はしない。

場所も場所だし、ついでに300年前の憂さ晴らしもしょうか。太陽の予めたいに弱かったら、軽くヤキを入れるくらい許されるだろう。

ちようどよくストレス発散の機会が巡って来てくれたことで、私の口元には自然と笑みが作られた。

「まだいうか。だから彼女は」

「いや、いいよレスト。私も最近ちょっと鍛錬が足りないと思っていたところだ」

「おお、では？」

「ああ、実“戦”形式でやってみよう」

語意の微妙な差異に気付かないまま、リボンは私の答えに満足気に頷いた。

先ほどの不満もまだ残っていたし、何よりこのまま火種を燦らせて帰るのは具合が悪い。責任もって爆発させてもらわなければ。

それに、そろそろ自分の腕が錆びてないか心配になってきていたのだ。いい機会だし、実験台になってもらう。

そうして既に”殺る気”満々の私がさてどう料理しようかと思案している、すぐ隣のキラから不自然なほど間延びした声が発せられた。

「ご主人様、僕も参加していいですかー？」

声色だけなら普段通りといってさしつかえない。

ただ、私にはわかった。その目に宿るあり余る闘士に。瞳の奥では先ほどのリベンジに燃えていることを。

反対する理由なんてあるわけがない。相棒の期待に応えるべく今一度目の前の男に問いかける。

「いいか？」

「ああ、もちろんだ。フールも一緒に参加させて、2対2にしよう。では、演習場に案内する」

「噂の美少女と勝負かー。これは他の隊員に自慢できるっすねー！」

お遊び程度の演習。そう、彼等は完全に舐めきっていた。フールはもちろんのこと、一度痛い目を見たりボンでさえも。

温い空気を纏わせながら魔法士団の2人は、軽い足取りで彼女たちを目的地へと先導する。

それが地獄への招待状とも知らずに。

後に付いてくる二人が『期待に込めて、それなりの“おもてなし”をしないと』という物騒な思考を巡らせていることにも気付かずに。

そして、なんだかんだで似た者同士の主と使い魔も、何食わぬ顔で

悠々と歩き出した。

だが、彼女たちが凶悪な笑みを浮かべたその一瞬を、レストは見逃さなかった。彼の背筋にえも知れぬ寒気が走る。野獣のように獰猛な、ギラギラとした危うい光を宿した瞳は、彼の本能に警鐘を鳴らした。

「……嫌な、予感がする」

はたしてレストの勘は当たることになる。

この後、諸国最強と呼ばれる“月夜の盾”の隊長、副隊長は生き地獄を見ることになった。

「がっ！……ちょ、ま……ぶっ！……」

「待・た・な・い　　ねえー、どうせならもつと楽しそうに踊ってよー。リ・ボ・ンた・い・ちょー」

その日、王城の一角にある魔法士たちの演習場では、大の男が立ち上がりかけては派手にすっ転ぶという珍妙な光景が繰り返されていた。

傍から見れば『何のギャグ？』というくらい見事に転倒しているが、もしこの場に事情を知らない観客がいたところで、男のあまりにも必死な様子に笑うに笑えなかったかもしれない。

そしてまた、それは見る者が見れば戦慄を覚えるほど恐ろしい光景でもあった。

なにせ立ち上がろうとするリボンの足元では、魔力を帯びた黒い影

が高速で動き、遠慮もなしに思い切り足を引つ掛けているのだ。

相手に詠唱をさせる隙を一切与えず、影で完全に身体を操りながら毬のように転がす。それはまさしく”手玉にとる”という表現がふさわしい光景だった。

自分の手足の様に器用に影を操り、しかも無詠唱でそれをやられては並みの魔法使いでは手も足も出ないだろう。

一方、その陰險な魔法を行使する術者は、新しいおもちゃを手に入れた子どものようにこころごとく笑っていた。

もちろん、その正体は先ほど男に屈辱的な（本人にとって）痛手をくらったキラである。

子どものように純真な笑顔を見せながら、時折愉悦に歪む彼の表情は、本当に楽しくてしかたがないといった感じである。

他方、そんな悪魔のような所業が行われているすぐお隣でも、これまた情けなくも悲痛な叫びがあがっていた。

「うぎゃああー！ー！ー！！ もう無理っす！！ほんと無理っす！！」

「ふん、情けない！ お前それでも宮廷魔法士の端くれか！？」

演習場をところ狭しと走り回る男フルと、その場から一步も動くことなく男を叱咤している少女アリアである。

こちらはこちらで、あまりの齒ごたえのなさにご立腹のようだ。

だが、彼女のやり方は、ある意味キラのそれより性質が悪かった。
” 始め ” の合図が出ると同時に古代魔法の、詠唱ともいえない極限
まで短縮された単語を呟いて容赦なくフルを攻撃したのだ。
フルにしても、まさか実戦経験もないような娘が、初っ端から躊
躇なく攻撃魔法を繰り出すとは想像もしていなかったのだろう。
慌ててその火球を避けたものの、恐る恐る着弾点の様子を確認した
彼の顔は、みるみるうちに蒼白になっていった。

それでも普段はふざけている男とて、その地位は名誉あるハインレ
ンス王立魔法士団の副隊長である。

このままではいろんな意味でまずいと考えた彼も、最初のうちは食
い下がっていたのだ。

だが、ぜえぜえ走りながらもなんとか張った防御は、まるで薄っぺ
らい紙のようにことごとく突き抜けられた。逆にこちらから攻撃を
仕掛けてみても、少女を守る障壁の前では、彼の魔法は城壁に突撃
する蟻んこのようなものだった。

どう考えても勝てない。

だが、早々に戦意を喪失し降参を告げたフルを彼女が許すことな
かった。

いわく「馬鹿者！ 戦場で魔物相手に降参などない！ 死にたいの
か！？」だそうだ。

「いや、今まさにあなたに殺されかけてるんですけど……」という彼
の控えめな主張は完全にスル され、アリアは生ぬるいと言わんば
かりにどんどん危険な魔法を打ち出した。

そういつた経緯で、もはや恥も外聞もなく全力疾走で逃げる副隊長と、許しを請われても全く追撃の手を緩める気のない少女との、命をかけた実”戦”訓練が行われているわけである。

レストは目の前に広がる光景を冷や汗を垂らし見ながら、ただただこう思った。

鬼だ、鬼がいる、と。

きっかけは、おそらくさきほどキラが襲撃された件にある。確かにあれはこちらがほぼ全面的に悪いし、彼女たちが怒るのも当然だろう。

……だが、なにかの鬱憤を晴らすようにやりたい放題の二人を見ると、もしかしてそれ以上の”何か”があるのではないのかと勘繰ってしまう。

なにせ彼らに一体なんの恨みがあるのか、と思わせるほど苛烈で容赦がない。

いや、一応手加減はしてくれているのだろうが、彼女の性格を鑑みてもさすがに初対面の人間をここまでしごくことには違和感があった。

だが、そうして思考の闇に沈んでいる間も、事態は刻一刻と進んでいた。さすがにそろそろ止めないとまずいだろう。

残された勇気を振り絞り、レストは恐る恐るその凜とした後ろ姿に声をかける。

「セ、セレスティ……その、そろそろ許してやってはくれないか？」

「甘い！ この程度で諸国最強など笑止千万もいいところだ！」

超然と言い放つ彼女に、レストはついに頭を抱えた。いくらなんでも魔法師団が相手ならば、滅多なことにはなるまいと高をくくっていたのだ。

だがその期待は軽々と裏切られ、いまや想像を絶するまずい事態へと発展している。

レストは、彼女をここに連れてきたことを後悔していた。

そもそも彼がアリアをアルバイトという名目で王城に連れてきた理由は、先日目撃した飛行魔法にあった。

小さい頃から城の書庫で本を読みあさっていた彼だからこそ、その違和感に気づいた。

行使できる者は世界に数人もいないとされている飛行魔法。あまり知られている事ではないが、それはまた魔力消費量の非常に高い魔法でもあったのだ。

実際今まで報告されている行使者も、いざ使うとなるともってせいぜい数十秒がいいところだそうだ。

だというのに、アリアのそれは明らかに……いや、もはや飛行魔法のことだけではない。彼女は何もかもが規格外だ。

だが、慣れとは恐ろしいもので、彼女と日常的に接していると段々おかしいことが当たり前となっていくのだ。既存の魔法常識を覆し

ても”アリア・セレスティだから”という一言で片づけられてしま
う。

レストはそれが嫌だった。いや、正確には彼の探求心と為政者とし
ての理性が、事態に飲み込まれてしまふ前に真実を掴めと警告して
いた。

それが今回のアルバイトという名の、魔法調査を提案した理由であ
る。

ある意味友を裏切る行為であつたのは覚悟の上だった。だが、うし
るめたさを感じながらも、彼女のためにもなると己に言い訳をして
ここまで来たのだ。

……そして、この惨劇である。

罰があたつたのかもしれない。

レストは冷や汗を垂らしながら、食物連鎖のように見事な力関係を
見せる4人を眺めた。

思えば、彼女が演習場に目くらましの魔法や遮断の結界を張った時
点でこの事態を予測すべきであつた。

まさかここまで容赦がな……いや、戦いに慣れているとは。

前任のバッシュ・フラストに比べればまだまだでも、二人とも隊の
中では卓越した技能で知られている。だからこそ実力主義の魔法士
団の隊長副隊長に選ばれたのだ。

だというのに、それをまるで赤子の手をひねるように易々とあしら

うとは。

事前に目くらましの魔法をかけていなかったら魔法師団の面目丸潰れもいいところである。

そんなことを考えているうちに、いつのまにか演習場を騒がす悲鳴は消えていた。

嫌な予感に急いであたりを見回せば、そこには叫び声の代わりに虫の息を吐く魔法師団の双壁がいた。

「セ、セレスティ！　だめだ、それ以上やったら使い物にならなくなる！」

レストの言葉は真に迫っていた。ひどい言い方ではあるが、実際比喩でも何でもない。

物理的な意味でも、精神的な意味でも、魔法師団壊滅の危機である。だが、彼の必死の懇願は、隣からあがった場違いにもほどがある声援のせいで台無しにされる。

「ああ、いいわ……そう、そこ！　もっと……もっと激しくやって！　ああん、もう最高！」

恍惚とした表情で、顔を赤らめながらいろいろな意味でギリギリな発言をする女性は、自称“天才研究者”ジルである。

同僚のいじめに嬉々として声援を送る彼女は、アリアが危惧した通り人間として非常にマズイ性格をしていた。

こんな変態が宮仕えの研究者だと知られては、王家の沽券に関わる。そう常日頃から危機感を抱いていたレストにしてみれば、目くらましの魔法は唯一の僥倖であった。

もつとも、だからといって事態がよくなるわけではないのだが。

そして、ようやくレストの願いが通じたところには、名誉あるハインレンス魔法士団の2人は、人間と表現するのが憚れるようなボロ雑巾と化していた。

プライドを含めたいろいろなものを完膚なきまで破壊されると、人はこうなるのだという良い見本である。

しかし、そんな哀れな彼らの姿を見ても、鬼軍曹と化した少女の口からは「もう終わりか。つまらん」という非情の一言のみ。

「ご主人様、この人たち弱過ぎて相手にならないですー」

そして、彼らの部下が聞いたら憤然ものの台詞をこともなしげに言い放った使い魔の少年も、確かにそれに相応しい実力を持っていた。

「全くだ、軟弱にもほどがある！ お前らそんなへつぱり腰で魔物相手に戦えると本気で思っているのか！？ 怠慢の先にあるのは滅びのみ！ 鍛え直しだ！！」

今はほとんど魔物の被害なんて起こってない……とは誰も言えなかった。

一体どんな危険地帯で生きてくれば、そんな思考に至るのか。歴戦の武人のような貫禄と威圧感は、この王宮においても右に出る者はいなかった。

結局、誰ひとりとしてこの場の支配者には物言えず、恐るべき未来が決定した男2人は地面に倒れながら深い絶望を味わうことになった。

まさしく泣きつ面に蜂である。

そんな悪夢のような光景を見ていた人間が、実はもう一人いる。

「強い、な。……いや、強すぎる」

アリアたちのクラス担任、バッシュ・フラスト。

柱の陰で気配を消しながら彼らを見るその目は、教師にはいささか不似合いな険呑さを宿していた。

彼がこの場にいる理由はレストのそれと似たようなものだ。

異なっているのは、今やレスト以上の警戒心が彼の中で芽生えていることにある。

「ドラゴンに飛行魔法、そしてこの強さ、か。こりゃ”変わっている”の一言じゃすませらんねえな」

そうして眉間に深い皺を寄せた彼が今後について思案していると、背後から聞き慣れた声がかけられた。

「おっ、バッシュではないか」

いくら王宮内だからといって、ここまで接近されて気付かなかったのは失態である。

自戒しながら彼が振りむくと、そこには数か月前までは毎日のように顔を合わせていた人物がいた。

「ギル様？」

その相手、ハインレンス王国第一王子ギルネシアも、思わぬ人間との再会に首を傾げる。

「どうしてお前がここにいるんだ？ 学園はどうした？」

「休みですよ。今日は元隊長として部下の成長具合を見学に来ました」

すぐに気を取り直して、いけしゃあしゃあと返すあたりは、さすが年の功というべきか。しかも嘘は言っていない。

もっともその内容は、さきほどの”部下”のボロボロ具合を考えると、皮肉以外の何物でもなかったが。

「ああ、そうか。王宮にいらるとどうもそのあたりの感覚がずれるな。だがバッシュ、そう言うわりには部下の一人もいないが？」

目くらましの魔法を張っているせいで、今のギルネシアにあの惨劇は見えていなかった。バッシュにとっては好都合である。

「ちょっと考えごとをしていただけです。あなた様こそどうしてここに？」

半ば答えを予想しながら、話を逸らす目的でそう振る。
案の定、あたりを念入りに見回しながらギルネシアは答えた。

「よくぞ訊いてくれた。レストが王宮に来ているらしくてな。このあたりで目撃情報が途絶えたのだが、お前見てないか？」

「……ストーカーはおやめになられたと報告を受けていたのですが」

「何を言う！ 兄がかわいい弟を追いかけるのはストーカーではない！ 愛情表現の一種だ！」

「……そうですか」

人はそれをストーカーという。

だが、何を言っても無駄と悟ったバツシュは、賢明にもその一言を飲みこんだ。

ようやくブラコンに回復の兆しが見えたと思ったたらこれだ。

「で、結局見たのか、見なかったのか？」

「誰も見えておりませんよ。おそらくもう帰られたのでしょうか。さ、ギル様もいい加減公務に戻りましょうか」

慣れた仕草で執務室へと強制連行する。バツシュはこのブラコンに十数年付き合わされてきたのだ。むしろ慣れない方がおかしい。

「ま、待て、おい、引つ張るな、バツシュ！」

王子を王子とも思わぬ扱いにギルネシアは抗議するが、彼の護衛たちは『さすがフラスト様』と尊敬の眼差しを送るだけだった。

最後に一度後ろを振り返ったバツシュは、穴だらけになった演習場を魔法で直す彼女に鋭い視線を投げる。

いろいろと思うところはあったが、今はまだ情報がたりない。

結局『まだ報告する段階ではない』と判断した彼は、駄々をこねる王太子を引きずりながらその場を後にするのだった。

その数十分後

諸国最強の魔法士団の隊長と副隊長が全身ボロボロの出で立ちで目撃されることになる。

世にも珍しいその光景に、好奇心旺盛な部下たちは一体どんな強敵とやり合ったのかと質問責めするのだが、隊長はもちろんのこと、普段はおしゃべりな副隊長さえもその理由を話すことは決してなかった。

その後も週に一回行われる実験という名のイジメは、アリア達にとってはストレス発散に、リボン達にとってはまさに命をかけた実戦”訓練”となった。

もっとも、そのおかげで彼らは歴代最強の魔法士団隊長・副隊長への道を通つて走ることになるのだが……それはまた別の話。

第7話「実”戦”訓練」(後書き)

皆様お久しぶりです。

というか、久しぶりすぎてごめんなさい(汗)

忙しくて、かなりスローペースになります。またちょこちょこ書いていきたいと思えます。

よろしく願います(ペコリ)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5718m/>

ツクラレタ聖女

2011年8月14日02時43分発行